
IS(インフィニット・ストラトス) 伝説の鬼神

魔帝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 伝説の鬼神

【Nコード】

N5468S

【作者名】

魔帝

【あらすじ】

織斑一夏がISを動かす九年程前、先にISを起動させた男がいた。

名は天星イブキ。

彼は篠ノ之束、織斑千冬達と共に学生時代を走った。

そして今、IS学園に新任教師として再び学園に足を踏み入れた。

初代男性操縦者（前書き）

何気に始めてしまったIS小説。

既にアニメは終わったと言うのに…。

しかし後悔はしていない！

という事で始まります。

初代男性操縦者

とある国のとある研究所。

今、此处では戦闘が行われている。

といつても、戦闘と呼んでも良いのか分からない状況だった。

研究所を守る何十台もの戦車が一瞬にして唯のごみ屑に変わり、放たれたミサイル群は一瞬にして目標に命中する前に消滅するという、ワンサイドゲーム状態だった。

そして今、とうとう研究所を守る戦力が完全に消え失せた。

「フン…呆気ないな」

逃げ惑う研究員、戦闘員を見据え、赤黒いアーマーに身を包み、黒い刀を持ったもの…ISに乗る一人の『男』が詰まらなさそうに呟いた。

先程までの戦闘はこの男が行っていたのだ。

ピリリリリリリ…！

「ん？」

突如、男の携帯が鳴った。

男はズボンのポケットから取り出した。

通常、ISに乗る際には、水着のような専用のスーツに着替えなければいけないのだが、この男は普通の黒いＴシャツに黒のジーンズといった、一般的な格好をしている。

「つたく、こんな時に一体誰だ？」

男は携帯に映る着信相手を確認した。そこには……

「織斑千冬……だと？」

織斑千冬。

この男の同級生であり親友でありライバルである女性からだった。

「……もしもし」

「ああ、やっと出たな」

男は少し考えてから電話に出た。

「久しぶりだな、五年ぶりか？」

「そうだな。ところで、今何をやっている？」

「あゝ今は研究所を破壊してる所だ」

「……よく電話に出れているな」

「問題無い、後は爆破するだけだからな」

男はISで、あるシステムを操作し始めた。

「それで？何か用でもあるんだろう？」

「ああ、織斑一夏は知っているな」

「ああ、最近二人目が現れたとニュースになっていたな。……それが？」

「姓を聞いて分かると思うが、あれは私の弟だ」

「ああ、全然似てないけどな」

「む、失礼な奴だな。正真正銘の実弟だ」

「分かってるさ。で？」

男の目の前に「起動しますか？」と言う画面が表示された。

「お前の場合は心配要らないだろうが、一夏は…」

「ああ、成程。つまり織斑一夏のボディガードをして欲しいわけか」

男は表示された画面に「YES」と打ち込んだ。

「そつだ、頼めるか？」

「そつだな……アイツに聞いてみないとな」

「それならもう許可は取ってある」

「……一体どんな手を使ったんだ」

「なに、少しな」

男はISを反転させ、研究所から離れた。

「まあ良い、アイツが許したのなら、俺とお前の仲だ、幾らでも頼まれてやる」

「そうか、助かる」

男は停止し、研究所を見降ろした。

「それで、俺は何所に向かえば良い？」

「IS学園だ。そこで教師をしてもらう」

「……何？俺は教師免許なんぞ持っていないが？」

「心配ご無用、お前なら大丈夫だと、理事長が許可をくれた」

「そうかよ……。まあ良い、詳しくは後日聞かせてくれ。それじゃあ切るぞ」

「ああ」

ピッ！

男は電話を切った。
その瞬間……

ドカアアアアーン！！！！

研究所が爆発に吞まれた。

「任務完了。さてと、俺と同じ男の操縦者か……楽しみだな」

男は爆発した研究所を見届けた後、薄っすらと笑みを浮かべ、空の
彼方へと消えていった。

翌日、この国の新聞にはこう書かれていた。

ISの違法研究所が何者のかによって破壊された。しかし、負傷者、
行方不明者、死者は0人だった。

鬼神、教師となる（前書き）

はい、更新です。

鬼神、教師となる

朝、IS学園、正面ゲート前

此処に、全身黒い服を着た若い男性がいた。

黒い髪に黒いシャツ、黒い長そでの上着、左手には黒の手袋、黒い長ズボン、そして左腰部分には、黒に近い赤のチェーンを着けている。

「ふう… やつと着いたか」

俺、天星イブキてんじまきは今IS学園前に居る。大きなバックを二つ持って。

「あまり変わって無いな」

7年前、俺は此処の学生だった。

ISが出来た当初、女しか使えなかったが、その1年後、初めて男の操縦者が現れた。それがこの俺だ。

そして今、また新たな男の操縦者が現れた。

織斑一夏。俺の親友、織斑千冬の弟。俺が初代だとしたら、そいつは二代目だな。

俺は学園内に入った。

「さて、受付は確か本校舎一階だった筈…」

「ん？ああ、イブキ、もう来たのか。まだ約束の時間まで四十分あるぞ？」

探す必要は無くなったな。

俺が受付を探そうとしてら、千冬がやって来た。

「そうだったか？なんせ、母校に帰って来るんだ、足が速くなるのは仕方が無い」

「ふっ、そうか」

「……久しぶりだな」

「ああ。少し見ない間に遅くなったな」

「そう言うお前こそ、更に美人になったな」

「……」

「……」

「……はっ」

「……ふっ」

俺達は静かに笑った。

学生時代もこんな感じだったな。

「さてと、色々と案内して欲しいのだが？なんせ、知っているのは学生の時の事しか知らないからな」

「無論だ。まずは荷物を置いてからだな」

俺達は並んで歩きだした。

俺は荷物を受付に預けた後、千冬に教師として色々と案内してもらった。

IS学園、元々女子高だけに男には優しくないな。ってか、男性が俺と表向き用務員のおじさんしか居ないとは……色々と辛い。

「で、ここが学生寮だ」

「ほう、俺達の時より綺麗じゃないか」

「もう十年近くも経っているからな。お前の部屋もこの寮だ」

「そうか……」

教師と学生は一緒の寮だったか？まあ昔と変わったんだろう。

「ん…もう昼か。丁度良い、案内も終わった事だ、久しぶりに学食にでも行くか？」

「おっ！それは良いな。よし行こう」

俺は千冬の手を引いて学食に向かって歩き出した。

「なっ！？／／／／」

「ん？何赤くしてる。こんな事、学生時代に散々やって来ただろう」

「いや！／／／だからと言っていきなりするな！！／／／／」

「はっはゝん…その反応を見るに、未だに彼氏が出来ていないんだな」

「……」

ドゴッ！！

「ぐおお！？」

千冬がいきなり俺の腹を蹴った。いや、蹴り抜いた。

「大きなお世話だ！」

千冬は手を振り払い、歩き出した。

「まったく、変わってないな」

学生時代もからかっては何時もやられてたっけな。

「何をニヤついている。さっさと行くぞ」

「分かっている」

俺は千冬を追いかけた。

学食

今日は土曜日だから学校自体は無いが、此処は全寮制である故に、多くの生徒で賑わう。現に、学食は生徒で一杯だった。

「ほう、此処も綺麗になってるな」

「内装は変わっていないがな。お前の特等席も残ったままだ」

「そうなのか？それは嬉しい事だ」

俺の特等席、即ち一番奥の窓際のテーブル席。
あそこが一番落ち着く席なのだ。

「さて、日替わり定食は……あつたあつた」

俺は何時も食べていた定食の食券を買った。

「千冬は何にするんだ？」

「同じので良い」

「了解」

俺は同じ物を買った。

「……随分と静かになってないか？」

先程までガヤガヤと騒いでいた学食が何時の間にか静まり返っていた。

「当然だろう。女子高の学食に見ず知らずの男が来ているのだ。驚かない筈が無い」

「成程」

俺は納得し、カウンターのおばさんに食券を渡した。

「頼みます、おばさん」

「あ…はいよ。……うん？もしかして…イブキ君かい？」

「はい、お久しぶりですね。お元気で何よりです」

このおばさん、俺達が学生時の時から働いていた人だった。
相変わらず元気だな。

「久しぶりじゃないか〜！まったく、カッコよくなっちゃって〜！
日替わり定食ね！すぐ持ってくるよ！」

そう言うなり、おばさんは奥に引っ込んだ。……と思ったら、すぐ
に出てきた。
どんだけ早いんだ。

「お待ちどう！」

「ありがとうございます。行くぞ、千冬」

「ああ」

俺と千冬はお盆を受け取り、先に向かった。

「ちょっと待て」

「ん？」

千冬が呼び止めてきた。

千冬は学食に居た生徒を見渡し口を開いた。

「お前達……普段通りにやれ」

ただしドスの効いた声で。

それを聞いた生徒達は俺の事が無かったかの様にまた騒ぎ始めた。

「千冬……」

「ンン！……行こう」

「……」

俺は従わずを得なかった。何故なら、千冬の目が「何も言っな。言ったら……剥ぐぞ」と、語っていたからだ。

俺は黙ってついて行く事にした。

「ん？先客がいるな」

前を歩いていた千冬が立ち止り呟いた。

「……あれは織斑一夏か？」

その先客が織斑一夏と見知らぬ女子生徒だった。

「丁度良い、挨拶でもしておけ」

「そうだな」

俺達は織斑一夏と女子生徒が座っている特等席に向かった。

「織斑、篠ノ之、同伴するぞ」

千冬が声を掛けた。

「ちっ千冬姉!？」

「千冬さん!？」

「織斑先生だ。まあ今は良い。それより、邪魔をする」

千冬はお盆をテーブルに置き篠ノ之と呼んだ生徒の横に座った。

因みに、この席は半円を描いている。

「では失礼」

「「ッ!？」」

俺は織斑一夏の隣に座った。

二人は俺の事で大いに驚いている様だ。

「あ、あの……あなたは？」

織斑一夏が訪ねてきた。

「ああ、紹介が遅れたな。俺は天星イブキだ。そこにいる織斑千冬の……」

俺は千冬を見てから言った。

「婚約者だ」

「ブフーーーーッ！！！！？」

「「ええええええ！！？」」

千冬は丁度飲んでいた味噌汁を吹き出し、残りの二人は目を大きく見開き驚いた。

「きつきつきつ貴様！！！！／／／何を！！！！？／／／／」

「ち、千冬姉…本当なのか？」

「千冬さん…おめでとつございます」

「なっ！？違う！！これはこいつの冗談だ！！」

「何を言っている、昨日の夜なんかあんなに絡み合っていたのに」

「「なっ！！？／／／」」

「うわあああ！！！！／／／やめろおおお！！！！／／／」

千冬は箸を手裏剣の如く俺の顔面に向かって投げてきた。

俺は顔をずらし避けた。

箸はそのまま俺の後ろに置かれていた植木を貫通した。

おいおい…俺を殺す気か？

「フーツ！フーツ！」

「まあまあ、落ち着け。二人とも、今のは冗談だからな」

「「はあ…」」

「まあ、それに近い事は過去に起こった事があるがな」

「貴様：そんなに死にたいか？死にたいんだな？よしよし、今こゝで殺してやるっ」

千冬はもう一本の箸を俺の首に押し付けてきた。

「分かった、分かったから力を緩める。血が出て……おい！？マジで止める！！これ以上進ませるな！！」

「何？もつと刺せだど？分かった一氣にやってやる」

「冗談抜きで止める！！お前は弟に殺害現場を見せたいのか！？」

「……チツ、仕方ない」

千冬は箸を俺の首から離れた。

あゝ少し切れてやがる。まあこの位なら大丈夫か。

「ん、血が……」

千冬は箸に付いた血を見て…

「ぺろ…」

「「「ゾクッ!?!」「」」

口を歪ませながら舐めた。
その姿はとても、とても恐ろしかった。

「さてイブキ、そろそろちゃんとした紹介をしたらどうだ？」

「あ、ああ…。名前は先程言った通りだ。俺が此処に居る理由は一
つ。このIS学園の教師になったからだ」

「ええ!?!そんなんですか!?!…あれ?天星イブキ?…何所かで」

「馬鹿者、イブキは一人目の男性操縦者だろうが。忘れたのか？」

「あっ!そうだった!!!」

「天星…イブキ…」

織斑一夏が驚いている中、篠ノ之と呼ばれた女子生徒は俺の顔をマジマジと見てくる。

いや待て、篠ノ之だと？まさかこの娘が束の…。

「あゝ、君はもしかして、篠ノ之束の妹の、篠ノ之箒…かい？」

「え？あ…はい」

そう答えた彼女は何所か不機嫌だった。

「そうか…君が。いや成程、姉が姉なら妹も妹か」

「ッ……どう言う意味ですか？」

「なに、良い女性だと言う事だ」

「ッ／／／」

篠ノ之箒は顔を赤くした。何故だ？

「（はあゝこの馬鹿が。今自分がどういった顔をしたのか分かっていないな）」

「（うわ、この人カッコいい…うん、今の顔なんか男の俺でもドキッってなったぞ）」

「（なっ何なんだこの人は！？／／／わっ私の事をいつ良い女性って！？／／／それに今の顔、まるで恋人に向けるような…／／／）」

「……何故だ、何故呆れたり、尊敬の眼差しで見たり、赤く固まってるんだ？」

『イブキ』

千冬が唇の動きで伝えてきた。

『今お前はアイツに向けての顔をしていたぞ』

な、そうなのか。それはいかな。どうやらその顔は男女問わず釘づけにするらしい故に、アイツに自分以外にするなと注意されているからな。

「ンン！…それで、篠ノ之箒、君は俺の顔をずっと見ていたが、何か付いてるか？」

「え…あ、いえ！／＼／＼何でもありません！」

「そうか…。ところで、束から何か俺の事を聞いてないか？」

「え？あ、はい。えっと……無類の女好きでたらしと」

「よし、それは違うからな。俺は無類の女好きでもないし、たらし

でもない」

束……次会ったらお仕置きだ。

「天然たらしではあるかな」

千冬が何時の間にか食べ終わりお茶を啜りながら言った。

「何を言う。俺は天然たらしでもない」

「（あ、もしかしてこの人…一夏と同じ？）」

……篠ノ之箒よ、今失礼な事を考えなかったか？

「さて、昼も終わりだ。イブキ、早く食べる」

「もうそんな時間か」

俺はまだまだある昼食を無理やり胃袋の中に入れた。

「ああそつだ、篠ノ之、お前の部屋に新しい同居人が来る」

「はっ？」

千冬が思い出したように篠ノ之箒に言った。

どうやら彼女は現在一人で部屋を使っている様だ。

「荷物ももう運び込まれている。ちゃんと世話をしてやれ」

「は、はい…」

「千冬、誰か転校生でも来るのか？」

「何を言っている。同居人はお前だ」

「……はっ？」

今何と言った？同居人はお前だと？つまり俺か？

「千冬…俺をからかうのは良いが、生徒を巻き込むな」

「お前が言えた義理か？それにかかって等いない」

「ふざけるな。見ず知らずの男が年頃の女と過ごせる筈が無いだろう。それに、普通織斑一夏と同室だろう。いやそれ以前に教員用の部屋は？」

「織斑は私と同室だ。教員用の部屋は空いていない。それに、お前は決して手を出さないだろう？」

「いやそれはそうだが……」

「なら問題ない。この話は終わりだ。さて行くぞ。週明けからの仕事の話をしなければいけない」

「おっおい！？引つ張るな！まだ話はつておい！？」

おいおい……初日からとんでも無い事になってしまったぞ。この先大丈夫なのかよ。

鬼神、弟子を持つ（前書き）

はい、更新です。

鬼神、弟子を持つ

職員室

あの衝撃？事実を知った後、俺は千冬に仕事の事を聞いていた。

「お前が担当するのは、当然実技だ」

「まあそうだろうな」

「それには私も同伴するがな」

「可哀想に」

「何か言ったか？」

「いや何も」

俺は心から生徒に同情した。

千冬の教え方は容赦ないからな。まあ俺は何とも無かったがな。

「それと、理数の授業も受け持ってもらおう」

「……一応聞くが、俺がやっても良いのか？」

主に法律とかで…。

「構わん。理事長直々の許しを得ている。それに、成績が常にトップだったお前には何の問題も無いだろう？」

「どうせ拒否権は無いのだろう？」

「無い」

そうですか・・・。

「分かった。受け持とう。それで？これだけか？」

「いや、まだだ」

まだあるのかよ。どんだけ働かすつもりだ。あれか？今までの清算をここでつける気か？はつきり言おう、それだと俺の体は耐えられない。散々からかってきたから。

「何この世の終わりみたいな顔をしている」

「いや、少し自分がやってきた事の後悔を少し・・・な」

「...？まあ良い。受け持つクラスは私が担任の一組だ」

「一組だけか？」

「ああ、一夏も一組だ」

「そうか」

つまりエコ贖肩か。このブラコンめ。

「本来なら月曜日に紹介するのだが、生憎、その日は特別でな」

「ん？何かあるのか？」

「浮かれた馬鹿と弟が決闘と言う名のお遊びをするんだ」

決闘をお遊びと呼んだ奴、初めて見た。
と、それは置いといて。

「なら火曜日か？」

「ああ。しかし、見学には来ても良い。護衛対象の能力は知っておきたいだろう？」

確かに、織斑一夏を知っておかなければ、いざという時に困るかもしれない。いい機会だ。

「なんなら、今から特訓しやってもらっても構わない」

「おいおい、ISを動かせたと云ってもド素人なのだろう？俺の特訓に付いて来れるワケが無い」

「どうかな？私の弟だぞ？」

「……そう言われると……否定できないな。なら一度見てみるか」

俺は机に置かれたお茶を啜った。

ドサッ！

「ん？」

突然、後ろから何かが落ちる音がし、振り向いた。

「あ…え？…あ？」

落ちたのは書類の束で、そこには落とした張本人がいた。
しかし、その張本人は俺の顔を見て驚愕していた。

「山田君、どうかしたのか？」

その人の名は山田らしい。

「お、織斑先生…」

「何だ？」

「婚約者を連れ込んでいると言っ噂は本当だったんですね！？」

「ブウッ！」

「なっ！？／／／／」

俺は飲んでいたお茶を嘔き出し、千冬は顔を真っ赤にして驚いた。

「ちっ違うぞ山田君！／＼／＼こいつとは決してそんな仲ではない
！！／＼／＼」

「そんなに全力で否定せんでも…」

「うるさい！！／＼／＼元はと言えばお前のせいだろう！！／＼／
／」

「そうだったか？まったく身に覚えが無いのだがな」

「うっ！織斑先生は渡しませんよ！！」

山田真耶と言う教師は俺に指を指し、宣言した。

「……千冬、お前そんな趣味だったのか？」

「違う！！／／／／」

「知っている」

「きつ貴様…！」

「そんなに仲良下げに！？どうせ私なんて……私なんてえ……！」

山田真耶は何所かへと走り去って行った。

「まつ待て！山田君！山田君……！！」

千冬も追いかける為に走って行った。

俺は千冬が誤解を解き、戻って来る数時間の間、職員室で他の先生方と喋って過ごした。

「すみません！まさか新しく赴任する先生だったとは知らなくて！」

「いや、千冬の面白い所が見れたから別に問題無い」

「くっ…」

山田真耶、一言で言うと、子供が背伸びをしたみたいな巨乳な女性と言った所か、彼女が謝罪をしてきた。

「いやゝそれにしてもあの天星さんがこの学園に来て下さるなんて光栄です！知ってました？学生時代、私天星さんの後輩だったんですよ？」

山田真耶はキラキラした期待の目で見て来る。

「山田君、それは…」

「？織斑先生どうしたんですか？」

千冬が山田真耶を止めようとした。

「すまない、俺は後輩の事は全く、これっぽちも記憶に無いんだ」

記憶に残っている人は千冬と束とアイツのほんの数人しかない。
何故ならあの頃の俺は、束みたく興味のある人しか関心を持たなかったからだ。
（学食のおばさん、そして用務員のおじさんは例外）。

その事を説明すると、山田真耶はもの凄く落ち込んでしまった。

「そ、そう…なんですか」

「いや、ホント…すまない」

「いっ…いっえ…」

山田真耶はこれでもかと言つぐらゐに落ち込んでしまった。

「だが、これからは違う。しっかりと記憶に焼きつける」

「ありがとうございます……はあ……」

効果は無し。いや、少しだけあった……と思う。

「馬鹿が……」

返す言葉が無い。

「あゝ千冬？もう説明は終わりだな？」

「ああ。何かあればまたするが……」

「なら俺は織斑一夏の所へ行く」

「分かった。だが、居場所は分かるのか？」

「ISの訓練をしているのならアリーナだろ？」

「織斑はまだISを持っていない」

「……………は？」

「持っていない？決闘は明後日だぞ？」

「それじゃあ、何をしているんだ？」

「篠ノ之と剣道をしている」

イブキSIDE AUT

一夏SIDE

こんにちは、織斑一夏です。今何をしているかと言つと……

「メエエエェン!!」

「うおっ!?!」

パシン!!

幼馴染の箒にタコ殴りにされています。

「何余計な事を考えている!?!集中しろ!?!」

「まつ待て箒！少し休憩を！」

「問答無用！！」

ダッ！

箒は俺の願いを無視し突っ込んできた。

「面！！」

「うわっ！？」

間一髪、何とか防げたものの、あまりにももの衝撃に手が痺れた。

なんつー力してんだよ！？

「まだまだ！！」

箒は面、胴、小手、そして突きのラッシュを仕掛けてきた。

ちよっおい！？無茶苦茶過ぎるだろう！？ほら見る！周りの女子達
があまりにも無茶ぶりに驚いてますよ！？

「突きイイイ！！」

「ッ！？しまっ！？」

ドスッ！！

俺は箒に突きを打たれ、吹き飛ばされた。

「うわっ！？」

そして俺は仰向けに倒れた。

「おいおい、何をやっているんだ、織斑一夏」

突然、頭の上から男の声がした。

俺は仰向けのまま頭を動かすと、そこには学食で出会った天星イブキさんが立っていた。

一夏SIDE AUT

イブキSIDE

俺が道場に着いた時、女子生徒が何人も集まって何かを見ていた。俺は近寄り、生徒たちの視線の先を見た。

そこでは、織斑一夏が篠ノ之箒に竹刀でボコられている所だった。と言っても、ただ剣道の練習をしているだけだが。

織斑一夏……はつきり言って弱いぞ。ある程度筋は出来ているが、それでも素人より少し上という所だ。千冬に聞いた話では、昔に剣道をやっていたと言う話だが……。それに比べて篠ノ之箒は強い。筋もすっかりしていて、速くそして力強い。闘志も人一倍だ。

俺は生徒達の間を掻い潜って、道場の中に入った。その際、奇妙な目で見られたのは言うまでも無い。

俺が道場の中に入った時、丁度織斑一夏が俺の足元に飛ばされた所だった。

「おいおい、何をやっているんだ、織斑一夏」

「てっ天星さん!？」

「ッ……」

ん？篠ノ之箒が何故か異様に反応したな……何故だ？

「天星さん、どうして此処に？」

織斑一夏が起き上がり訪ねてきた。

「なに、週明けの決闘に向けて練習していると聞いたものでな。少し気になって見に来たまでだ」

「そうなんですか…」

しかしこの実力では…。
相手はイギリスの代表候補と聞いたが、勝ち目はほぼ無いな。

「え？なになに？あの男の人誰？」

「織斑君の知り合い？」

「カッコいい〜！」

周りの生徒達が騒ぎ始めた。

まいったな…千冬にあまり騒ぎを起こすなと言われていたのだが…。

「天星さん」

「ん？どうした、篠ノ之箒」

俺がどうやって騒ぎを止めようかと悩んでいたら、篠ノ之箒が声を掛けてきた。

「姉から聞きました。天星さんは剣の達人だと…」

「えっ！？そうなんですか！？」

一夏が俺の顔を見て驚く。

「達人か……自分ではそう思った事は無いが、束が言うのならそうなのだろう。それが？」

「ぜひ一度、私と勝負をお願いします！」

「箒!？」

勝負ね…。正直言つて、俺とじゃ勝負にならないが、この目は絶対に引かないな。束と一緒にだな。

「別に構わないが…」

「本当ですか!？」

篠ノ之箒は一瞬、目を輝かした。

「しかし、勝負にならんぞ?」

「そうだとっても、お願いします」

「…分かった。だが俺は防具なんぞ着けんぞ」

「ッ…何故です?」

「君は竹刀を振る事すら出来ないからだ」

「え！？天星さん、それは…」

一夏が驚き、止めさせようとした。

「舐めないで下さい…」

しかし篠ノ之箒は織斑一夏を無視し、条件を呑んだ。

俺は織斑一夏から竹刀を奪い、所定の位置に着いた。篠ノ之箒も俺の正面に着いた。

「織斑一夏、合図を頼む」

「え？…分かりました」

俺は織斑一夏に合図を頼み、篠ノ之箒を見据えた。そして、時が訪れた。

「……始め！」

ブン！！ パシッ！

「……え？」

篠ノ之箒は何か起こったのか分からない様だった。ただひたすら自分が竹刀を握って『いた』手を見ていた。

「……審判」

「……あ、いつ一本！」

織斑一夏は俺の方に手を上げ、宣言した。

何故？簡単だ。合図と共に篠ノ之箒の竹刀を手から飛ばしたのだ。

巻き上げ…相手の竹刀に自分の竹刀を巻き付けるように動かし、相手の手から竹刀を飛ばす高度な技。
俺はそれをあり得ない速さで繰り出したのだ。

「これで分かっただろう？俺と君とでは差が有り過ぎる。もっと力をつけてからまた挑んで来い」

俺は織斑一夏に竹刀を返し、道場を出た。

うゝん…大人気無かったな。

「そうそうやってくれたな」

「面目ない」

時は夕方、俺は千冬と外を歩いている。そして俺の事が学園中に噂

として広まってしまった事で叱られている。

その噂とは、『謎のイケメン男性現る。織斑一夏と篠ノ之箒と浅はかならぬ関係！？』だ。…否定出来るよう出来ないな。

「まったく、ただでさえ一夏一人で煩いんだ。そこにお前が入ると余計煩くなる」

「ブラコンのお前には厳しい状況なんだな」

「黙れ」

「はいはい。……にしても、イケメン男性って…俺の何所がイケメンなんだか」

「……………」

「どうした？」

「いや、何も無い（昔からそうだったな。自分の容姿を全く理解していない。そのせいで私がどれ程困ったか／＼／＼）」

「顔、赤いぞ？」

「うつ煩い！／＼／＼火曜日から働いてもらうから、それまでに色々を用意しておけ。月曜日までは自由だ」

「いきなりだな。はいはい、分かりましたよ。じゃあ、俺は寮に行くから」

「あ、ああ…またな」

「ん…」

俺は一足早く寮に戻る事にした。

俺はこの時忘れていた。俺は織斑一夏と同じ部屋では無く、一人部屋でも無く、女子高生と相部屋だったと言う事を…。

「1025室…1025室…此処か」

俺はこれから自分が暮らす部屋の前に着いた。

1025室……懐かしいな。俺が暮らしていた部屋だ。束と相部屋だったな。

俺は昔を思い出し、ドアのカギを開け、ドアを開いた。
そして目に入ってきたものは……

「……………」

「……………」

健康的な白い肌、長く美しい黒髪、巻かれたタオルからもはつきりと分かるきれいにくびれた腰、そしてとても豊富な胸…。

……ウム、束に引けをとらない程だな。形もとても良いという事がタオル上でもわかる。思わず欲情しそうな体だ。

以上、0・0021の思考世界終了。

「て、てん…じょう、さん？」

「しの、の、の…ほづき？」

「ッ！？／／／いついやあああああ！…！？／／／」

「うわあああああ！…！？／／／／」

ボタンッ！…！

俺は神速の速さで反転し、ドアを閉めた。

「すつすまない！／／／まさかその様な状態では知らず！
／／／（しまった、忘れていた！篠ノ之箒と相部屋だったと言う
事を！）」

「なっ何！？今の声！？」

「篠ノさんの部屋からよ！」

「まさか変質者！？」

「誰か織斑先生を呼んできて！！」

近くの部屋から女子生徒がわんさか出てきた。

まずい…このままでは犯罪者扱いだ。千冬はともかく、生徒達に誤解を与えるとこの先の事に支障が出てしまう！

「しつ 篠ノ之箒！着替えてからで良い！俺を中に入れてくれ！このままでは俺は！」

俺はドアを叩きながら中にいる篠ノ之箒に懇願した。

「頼む！俺はこんな所で社会的に死を迎えたくない！」

俺は恥も尊厳も捨て、土下座までした。

するとドアがゆっくりと開いた。

俺はその瞬間、ドアの向こうへと駆け抜けた。

バタンッ！

「ハア…ハア…！」

「……／／／／」

俺はすぐにドアを閉め、膝を着いた。

「すつすまない、助かった」

「い、いえ…」

俺は立ち上がり、改めて篠ノ之箒を見た。篠ノ之箒は紅い浴衣を着ていてとても良く似合っていた。こう言っのを日本美人と言っのだから。

「その、先程はすまなかった。相部屋と言っ事をつい忘れてしまっていた」

「……………」

「……………あゝ良い部屋だな。俺が居た頃と少ししか変わって無いな」

「……………」

「……………ベッドは窓際が君か。なら俺は此方だな」

「……………」

「……………茶でも飲むか？」

「……………」

「……本当にすまなかった。この通りだ」

俺は篠ノ之箒の視線に耐えきれず、また土下座をした。ほら、今にも木刀を握ろうと……はあ!?

「マジで悪かった!何でもするからそれだけは止めてくれ!な?」

「……………さい」

「む?」

「なら剣術を教えて下さい」

篠ノ之箒は真剣な目で俺を見てきた。

「それは俺の弟子になりたい、そう捉えても?」

「はい」

……どうするか。俺は基本教える事に関しては来る者拒まず、去る者追わずだしな。しかしそうすると後に生徒達に贖いだとか言われないだろうか。だがこの目、相当な覚悟を感じる。俺の実力が生半可な努力では手に入れないとあの時に感じたんだろうか。なんにせよ……気に入った。この子には俺の全てを託しても良いかも知れない。こう見えて俺は人を見る目があると自負している。

「良いだろう。その覚悟見せてもらっぞ、第」

「ッ！ありがとうございます！……？第？」

「ん？ああ、呼び方か。俺は基本、完全な信頼を置ける者には名で、少しだけなら姓で、それ以外の者ならフルで呼んでいる」

そう言えば、最初に名を呼んだのは束だったな。いやはや、何と言う縁だ。姉妹揃って名を呼ばせるとはな。

「完全に信頼を……」

篤は嬉しそうに笑顔になった。

うむ、年頃の娘は笑顔が良い。

「それと、お前も俺の事を名で呼べ。それが信頼し合う証だ」

「は、はい！！い、イブキ…さん／／／／

「取り敢えず茶でも飲みながら話すか。色々と決め事とかあるだろうし」

「あ、はい！」

俺は部屋に備え付けてあるお茶っ葉と湯を湯呑に入れデスクに置き、篤を座らせた。俺は湯呑を片手にベッドに座った。

「さて決め事だが、筈が決めてくれ」

「わっ私ですか？」

「ああ、俺は全て其方に合わせるから。ただし、遠慮はするな」

その方が色々とやり易いからな。無責任な気もするが。

「えっと…ではシャワーなんですが、私が七時から八時で、天星さんがその後でお願いします」

「シャワーね、分かった。他には？」

「えっと…着替える時は…」

「洗面所もしくは外に行ってる。安心してくれ」

「あ、はい。他は……もう無いと思います」

「もうか？遠慮はしてないだろうな？」

「大丈夫です」

ふうん… たった二つか… もっとあると思ったが、今の娘はこんなものなのか？

「分かった。この二つは必ず守り通そう」

さて、次は俺の番か…。

「筭、今から知る事は他言無用だぞ？」

「え？……ッ！？」

俺は手袋を取って上着を脱ぎ、二の腕辺りを掴んで外した。正確には腕の形をした筒を外した。そして、その中から黒いISの腕の様な物が出てきた。

「そ、それは…？」

「良く出来てるだろ？ISの部品で出来ているんだ。……俺はな、昔に無茶やって腕を無くしたんだが、ある人が俺の為に数カ月かけて作ってくれたんだ。電気信号で動かせる様になっていて、普段はこの腕の筒で隠している」

俺は左腕をしまい、手袋を着けた。

「俺がこれを明かしたのは、偶にメンテナンスをしなくてはいけなくて、隠し通すにはちとしんどくてな。もう俺が信頼できる人ならば、ばらしても大丈夫だと判断したからだ」

「…この事、他には…」

「知っているのは、千冬、東、君と“あと一人”の四人だけだ。…黙っててもらえるか？」

俺は立ち上がり、空になった湯呑を筭が座っているデスクに置き、筭を見つめた。

「勿論です。絶対に口外しません」

「そうか、ありがとうな箒」

俺は箒の頭を撫でた。

「／／／／／」

箒は顔を赤くしてしまった。

おっと、もしかしてこれは所謂セクハラか？いけないいけない。気を付けなければ。

俺は箒の頭から手を退かした。

「あ……」

「む、どうかしたか？」

「いいえ！／／／何でもありません！／／／」

「そうか?.....さて、実は俺、この一週間一睡もしていないんだ」

「え?」

「と言う事でもう寝かせてもらおう」

「え?あの「おやすみ」はやっ!?」

俺は筈の抗議を無視して強制的に意識をシャットダウンさせた。

イブキSIDE AUT

筈SIDE

天星さんは一瞬で完全に眠ってしまった。服も着替えずに。

私は寝ている天星さんに近寄り、顔を覗いた。

「……………」

「すゝ…すゝ…」

か、カッコいい…／／／／

「ッ！？／／／／」

なっ何を考えているんだ私は！？／／／／

私は慌てて天星さんから離れ、自分のベッドに顔を埋めた。

天星…イブキ…。一夏と同じくISを動かした初めての男性…。姉から聞いた話では凄まじく強く、頭脳も明晰らしい。確かに天星さんは強かった。勝負の時、何をされたのか分からなかった程速い技

を出されて負けた…。私はとても悔しかった。と、同時に憧れた。私もあれ程強くなりたい。でも、あれ程の強さを手に入れる為には、考えられない程の努力がいるだろう。才能もいるかもしれない。でも私は欲しい。どんな事をしても強くなりたい。そして、“あの人”に会いたい…。あの約束を果たしたい…。

私は昔の事を思い出し、感傷に浸ってから明かりを消して眠った。

そう言えば…天星さん、“あの人”似てるいるな…。

翌日、昨晚の件での騒ぎを皆に問い詰められたのは言うまでも無い…。

前日（前書き）

束の口調が変！？

前日

朝5時

まだ誰も起きていない時間帯に、彼は起きた。

「……早く起き過ぎた」

はあ、まだ寝足りないのに……習慣って恐ろしいな。

俺は伸びをし、ベッドから降りた。

靴から着替えやその他もろもを取り出し、シャワー室に入り、シャワーを浴びた。二十分後、着替えを済まし、シャワー室を出た。

さて、学食はまだ開いていないだろうし……鍛錬するという気分ではないし……職員室に……行ってどうする。

俺はふと、視線を俺とは別のベッドに向けた。その先には掛け布団が上下運動をしていた。

束の寝顔は可愛かったが……妹の方はどうだ？

俺は少し、若干、些か気になり、篝の顔が見える位置、即ち顔の正面の位置に移動し、篝の寝顔を拝んだ。

「スウゥ……スウゥ……」

「……………」

十分後……。

「スウゥ……スウゥ……」

「……………」

二十分後……。

「スウゝ…スウゝ…」

「……ハッ!？」

何をやっているんだ!?!いくら束とは別の可愛さがあるからと言って長い事見過ぎだ!?!と言っか何俺は九歳も年下の娘の寝顔を眺めてる!?!変態か!?!

俺は自己嫌悪に陥ってしまい、その場で頭を抱えた。

「うん……うん？」

「あ………」

俺がまた篝の寝顔をまじまじと眺めてしまっていたら、タイミング悪く篝が目を覚ましてしまった。

「お、おはよう……篝」

「何を……やっているんですか？」

「……眺めてた」

「……フンッ！」

ゴスッ！！

「うぐッ！？」

箒は何所からともなく木刀を取り出し、俺の頭を殴った。

「……何だ、その頭は？」

「聞かないでくれ……」

午前八時、俺は現在職員室の千冬の席の隣に座っている。二時間経った今でも、木刀で殴られた場所にはコブが出来ていた。

「どうせ馬鹿な事でもしたんだろ？」

「……否定はしないでおく」

「しろ。生徒と問題を起こして貰っては困る」

「大丈夫だ、許してもらった」

「やはりしたんだな……」

こんな馬鹿な話をしながらでも、千冬は書類整理をしていく。

俺か？舐めてもらっては困る。それでも束同等且つそれ以上の能力だ。少しの時間があれば簡単に終わる。まあ、まだ全然無いのだが。掴む所暇なのだ。

「暇だ。暇で暇でしようがない」

「なら一夏の傍にいろ。と言うより、それが仕事だろう」

「大丈夫だろ。少なくとも、俺の目が黒いうちは大丈夫だ」

「その自信は何所から来るのやら。過去にもそう言って、痛い目に会っただろう」

そう言った千冬の目は俺の左腕に向いた。

「……」

そついや、そつだったかな……。俺が自惚れてたから、アイツが危険な目に会って、俺の腕も……。

「……今度はならんさ。させてたまるか」

俺は席を立ちあがった。

「何所へ行く？」

「部屋に籠る」

「仕事は？」

「終わった」

俺は職員室を出て、誰にも見つからない様に注意を払って部屋に戻った。

「ただいま……って居ないか」

筈は織斑一夏と特訓しているんだっとな。ま、俺の出番はまだまだ先だな。

俺はベッドに寝転んだ。

そういや、アイツに連絡してなかったな。

俺はふと思い出し、携帯を取り出してアイツの電話番号を指定した。

…ブルツ「はいはいはーい！！あなたの天使ちゃん、篠ノ之束だよ
くん！！」

「早ッ！？」

ワンコールも終わる前に電話に出た相手、それは篠ノ之束だ。

「やあやあやあーいぶちゃん！お久しぶりー！一週間ぶりかな？」

「久しぶりの域か？まあ良い、元気そうで何よりだ」

「元気元気！それが取り得みたいなもんですから！」

電話の向こうで豊かな胸を張りながらエッヘン！と、威張っているのが頭の中に思い浮かぶ。

「そっちはどう？ちーちゃんには会った？篝ちゃんには？いつくんには？」

「こっちは先ず先ずだ。昔を思い出す様で楽しいかな？千冬には会ったぞ。ますます美人になってたな。その分怖くなつた気もするが……。篝にも会った。と言うか相部屋だ。それに、俺の弟子になった中々、お前と同じくらい可愛い娘じゃないか。いっくんと言つのは、多分織斑一夏だと思うが、そいつにも会った。が、はつきり言つて弱い。けど強い。そんなところか」

俺は束の質問にスラスラと答えていく。質問が多いのは何時もの事だ。…少し答えるのに疲れもするが。

「うんうん、楽しそうだねー！二つほど嫉妬しちゃうけど」

それ殆どじゃん。

「あー良いなあちーちゃんは。これからずっと、いぶちゃんと一緒にいるんだからね」

「たったの三年間だろ。お前と居た時間方が遥かに長い」

なんせ、強制的に一緒に逃亡させられてたんだしな。流石の俺でも驚いたな。ま、別に良いんだがな。

「そうだ束、お前良く俺がIS学園に行く事に同意したな、千冬に何言われたんだ？」

千冬でも頭を痛くする束だ。とてつもない何かを言われたんだろうけど…。

「ひつ秘密だよ！！これは言っちゃいけないんだよ！！乙女の秘密なんだよー！！！！」

キーーーーン…

束の悲鳴に近い叫びが俺の耳を貫いた。

「そっそうか……なら聞かないでおいこ」

「うん！そうして！」

ホント、何言っただよ千冬……。束を此処まで焦らすとは…恐ろしい。

「あっ」

「ん？どうした？」

突然、束が言葉を止めた。

「あちゃゝ、何処かの国に見つかっちゃった!」

「は?何でだ?」

「んゝ多分今まで暇つぶしにやってたハッキングが見つかったのかな?」

「何やってんだよ...」

「だってえゝ例えどんな状況でもイブちゃんの電話に出るのが私の絶対な掟だから!」

「だからってハッキング中に出るなよ!?」

「あ!場所移らなきゃいけないからバイバイ!」

「おっおい!? ブツツ...切れた」

束は俺の言葉を見せず、電話を切った。

ったく、相変わらずやんちゃやってんな。

俺は携帯を置き、束が元気であつた事に嬉しさを感じながら、目を閉じた。

そしてそのまま眠りに着いた。

イブキSIDE OUT

束SIDE

「んも〜！束さんとイブちゃんの邪魔して〜！空気読めつての！」

あれからすぐに特性ロケットで飛んで行き、どっかの国のどっかに身を隠した。

んでも多分久しぶりにイブちゃんの声聞いたから、本能的に日本に近付いたと思う。

「あゝあ、イブちゃんに会いたいなゝ、抱きしめたいなゝ、ちゅゝ
したいなゝ、にゃんにゃんしたいなゝ、終いにはえくパララゝ パ、
パ、パ、パゝゝゝ パッパララゝ >お?…こ、この曲は…」

突然、私のケータイから仕事人の曲が流れた。

うゝ、この曲って事は…。

私は渋々とケータイを取り、電話に出た。

「も、もすもすひね『下らない挨拶はいい』相変わらず酷いねゝ、
エレちゃん」

電話の相手は、イブちゃんとちーちゃんと共に青春を謳歌したもう
一人親友、エレナ・レンヴァルス。
ちーちゃんとは違ったクールさを持つ、ミステリアスな女性。

「どうしたのかな?エレちゃんから電話なんて珍しいね?」

私は内心予想が付きながらも尋ねた。

『イブキを出せ』

「……………」

さて、どうしようか。

正直に話して呪われるか、誤魔化してイブちゃんやちーちゃんにある事無い事流されるか……ってどちらもダメじゃん！

『どうした？早く代われ』

「あ、あゝ！なんか電波が悪いなー！また後で『か・わ・れ』ごめんなさい、いません」

私はケータイに向かって土下座してしまった。

だって怖いんだもん！まだ呪われたくないよ！

『そっだらうな』

エレちゃんはふんつと鼻で笑った。

「え？知ってて要求した！？酷いよエレちゃん！！私のガラスの心は割れちゃったよ！」

『知った事か』

ううゝ、ホント酷いよゝ！

「うう…それで？どうしたの？」私は泣きながら尋ねた。

『いや、イブキの行き先を知りたい』

「どうしてかな？」

『会いに行くに決まってるだろう』

「ぶーぶー！私だって会いに行きたいのにー！」
『知らん。愛は奪う為にあるんだ』

電話の向こうで胸を張っているエレちゃんが想像ついた。

……っ、ちょっと待ったー！！

「奪うって何さ！？イブちゃんは渡さないよー！」

『なら共有で』

「んゝ…それなら…いつかな」

『なら早く教える』

「仕方ないねー。IS学園で教師になってるよ」

『なっ！？IS学園だと！？』

「わっ！ど、どいつしたの？」

『お前は馬鹿か！？あの女ばかりの巣窟にイブキを放り投げてみる！すぐに男に飢えた雌豚共がイブキに喰らい付くだろうが！』

「あ……」

言われてみればそうだ。

イブちゃん
は容姿抜群、
頭脳明細、
運動神経は神の領域、
御心はキリスト様。

そんなザ・パーフェクトな男を他の女が放っておくワケが無い。

いくらちーちゃんがいるって言っても、寝食を共にしているワケじゃない。

そこを狙われたら……。

「にや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
あああああ！！！！！ ダメダメダメダメ！！！！ イブちゃん
の味は私だけしか知っちゃいけないよーーーー！！！」

「この馬鹿者が！だが安心しろ」

「ふえ？」

『私が何時如何なる時でも傍に付いてやるから、雌豚共はイブキには近寄れない』

「本当！？じゃあ宜しくね！」

『ああ。任せろ』

エレちゃんは頼もしい返事を返し、電話を切った。

これでイブちゃんの味は守られた！

エレちゃんが何時如何なる時でも傍にいる限り、イブちゃんは……
何時如何なる時？それって……寝る時も？というかエレちゃんもイブちゃんを……。

「んにゃあああああああああああああああああ……！！
謀られたあああああ……！！」

私はすぐに掛け直したが……。

『お掛けになった電話番号は現在使われておりません』
「何ですとおおおおおおおお！！？」

ううー！エレちゃんのバカああああ！！

鬼神、着任する（前書き）

遅くなりましたが、更新です。

鬼神、着任する

月曜日

今日この日、織斑一夏とイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットの決闘の日である。

そして俺は箒と織斑一夏と共に、第三アリーナ・Aピットにいる。

俺がいる理由？
気分だ。

「　なあ、箒」

「何だ、一夏」

織斑一夏が箒に話しかけた。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか、気のせいだろう」

「ISの事を教えてくれる話はどつなつたんだ？」

「……………」

「目をそらすな」

ほう、箒はIS関連についても教授を頼まれていたのか。
しかし俺が見た内では只管、箒が織斑一夏をボコってる姿しか見た
事無いのだが。

「し、仕方ないだろう。お前のISも無かったのだから」

「まあ、そうだけど じゃない！知識とか基本的な事とかあつ
ただろ！？」

「……………」

「目をそらすな」

この会話を聞いて分かるだろうか？

そう、織斑一夏のISが届いていなかったのだ。
否、届いていないのだ。現在進行形で。

千冬によると、束が製作していることだ。

「これは不戦敗か？」

「それだけは絶対に嫌です!!」

織斑一夏は全力で拒絶した。

「お、織斑くん、織斑くん、織斑くんっ！」

誰だ？同じ名前を連呼する奴は。……ああ、山田真耶先生か。
いかなぞ、そんなにメロンを揺らしてわああ!!??

「……ほ、箒？」

「どうしたんですか？」

「い、いや……足……」

「足が何か？」ぎゅうう……

「ぐっ！何でも無いです！」

箒が俺の足を踏み抜こうとしてきた。

「何やっとなるか馬鹿者」

パン！ガスッ！

俺と織斑一夏の頭に出席簿と言う名の宝具が振り下ろされた。

そのランクEX。しかも俺だけ角で。

「目上の人間には敬意を払え。そしてお前はそれを止めずに何じゃれあつてゐる」

織斑一夏はどうやら山田真耶先生に失礼な事をしたらしく制裁。

俺はその現場をほったらかしにし、箒とじゃれあつてると思われ制裁。

一つ良いか？これは理不尽だ！
そして制裁を下した千冬に一言！

「おにば」

瞬間、千冬の回し蹴りが炸裂してきた。
が、俺は足首を掴み受け止めた。

そして俺はなんとなしに掴んだ足を軽く上にあげた。

「……今日は黒か」

「ッ！？／／／／／」

ピンポンパンポーン……

くしばらくお待ちくださいく

「す……すみませんでした」

「この愚か者が！／／／／／」

俺は言葉では表現出来ない制裁を下され、床とキスする事になった。
可笑的い……何時もなら回避しているのに……。

ギャグ補正って恐ろしい。

「イブキさん」

「篤……」

「覚悟しててくださいね」

「なっ……！」

怖い……俺の弟子がこんなに怖いはずがない！

「そ、そ、それですねっ！来ました！織斑くんの専用IS！」

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でモノにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ、一夏」

「織斑一夏。……派手にやられてこい」

「え？え？なん……」

「「「早く！」「」「」

織斑一夏のISは白かった。

名前は白式。

それを織斑一夏は装着し一体となった。

そして後はピットから飛び立つだけだった。

「……一つ、助言をしておいてやろう」

「え？」

俺は今まさに飛び立とうとしていた織斑一夏に声を掛けた。

「それはただ一つ

『相棒を知れ』」

「え……？」

織斑一夏は首を傾げる。

「必死に考え、足掻け。そして学べ」

「……………」

「分かったのならさっさと行け。余り相手を待たすな」

「あ、はっはい！」

織斑一夏は俺に急かされて慌ててアリーナへと飛び出た。

あの様子じゃあ、何も分かってなかったな。

「珍しいな、お前がフルネームの奴に助言とは……」

千冬は少し驚きながら俺を見た。

「昔の俺ならしなかっただろうな。……さて我が弟子、箒よ」

「は、はい！」

箒はいきなり呼ばれて慌てて返事をした。

「俺が先程言った言葉、どついう意味分かるか？」

『相棒を知れ』……全ての戦いにおいてとても重用な意味を持つ言葉だ。

「うっ……」

箒は分からないのか唸りながら頭を抱えた。

……仕方ない、その可愛さに免じてヒントを出してやるか。

「ヒント。剣士は何を扱う？」

「剣士……！はい！」

箒は大きく手を上げた。

「はい、篠ノ之君！」

「相棒……つまり自身が扱う武器の事ですネ？自身の武器の特性を知らなければそれに振り回され敗北する。そう言う事ですネ？」

「うんうん、正解だ」

俺は箒の頭を撫でてあげた。

「……／／／／」

「しかし五十点」

「えっ……」

箒の顔が引き攣った。

「確かに、己の武器の特性を把握する事は必須だ。だが、相手の武器も理解しないと何も出来はしないぞ」

「成程……」

箒はウンウンと頷いた。

しかし、織斑一夏は分かるかね？

多分無理だな。

「……ん？千冬、何メイド服を着せられた時の顔をしている」

ふと、隣にいた千冬の顔を見ると、普段では考えられない様な驚きに満ちた表情をしていた。

正しく、学園祭でメイド服を着せられた様な……分かったからそんな怖い目で睨んで来るな。

安心しろ、この事は現状誰にも話さないから。

「で？何に驚いてたんだ？」

「……何故、会って間もない篠ノ之を名前で呼んでいる」

「……ああ。嫉妬がああ！！？」

「下らない事を言っていないで答えろ」

「分かった！分かったから足を踏まないでくれ！」

「ふん…」

千冬は俺から足を退けて睨んできた。

「まったく、冗談だったのに。」

「別に束の妹だからではないぞ。こいつの目と意志に惚れて、弟子にした。そう言う事だ」

「ほっ惚れ！？／／／／」

それを聞いた篤は、顔を真っ赤に染め上げてオーバーヒートしてしまった。

いや、心に惚れただけで異性としては惚れてないからな？
まあ、意志の強い女性は好きだな。

「……明日は核弾頭か」

「何物騒な事言ってるんだ。ほれ、お前も大切な大切な弟様を見てろ」

俺は千冬を強引にモニターの方向に向けて、試合を観賞する事にした。

それから約三十分後、勝敗は決した。

結果から言おう。

織斑一夏は負けた。

だが内容は互角だった。いや、寧ろ逆転勝ちを成し遂げようとしていた。

そう、遂げようとしていたのだ。……エネルギー切れを起こすと言うドジを踏まなければ。

「アホ」

「ぐっ…それは無いですよ…」

「天星の言う通りだ。あれだけ持ち上げてそれでこの結果か、大馬鹿者」

「ぐはっ…」

俺と千冬の言葉に織斑一夏は敢え無く撃沈。

「あのな、お前は初期設定の状態で専用機相手に弱点を見抜いて追いつめて、更に劇的な一次移行ファーストシフトまで行い、止めを打とうとした。そこまでが良い。ド素人があそこまでやるとは思わなかった。だが、己の武器の特性を確認せず突っ込む馬鹿が何所に居る。あそこが戦場ならお前は死んでおた仏だ。そこんとこ分かってんのか？って言うか元々エネルギーが少なかつたのに何の考えも無しに突っ込むな分かってんのか？」

「……………」

「イブキさん、一夏がショートしていますよ」

織斑一夏は俺の言葉の波を処理しきれず頭から煙を出していた。

こんな簡単な言葉を理解出来ないとは……これは本当に一から鍛えるしかないか。

「はぁ…………千冬、この馬鹿に単一仕様能力「ワンオフ・アビリティ」について教えてやってくれ」

「無論だ」

「それと箒」

「はい」

「確か幼馴染だったよな？」

「はい、そうですね……」

「なら、弟子として稽古してやってくれ」

「えっ！？で、では私の修行は！？」

「安心しろ。しっかりと付けてやる。……教えてくれるのなら、俺のとおきをおきを伝授してやる」

「分かりました！その任、承ります！」

「任せた」

俺は面倒事……もとい課題を箒に与え、部屋に戻る事にした。

織斑一夏……俺の様になる心配は無しだな。
己の力を過信していなかった。

あの時の俺の様に…。

一夏SIDE

翌日・SHR

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりです
ね！」

山田先生は嬉々として喋った。

「先生、質問です」

俺は挙手した。

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になっているんでしょうか？」

「それは
」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたと立ち上がり、腰に手を当てポーズをとるセシリア。
しかし何故？

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったので
すから、それは仕方のない事ですわ」

くっ、反論出来ない。

「それで、まあ、わたくしも大人気無く怒った事を反省しまして、
“一夏”さんにクラス代表を譲る事にしましたわ」

……ん？今俺の事名前で呼んだ？

「そ、それですわね」

コホンと咳払いをして、顎に手を当てるセシリア。

「わたくしの様に優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ」

バン！ 机を叩く音が響いく。
立ち上がったのは箒だった。

「生憎だが、一夏の教官は足りている。私がイブキさんに頼まれたからな」

な、なんなんだ？

『私が』と『イブキさんに』を特別強調した箒は、殺気立っている瞳でセシリアを睨んだ。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何か御用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。一夏もどうしてもと懇願するからだ。と言いか私がしなければならなんだ！」

ほ、箒……俺はしてないし何でそこまで必死なんだ？
あ、そう言えば昨日天星さんに何か言われてたような……。

「座れ馬鹿共」

教室にいなかった千冬姉が入って来て、セシリア、箒の頭をばしんと叩いた。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も割れていない段階で優劣付けようとするな」

流石のセシリアも千冬姉に言われては反論の余地が無いらしい。

「クラス代表は織斑一夏。異存は無いな」

はいと（俺は除く）クラス全員一丸となって返事をした。

「よし。……さて、授業を始めたいのだが、先に紹介しておく人物がいる」

……もしかして、天星さんの事か？

千冬姉は扉に向かって入ってこいと言言った。

そして扉が開き、黒い私服に身を包んだ人が入って来た。

その人は教壇の所まで歩き、クラス全体を見渡した。

「こちらは今日からこのクラスで数学と実技の担当をする事になった」

「天星イブキだ。皆、宜しく頼む」

しゅん……。

クラス全体（俺と篤以外）が大きな目をし、口をあんぐりと開けて固まった。

「き……」

ん…？

「「「キャ――――！！！！」」」

うわあ！？何だ！？

「イブキ様！本物のイブキ様よ！！」

「あの伝説の！世界を救った伝説の男性操縦者の！！」

「カッコイイー！！私をお嫁にしてください！！」

女子が全員天星さんに向かって黄色い声が響いた。

……と言うか天星さんって有名人！？世界を救ったって何！？
しかもセシリア！君は男の俺に野蛮人とか極東の猿だとか言っ
てな
かったか！？何で混ざってんだよ！？

「この方は例外ですわ！」

あ………そうですか。

その天星さんは少し困ったような顔をし、頬をかいていた。

「静かにしろ、馬鹿者共」

バン！ 千冬姉机を叩き、黙らせた。

「先も言った通り、数学と実技を教える事になった。皆、分からない事があれば聞いてくれ。君たちが分かる様に教えよう」

天星さんは優しく微笑んだ。

「きゃあああ！イケメン過ぎる！」

「織斑くんとは違う大人のフェロモン……！」

「そして何所となくワイルドなお方！」

クラスは益々元気になったようだ。
しかし筈はどこか不機嫌だった。

「……まだ一時間目には時間があるな……。よし、何人が質問を許そう」

「「はい!!」「」」

天星さんがそう口にした瞬間、クラスメイトが全員手を挙げた。幕までもが。

「おっと、これは凄いな。それじゃあ、君」

「はい！年下の子はどう思いますか!？」

何聞いてちゃってんの!？

「ふむ、気が合えば良いんじゃないか？」

そして何で疑問形！？

「次は……君」

「はい！こういうタイプが良いですか！？」

だから何聞いてんの！？

「強く美しい女性」

ほう、だから千冬姉と仲が良いのか？

「君」

「はい！ぶつちゃけ織斑先生とはどんな関係ですか！？」

あ、それは俺も気になる。

「ふむ……ただならぬ関係とでも言っておこう」

いや、天星さん！アンタ同級生とか言ってた！？ほら、隣で千冬姉の宝具が震えてる！

「その君」

「恋人はいますか！？」

クラスメイトの誰かがそう言った瞬間、辺りは静かになった。

「……それは」

「「それは？」」「」

それは？

「…………秘密だ」

フツと笑って答えた。

するとその笑みにやられた女子生徒達が次々に顔を赤らめて昇天していった。

と、ここでチャイムが鳴り、質問タイムは終了した。

「では諸君、頑張りましたえ」

天星さんは手を振り、教室から出ていった。

さてさて、これから大変な事になりそうだ。

保険医、現る（前書き）

さてと……なんか設定が無茶になってきたような…。

保険医、現る

天星イブキが着任して三日後。

イブキはかつての同級生、織斑千冬と職員室でお茶を飲んでいた。

「しかしあれだな。まさか俺が教師になるなんてな」

「確かにな。頼んどいてなんだが、あれ程他人に関心を持ってなかったお前が、こうるさいガキ共の面倒をみるとはな」

酷い言われようだな。

まあ、確かに千冬と初めて出会った時は「何だコイツ？鬱陶しい」
って思ってたしな。

「だがお前は変わったな」

「ん？」

「学園に編入して来て、誰とも関わりたがらなかったお前は、私達と“アレ”を乗り越えて、徐々に他人を思いやって……今ではもう教師になったワケだ」

「……そうだな」

“アレ”……か。

“アレ”は本当に辛かったな……。俺も束も千冬も“アイツ”も当時の生徒たちも……。皆頑張った……。

「……ところで話は変わるが」

「あ？」

「……束とはどうなっている」

「ぶふう————！！！！？」

俺は飲んでいたお茶を噴き出したしてしまった。

「ゴホッ、ゴホッ！い、いきなり何だ！」

「いや、少し気になったただけだ。で、どうなんだ？幼馴染として聞いておきたいんだが」

ま、まさか千冬からこの手の話題が出るとは思わなかった。年月は人を変えるものなんだな。

「どうって……何時も通りだが」

「子供は出来たのか？」

「ぶうー……！！？」

「汚いぞ」

千冬は机に掛ったお茶をティッシュで拭いた。

「こ、子供ってな…。あのな、まだ“アレ”が終わったワケじゃないんだ。それどころじゃない」

「しかし寝たんだろう？ いや、寝てるんだろう？」

「っ…あのな、何でそこまで知りたいんだ？」

「興味があるからだ」

興味って…。はあ、こいつ俺が狼狽してる所を見て面白がってるな。

そうかいそうかい、何時もからかわれてるお返してか。良いだろう、そっちがその気ならこっちもやってあげようじゃないか。

「……知りたいのか？」

「ああ」

「なら教えよう」

千冬に近寄り、スツと手を千冬の頬に持つていく。

「なっ！？／／／何をする気だ！／／／／」

「教えてほしんだろう？だから何をしているのか、言葉ではなく身体で教えようとな」

「うあっ！／／／／／」

座っていた千冬の腕を掴み、立たせてから左手で千冬の腰にまわし、右手を千冬の顎に添える。

「安心しろ……優しく教えてやるから」

優しく囁きながら顔を千冬に近付ける。

「まっ待てっ！／／／／こんな所で！／／／／」

「俺達の他に誰もいないから…」

「~~~~ツ！？／／／／」

「織斑先生、お話が……………」

「……………」

あと数センチで唇が触れそうな所で、山田先生がやって来た。

「……………」

「……………あっ！！／／／／お、お邪魔しました！／／／／」

山田先生は我を取り戻した後、顔を真っ赤に染め上げて走り去っていった。

「……………」

「……………」

「………すまん」

「この、馬鹿があああああああ……！！！！！！／／／／／」

この瞬間、神の雷が鬼神に落ちた。

イブキSIDE OUT

第SIDE

私は今、幼馴染の一夏と、最近一夏の最終兵器・無限の旗製にやられたセシリアと食堂に来ている。今は昼休みで、食堂には生徒で溢れかえっていた。

「いや、天星さんの教え方は上手いよ。すぐに分かったちゃうもんな」

「ええ、とてもシンプルでしっかりとした教え方で助かりますわ」

「ああ。それに俺達に分からない事は無いかって、ちゃんと気遣ってくれるし。ホント、良い先生だよ」

一夏の言う通り、イブキさんはこの三日間でとても人気が出た。

一組しか授業を受け持っていないが、イブキさんのルックス、性格、その武勇伝でたちまち学園中に広まり、知らない人はいない。……
…何故かそれが気に入らないが。

「そう言えば、二人は天星さんの事って知ってるのか？何か伝説だとか、世界を救ったとか」

確かに……。一夏よりはIS関連について知っているつもりだったが、それは基礎などばかりだ。

姉の篠ノ之束が作ったISのせいで昔住んでいた土地を離れる事になり、一夏とも、“あの人”とも会えなくなってしまった。

それ故にISの事は極力避けていたが、姉の妹と言う事もあり、適性試験を受けさせられて今に至るのだが……。まあ、一夏とも再会出来て、イブキさんとも会えたから良しとしよう。

「え……一夏さん、知らないんですの？」

「おう」

「篤さんは知って……」

「すまない、私も知らない」

セシリア、何故そんなに口を開けて驚いている。ISについて知らなかったらイブキさんの事を知らないのは仕方の無い事だろう。

だが、その考えはセシリアの言葉で消え去った。

「そんな！何も知らないんですの！？八年前の戦争を！」

「「せ、戦争！？」「」

何を言っているんだ！戦争なんか無かった筈だ！

「信じられせんわ…。一夏さんならともかく、箒さんまで知らないなんて……」

「俺ならともかくって何だよ！」

「いや、戦争なんてものは無かっただろう！まあ、確かにそれ位前にテロか何かはあったみたいだが」

「え、そうなの？」

一夏はこれも知らなかったらしく、目を丸くして固まった。

「テロ…？ああ、そうでしたわ。そう言う事になっていましたわね」

セシリアは思い出したように呟いた。
そして小さく咳払いをし、説明しだした。

「実は今から八年前、IS学園と、ある組織との戦闘があつたんです」

「八年前って千冬姉が在学してた頃じゃないか！」

「ええ。その戦闘は、世界各国の政府が国民に不安を大きくしないよう、出来るだけ小さくして、少し大きな目のテロと言う事で世界に広められていますけど……実際は戦争と変わらなかったと、政府から聞かされていますわ」

戦争って…じゃあ、イブキさんや千冬さん…姉さんも戦争に…？

「皆さんは政府によって戦争を隠蔽、美化された、テロと言う戦いを、天星先生が止めて世界を救ったと思ひ込まれているのですよ
うが、“本当”に世界の命運を賭けた戦争そのものを、しかもたつ

た四人で終結させたそうです」

「四人……て言うത്？」

「『鬼神』天星イブキ、『天災』篠ノ之束、『武女帝』織斑千冬、そして『無限の魔女』エレナ・レンヴァルス。この四人が世界を救った人物だそうです。織斑先生は今では『ブリュンヒルデ』と呼ばれていますわね。天星先生はこの四人のリーダーで、常に最前線で戦っていたそうですわ」

「千冬姉が！？」

「姉さんも！？」

まさか姉さんも戦っていたなんて……。いや、どうせ真面目にやっていたいなかった筈だ。他人の事を考えずに自分勝手にやってた筈だ。

「これ以上はあまり聞いていませんので分かりませんが、天星先生達は英雄と言う事に変わりありませんわ」

「英雄……か。カッコいいな」

英雄……。姉さんが？そんな筈はない。姉さんはただ自分の事だけを……！

「……あ、因みに今の話は、各国の代表候補生以上の人が知る国家機密ですから内密にお願いしますわ」

「「……………え？」」

セシリア……………それを先に言ってくれ。

第SIDE OUT

一夏SIDE

午後の授業は本来なら千冬姉の座学なんだが、どうも山田先生と共に急用が出来たらしく、特別に天星さんが教えてくれる事になった。

「~~~~~であるから、この場合の出力、スピードは~~~~」

うん、もの凄く分かりやすい。

読書の皆様には分かりづらいだろうけど、聞いてるこっちはもの凄く分かる。

流石、伝説の人だ。

「~~~~と言う事だ。何かここまでで質問がある人は？」

「「「ありませ〜ん!!」「」」

「そうか、それは良かった」

凄い……。このクラスの心を完全に掴んでる。恐るべし天星先生。

「良いか、どんな小さい基礎でもしつかりと覚えておけば、それが何時か勝利への道となる。実際、それで勝っている人も何人もいる」

伝説の人が語ったらもの凄く説得力あるな。
俺も天星さんみたく強くなりたいな。

「せんせーい！私達も先生みたいに強くなれますか？」

お、俺が思ってた事を誰かが聞いてくれたぞ。

「そうだな。まず本気で強くなろうとする意志が無いと無理だな。
俺もそうだが、千冬もその意思があったからこそ、強くなった。決して才能だけではないぞ」

強くなろうとする意志か…。

そうだな。やっぱそれが無いと意味無いもんな。流石は先生だよ。

「だから意志ある者は己を磨け。そしてテストで満点でも取ってみる」

「「「ええ〜〜〜!!」」」

テスト…。うう、やだなあ…。俺そこまで頭良くないし…。

「そんな嫌がるな。……そうだな、もしテストで満点を取った者にはご褒美をやるう」

「「「ご褒美!?!」」」

うわっ!? いきなり女子が顔を赤くして涎を垂らしたり、身体をくねくねさせたり……。駄目だ! 見てられない!

「……期待してる様なものじゃないから」

天星さんも若干引いて顔を引き攣らせてた。

「いいか？満点を取った者には……」

「「「者には……？」」「」

者には？

「織斑千冬のコスプレ写真をあげよう！」

ぶううううつ！！！？

なっ なっ なっ な！何ですかそれは！？千冬姉の見た事の無い姿の写真！ってか何で今持つてるんですか！？

「これはな、若き学生時代の千冬が、学園祭の時に行われたコスプレ喫茶で着ていた数々の服の写真だ。レア物だぞ。どうだ、欲しいか？」

い、いくらなんでも欲しがらないでしょう。

「「「欲しいです!」「」」

欲しいのかよ!?!そっぴゃこのクラスってちょっとおかしいんだっ
た!

「一夏、欲しいか?」

「そこで俺に振ります!?!」

「答えによっては、お前がシスコンかどうかが判明する」

「いいませんよ!」

「ちっ……」

何で舌打ち!?!ねえ!何で舌打ちされないといけないんですか!?!

バァン！！！！

「「「ツ！？」「」」

いきなり教室のドアがあり得ない音を立てて開いた。

「ち、千冬……」

開けた人物は千冬姉だった。

千冬姉は肩で息をしながらズカズカと教室に入ってきて、天星さんに近寄った。

「ち、千冬！落ち着け！これはだな！生徒のやる気をだな！」

ま、まずい！天星さんが千冬姉に殺される！今の千冬姉なら本気でやれる！

「イブキ……」

千冬姉は天星さんの両肩を掴んだ。

ああ、駄目だ！先生、三日間ありがとうございました！

「逃げろ……」

「は……？」

……あれ？殺さない？それどころか逃げろ？

「今すぐ逃げろ！アイツが！アイツが来た！」

「お、おおお落ち着け！一体誰が来たんだ？」

千冬姉があんなに焦っている所初めてみた。俺が誘拐されて助けに来てくれた時よりも切羽詰まった様な顔をしてる…。

クラスの皆も啞然としてるし……。

「アイツが……“魔女”が来た！」

「……魔女？」「……」

いや、何言ってるんだ？魔女って……そんなのいるワケないじゃないか。

もう、皆が呆けてしまってるじゃんか。しっかりしてくれよ。働き過ぎか？

けど、天星さんの顔を見ると、まるでこの世の終わりを見た様な顔をしていた。いや、実際どんなにか知らないが。

「あの、天星さ　天星先生？どうしたんですか？」

何時まで経っても戻ってこない天星さんに声をかけてみた。
けど返事は無く、汗を垂れ流していた。

「…………まずい」

「え？」

「まずいぞ千冬！これは緊急事態だ！」

「あのちよつと？」

「ああそうだ！だから早く逃げろ！このままではお前は喰われる！」

喰われるって何！？何か化け物でも出たのか！？

「くそ！何故ここがバレた！？」

「恐らく束が洩らしたんだろう…。アイツの恐怖を知っているからな……」

「くっ！千冬、ここは頼む！」

そう言つて、天星さんは教室から出ようとドアに向かった。
けど……。

ガガガガッ！

「ぬわっ！？」

天星さんの足元に四本の剣が刺さった。

「何だ！？」

あれは明らかにISの武器！誰かが攻撃した！？

俺はこの時セシリアに聞いた話を思い出した。

戦争……。まさかその時の敵が！？

「天星さん！」

「来るな織斑！こいつはお前の敵う相手ではない！」

白式を展開しようとした俺を止めて天星さんは今度は窓から飛び出ようとした。

ガガガガガッ！

けどまたしても天星さんの足元に剣が刺さり、行く手を遮った。

くそっ！一体何所から攻撃しているんだ！？

教室、廊下、外を見える範囲で探したけど、敵らしい者はいなかった。

「まずい…い…」

「イブキ！」

千冬姉が天星さんに駆け寄ろうとしたが、また剣が突き刺さり、千冬姉の動きを止めた。

「千冬姉！」

くそ！やっぱり俺が白式で！

「動かない方が賢明だぞ、坊や」

「ッ！」

白式を展開しようとした瞬間、一本の剣が俺の目の前で切っ先を向けて空中に浮かんでいた。

そして一人の女性が教室に入ってきた。

白いような銀色のような色でとても長い髪、目は真っ赤で、身長やスタイルは千冬姉と同じくらい。灰色の長ズボンに白いＴシャツ、

灰色のジャケットを来た女の人。

まさか、この女の人が！？

「直接会うのは久しぶりだな」

「……何しに来た」

女の方は天星さんに近寄り話しかけた。
天星さんは睨みながら返した。

「何しに来た？そんなの決まっておろう……」

女の方は自分の前にある剣を消して天星さんに更に近寄り……。

「お前に抱かれる為に決まっているじゃないか！！」

天星さんに抱き付いた。

「「「「……はい？」」」」

うん、クラス全員シンクロで言ったけどもう一度言っ。

はい？ 一体何ですかこれは？

白髪の女の人は天星さんに抱き付いて嬉しそうだし、天星さんは呆れて頂垂れてるし、千冬姉も頭を抱えてるし……。それに攻撃してきたのはあの人だよな…？

「あの、天星さん。その人は一体……」

「あゝ… なんと言ったら良いか…。悪友か」

「違う。妻だ、嫁だ、伴侶だ、奥さんだ」

「織斑、気にしなくて良いからな。えゝと、各自自習！じゃー！」

「あ！天星さん！」

天星さんは千冬姉と女の人を連れて教室から出て行った。

因みに言うと、さっきからもの凄い負のオーラが箒の席辺りから漂っているんですが！

ほら！周りの皆が恐がってるぞ！

一夏SIDE OUT

イブキSIDE

職員室のドアを乱暴に開けて、自分の席へ向かう。

それから椅子を一つ用意して、その椅子にこの妄想女を叩き付けた。

「ひゃっ！……優しくして／＼／／／」

「言ってる。で？何でここにいる」

「なんだ、聞いていないのか？束とか千冬に」

「何？」

隣にいる千冬に視線を向けると、千冬は溜息を吐いて頭を抱えた。

「私は先程、山田先生に聞いた。ここに赴任してくるとな」

「ああそうか……………って赴任！？」

「赴任と言っても、別に教師になるわけではない。ここの保険医が丁度いなくなるのでな、そこにこいつが入る事になった」

「何ッ！？」

「そう言う事だ。何時でも来て良いぞ。授業中、誰にも見つからずに保健室のベッドで……………キャッ！／＼／＼」

嘘だ…。嘘だと言ってくれ。この日々俺に抱かれる事を妄想し、あまつさえそれを実行しようとしてくるこの女と毎日顔を合わせると言うのか。神よ……。私は何か仕出かしたのでしょいか？

「はあ…変な妄想をしていないでさっさと手続きとか済ませろ」

「なんだ、イブキに相手にされないからと言って、八つ当たりするな」

「ばっ！？／／／何を言い出す！／／／」

「知っているんだぞ。お前が毎日鏡の前で「わああああ！／／／やめろおおお！／／／」ふふん、千冬はからかいがいのある奴だなあ」

はあ…。相変わらずこいつ等はうるさいな。いい意味で。

この女、名前はエレナ・レンヴァルス。

白い髪で光の反射の影響で銀にも見えたりする、尻を隠す程の長い

髪を持ち、後ろで一つに結んでいる。目は赤眼で、一瞬どこぞの酒好きの女にも見えない事も無いが、決して違う。

身長は170位で、スタイルはこれまた良し。

性格は千冬と同じくクールレディだが、エレナは千冬と違いミステリアスさを兼ね備えている。そしてさらにスケベである。本人曰く「激しいスキンシップだ」らしい。

俺の妻とか言っているが、これは学生時代にあつたとある事が原因だ。まあ、言われる俺は案外少しだけ嬉しかったりする。……そこ、変態とか言つな。

イタリアの元代表候補生で、本来なら代表選手になっている程の腕前なのだが、とある理由により辞退。この理由に俺が関わっていると、マスコミが煩かつた時期もあつたりなかったり。

教室で俺と千冬があんなに慌ててたのは、上記で述べたとおり、エレナは俺に積極的にアプローチを仕掛けるが故に、手段を選んでこない。だから俺はこいつと居るのが気が気でないのだ。

千冬の場合、エレナに弱みを多く握られているせいで逆らえず、エレナは千冬にありとあらゆる無理難題を要求しては笑い、厄介事を押し付けては笑い、面倒事を擦り付けては笑いを繰り返すのだ。だから千冬はまた地獄が始まると嘆いていたのだ。

因みに、束に対しては仲は良いのだが、キツイ物言いで喋ったり、憂さ晴らしに振りまわしたり、時にはやり返されたりと、割と激しい付き合いだ。……何かこんな言い方をするとエロいな。

「そうだイブキ」

「ん？」

「ナース服はピンクが良いか？それとも水色か？それとエロい奴と普通の奴、どっちが良い」

「普通に私服で白衣にしろ！」

これからの学園生活……せめて生徒からは冷たい目で見られないように努力しよう。

「……で？」

「何だ唐突に」

さて、まだこの女に一日も経っていないのにもう問題が発生した。

「はあ……／＼／＼はあ……／＼／＼」

「……何故箒は……その「乱れている？」まあ、それだ」

寮に帰って部屋に入ると、顔を赤くし息を乱して浴衣が思いつきり肌蹴てベッドに寝ている箒と、その上でピンク色で袖が肩からパツクリと無く、尻の肉が見えそうなほど短い丈の浴衣を着て箒の胸を鷲掴みをしているエレナがいた。

「だから……何をしている」

「女同士の……ナニだ」

「お約束だな！ってか箒から離れろ！」

俺が持参して来た刀を向けてエレナを箒から退くように命令する。

「箒？……私の時はすぐに名前を呼んでくれなかったくせに」

エレナは不貞腐れながら、簾の上から退いた。

「簾、無事か？」

「はあ……／／／はあ……／／／は、はい……／／／／」

顔どころか身体中を真っ赤に染め上げて、身体を起こし浴衣を直した。

「で、お前は何でこの部屋にいる。そして何故簾の……アレをアレしたんだ？」

「アレ？アレって何だ？分からないな」

「……………」刀を喉元に突き付ける。

「ああっ……そのまま浴衣を切り裂いて私の身体が露わに……／／／／」

「分かった。もう良い。取り敢えず何故この部屋にいるんだ」

「篠ノ之箒の身体があまりにもエロくつてな」

「それはもう良いと言っただろうが!」

「私もこの部屋だからだ。そしてこの娘の身体も私のだ」

「だからもう良いと……ちょっと待て。今何て言った?」

「この娘の「それより前だ!」私もこの部屋だ」

「……………」

……………あり得ない!!!!!!!!!!

何故こいつと同じ部屋何だ!?!?この部屋は二人部屋の筈だ!三人など入れる筈がってベッドが三つあった!?!強引に間に小さいのが入れられてる!?!?!そして部屋の大きさは変わり無い!?!?!!!!!!!

「殺す気か!!」

「そうだな。私の処女はお前に殺される」

「殺すか馬鹿が!! 誰だ! こんな風に組んだのは!」

「デカメロン」

「誰だそれはああああああ!! 代名詞を使うなあああああ!!
ハッ! あの女かああああああ!!」

「落ち着け。キャラが崩れている」

「元と言えば誰のせいだ!」

「私だ!」

「威張るな!」

はあ、はあ、はあ、疲れる! こいつの相手をするのは疲れる!

「取り敢えず、色々と仕切りを立てるぞ」

「気にするな。私はお前と一つになりたい」

「先ず、シャワーの時間帯だが……」

「放置プレイ！？放置プレイか！これが放置プレイの快感……／／／／
／なんとすばらあっ！？」

「ごちゃごちゃと喧しい。この痴女が」

刀の峰で後首を殴り気絶させた。

「すまない筈。同級生が迷惑をかける」

「い、いえ……。吃驚しただけですから」

「気を付ける。隙あらば襲うからな。束と千冬も犠牲になってたな」

アレは見るに耐えなかった。俺の目の前で束のメロンが、千冬のも
モが……。

「えっと、気をつけます」

「どんな事をしてもいい。俺が許す」

じゃないと無事では済まない。束と千冬はミサイルと零落白夜で撃
退していたからな。

「……あの、この人って、イブキさんの……」

「違うからな。俺の女じゃない」

「……そうですか」

この日はもう寝る事にした。

余談だが、寝る時は真中が俺、窓際が箒、残りがエレナとなった。理由はエレナが箒を寝ている間に襲わないようにだ。……俺が狙われる可能性が格段に上がったけどな。

はぁ……このベッド小さい。

おまけ

「お前が山田真耶だな」

「はっはい！」

「胸を揉まれたくなかったらイブキと同室にしろ。先客は居ても良い」

「ええっ！？あつ、やめっ！あつ！わ、分かりましたからっ！」

おまけ2

「ほう、お前が束の妹か」

「そ、そつですけど……」

「アイツに似て良い胸をしているな」

「ッ！？／／／／」

「揉ませてくれたらイブキの目を惹くものを教えてやるぞ」

「＜キラーン！＞（もし私を気にしてくれたら色々と教えてくれかも！）気が済むまでどうぞ！」

おまけ3

「……一体何故ばれたんだ」

「千冬姉？何してんだ？」

「ッ！／＼／＼い、一夏か……」

「お、おう。（あ、また鏡の前でポーズ取ってる。うわ、千冬姉の上目使いとか反則だろ。天星さんでもこれは落ちるかな）頑張つて、千冬姉」

「……？ああ。（やはりこうか？アイツはこつ言つのが好きのか？それとももつと胸を……。いや、そもそも胸は気にする方なのか？）」

鬼神と魔女の設定（前書き）

おかしな所があったら言っして下さい

鬼神と魔女の設定

名前：天星イブキ

年齢：24

性別：男

身長：190

髪：漆黒のショート

目：紫

性格：クールでノリが良い。面倒見が良い。起こると正に鬼神。

特徴：信頼のおける者には名前で呼び、ある程度関心が持てたり、関係が長くなる者には苗字で呼ぶ。それ以外はフルネームで呼ぶ。

好き：千冬をからかう事。和食や浴衣や和服等の、様々な和。黒を好む。

嫌い：酸っぱい物。平穩を脅かすもの全て。威張る人間。

備考：千冬に頼まれてIS学園の数学、実技の教師になった、一夏より先にISを動かした男。

千冬、束、エレナとはIS学園に編入して頃からの長い付き合い。
『鬼神』と呼ばれ、世界を救った伝説の男。世間一般には大きなテロを止めたと言われているが、それは世界各国の政府が隠蔽工作を

した物で、実際は世界命運を賭けた戦争だった。この事は国家機密であり、すっかりとばらしてしまったセシリアにより、箒、一夏が知ってしまったが、この事はイブキはまだ知らない。他には千冬、束、エレナと、当時の学生が知っている（この作品では、山田真耶はイブキが在学中の後輩であるが故に知っている）。

左腕が無く、とある人に数カ月掛けて製作してもらった義手をしており、普段は人の腕と同じ形と色の筒で隠し、黒の手袋をしていて外には出さない。

この腕はISの部品で出来ており、強度、パワー共に起動状態のISと同等である。なお、生徒にお仕置きをする時はこの腕でアイアンクローをお見舞いする。

箒が過去に出会った人物に似ているらしい。

IS

名前：天照
あまてらす

世代：全てに当てはまらない。

カラー：ドス黒く、赤が混じった色。

待機状態：赤黒いチェーン。

外見：ほぼ全身装甲で、フル・スキン僅かな二の腕部分と、首から上しか出ていない。

両肩には打鉄と同じような装甲があり、二本のニードルが突き出ている。

背中には五枚一对の非固定浮遊部位の翼があり、その大きさは自身の身長と同じかそれ以上ある。形状は、一枚一枚が分かれており、横に並ぶ板のようになっていて、翼の内側には一枚に付き一本の剣が収められている。普段は五枚を一つに束ねていて、ある程度本気を出した時に展開する。尚、展開した時はスピードが上がったり、翼で敵の攻撃を防ぐ事が出来る。

武器

刀：鬼龍

黒い刀で、刀身の長さは二メートル。振れば高エネルギーの赤黒い斬撃を放つ事が出来る。鞘も存在し、抜刀術、帯刀術、居合い切りなどの刀術を扱う。

剣：邪天^{じゃてん}

黒い剣で、刀身は二メートル。鬼龍が柔なら邪天は豪である。振れば高エネルギーの赤黒い波動を放つ。波動を障壁にして敵の銃器や飛び道具を防ぎ、波動をそのまま敵に放てば、面の斬撃となる。

翼：夜叉

長さ三メートル弱の翼。五枚一对で、縦に並ぶ板の様な感じ。展開すれば機動性が上がり、翼を盾にする事も出来る。

内側に剣を一本ずつ収納しており、射出する事が出来る。

十本の剣：修羅

翼の内側に納めている黒い剣で、刀身は一メートル。切れ味はそんなに高くないが、強度は高い。高エネルギーを刀身に纏わせ、敵を斬り付けたり投擲する。

爪：鬼龍爪きりゅうそう

エネルギーを拳に送り込む事で赤黒い電撃を纏った拳になり、触れた物を容易に切り裂く事が出来る。その威力はアリーナのシールドをも切り裂く。

戟：喰龍がじゅう

赤黒い方天画戟。形状は、青龍偃月刀の刃の付け根辺りに三日月の刃を付けた感じ。エネルギーを刃に溜めこみ、強力な荷電粒子方を放つ事が出来る。また、刃に纏わせたまま斬る事が出来る。

ロングライフル：麒麟

二丁の赤黒い高エネルギーライフルで、一発が荷電粒子砲並の威力のビームを放つ。また、縦に連結する事で、半径百キロ先の敵を狙撃する事が出来る。但し、狙撃モードは強力過ぎて、毎回五分のチャージが必要。

名前：エレナ・レンヴァルス

年齢：24

性別：女

身長：169

髪：白いが、光の反射によって銀に見えたりする。長さは尻を隠す程で、うなじ辺りで一つに束ねている。

目：紅

性格：クールでミステリアス。スケベ。いたずら好き。正に魔女。

趣味：イブキに猛アタックする事。その為ならば手段を選ばない。

好き：イブキ。千冬をからかう事。女との激しいスキンシップ。

嫌い：イブキ以外の男（一夏は許す）。イブキに近付こうとする女（千冬と束は親友なので良し。筈は良い胸をしているから良し）。

備考：IS学園に保険医としてやってきた女性。

『無限の魔女』と呼ばれ、イブキと共に世界を救った一人。

束、千冬とはイブキを切欠に知り合い、それ以来親友同士となる。過去に男に襲われた事があり、イブキを憎しみの対象として見ていた事があつたが、ある事を切欠に見方を改め、今では愛しているが、今のところ片想いの様子。

女性の身体が好きで、大きな胸を見ると、スキンシップと称してセクハラを行う。だが自分がされると、顔を真っ赤にして恥ずかしが

る。

イブキの為なら何でもする気で、一人で世界に剣かを売っても良い
と思っている。

千冬の弱みを数多く握っているので、それを利用してパシリに使っ
たり、からかったり、面倒事を押し付けたり、遊んだりして笑う。
それ故に千冬から魔女と恐れられている。

束とは基本的に仲は良いが、ある理由からきつい物言いで話したり、
脅したり、はたまた振り回したり、やられ返されたりと、激しい関
係。

IS

名前：ポルポーラ・ストレージ（紫の魔女）

世代：第一 第三

カラー：紫色で、緑のラインが入っている。

待機状態：アメジストのネックレス。

外見：他のISよりもシャープな感じで、手足も細く、機動性を重
視した様な機体。しかしスラスタは一つで、移動よりも待機する
事を目的として背中に取り付けられている。端から見れば、身長が
大きい女性に見える程、装甲や装備を持っていない。

特性：限界まで装備や装甲を取り除き拡張領域を増やし、更に改良
に改良を重ね、拡張領域が通常の数百倍に上がった世界に一つだけ
のIS。それ故、機動性、防御力などが格段に下がった。

ハイパーセンサーも劣化させられた為、搭乗者自身の処理能力が高くないと、完全には扱えない。

武器

拡張領域が数百倍の為、ほぼ無尽蔵の剣、槍、戟、刀、薙刀、ランス、盾等々、ありとあらゆる全ての武具を収納している。但し、本当に無限ではないので、何時かは無くなる（しかしそこまで使う事が無いので、無くたった事はない）。

攻撃方法が幾つかあり、一つ目は、武器を周りに展開して敵に射出する。但し、自分が見えている範囲、即ち前方にしか撃てない。

二つ目。武器を身体の周りに展開、周回させる事で、接近戦タイプのISを寄せ付けない。

三つ目。自らが武器を持ち、尚且つ幾つもの武器を射出、周回させながら接近戦を行う。しかし自身が接近戦タイプではないので、リスクが高い。

四つ目。盾を全方位に展開し、防御態勢に入る。偶に剣などで防御する事もある。

五つ目。全方位に様々な武器を展開し、全方位に射出する。しかしこれは敵味方問わず攻撃する上に、ロックオンが出来ない為、緊急時の時しか使わない。

武具以外にも、様々な物が量子変換されており、中には超小型追跡カメラまであり、イブキの着替えやシャワーを覗く為に使用しようとするが、その度に破壊される。今までで壊されてきた数、凡そ500。

武女帝の想い（前書き）

更新です。

文化祭楽しかったー！

武女帝の想い

四月も下旬。

遅咲きの桜の花びらがちょうど全部無くなった頃。

俺は実技の授業の為にアリーナへと向かっている。

しかし、それを邪魔する奴現れた。

「てん・じょう・せん・せい！」

そいつは後ろから飛びついて来たが、俺は身体をずらし、飛び付く目標を失った奴は床に落ちていった。

が、そいつの後襟を掴みそれを防いだ。

「何の用だ、更識盾無」

「もう、名前で呼んで？」

そう言ってウィンクしてくるのは青髪にルックスは上の女子生徒、生徒会長・更識盾無だった。

「俺は絶対的に信頼を置く者しか名前で呼ばん。お前こそ、教師には敬語を使え」

「えゝ？良いじゃない、別に」

こいつ、生徒と言う立場を理解しているのか？俺が千冬並の性格だったら、そく鉄拳制裁だぞ。手を離して地面に下ろす。

「それで？何の用だ？」

「用が無いと来ちゃ駄目なの？」

「特定の人物意外駄目だ」

「それって恋人？」

「答える義理は無い」

「むう」
「…」

更識は頬を膨らませて不貞腐れた。

「用が無いのなら俺は行くぞ。可愛い教え子たちが待ってるのでな」

俺は更識の横を通り過ぎて、アリーナへと向かった。

「むう」、流石は伝説の人。ガードが固いわね」

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみる」

千冬に言われてオルコットはISを展開していたが、織斑は展開に手間取っていた。

ふむ、まだそんなに早くは無理か。

織斑は右腕に付けているガンレットを掴み、意識を集中し始めた。そうすると織斑は白式の展開に成功した。

「ふむ、良いだろう。だがまだ遅い。もっと速くしろ」

…無茶言っなあ。織斑はまだド素人だぞ。そう簡単にいくか。

「天星先生、お手本を」

「あ？」

「お手本を」

千冬が睨みを効かせて要求してくるから仕方なく俺はISを展開した。

「「「おおー！！」」」

生徒達から拍手が聞こえてきた。

瞬きを終えるか終えないかの速さで展開したからだろう。

因みに俺のISは、ドス黒い赤で、肩には打鉄と似ているシヨルダ
ーが存在し、違う部分は二本のニードルが突き出ている部分だ。
背中には五枚一对の翼があるが、今は一つに畳んでいる。
手足は少しばかり太くガッチリしている。

ついでに言うと、俺はISスーツは着ない主義だ。
電気信号だのなんだのは、俺には関係ないのだ。……理由は言えな
いが。

「流石だな。ついでにそのまま一緒に実演してくれ」

「了解」

「よし。では飛べ」

言われてオルコットはすぐに空を飛んだ。

急上昇をし、遙か頭上で静止する。

対して織斑はすげーっと眩きながらぼけーっと見ていた。

「おい」

織斑の頭を小突き、飛ぶように指示を出した。

織斑はすぐに上昇したが。オルコットよりもかなり遅いものだった。

俺も上昇を始めたが、先にオルコットと同じ高度へと達した。

「何をやっている。天星先生は訳あって出力をあまり出せないが、オルコットと比べればスペック上、白式が上だぞ」

こら千冬。人の秘密を簡単に洩らすな。結構気にしているんだぞ。

千冬が言った通り、俺は過去の戦争の影響で、出力を上げる事が出来ない。

理由を話すとなると、また別の話になるので割合。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやり易い方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。何で浮いているんですか、これ」

織斑が俺に視線をやってきた。

「説明しても良いが……長いぞ？」

「やっぱり遠慮します」

ニヤツと笑って言ったら、汗をかいて遠慮された。

まあ、聞いても理解出来ないと思うしな。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。
その時は二人きりで」

「ンン！……オルコット、授業中に逢い引きは関心せんな」

「あ、あいっ！？／＼／＼ち、ちがいつ」

「それに、下で千冬が苛立ってる」

主に早く次に行かせるとな。

「三人とも、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、先生。お先に」

オルコットは言い終えた瞬間、急降下を行い、完全停止をやつてのけた。

流石は候補生か。これ位はな。

「織斑。先にやるから後から来い」

「はい」

俺は出来る限りの速さで急降下し、地表一センチで止まった。

うん、まあまあだな。

続いて急降下をしてくる織斑を見上げたが、俺は正直呆れた。

俺は少し立ち位置を変え、右腕を伸ばして握った。

ガシンン！！！！

その瞬間、タイミング良く織斑の右足首が手に握られた。

織斑は頭から地面に向かって突っ込んできたのだ。

「織斑。急降下と墜落は違うからな」

「あ、ありがとうございます……」

ぱつと手を離し、織斑は地面と深いキスをする羽目になったが、罰の代わりとして受け取りな。

「大丈夫ですか、一夏さん？」お怪我はなくて？」

「あ、ああ。天星先生のお蔭でなんとか……」

「そう、それはなによりですわ」

オルコットが嬉しそうに喜んだ。

これはあれだな、織斑に完全に惚れたか。

「はいはい、そこまで。千冬、次行くぞ」

「うむ。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになったのだろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。では始めろ」

言われて織斑は右腕を突き出す。

二、三秒すると手が光り出し、光が収まると>>雪片式型<<が握られていた。

「遅い。0・5秒で出せるようになれ」

ほっほう、ホントに無茶言っな。そこまで行くのに一体どれほど掛るやら。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に突き出し、一瞬だけ爆発的に光り、狙撃銃>>スターライトmk?<<が握られていた。……………横にいた俺に銃口を向けて。

「流石だな、代表候補生。」

ただし、そのポーズは止める。天星

先生を亡き者にする気か。正面に展開出来るようにしろ」

「えっ！？す、すみません！！」

「いや、いい。千冬に言われた通りに、な」

「……はい」

オルコットは少ししょんぼりとして頷いた。

「では天星先生」

はいはい。

俺は左腕を腰に構えた。

と、思ったら既に黒い鞘に納められた刀が握られていた。

「これが伝説の鬼神と言われた者の腕だ。流石にここまでとは言わんが、出来るだけ近付けるように」

いや、無理だつつに。これは俺だから出来る訳でして……って聞
いちゃいねえ。

それからはオルコットが接近戦の武器が展開しにくいから、出来る
ようになれと千冬に言われて、授業は終了。
今日の授業は全て終わった。

夜十時過ぎ。

「ふう〜、今日も疲れたな」

「これ位でなにへこたれている。お前ならこの十倍はやってのける
だろ」

「お前は俺を誰だと思ってるんだ…」

今日の分の仕事が全て終了し、千冬と共に寮へと帰ってる途中だ。

はあ……教師の仕事がこんなにも大変だったとは思わなかったな。
と言っかそもそも俺は教師免許も何も持っていないのに良くやって
るな。改めて自分の凄さに感心だ。

「……なあ、イブキ」

「ん？」

千冬が歩いていたら足を止め、視線を下に落としていた。

どうしたんだ？こんな千冬はまるで……。

「……私達はまだ“あの戦い”の途中なのだな」

まるで、俺が墜とされた時の……。

「……そうだ」

「なら、“アイツ等”は一夏達を……」

「……巻き込もうとするだろうな」

それが、俺達の強さの秘訣であり、最大の弱点だからな。

「だったら、いつその事一夏と筈に」

「千冬」

「ッ……！」

千冬の口に指を当てて閉じさせる。

「千冬。それは俺達が決める事じゃない」

「……だが」

「あの子達が決める事だ」

「なら！教える事だけでもしなくては、決めるも何もないだろう！」

「いや、あの子達は何時か知る事になる。もしくはもう知ってるのかもしれない」

あそこにはセシリア・オルコットがいるからな。情報が伝わってしまっていると言う事もあり得なくはない。

「ならもし！一夏達がこちらに来てしまったらっ！」

千冬はその目から涙を零していた。

弟を巻き込みたくはない。

その思いから来ているのだろう。

「その時は、俺達を守ってやればいいじゃないか。それが俺達のやり方だろ」

「それでも…ッ!？」

千冬を俺の腕でそっと抱き寄せる。
誰かに見られたら色々と面倒だが、そのような些細な事はどうでも良かった。

「安心しろ。俺達は一時的には言え世界を救ったんだぞ？それが弟達に変わるだけだ。守り抜けるさ」

優しく包み込むようにして抱きしめ、頭を撫でる。

すると千冬の身体からゆっくりと力が抜けていき、終いには俺に身体を委ねてきた。

「そう、だったな…。私達は一度救っているんだっただな……」

「ああ……」

「ならまた救えるよな？」

「当然だ」

「……………ありがとう」

「……………どういたしまして」

暫くの間、抱きしめる時間が続いた。

気が済んだのか、千冬はゆっくりと身体を離し、流れ出ていた涙を拭った。

「気が楽になった。礼を言う」

「……………今更強がられてもな……」

「ッ！／＼／＼／＼うるさい！／＼／＼」

顔を真っ赤にして恥ずかしがる千冬は可愛かったと、心に刻んでおこう。

「にしても、何でいきなりこんな事言いだしたんだ？」

唐突過ぎるだろ。それにらしくもなかったし。

「いや、実は一夏達が話している所を聞いたんだが…」

盗み聞きかい、このブラコン。

いくら弟が心配だからってストーカーはすんなよ。

「織斑達が、何て？」

「……八年前の戦争がどうのと、聞こえた」

「うん、それもう知ってるよ。あのガキ共はもう知ってるよ」

「……やはりか」

なぐにやっちゃってんのかね？この事は最重要機密だぞ。誰だ、口を滑らせた馬鹿者は。まあ、十中八九オルコットだな。後で俺のアイアンクロードでも与えてやるか。

「これはもう、何時間かれてもおかしくないはないな」

「その時は教えられる範囲で教えるか」

「そうだな。……敵の事と俺の事だけは、細かく教える訳にはいかないが」

「……そうだな。一夏達は優し過ぎるからな」

「俺からしたら、俺以外の殆どの人類が優しいさ」

「……………」

そう、俺は鬼神だ。その名の通り、俺は誰にも容赦はしない。
敵は全て、完膚なきまでに叩きのめす。
それが例え、許しを求める相手でも…。

「…………お前も優しいさ」

千冬の眩きは風に消されて、俺には届かなかった。

千冬と別れ、自室に戻った俺は、早々頭を抱えた。

「エレナ…。俺の弟子に何を見せている」

「世界の体位大百科」

「あ…／／／ああ…／／／／」

エレナはベッドの上で箒を後ろから抱きしめるような形で座っていた。

エレナの手には、分厚い本が握られていて、その姿は仲の良い姉妹が妹に本を読ませている様だった。

箒は顔をこれでもかと言う程赤く染め、本の中身を見ていた。否、見せられていた。

「この痴女が！俺の弟子を墮落させるな！」

エレナから箒を奪い取り、エレナを蹴り飛ばす。

「きゃんっ！…乱暴にしないで…／／／／」

「永遠に寝てろ」

ガスッ

エレナの首に手刀を落として気絶させる。
エレナはぱたりとベッドに倒れた。

「篤、気をしっかり持て」

「はわあゝゝ……／／／／」

「本気で大丈夫か!？」

ちよい!!目を覚ませ!戻ってこーい!!

「わあゝゝハッ!あ、イブキさん……」

「ほっ……。良かった」

「わ、私は一体何を……」

「何でもないさ。何でもな」

取り敢えず、この百科事典を焼却してしまおうか……
… っっぱ保存しておこう。使えるかも。

「何をしまったんですか？」

「対東戦用攻略本」

「姉さんの？」

「そうだ」

恐らくこれで五日は持つ筈だ…… 多分。

「エレナさんはどうして泡を吹いているんですか？」

「それも気にするな。と言うか、名前で呼んでいるんだな」

「あ、はい。……さもないと色々と、危機が感じられましたから」

「そうか…」

良い判断だ。流石は俺が見込んだ弟子だ。

「あの、イブキさん」

「ん？」

「そろそろ、指南をお願いしたいのですが…」

……ああ、もう期限か。思ったより早く感じたな。

俺は箒の弟子宣言から今まで、箒は俺が渡した体力トレーニングのメニューをこなしていた。

これをやれば、覚悟のある者ならば体力が必ず付くのだ。箒はそれを見事にやってのけたのだ。

「そうだな。校庭五十周に鬼の筋力トレーニング十セット、更に毎日三回の瞑想。今更だが、女子にこのメニューは辛かっただろう」

「本当に今更ですね…」

だがそれをクリアした箒は凄い娘だ。

これはもしかして俺や千冬を超えるかもな。

「よし、なら明日から早朝と部活後に鍛えてやるとしよう」

「あ、ありがとうございます!」

箒は土下座で礼を言った。

「まあまあ。それと、この事は黙ってるよ。エロ鼻屑とは思われたくないだろう?」

「はい、分かりました」

「良い返事だ」

ワシャワシャと頭を撫でる。

……ここに来てから撫でるのが癖になってきたな。セクハラで訴えられるのは勘弁だ。

「……………」

「……………どうした、箒」

笑顔だった箒の顔は、何かを決心したような顔だった。

「……………イブキさん」

「……………何だ」

「指南してもらったあたって、一つ。どうしても聞いておきたい事があります」

……まさか。

「八年前の……戦争の事を聞きたいのです」

……来てしまったか。
しかも、千冬と話したばかりなのに……。

「……その事を誰から聞いた。そして誰が知っている」

「……」

「罰則は与えない。約束しよう」

「……セシリアからで……一夏も知っています……」

「……そうか。エレナ」

「何だ？」

エレナはムクリと起き上がり、首をゴキゴキと動かした。

「教えてやってくれ」

「え…？」

「何所まで教えて良いんだ？」

「俺と敵との因縁と、俺のIS以外だ」

「……分かった」

「え…イブキさん！？」

後ろから聞こえる筈の声を無視して部屋から退出した。

俺はあの戦争の事を口にしたくない。したら俺は……正気を保って

られるのか分からない。
考えるのは平気、戦うのも平気。だが口にすると、より鮮明に思い
出して心が抉られる…。

「……弱いな、俺は」

そして、なんて卑怯なんだろう。エレナや千冬、東でさえ口にする
のは嫌なのに…。

俺は静かに寮の屋上へと足を運んだ。

同時刻、織斑兄弟の部屋。

「……なに？もう一度言え」

「八年前の戦争の事が知りたい」

「ッ……」

この時の千冬の心は嘆いていただろう。

唯一の存在を巻き込んでしまつのかと……。

第一次鬼神戦争 第SIDE（前書き）

今回は第と一夏の二つに分けます。

訳が分からなくても許して。

第一次鬼神戦争 第SIDE

私の声に反応せずに、イブキさんは部屋を出ていった。

チラッと視えた顔には暗い表情が浮かんでいた様に思えた。

「……イブキはな、自分では口に出来ないんだよ」

「え？」

「心の傷が大き過ぎる。思い出すだけなら普通にいられる。だが、言葉にしようとするとな」

「……」

「…さて、聞きたいんだったな。八年前の事を」

「……はい」

そう答えると、少し待てと言って、エレナさんは自分のデスクから写真を二枚取り出して、一枚を見せてきた。

写真には同じ年くらいの四人の男女が写っていた。三人の女の方はISスーツを着ているが、男の方は黒い服を着ている。

三人は知っている。姉と千冬さんとエレナさんだ。

だがこの男の人が分からない。もの凄く無表情で、とても怖い顔の人。

「……姉さんに千冬さん、エレナさん……この男の人は？」

「イブキだ」

「えっ？」

この無表情で怖い人があの優しいイブキさん！？あ、でも言われてみればイブキさんに見える…。

「その写真は最終決戦の前に撮った写真だ」

と言う事は姉さんもISに乗って戦っていた…？

「その時のイブキは今みたいに笑ったり、優しくしてくれたり、ましてや子供の面倒なんて見ない、冷たい奴だった」

「そ、そうなんですか？」

「ああ。…イブキの親って誰だか分かるか？」

分かる訳が無い。会った事も聞いた事もないのだから。

「イブキも分からないんだ」

「……え？」

「記憶喪失でな。一面焼け野原のど真中で倒れているのを見つけたらしい」

「きおく……そう……しつ？」

「大体十四の時までの記憶を全て失って、そのせいで周りの人間に心を開けなかった。唯一人を抜いて」

今度はもう一枚の写真を見せてきた。

それには先程の四人に一人の女性が加えられていた。

女性はピンクのセミロングで左肩に髪をかけて、目は青で鋭い。けれどもとても優しくそうな表情をしていた。身長は千冬さんよりも高い目だった。

……ちょっと待ってほしい。この女性を私は知っている。いや、全世界が知っている女性だ。

この女性は、嘗て日本軍とアメリカ軍が共に戦地を駆け抜ける為に作られた、世界最強の特殊防衛軍隊で名を馳せている女性だからだ。

「どうしてこの人が写っているんですか!？」

「ん？ 知っているのか？」

「当たり前ですよ！ 伝説の雷光・天星ライトさん……ですよ……」

“天星”ライト……？

……もしかして。

「あの、まさか天星ライトって……」

「ああ。イブキの義母だ」

「……マジですか？」

「マジです」

だからあんなに強かったのか……。道理で手も足も出なかった訳だ。

「イブキを見つけて引き取り、僅か一年足らずで言葉や戦いを教え込んだ人だ。因みに、イブキはライトさんには未だ勝てない。戦った瞬間秒殺だ」

イブキさんが負ける……想像できない。

「でまあ、その人だけに心を開いていて、私達と会った時にはライトさん以外の人間を邪険に扱っていたな」

「あのイブキさんが……」

「特に私や束とは仲がもの凄く悪かったな」

「え？ 姉さんは何となく分かりますが……」

恐らく自分勝手に横暴でイブキさんを怒らせていたからとか。

「……私はな、この頃は男に対して憎しみしか持っていなかったから

な」

「…憎しみ？」

「……私の事はどうでも良い。今はイブキの事だ」

まるで余計な事を言ってしまった様に気まずい顔をして話を戻した。

「それでだ。長い事過ごして行く内に、色々とあつて友人とままでに
なつた訳だ」

「はあ…」

何か大切な部分が抜け落ちている様な気もするが、敢えて聞かない
でおこう。

「…ってこれでも話が脱線してるな。ええっと…そう！ 戦争だ！」

エレナさんは何の話をしていたのかやっと思いだした様だ。かく言う私も忘れていた。

「日々が過ぎていく中、事件が学園に起こった」

「事件？」

「学園に謎のISが強襲を仕掛けてきた」

「強襲！？」

「ああ。そいつの狙いは束だった。イブキは束を守ろうと必死で抵抗したが、当時のイブキでは何も出来なかった」

イブキさんが勝てないって、それじゃあ姉さんは…！

「それでもイブキは必死に守って束を死守し遂げた。……戦争の火種となつてな」

「えっ…?」

待つてほしい。今何かとても聞き捨てならない事を言った気が…。

「束を守った時、イブキは奴らに宣戦布告をしてしまったんだ。イブキに自覚が無くとも…」

「どういふことですか!？」

「それは言えない。イブキに直接聞くんだな」

「……」

「続けるぞ。…それから奴らは機会があればイブキを狙い、その過程で学園を巻き込み、次第に世界を巻き込み始めた」

「…飛躍し過ぎてませんか？」

「仕方が無かるう。口止めされている事を抜いたら、こっになってし

まうんだ」

「……」

「…兎に角、世界が巻き込まれ、学園と奴らを中心とした戦争が始まった。そしてイブキは……」

エレナさんは口を閉じて、少ししたらまた開いた。

「自分の事を知って、世界に狙われた」

もやは何も言えない。飛躍し過ぎて訳が分からない事もあるが、イブキさんの過去があまりに壮絶だと言う事が分かって、驚きで頭が真っ白になっていた。

「イブキは心を砕かれて、戦う意志も無くし、唯一の暖かさも失い、一度死んだ」

「死んだって……生きてるじゃないですか」

「まあそうなんだが…。何時か知る時が来るだろう」

エレナさんは目を伏せがちにそう言った。

一体何なのだろう？　もう色々あり過ぎてどう捉えたらいいのか分からない。

「しかしイブキは自分を見つけて戦場に戻ってきた。そして私達の手を取って、一緒に戦った。そして大きな怪我を負いながらも、この戦争を休戦へと導いた」

「……そうですか」

私が理解出来たことは少ないが、その一つはとても恐ろしい事だった。

エレナさんは言った。“休戦”と。“終戦”ではなく、“休戦”と言ったのだ。なら戦争は終わって無いと言つつ事…。

「戦争はまだ…終わってないんですね…」

「ああ…。何故イブキがこの学園に来たか、分かるか？」

私は首を横に振った。

「千冬に頼まれたからと言っていたが、内心はお前達を守る為だ」

「私達を…？」

「ああ。束の妹であるお前、千冬の弟である織斑一夏。イブキ達の心を殺すなら、イブキ達の大切なものを殺せば良いからな。だからここに来た。……ま、これは悪魔で推測だがな」

「一夏が千冬さんの大切な弟と言う事は分かる。……けど、姉さんにとって私はそんな大層なものじゃない。姉さんは自分の事しか…」

「第よ、お前自分がどんなに愛されてるか知らないな？」

「え…？」

「はあ…、私から言える事はこれぐらいだ。後はイブキの所へ行け。アイツは今、屋上にいると思う」

「え？ いや、でも…」

「拒否するなら、朝まで快樂の地獄を味あわせてやる」

手をワキワキさせて近付いてくるエレナさんを見て、本能的に危険と感じた。

私は脱兎の如く部屋から飛び出した。

その時にエレナさんが何か呟いた気がしたが、私には聞こえなかった。

「……よし！」

私は気合を込めて、イブキさんの元に向かった。

先ずはこう言ってるよう。

私も戦いますと…。

「イブキ…本当に良かったのか？ お前が“人間じゃない”と感づかれるのも、時間の問題だぞ…」

「

第一次鬼神戦争 一夏SIDE（前書き）

いや、やっぱりかおかしいかも。

そして短い。

第一次鬼神戦争 一夏SIDE

「……それを聞いたら、お前は巻き込まれる事になるかも知れんぞ？」

「ま、巻き込まれるって…何に？」

千冬姉が何時も以上に真剣な眼差しをするから、少し戸惑ってしまった。

「イブキの敵にだ」

「……ッ!？」

「それでも聞きたいと言っのなら、教えられる事は教えよう」

どうする…？ 俺は千冬姉が過去にやってきた事を聞きたかっただけだ。それが戦争に巻き込まれるかもしれない事になるなんて…。

……いや、箒も聞くと言っていた。なら箒も巻き込まれる事を承知で聞く筈……。なら俺は幼馴染だけ巻き込ませるなんて事は出来ない！

「ああ……。覚悟はある」

「……分かった」

千冬姉は自分のデスクから二枚の写真を取り出した。

「天星ライトさんを覚えているか？」

「えっ？ ああ、俺達がまだ箒の家族に出会う前まで、捨てられた俺達を養ってくれた人だよな。それが？」

「天星……。これを聞いて何か引つかかる事は無いか？」

引っ掛かる事？ ……あれ？ 天星先生と同じ……。まさか……。

「あの人はイブキの義母だ」

「……ええっ！？ 天星先生のお母さん！？ って、え？ でも何で義母？」

「……イブキは昔、とある焼け野原で倒れている所を発見されたんだ。その時に、十四歳までの記憶を全て失っているんだ」

「……え？」

天星さんの過去は壮絶だった。

言葉も思い出も名前も、歩き方まで失った天星さんは、ライトさんに僅か一年足らずで全てを叩きこまれ、世界最強のIS操縦者までになった。

そして千冬姉達と次第に心を通わせていき、絆を築いていった。

それから戦争が起きて、原因が天星さんとか、一度死んだとか、様々な過去を聞いた。

名前の呼び方まで天星さんは決めているらしい。

無関心、初対面、気に入らない奴にはフルネームか、無視。

関係が長くなる者や知り合い、興味を持った者等には苗字で。

信頼を置ける親しい者、認めた者達には名前で呼ぶらしい。どうやら俺は興味を少なからず持たれているらしい。…いや、ただ関係が長くなるから？

それと、天星さんが此処に来た理由も聞いた。

千冬姉に頼まれて、俺を護衛する為に来たとか…。

千冬姉、嬉しいけど、俺は自分の身は自分で守って見せるさ。

……だけど、俺が一番聞きたいのはこれじゃない。

「千冬姉…」

「何だ？」

「千冬姉は、人を殺したのか？」

「っ…」

…表情から見るに、やっぱり千冬姉は…。

「…仕方なかったんだ。アレはスポーツではなく、本物の死合いだ…。シールドエネルギーを削るだけでは…敵は退いてはくれない…」

「千冬姉…」

「皆を守る為には殺さなければならぬ…。生かしておいたら、また誰かを殺しにやってくる…。それが敵のやり方なんだ…！」

そうか…。千冬姉は皆を守る為に…刀を…。

「…私を軽蔑するか？ 人殺しだと…」

「ッ…！」

俺は立ち上がり、千冬姉の胸ぐらを掴んだ。

普段はこんな事出来ないけど、今の発言には頭に来てしまった。

「軽蔑？　するわけなんだろうがっ！　千冬姉は人を守ったんだろ！？」　戦えない人達を守る為に刀を握ったんだろ！？」

「そ、そうだ…」

「ならそれで良いじゃんかよ！　千冬姉は多くの人を守った！　それは誰にでも出来る事じゃない！　俺はこんな姉を持てて嬉しいさ！」

「一夏…」

「それになあ！　守る為に人を殺すのは道徳的に間違ってる！　けど人道的には間違ってる無い！」

「ッ！」

そうさ！　それが人なんだ！　人は人を守る為に時には世界をも変えてしまっんだ！

「一夏……。そうか…私は、これで良かったのか…」

「ああ！」

俺は千冬姉を離し、千冬姉の肩に手を置いた。

「だから胸張っていいんだぜ。私は皆を守りましたってな！」

「……………ありがとう」

「ッ！／／／／／」

は、反則だ…！ その笑顔は反則ですぞ…！ 思わずドキッとなつてしまったじゃないか。

「それにしても以外だな」

「な、何が？」

「お前があんな立派な事を言えるなんてな」

「ああ…。これ、受け売りなんだ」

「受け売り？ 誰からだ？」

「えつと…ほら、俺が、五、六歳の時に、箒とよく裏山で遊んでいたろ？」

「…ああ。一時期、毎日の様に行っていたな。それがどうした？」

「俺と箒さ、そこである人と遊んでたんだ」

それはもう十年近くも昔の話。

俺と箒は毎日裏山に行き、ある人と遊んでいた。

とても優しい人で、俺は“兄さん”って呼んで何時もくっ付いてた。

毎日裏山で集合して、川でで遊んだり、昆虫採集をしたり、修行ごっこなんてのもしていた。

出会った切欠は箒の紹介で、箒が虐められている所を助けたらしい。

歳は大体十三歳くらいで、けどとても大人びていて、本当に俺達の兄の様に接してくれた。まあ、箒はそれ以上に想っているけど。一年ちよつとで会えなくなっただけど、とても楽しくて今でも鮮明に覚えてる。

「その人が言ってた。『大切な人を守る為に相手を傷付ける事は道徳的に間違ってるけど、人道的には正解だ』って。正直、その時の俺たちじゃ意味が分からなかったけど、今はちゃんと分かるよ」

「……そうだったのか」

「ああ……」

ホント、あの頃は楽しかったよ。千冬姉と同じくらいに憧れてて、兄さんのどんな事でも真似しようとしてたっけ…。

「その子の名前は覚えてるのか？」

「ん？ ああ、『月夜黒耶』^{つくよぐろや}って言うんだ」

「…ッ！？」

ん？ 何だ？ 千冬姉、今変に反応したような……。

「千冬姉？」

「あ、いや…何でも無い」

そう言つて千冬姉は腕を組んで何かを考えだした。

一体何なんだ？

「……まさかな…いやしかし……」

「……？ 千冬姉？」

「……一夏、私が言える事は全て伝えた」

「え？ お、おう……」

何だいきなり……。

「今日はもう遅い。早く寝ろ」

「え？」

「拒否は認めん。明日はお前が日直だろう」

「ああっ！？ そうだった！ 朝早いんだった！」

やべー…しかも天星さんに数学のプリントを配ってけって言われてるんだった！

「お、お休み！」

「ああ……」

俺はベッドに潜り、眠りに付く準備に入った。

千冬姉……今は何も言わなくて良いから……。何時か言える時が来たら言ってくれ……。俺はちゃんと受け止めるから……。

俺は意識を飛ばした……。

「……お前は何処まで奇跡を生んでいるんだ……。だが……感謝するよ……」

幕の決心（前書き）

あははは〜……なんかもう、スンマセン！
俺の文才ではこの程度
なのか！

幕の決心

屋上に出ると、夜風が冷たかった。春と言ってもまだ少し寒く、ずっといたら風邪を引くかも知れない。それに加えて今の私はシャワーを浴びた後だから浴衣姿である。上に何かを羽織って来たら良かったと後悔した。

「……………」

イブキさんは柵に肘を突いて学園を眺めていた。

何処か寂しい表情で、何かを思い出している様な雰囲気だった。

「イブキさん……」

「……………」
「どう思った？」

「え？」

「俺の過去、戦争を聞いて」

私はイブキさんの隣に移動し、同じように学園を眺めた。

「何て言うか……滅茶苦茶でした……」

「はは…滅茶苦茶か…。そんな事を言われたのは初めてだ……」

「うう……」

いかん…これでは私が無関心な子とかわれてしまっではないか！
もっとこう…何か気の利いた言葉は無いのか！？

「だが…それを聞いて安心した」

「えっ…？」

「普通なら同情したり、一線を引いたりするものなんだが…。お前は素直に感想を言ってくれたな。ありがとう」

「い、いえ…／／／／」

「反則です、その顔は…／／／／ とてもカッコ良過ぎます…／／／／」

「それで…箒。覚悟はちゃんとあるんだろうな？」

「え？ 覚悟…ですか？」

「何の覚悟だろう？ 俺の過去を知ったからにはタダで返さんぞ、的な何かだろうか？」

「……お前、まさかエレナに何も聞いてないのか？」

「へ？ いえ…何も…」

「……あの馬鹿が……！」

「あの、話が見えないんですけど……」

イブキさんが頭を抱えて此処にいないエレナさんに怒っていた。

「箒、落ち着いて聞け」

「は、はい」

「俺の過去、俺達がやってきた戦争を知れば、それが俺達にとって大切な誰かであれば、俺達が戦ってきた相手に命を狙われるかもしれないんだ」

「……そうですか」

「そうなん……へ？」

イブキさんは面を喰らったかのようになり、私を見て固まった。

「イブキさん、私の我儘を聞いて貰えますか？」

「あ、ああ……」

イブキさんの正面に向かい合って目を見詰める。

「イブキさん。私は口が上手くないですから、単刀直入に言います。
…私も一緒に戦います！」

「……はい！？」

「エレナさんが言っていました。イブキさんは私達を守る為に学園に
来たのだと。千冬さんの頼みも含めて、私達を守るからと」

「そ、それは…！ いや、だが…！」

「それに、私だって誰かを守りたいんです！」

私は、誰かを守りたい。“あの人”が言っていた様に誰かを守りたい。約束を果たしたい。でもそれには…。

「だからイブキさん！ 私に戦いの術を教えてください！ お願いします！」

その場で土下座をした。浴衣が汚れるとか、恥だとかはどうでも良い。私はイブキさんの弟子に本気でなりたい！

「ちょ、おい！？ 止めろって！」

「お願いします！」

「……はあ……。分かったから取り敢えず立て」

イブキさんが溜息を突いて私を立たせた。

「筭、理由くらいはあるんだろう?」

恐らく、何故私が戦うと決めた理由についてだろう。

「…十年近く前です。私は一人の男の子に恋をしました」

その人は私よりも年上で、大人びていて、何よりとても暖かった。

私は昔、性格が理由で周りから虐められていました。ある時、一人で買い物に出ていたら、虐めてくる男の子達に遭遇してそのまま虐められしまいました。

周りを囲まれて、罵りの言葉を浴びせられて、私は相手を睨む事しか出来なかったんです。だけどそれが気に入らなかったのか、一人が私を突き飛ばしてきたんです。それから周りもそれに乗って私に手を出してきたんです。

流石に私も子供で、泣きだしてその場に蹲っていたんです。そしたら…。

『おい餓鬼共』

『な、なんだよ!?!』

『寄って集って一人の女の子をリンチか…。どうしようもないゴミだな』

『う、うるさい! コイツが悪いんだ! 何時も木刀を振り回して男みたいにさ! 男女なんだよ!』

『ならただ叫ぶお前は女みたいだな。やい女男』

『お、俺は女なんかじゃない!』

『だったらその子も男じゃない。分かっただけで帰ってママに抱き付いてな。それとも何だ? その子の様に女男って殴られたいのか? 年上舐めるなよ』

その後、虐めていた子達はその人に殴りかかりましたけど、あっさりと負けて泣きながら帰っていました。勿論、その人は何もしてません。ただずっと女男って口にしてただけですから。

『君、大丈夫か?』

『ひっぐ…ぐずっ…』

『真っ赤に腫れてるな…。よし、お兄ちゃんが手当てしてあげる』

『あ…!』

その人は私を背負って、丁度近くにあった薬局で薬とかを買って、治療してくれました。

『うっ…!』

『痛かった? もうすぐ終わるから……はい、終わり』

『…ありがとうございます…』

『偉いねー、ちゃんとお礼言えるんだ』

『お母さんがちゃんと言わなきゃダメって…』

『そのお母さんも偉いね。ウチのお母さんもね、女の子が困ってたら助けなさいって言ってたんだよ』

私は嬉しかったんです。私をちゃんと女の子って思ってくれて…。このキツイ目も言葉使いも好きだって言ってくれたんだす。

『“黒耶さん”は、中学生ですか？』

『そうだよ、良く分かったね。周りからは大人だって言われるんだけどね』

『……確かに』

『そう言う箒ちゃんもホントに小学生？　しっかりし過ぎてない？』

『……お姉ちゃんを見ると、自然に…』

『へえ、お姉ちゃんが居るんだ。じゃあその人はとてもしっかりしてるんだ』

『いえ……逆です』

『……ああ、そう言う事か』

黒耶さんとの会話は何故かとても楽しく思えた。

黒耶さんの声を聞くだけで心が穏やかになり、隣にいただけで心が一杯になる……。

普通、この歳なら何も感じないのだろうけれど、私は直感した。

ああ……私はこの人の事が好きなんだなあ……と。

それから一夏にも紹介して、三人で遊んで、剣道の練習をしたり、大きくなったら何をしたいとか色々話した。

『俺はさ、大人になったら皆を守るヒーローになりたいんだよ』

『ヒーロー？』

『カッケー！』

『そう、本当にカッコいいんだ。だから俺は強くなって皆を守りたい』

『皆って、誰ですか？』

『家族や友達、あと篤や一夏や二人の家族や友達、皆…』

『……なら、私もヒーローになる！』

『え？』

『なら俺も！』

『…一夏は兎も角、篤も？』

『……ダメ、ですか？』

『……女の子のヒーローってのも面白いな。じゃあ約束だ』

『約束？』

『今度大人になって会う時は、三人ともヒーローになってる事。どうだ？』

『いいぜ！ 男同士の約束だ！』

『わ、私も！』

今思えば、女の子がヒーローってのも笑えますね。でも黒耶さんは笑わず受け止めてくれた。それがとても嬉しくてつい言っちゃったんです。

『も、もし私がヒーローになって…！』

『ん？』

『ヒーローになって！ 黒耶さんよりも強くなって！ 美人になつてたら！ け、けけけっ、結婚してくれますかっ！？／／／／』

その時の黒耶さんの顔は、今でも覚えています。子供が言ってる事なのに真剣に考えてくれて、ちゃんと約束してくれたんです。

『いいぞ。俺を吃驚させるくらい強くなって美人になってたら結婚してあげる』

『ほっ本当ですかっ！？／／／／』

『ああ、約束だ』

「だから、私は今までこの約束を胸に生きて来ました。だから私は強くなつて、ヒーローになる！ だから、独りで戦つてるイブキさんを放つては置けません！」

「……………」

「だから！ 私に守れる術を教えてください！」

「……………」

イブキさんは少し考える素振りを見せて、空を見上げた。

「…過去があるって事は素晴らしい事だ」

「え…？」

突然イブキさんが呟き始めた。

「アレを決めたからコレをする。アレを感じたからコレが出来る。昔の自分がいたから今の自分がいる。過去とは今を生きる為の謂わば術…。問題はそれをどう受けているかだ」

「……………」

「第、お前にとって過去とは何だ？」

「私にとって過去とは……覚悟です！」

「覚悟？」

「アレをした。ならコレを成し遂げるべきもの。コレをした。ならアレをやらなければならない。私にとって過去とは思いついてもあり、同時に覚悟をした瞬間でもあります」

「……合格だ」

「は……？」

え、合格？ ええと、それはつまり……。

「お前は本当に高校生か？ そんな固い考えをする女子は初めてだ」

「か、固い……ですか」

「ああ。やはりお前は面白い奴だ。喜べ、篠ノ之箒はたった今から俺の愛弟子だ」

「……………あつ、ありがとうございます！！」

やった！！ 私はイブキさんに認められたんだ！！ 戦いの術を教えて貰えるんだ！！ 良かったあ！！

「まったく、束といいお前といい、どうしてこつも俺を驚かすんだ」

「姉も…ですか」

「ああ。成程、束がシスコンになるのも頷ける」

……………え？ 姉さんが、シスコン？

「あの、それは何かの間違いじゃ…。姉は何時も自分の事しか…。私のことなんて…」

「それはアレだ。照れ隠しって奴だ。……俺から聞いたって言うなよ?。」

イブキさんは私の目を見て口を開いた。

「決戦前だ。何で束はそんなにも世界を守ろうとするんだって聞いた事がある。その時何て答えたと思う?。」

……………千冬さんがいるから?

「『私の大好きな大好きな妹がいるから!』ってとても眩しい笑顔でそう答えたよ」

「……………え……………?」

嘘だ…。姉さんがそんな事言う筈が…。

「『何時か寂しい思いをさせることになっちゃうから、せめて危険が及ばない様にしたい』って、言ったんだ」

「……………」

「…箒。俺がとやかく言っても信じられないだろう。だがこれだけは本当だ」

「……………」

「『篠ノ之束は篠ノ之箒の為に戦った』これだけは信じて欲しい」

「そんなの…………どう信じれば…。あの人は何も言わないで…………私の前から…………」

「…今度会ったら言ってやれ。寂しかったって。そう言ったら束は泣くから」

私の頭をそつと抱いて撫でてくれた。

私はそれがどうしてか嬉しくて、無意識にイブキさんに泣き付いていた。

「お前は優しい子だよ……」

私は確信した。何故泣いているのかを…。

私は嬉しかったんだ。姉さんが私の事が大好きなんだって。

私は寂しかったんだ。姉さんがいなくなって。

私は大好きだったんだ。姉さんが心の底から大好きだったんだ。

私はこの日を一生忘れない。

イブキさんに与えて貰った、この日を……。

再会と再開（前書き）

奈々様のライブ、ヤバかった！ あの方こそ女神だ！

自分の将来の夢は声優なので、あのような方が先輩になると思うと……もう感激っす！！

再会と再開

「転校生？」

「ああ、そうだ」

朝、職員室で千冬と話していたら転校生が来ると言う話になった。

「どんな子だ？」

「ファン・リンイン 鳳鈴音。中国の代表候補生で、一夏の幼馴染だ」

「……言い当ててやろうか。その子は織斑に惚れている」

「ああ、当然の如くな」

やっぱし……。これはまたおもしろ……。めんどくさい事になりそうだ。

「織斑は一体何人の女性を泣かす事になるんだろうな？」

「人の事は言えんだろう」

「そうだ。あの時は私と言う妻がいるのに、学園中の女を惚れさせていたな」

「んなわけないだろ。大体……ってちょっと待てい！！ 何時か聞いた！？」

「言い当てるやろうか、からだ」

俺の隣に態々椅子を持って来て座っていた。

エレナの格好はジャケットを脱いで白衣を着ている。当初、超ミニスカナース服や、下着の上に白衣だけだったりしていて、俺と千冬の鉄拳制裁で全力で止めた。

「まったく、己の価値を理解していない夫を持つのは苦勞するな」

「誰が夫だ。そして苦勞するなら夫にするな」

「まったくだ。そのせいで束がどれ程暴れたか…」

「え？ アレって俺のせいなのか？」

「「当たり前だ」」

「ぐっ…！」

アレと言うのは、束が俺を標的にして学園に配備されている全てのISをハッキングし、総攻撃を仕掛けてきた事だ。

アレはやバかった。束の目が据わってて、ハイライト無しの目で笑って走ってくるんだぞ。ただ笑って……ISで……俺を……。

「…スマン、トラウマだったな」

「よしよし、私が介抱してやるからな」

「え、遠慮しとく……。また来そうで怖い」

次やられたらもう逃げ切る自身が無い。それこそ、世界を放り投げてでも逃げなくては……。

「では、私はそろそろ行くぞ。お前も授業の準備をしておけよ」

「おっ……」

「よし、なら夫婦仲良くこれからベッドで」

「お前は保健室にいる。何かあった時にいなくては困る」

「ちよっ！？ 離せ！ はなせ！ はなせ！ アレばらずぞ
！ おい！ やめ」

千冬はエレナを引っ張って出て行った。

……さて、俺も仕事するか。

「……で、この式にXを代入して
」

三時間目、俺が受け持つ数字。

皆は真面目に受けているが、ただ一人、授業に参加していない不届き者がいる。

ノートにペンを走らせてはいるが、黒板を全く見見ないで映せる筈が無い。

教科書や参考書を見ているのなら話は別だが、その影すら無い。

「……オルコット」

試しに名前を呼んでみた。

「…例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な…」

「……」

ほう……俺の授業の最中で織斑をデートに誘う計画を練るか…。

「オルコット」

「…いつその事一線を……いえ、それは駄目ですわ」

さて、どうしてくれるようか。

俺はオルコットにゆっくり近づいた。目の前に来ても全然気づかないときた。

さあ、最後のチャンスだ。

「オルコット」

「しかし相手は超が五つ程付く鈍感さ……どうすれば……」

判決……左腕によるアイアンクロー十秒間。

「戻ってこい!!」

ガシッ!! ミチミチッ!!

「ッ!? いたっ! いたたたっ! 痛いすわっ!!」

「そうか、痛いか。無視され続けた俺の心はもっと痛かったぞ」

「へえっ!? いっ!! じっごめんなさいですの〜!!」

「分ければ宜しい。…だが後三秒だ」

「鬼ですわっ！！」

「そうさ！ 伊達に鬼神と呼ばれてないさ！」

「「「（じ、恐い…！）」」」

その後のオルコットは、俺の授業の時は人が変わるとか、変わらな
いとか。

夕方、俺は思いの外仕事が早く一段落着いたので、寮に戻る事にし
た。

千冬とその弟の部屋の前を通りかかろうとした瞬間、いきなりドア
が開き、中から小さな少女が飛び出てきた。

「おっと」

「へにゃっ!？」

俺とぶつかりそうになり、少女は奇声を上げて仰け反った。

「いきなり飛び出すな……泣いているのか？」

「男っ!？ 何で此処に!？ 不審者っ!？」

「こらこら、俺はこの教師だ。ISをむやみに展開するな」

少女は右腕を部分展開し、俺に向けて突き出してきた。

「教師？ 男の教師が女子寮をうろつく筈ないじゃない！ ドイツもコイツも馬鹿にしてっ！」

「本当だ。織斑にでも……」

「知るかつ！！ あんな馬鹿っ！！」

「お、おい！」

少女は走り去って行った。

なんだ…？ この部屋で何かあったのか？

俺は部屋に入り、中を確認した。

中では織斑が頬を真っ赤に腫れ上げて、ベッドに座りこんでいた。

「……何があった」

「えっと……分かりません」

「……つまりアレだ。お前は昔、鳳と約束した内容を覚えていたつもりが、実際にいはそうで無かったと…」

「たぶん……そうなります」

「それで鳳は怒り、ひっぱ叩いた…。取り敢えず織斑、惨殺、銃殺、撲殺、圧殺、殴殺、刺殺、焼殺……。どれが良い？」

「なっ何ですか!？」

「女との約束を忘れるなど万死に値する。死んで償え」

「まったく、鈍感なうえに天然、アホ、バカ、マヌケときたか。なんと
言う主人公気質か。俺には到底まねできん。」

「取り敢えず謝れ。そして殴られてこい」

「うつ……そうですね……」

「クラス対抗も近い。このまま引き摺って、良い結果が出ませんでしたじゃ、クラスの皆に顔向けできんぞ」

ポンツと、織斑の頭に手を乗せ、ワシャワシャと撫でまわした。

「
兄さん？」

「ん？ 何か言ったか？」

「……え？ あ、いえ……何でも無いです」

「そうか。俺はもう戻るからな」

「はい。ありがとうございました」

俺は部屋を出た。

「……………兄さん、か……」

今日はもう、戻って寝る事にした。

そうだ、箒の修行内容……明日からやるか。

五月。

あれから数週間経ち、クラス対抗も来週へと迫った。

あの後、鳳は俺が教師であると知り、申し訳なさそうに謝って来た。

余談だが、俺が鬼神である事も知り、謝る時にビクビクとしていた。

……俺はそんなに恐いのか？

そして俺は今、職員室で織斑と向き合って座っている。
他に箒とオルコットもその場にいる。

「
……」

「
……」

「……織斑、何か言う事は？」

「えっと………口が滑りました」

「この愚図が。刀の錆にしてくれる」

鬼龍を展開し、織斑が正座していた床を斬った。

気を付けろ、この刀は少々切れやすいからな。

「まっままま待って下さい！！」

「そ、そうですね！　せめて拳骨に！」

「よし拳骨だな」

即座に右腕を部分展開。

「ISするのは無しです！」

「チッ……」

箒とオルコットが止めに入ったお蔭で、織斑の命は保たれた。

織斑は鳳に謝るところか、禁句を言ってしまったらしく、完全に怒らせてしまった様だ。

「織斑、何をすべきか分かってるな？」

「はい……」

「ならやれ。……取り敢えず、もう門限を過ぎる。さっさと戻れ」

「はい……」

織斑達は一礼し、寮へと戻って行った。

まいったな……。こんな時、義母さんがいたら……。もっと上手くフ
ォー出来るんだろうがな……。

今はいない、たった一人の家族を思い出した……。

言っておくが、生きてるからな。今はアメリカに行ってるだけで。

試合当日、第二アリーナ第一試合。織斑対鳳。

噂の新生生同士の戦いと言う事もあり、アリーナは満席。それどころか通路までも生徒で埋め尽くされていた。

俺と千冬と山田先生、箒とオルコットはピットからリアルタイムモニターで見ている。

「千冬、織斑に『零落白夜』の事を教えてやったのか？」

「当然だ。みっちりと鍛えてやったさ。篠ノ之も剣道で鍛えてやっていたしな」

「そうか。ちゃんと見てやっていたんだな」

隣にいた箒を褒めてやると、箒は顔を紅くして俯いた。

「……………」

……………千冬、何故不機嫌な顔になってんだ？……………はっはっん、羨ましいのか。可愛い奴め。

「千冬もちゃんと教えたんだな」ナデナデ

「ッ！？／／／バツ！？／／／撫でられる歳ではない！／／／」

ふっ、初な奴……っと、始まったか。

ブザーが鳴り、織斑と鳳はぶつかった。

白式の雪片と鳳のIS『甲龍』の異形な青龍刀をぶつけ合う。

ほう、あの時より動きが良くなっているな。

何度かぶつかった後、白式は距離を取ろうとした。が、その瞬間、甲龍の肩のアーマーが光り、白式は吹き飛ばされた。

「何だあれは……」

箒が呟く。それにオルコットが答えた。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰

で生じる衝撃でそれ自体を砲弾化して撃ち出す
アーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

ブルー・ティ

ふん……織斑はこれをどう攻略するかな？

「で？ 織斑に何を教えたんだ？」

画面の前で少しニヤついている千冬に尋ねた。

「イグニッション・ブースト
『瞬間加速』だ」

「ほう…それをもつ身に付けたのか。それも素人が」

「ああ。まあ、お前の『鬼神化』には敵わないがな」

「『鬼神化』…？」

千冬が口にした言葉に、篤が反応した。

「……止してくれ。今はもう使えないし
嫌いだ」

そう、もうアレは使えないんだ。あの戦争で俺は……。

「あの、その『鬼神化』と言っのは……？」

篤が恐る恐る尋ねてきた。

「……俺の二つ名の由来。今はそれしか言えないな」

「そうですか……」

「……動くぞ」

モニターでは織斑が加速体勢に入っていた。

そして瞬間加速を発動し、雪片を

！

ズドオオオン！！！！

アリーナが揺れた。

「何だっ！？」

「アリーナのシールドが破れた！？」

山田先生が驚き、モニターを確認すると、アリーナの中央から煙が上がっていた。

…まさか、遮断シールドを抜けてきたのか！？

「そんな！？ アリーナに所属不明のISが進入！ 白式がロック

「されています！」

「何っ！？」

不味い……。アリーナの遮断シールドはISのと同じ。それをいとも簡単に突破する攻撃を持った機体が白式とぶつかったら……！

『織斑！ 鳳！ 今すぐ脱出しろ！』

俺はISのプライベート・チャンネルで二人に呼びかけた。対する織斑は普通の通信で答えた。

『いえ、俺達が喰い止めます！』

『何ふざけた事をぬかしている！』

『ここで喰い止めなくちゃ、観客に被害が及びます！』

「くっ…！」

正論。確かにあそこでソイツを止めなくては逃げ遅れた生徒たちに被害が及ぶ…。

俺は通信で織斑に指示を出した。

『……なら確実に足止めしろ』

『はい！』

『但し！ 俺達が救援に向かうまでだ』

『分かり 』

そこで通信が切れた。

敵のIS、『全身装甲』の灰色の機体が、白式に向かって突進したのだ。白式はなんとかそれを避けた。

……あの機体、確か束が……。ええい！ アイツは可愛い顔して厄介な事をする！ お仕置きリストに追加だ！

「天星先生！ どうして!？」

「本人達がやりたいと言っているのだから、やらせてみても良いだろう」

「お、織斑先生も！ 何を呑気な事を言っているんですか!？」

「山田先生、貴女も嘗ての戦争をその身でご存じの筈だ。これぐらいの事、どつって事無い」

「それは天星先生の目線から見てでしょう!？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

と、千冬はコーヒーに“塩”を入れた。

「……千冬、それ塩だぞ」

ピタリと手を止め、白い粉を凝視する。

「何故塩があるんだ」

「さあな」

「あ、やっぱり心配なんですね！ だからそんなミスを」

「……」

……静かだ。アリーナで戦ってる音が鮮明に聞こえる程静かだ。

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってる奴じゃ……」

「どうぞ」

ずずいっと押しつけられるコーヒ―。山田先生は涙目でそれを受け取った。そして一気に飲まされた。可哀想に。

「先生！　わたくしにIS使用許可を！　すぐに出撃できます！」

「そうしたい所だが　　コレを見る」

千冬が端末を弄り、表示される情報を切り替える。

「遮断シールドがレベル4に設定…？　しかも扉が全てロックされて　あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かう事も出来ないな」

いや、出来る。俺が天照でシールドをブチ抜けば。だが、今回のコ
レは俺が手を出していい問題ではない。コレは ！

ドクンッ……！

「……ッ！？」

突然、俺の身体が何かに反応し脈打った。

この感じは……！ 不味い！

「千冬！ 俺がシールドをブチ抜いて出る！」

「何？」

「来やがった……。アイツらが……『ノアの箱舟』が！」

「……!?」

俺の言葉に、千冬と山田先生の動きが静止した。

そして千冬は慌てて通信を開いた。

「一夏!! 一夏!! 聞こえるか一夏!! 返事をしろ!!」

「ち、千冬さん!？」

箒が千冬の変貌に驚いている。箒だけではなく、オルコットも。

「山田先生! 観客席にはまだ生徒が取り残されているのか!？」

「……あ、はい! まだ半数以上の生徒が!」

「なら俺が隔壁を引き裂いて脱出口を作る! それから俺はシールドを突破し、織斑と鳳の救出に向かう! 但し俺以外に誰も入れな!」

「はっはい！」

「イブキ！」

ピットを出ようとして千冬に止められた。

「一夏を……弟を！」

「……任せる。もうミスはしないさ」

俺はピットを飛びだした。

「……織斑先生、また…始まるんですね」

「ああ……ん？ 篠ノ之はどうした？」

「え？ あら？ 先程までそこに……」

イブキSIDE OUT

一夏SIDE

くそっ！ 全然攻撃が当たらない！ 鈴が注意を引き付けていても俺の動きに反応してくる！

「一夏っ！ ちゃんと狙いなさいよー!!」

「狙ってるっつーの!」

くっ！ 鈴との戦闘で、もうシールドエネルギーが少ない。零落白
夜もたぶん一度きり。

「一夏つ、離脱！」

「おう！」

敵が肩から手からビーム砲を乱射してくる。

「ああもうつ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴も衝撃砲を放つが、長い腕により衝撃を叩き落とされる。

こいつ、バケモノか？……バケモノ？

「なあ、鈴。あれって……人が乗ってると思うか？」

「は？ あんたバカ？ 人が乗らなきゃISは動かな

」

鈴も何か思い当たる節があるのか、言葉を止める。

「そう言えばアレ、あたし達が会話してる時ってあんまり攻撃して来ないわね。まるで興味があるみたいに聞いている様な……」

確かにそうだ。会話してる時だけ攻撃を仕掛けてこない。

「ううん、でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない」

本当にそうだろうか。ただ公にされてないだけで、実際は出来るんじゃないだろうか。なんたって製作者があのだから。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？ 無人機なら勝てるって言うの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦無く全力で攻撃しても大丈夫だしな」

「全力も何も攻撃自体あたってないじゃない」

「次は当てる」

俺は鈴に向かって言い放った。鈴は目を見開いたが、すぐにニヤリと笑った。

「言い切ったわね。じゃあ 何ッ!？」

突然、ハイパーセンサーに反応が出た。それも目の前にいる敵からではなく、アリーナ上空からだった。

「ッ!？ 鈴っ！ 離れろ!!」

ズギヤアアアン！！！！

俺と鈴が離脱した瞬間、オレンジ色の太いビームが俺達の居た場所を貫いた。

新手！？ しかもあのISより遥かにパワーが上だ！

「何なのよ！？」

鈴が上空を確認する。俺も上を見ると、何かがアリーナに侵入してきた。

灰色の装甲、左肩には身体全身を隠す程の盾、右肩からは長い砲身、両腰にも砲身、そして右手にはセシリアのブルー・ティアーズのライフルに似た物が握られていた。しかも
有人機。

そいつは俺達に向かって左手を振って来た。

「はあ、いい坊や。貴方が二人目の男の子ね？」

バイザーを付けて顔は分からないけど、長い金髪と声、身体つきからして女の人だった。

「……そうだ」

「そう。それじゃ……死んでね」

ドォォン！！

ライフルから先程よりかは小さいビームを撃ってきた。

「うわっ！」

「あははっ！　いつまで避けられるかしら？」

「くっ！」

ライフルの連射を避けて行くが、徐々に回避出来なくなってきた。
しかし、それは突然止んだ。

「……何するのよ？」

女の人が下を見ていた。その視線の先には先に侵入してきたISがいた。そのISが手からビームを女の人に向かって放ったようだ。

「……ああ、そうか。コレ、あの雌豚の玩具だったわね。…憎たらしい！」

何だ？ 仲間じゃないのか？ それに、あのISの正体を知ってるのか？

女の方は両腰の砲身を伸ばし、そのISに向けて撃った。放たれた黄色い閃光はISの胸と頭を撃ち抜き、撃ち抜かれたISは倒れて動かなくなった。

肉の塊は血が見えない事から、どうやら本当に無人機だったみたいだ。

「何ぼさつとしてるのかな？」

「くっ！」

「一夏！」

ライフルが俺に向けられたが、鈴が衝撃砲を撃って援護してくれた。

「ちっ…アンタ邪魔ね」

今度は鈴にライフルを向けて撃った。

鈴は辛うじて避けたが、一発掠った。

「なっなんて威力なの！？ 一気に持ってかれた！？」

「鈴、大丈夫か!？」

「まだ行けるわよ!」

どうする!？ もうシールドエネルギーが無い！ これ以上は戦えない！

「うっくん……二世代目の『鬼神』になれそうだったのにね……。期待外れ」

二世代目？ 鬼神？ なれる？ 何を…。

「だからもういいや 死ね」

女の方は右肩の砲身を伸ばして、ライフルと連結させた。

「一夏あつ！」

「「「ッ!?」「」」

キーン……とハウリングが尾を引くその声は、箒のもので、その声に女の方は引き金を引く指を止めた。

中継室の方を見ると、箒が方で息をしていて、怒っている様な焦っている様な表情をしていた。

「男なら……男なら、女に翻弄されてどうする!？」

「……………ウザい」

まずい！ この人は今ウザいって言った。なら今までの行動を考えたら……！

女の人を見たら、連結させた砲身を箒に向けていた。

「止めるテメエエエ!!」

俺は雪片で斬りかかった。が、向こうは盾を幾つかに分裂させて、ブルー・ティアーズのビットみたいに撃ってきた。

「くそっ!!」

ビームの網に阻まれ発射を阻止できない。

「箒いっ!! 逃げろおおっ!!」

そして、無残にもビームは放たれた。アリーナを襲ったビームよりも強大な光りは、箒のいる中継室に吸い込まれるように伸びて行った。
そして……。

ズギヤアアアン!!!

中継室に当たる前に何かとぶつかり、ビームが遮られた。

「え…？」

そしてビームは弾かれ、消え失せた。

そして見えたのは赤黒い装甲を纏い、右腕を突き出した天星先生がいた。

「よう、待たせたな。鬼神のお通りだ」

この瞬間、第二次鬼神戦争が始まった。

その名は鬼神（前書き）

これで一巻は終了かな？

次からはラウラとシャルが出たらいいな。

その名は鬼神

俺の天照は世界に存在するISとは少し、否、だいぶ違う。コアは束が製作した物だが、それからの製造方法が全く違う。

それ故、俺は鬼神となった。

天照は他のISとはパワー、機動力、防御力、その他諸々が桁違いに上だ。

何故か。それは、この天照の本来の目的がそうさせているからだ。

故に、遮断シールドを破壊する事など、呼吸する様なものだ。

「い、イブキ……さん……？」

「……こんな処で何をしている、箒」

「そ、それは……」

「……まあ今はいい。怪我が無いだけで安心した。千冬の所へ戻ってろ」

「……はい」

箒は泣きそうな顔で戻って行った。

馬鹿が……。幼馴染が心配なのは分かるが、自分の状況をきちんと理解しろ。課題追加だ。

「さてと……。そのバイザー、取ってくれないか？」

俺は此方を見てくる敵に言った。

「あら、どうしようかしら。伝説の鬼神様に素顔を覚えられるのも悪くないけど……」

「フン、心にも無い事を……」

「………そうね、アンタなんか顔なんて見られたくないわね。色

んな意味で」

成程、この女は猫被りか。まったく、“アイツ”もめんどくさい奴を引き込んでるな。

「……そう言えば、あの時もいたな。貴様みたいな猫被りで、遠距離型のISを扱う女が」

「……ッ……」

「ま、俺達の敵ではなかったがな」

「……さまを……」

「ん？　なんだ？」

「姉さまを侮辱するなああああ！！！！」

敵が咆哮と共に連結したビーム砲を放ってきた。

戯け。そんな素直な攻撃、俺に効くものか。

俺は拳にエネルギーを送り込み、鬼龍爪を展開した。

爪が赤黒く雷を発し、全てを切り裂く爪となった。

俺は右手で迫って来たビームを受け止め、容易に切り裂いた。

「くそおおお!!!」

「下品な女だ。俺はもっとクールな女が好きだ」

ビームを撃った反動で動けない間に敵に近付き、左爪を振るった。

「私に触れるなあああああ!!!」

「ッ……」

反動から立ち直り、爪が触れる前に左足で蹴りを放ってきた。

俺はその足を右手で掴み、逆さ吊りに持ち上げた。

「誰が誰に触れるなど?」

「このっ! 離せえええええ!」

腰の砲身、これは超電磁^{レールガン}砲か。それを向けてきた。

「邪魔だな」

その砲身を左爪で挟み取り、爆散させた。

「きゃあああっ!!?」

「何だ、女らしく鳴けるじゃないか。だったら最初からそうしておけ」

「この……化け物がっ！」

掴んでいない方の右脚で蹴りを入れてきたが、左手で掴んだ。

「化け物……。そうだな、他人から見れば俺は化け物だ。人間じゃない。そしてお前はその化け物を怒らせた。俺の大事な生徒に手を出したと言う愚かな事をしたんだよ」

「大事な生徒……だ……？　ハハハッ！　あんな劣等種族のどこが大事なんだ！？　頭脳も、身体能力も、全て！　私達よりも遥かに劣る種族のどこが大事なんだ！？」

「心だ」

「な、なに……？」

「貴様らが言う劣等種族には心と言う何者にも負けないものを持っている。だが貴様らにはそれが無い。あるのは欲だけだ」

そつ、だから俺は生き残る事が出来た。義母さんに心があつたから

俺はここまで生きてこれた。学園で会えた皆に心があつたからこそ、俺は戦う事が出来た。だから俺は、人間が大好きなんだ。

「心だと…？ そんなものがあつたところで、世界が救われるものか！ それにアンタも元々は私達の…！！」

「今回は見逃す。だからアイツに伝えろ。俺の生徒には手を出すなと」

掴んでいたコイツをアリーナ上空へ放り投げた。
ソイツは空中で体勢を立て直し、ライフルを向けてきたが、引き金は引かず、少し睨みあいをした後、アリーナの外に飛び出し、撤退して行った。

「…………ふう…………」

俺は大きく息を吐き、身体力を抜いた。

…………とうとう再開したか。人間と鬼の戦争が…。俺は…また…………。

俺は敵が完全に撤退した事を確認し、ピットに戻った。

パンッ…

ピットに乾いた音が響いた。

その音の中心に、右手を振った俺と左頬を押さえた筈が立っていた。

「…俺は女だからと言って遠慮はしない。何故叩かれたか分かっているのか？」

「…ッ…」

「ISの戦場にISを装着せず出てくる馬鹿が何処にいる。ましてや敵の注意を引付ける愚かな事をしたな」

「天星先生、それは…」

「織斑は黙ってる！」

「ッ!？」

間に入ってくる織斑を一喝し、箒の前にでる。

「敵が丸腰の相手に撃ってこないとも思ったか？」

「……………」

「それとも何か策でもあったのか？　あるのなら聞こうか」

「……………」

黙んまりか。ここまで束にそっくりときたか。

「いいか、一度しか言わない。そして一度で覚える」

俺は箒の両肩を掴み、目線を合わせた。

「お前はもう俺の宝物の一つだ。俺の目が黒い内は死なさん」

「……え」

「だから要らぬ心配を掛けさせるな」

「……あ……」

「年相応の心配は問題ない。それが当然の事だ。だが、命は大事にしてくれ。俺はもう、あんな気持ちになるのはご免だ。……分かったな？」

「……はい……！」

箒は涙目で答えてくれた。俺は優しく箒の頭を撫でてやり、空気化している千冬達に目をやった。

「さてと………帰るわ」クルッ

「まあ待て」ガシッ

「ち、千冬………肩が痛いんだが……？」

「痛くしているからな」

「……鬼」

「鬼神よりはマシだ」

ああそうかよ。　　っててて！　　指喰いこんでるっつーのっ！

「何故逃がした？」

「何故って、そりゃ決まってるだろ」

「……？」

「アイツへのラブレターだ」

「……そうか。それと、今回は“会話”が多かったな」

「……そうだったな」

「……またアレはご免だぞ」

「……ああ」

千冬は手を離した。

あゝ痛てゝ、絶対手形がいつてるな。

「天星先生…もしかして、あの人が戦争の……」

織斑がおずおずと尋ねてきた。

「そうだ。と言っても、あの女はまだ下っ端だ。まだ上がいる」

「うっ…あれで下っ端……」

「トップは強いぞ。なんたって俺と同じだからな」

「……それって、遠まわしに天星先生が強いって言ってます？」

「そう聞こえたならそうかもな、凰」

「そ、そうですか……」

何を呆れているんだ。俺が強いのは事実だ。

……まあ、今回はそうもいかんがな……。

「さっ！今日は疲れただろ。もう帰って休め。今回の事はくれぐれも口外するなよ。では解散」

手を叩いて生徒を帰す。

さて、これからまた忙しくなるな。

イブキSIDE OUT

???SIDE

IS学園に向かわせた部下が帰って来た。どうやらイライラしているみたいね。

「ああもうつ！ あの男、何なのよっ！？」

「どうしたの、エリカ」

「シオン！ あの男、姉さまの事侮辱したのよ！」

「彼が？」

「そうよ！ 姉さまを殺して、侮辱まで…！」

「殺したのは彼じゃないけどね…」

そう、殺したのは彼じゃない。殺したのは武女帝・織斑千冬…。怒りの矛先を向けるなら彼女だと、私は思う。まあ、無理も無いか。

「アンタも、よくあんな男と関係持ったわね！」

「そう？ 彼ってとても良い人よ。ずっと想ってくれるから」

でも……私が愛しているのは天星イブキじゃない……。あんな偽物じゃない。

「兎に角、今日は試運転お疲れ様。閣下から休めと言われてるわ」

「はいはい……」

エリカは不機嫌そうに自室へ戻って行った。

「……『俺の生徒に手を出すな』……ね……。嫌よ」

だって、その方が早く目を覚ましてくれるかもしれないじゃない。

ねえ……黒耶……。

??? SIDE OUT

イブキSIDE

「それで？ 凰とは仲直り出来たのか？」

現在の時間帯は夜。

俺は今日襲ってきた無人機の事は知っているので、解析には行かなかった。後で千冬にどやされるかもしれないが。

なので俺は職員室で仕事の処理をしていた筈なんだが、いきなり現れたエレナにより拉致られ、保健室のベッドに寝かされた。

はいその諸君。別に厭らしい事を始めるわけではないのだぞ。

実は、俺は過去の戦争で深い傷を負ったのだ。まあ、これは後に話すかもしれないがな。

それで、俺の身体に後遺症みたいなのが出来て、天照で実戦を行う

と色々と身体に負担が掛かるのだ。
だからエレナは強制的に検査を行うと言いだしたんだ。

別に今回は遊んでいただけなんだがな……。

それで検査中、織斑がやってきた。何でもエレナに呼ばれたらしい。

男嫌いのエレナが珍しい…。

どうやら織斑も検査するらしい。敵のビームを掠ったとは言え喰らったので、一保険医として診るらしい。

それから冒頭のセリフに戻る。…はあ、長かった。

「あ、はい。一応」

「そうか、良かったな。この学園で女を敵に回したら、確実に死ぬからな」

「……………そうでした」

なんせ、99%が女だからな。女は恐いぞ。陰湿な嫌がらせでチネと精神を殺すからな。

「女は大切にしろよ。男には女、女には男必要なんだからな」

「へ？ どうしてですか？」

「安心する場所が欲しんだよ、人間って種族は…」

「そうゆうものなんですか？」

「そうなんだ。……薔薇や百合は別だが」

「……………うつす」

まあ、同性ってだけで一緒なんだろうけどな。

「私に男などいらん。イブキがいればそれでいい」

「俺は男なんだが……って、抱き付くな」

エレナが後ろから抱き付いてきたので離そうとするが、イヤよイヤよと訳分からん事言っただけで離れなかった。因みに、検査をしたばかりなので、織斑共々上半身裸。

「生徒の目の前でアホな事するな」

「ふふん…良いではないか。私達の愛を見せつけてやるつもりではないか」

「ぶっ！？／／／／／」

「ばっバカッ！ 生徒の前で脱ぐな！」

エレナはあろう事か白衣を脱ぎ捨て、中の服まで脱ごうとした。

「隙あり！」

「なっ！」

「……え？」

そして俺の左腕を取った。

当然、取ったのは義手を隠す方の腕だ。

「馬鹿っ！ 何をするんだ！？」

「遅かれ早かれ、何時かは知られるんだ。ならこの際知られておけ」

「どの際だ！？」

「織斑の検査はまだ終わってない。そしてお前の左腕の検査も終わってない。……お前が部屋で私に診せていれば、こんな事にはならなかったんだ」

それはそうだ。部屋で診せたら絶対に筭にこの腕になった理由を言う。だから俺は筭がいる部屋では診せなかった。

「えっと……天星さん？」

「……簡単に言うと、これはISの部品で出来た義手。パワーも防御性も、勿論シールドも付いている」

「……マジっすか？」

「マジだ。だから誰にも言うな。筭は知っているがな」

「……その腕でセシリア、掴んでませんでした？」

「ああなりたくなかったら、しっかり授業を聞く事だな」

「……了解しました」

その後、検査が終わったのは夕食の時間帯が大きく過ぎた頃だった。

転校生はやはり問題だらけ（前書き）

あれ？　あまりシャルとラウラ、特にラウラとの絡みが無い？

転校生はやはり問題だらけ

六月冒頭、日曜日。

俺は久しぶりに学園の外に出ていた。と言っても、学園がある街ではなく、電車で出て数時間の所にある田舎町だ。俺はそこである人物とである約束をしている。

その田舎町に一つだけ存在する喫茶店『如月』で、俺はその人物を待っている。

その人物とは……。

「す、すいませ〜ん！ 遅くなりました〜！」

……女だ。あ、いや、恋人ではなく、昔に俺が助けた子で、名前は伊司須紗奈（いしまさな）と言う。

この子は俺と似た様な境遇で、まあ色々と事情があって少しばかり周りとは違う。それで義母さんの知り合いにお世話になっている。

「大丈夫だ。そんなに待ってないさ」

「でも待ってたんですよ？」

「……マスター、アイスコーヒー」

「逃げた……」

ちよつとふくれっ面になって向かいの席に座った。

おおっと、この子の容姿を説明してなかったな。

この子の髪は長い黒髪で、腰まで届く髪を毛先の方で二つに結んでいる。歳は十八歳で、でる所はちゃんと出て引つ込む所は引つ込んでいる。瞳の色は紅だが、これはとある事情からだ。身長は一六〇センチ。現在の服装は白のＴシャツに黒のパーカー、黒のミニスカに黒のニーソックス、黒のスニーカーである。なんでも、俺をイメージしたらしい。……確かに俺の格好も黒尽くしだ。

「こうして会うのは何年ぶりですかね？ 会えて嬉しいです！」

「そうだな。ざっと五、六年位か。元気そうだなによりだ」

「当然です！ 元気だけ取り柄ですから！」

自分で言っなよ…。

俺は彼女の笑顔に少しほっとした。また戦争が始まるのなら、彼女にも危険が及ぶ。だから守らなくてはならない。

「紗奈、今日呼んだのは…」

「……戦争が始まったんですね」

「……分かるのか？」

「はい……。先日、感じ取れました。……イブキさんが戦ってる事も……」

「……………」

そうか……。もうそこまで…。

ここで説明しておいた方がいいか。彼女が周りの人間と違う所は、同じ者同士で感じ合えると言う所と、動体視力と身体能力が尋常じゃないということ。

何故なら……。彼女は『ノアの箱舟』から俺が助け出した実験体だからだ。彼女は身体を弄くられ、人間離れさせられた不幸な被害者そして、それを放置しておく筈が無い敵……。だから俺達は彼女を守り通さなければならない。

「私……。どんどん人間じゃなくなって来てるんです」

「……なあ、人間って何だ？」

「えっ？」

「人の形の身体を持っていると言う事か？ それとも言葉が話せる事か？ 火を使う事か？ だったらお前も人間だ」

「いえ、それは……」

「だが俺はそれが重要ではないと思う」

「え……?」

「重要なのは心だ。心が人間だと言っていれば、ソイツは人間だ。お前はどうか?」

「私は……」

紗奈は目を閉じて考え始めた。そして口を開いた。

「私は……人間です」

「フツ……。だったらお前は人間だ。誰が何と言おうと、俺が紗奈は人間だと断言する」

そう言って頭を撫でてやった。

……本当に撫でるのが癖になってないか? 何時かセクハラで訴えられそうだ。

「……ありがとうございます！」

「どういたしまして。さ、飯でも食つか。俺の奢りだ」

「はい！」

……この笑顔を絶対に壊させやしない。絶対にだ。

紗奈と別れ、学園に帰って来たらエレナと遭遇した。

「私は獣か」

「ある意味そうだろう……って何を嗅いでいる」

エレナは俺の服に鼻を近づけ、クンクンと匂いを嗅ぎ始めた。

「……なんだ、紗奈と会っていたのか。見知らぬ女だったらそいつに剣舞を喰らわせていたのに」

「お前怖いな！！ よく匂いで分かるな！？ そして剣舞は止める！！ 殺人犯になりたいのか！？」

「戦争でもう殺している」

「それとこれとは状況が違う！」

「一緒だ！ 我が夫を奪おうとする愚行……万死に値する！」

「だから誰が夫だ！？」

「それより聞いたか？」

「いや無視かコラ！！」

流石エレナ……。俺のペースをこつも乱してくるとは。

「それで、何をだ？」

「『学園別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』」

「……………は？」

何だ、それは？ 一体何の冗談だ？ まさか織斑が彼女欲しさに？
いやそれは無いか。だったら何故？

「どうやら凰が織斑に『優勝したら付き合いなさいよ！』と言う所を誰かが聞いて、まあ広まったんだろ。もう何日もすれば、学園中に広まるだろうな」

「……………女子って怖いな」

「その女が目の前にいるわけだが？」

「……………」

「……………」

「……………止める」

「『優勝できたら天星イブキと楽しいデート』も面白そうだと思うんだがな……」

止せ………それだけは止めてくれ。そんな事になつたら束が世界各国のミサイルをハッキングしてピンポイントに俺にくる！ 白騎士事件ならぬ鬼神事件になるぞ！

「……………何が望みだ」

「別に。ただベッドの中でズングホグレッツをだな……」

「……………」

………「添い寝で頼む」

「随分考えたな……。まあ………今はそれでいいか。ではな………」

と、エレナは去って行った。

………「凰、理不尽なのは分かっている。だが言わせてくれ。」

「この、ドアホがあああ……！」

「………ムカツ」

「ど、どうしたんだ？」

「分かんないけど、なんか理不尽な気持ちに…」

「……？」

し、死ぬ……。まるで一生気（精気）を搾り取られたような感覚だ……。つたく、エレナの痴女野郎が……。決死の覚悟で添い寝を提供してやったのに、幕の前で大変な事をしやがりやがつて……。まあ、アイアンクロードで事無きを得たのは良いが、その後が地獄だった。いいか、よく考えろ。何だかんだ言って、エレナは美人だ。そしてスタイルも抜群だ。寧ろ異常な程だ。そして一々格好や仕草がエロい。そのエレナが夜、ベッドの上で絡み付いてきてみる。男としての本能と俺としての理性が壮絶な戦いを繰り広げるんだぞ。どうしろと言った。……いつその事喰らえと？　ならん！　今そんな事したら束の手によって世界が崩壊する程の被害が想定される！　………って、はあ………疲労が酷過ぎて思考が変になってきたな……。

「酷い顔だな。ちゃんと睡眠を取ったのか？」

「エレナの襲撃、その効果は過去最悪だった…」

「……………この変態が」

「それは俺ではなくエレナに言ってくれないだろうか」

職員室で千冬に変態呼ばわりされる俺、なんて悲しいんだろうか。

「今日からまた転校生が二人も来ると言うのに、その体たらくでは気が引けるな」

「ああ……………会議でそんな事言ってたっけな……………」

ええっと、その書類は……………あ、あった。えー何々？……………うお
い。

「これはまた……………この学園は問題の巢か？」

「私達の時と今回がそうなだけだ」

「だからって、男装してくるなよ……」

転校生その一、シャルル・デュノア。本名『シャルロット・デュノア』、性別『女』。因みに、この本名と性別については他の教師方には知られていない。

何故なら、送られてきた書類には『シャルル・デュノア』と『男』と書かれているからだ。

何故、性別を偽って転校して来るのかは、まあ、大体織斑関連か、若しくは、俺関連。

それに、『男』と言っているから、新たな三人目と大騒ぎするだろうな。

前者の問題は追々明かすとして、もう一人の転校生も問題だ。これは織斑と問題を起こしそうな感じもするが、俺にも関係してきそうな感じだ。何たってな……。

「ラウラ・ボーデヴィツヒか……。大きくなった……。かな？」

あれ？ 付属されている写真で見る限り、あの頃とあんまり背が伸びてない様な……。

「……ま、何とかなるだろう、たぶん、恐らく、心配だが」

何とかなるんだろうか、本当に…。

さて、本日の朝はISの実戦訓練だ。そして担当は俺でもあるので、当然千冬が頭を叩く場面を拝む事になる。今回は喋っていたオルコットと凰と…。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

千冬がビシッと生徒に伝える。
今回は一組と二組の合同授業だ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

「専用機持ちはすぐに始められるからだろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのに何でアタシが……」

「たたく、こいつらは……。千冬、例の物を頼む。」

「お前ら少しはやる気を出せ。 アイツにいいところを見せられるぞ?」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね! 専用機持ちの!」

バカだ……こいつらバカだ。乗せられてるよ。織斑がそんなので振り向く筈が無いだろうに。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は」

と、ここで空を切るような乾いた音が聞こえてきた。その音はどんな大きくなり、織斑の方に向かって行った。

「ああああーっ！ ど、どいてくださいーっ！」

ドガンー！！

謎の飛行物体が織斑とぶつかり、転がった。

織斑が辛うじて白式の展開が間に合い、怪我はなかったが、織斑の天性のスキルにより、これから怪我をするだろう。

織斑は手を突き起き上がったが、その手を突いた場所がいけなかった。

「う?」

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ!」

「……………天星」

「見えないから」

見てませんよー、織斑が山田先生の胸を鷲掴みにして揉んでる場面なんてー。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ! 場所だけじゃなくてですね! 私と織斑君は仮にも教師と生徒です」

ね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な――

「……………千冬」

「そんなわけ無いからな」

あれま、そうですか。……………うおっと、オルコットが嫉妬でライフルを発射！それを織斑は寸前で避けた！そして凰は自身の武器『双天牙月』をブーメランのように投げた！織斑避ける！しかし相手はブーメラン！戻って来たところをよけ――！

「はっ！」

ドンッドンッ！

山田先生がアサルトライフルでそれを撃ち落とした。

ウム、実力は未だ健在だな。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔の事ですよ。それに候補生止まりでしたし……」

いや、そこは誇っても良い。覚えてはいないが、恐らく山田先生は嘗ての戦争で学園の防衛をした筈だしな。……覚えていない俺を殴りたい。あまりのも失礼だ。

「さて小娘ども、いつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

ほう、代表候補生だけあってプライドがあるか…。

今の千冬の言葉で二人の闘志に火が付いた。それこそ漫画の様に背に炎が見える程に……。

だから単純過ぎるだろうって……。

イブキSIDE OUT

シャルルSIDE

織斑先生に上手い事乗せられて二人は戦闘準備に入った。

二人には悪いけど、僕は山田先生が勝つと思うかな？ あの時の先生の射撃はあの体勢での的確な射撃は誰にでも出来るものじゃないし……。それに、“あの戦争”を経験してるから、場を踏んだ数が違うからね。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説を試してみろ」

「あつ、はい」

……と、よし！　ここで“天星先生に”いいところ見せなくちゃ！
『リヴァイヴ』の事なら完璧だ！

「山田先生の使用しているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばせないことと多様な役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能です。参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、一旦そこまでいい。……終わるぞ」

よし！ ちゃんと間違わずに言えた！ 天星先生、ちゃんと見ててくれたかな？

「……………」

……うう、こっち見てくれてなかったのかな？ あ、でも聞いてはくれてたかな？ 聞いてくれてたよね？

「（……………やっぱり、山田先生のこと、覚えていないな）」（聞いてなかった。っていうかヒドイ）

あ、戦闘が終わる…。やっぱり山田先生が勝ったね。

山田先生が一人を射撃で誘導して、もう一人にぶつけたところをグレネードを投げて終了。二人は仲良く地面に落ちた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。

以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて、織斑先生は皆の意識を切り替えた。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、凰だ。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

そう言い終わるや否や、僕と一夏の方に一気にクラスが詰め寄ってくる。

わわわっ！？ ちょっと皆落ち着いてよ！ これじゃあ教えようにも教えないよ！

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラント百周させるからな！」

わっ……。凄い……。織斑先生が言っただけでこんなに素早く動けるな

んて……。さすがは『武女帝』なのかな？

それからは僕のグループの皆にISを装着してもらって歩くことをやってもらった。と、そこに天星先生がやってきて、皆が騒ぎだした。って、僕もそれに入ってるんだけどね。

「デュノア、首尾はどうだ？」

「はっはい！ 順調です！ 皆、筋が良くて助かります！」

「そうか。皆もデュノアの指導はどうだ？」

「『大丈夫です！』」

「それはよかった。では、何かあったらすぐに言え」

そう言って、今度はボーデヴィツヒさんの所へ向かった。

わーっ！！ わーっ！！ どうしよう！？ あの天星イブキさんと喋っちゃたよ！？ 夢じゃないよね！？ 現実だよね！？ ああ…

！ 今日最高の日だよ……。

それからドンドン進めて行って、最終的に僕達のグループが一番進んでいた。

シャルルSIDE OUT

イブキSIDE

……デュノアに怪しい動きは無し。寧ろ目立ってた。俺が近寄って
からあたふたし始めたが、アレは違うな。こう、憧れの人が目の前
に着たら動揺するだろ？ それだよ。……自惚れ？ 違うな。過去
に何度もそんな気を向けられてたから敏感なんだ。

さて、次は“ラウラ”だな。……って、おい。このグループは葬式
か。

俺が見たその光景は誰も口を開かず、暗い表情でISを装着していた。

耐えかねた俺は、ラウラに声をかけた。

「……ラウラ」

「…ッ！ “兄上”！！」

「「「……兄上！？」」「」」

ちよっ、バカ。他の子が反応しただろ。

「今は勤務中だ。先生と呼べ」

「はい、先生！」

「ウム。……で、何故ここはこんなにも暗いんだ？」

十中八九、ラウラの雰囲気がいけないのだろうが……。

「それは……」

「ま、ラウラは他人との接し方が分からないからな。……よし、このグループは俺も入るとしよう」

「「「本当ですかっ!?!?!」」」

うおい!? 喰い付きいいな……。

「ああ。取り敢えず、歩くところまでは終わらずぞ。ラウラ、このリーダーはお前だから、俺はサポートしかしないからな」

「了解です!」

さっ! さっさと終わらそうか。

「……どうしたものか」

「……！（キラキラ！）」

只今の状況説明。

昼休み。食堂で飯を食おうと移動していたら、簾に昼を一緒にしませんかとお誘いがあり、弟子の誘いを不意にするのは忍びないので屋上に行く事にした。そこには織斑ズ＋デュノアがいた。どうやらこの四人も一緒の様らしい。そして俺は簾の横に座ったのだが、隣にいるデュノアからの視線が熱く、光り輝いているのだ。

以上、説明終了。

「……………」

「……………おー……………」

ええいつ！ 気になる！

「デュノア、俺の顔に何か付いているのか？」

「素敵な顔のパーツが付いています！」

予想外っ！？ 予想外の返答がきたっ！

「そ、それはどうも……」

「あ、あのっ！」

「何だ？」

「よ、宜しければ……」

宜しければ？

「さ、サインください!!」

そう言つて色紙を渡してくるデュノア。……どこから出したとかは聞かない。

「じゃ、シャルル？」

「何、一夏？ 今とても大事な所なんだ！」

「そ、そうか……」

おう……織斑が氣迫負けしたか……。

「サインか……。書いた事無いから、普通だぞ？」

「構いません！ 寧ろ喜んで！」

何故そんなに嬉しいがる……。

俺は色紙とペンを受け取り、サインを書いた。
受け取ったデュノアは瞳に星を宿して嬉しかった。

「天星さんの初めての……うへへ／＼／＼／」

デュノアレポート。

シャルル・デュノア改めシャルロット・デュノア、敵意無し。寧ろ
好意あり。

「シャルル、もしかして天星さんのファンなのか？」

「うん！ 政府から話を聞いた時からずっとファンなんだ！」

「何故、俺に？ 千冬やエレナ、束だっているだろ」

「えっと……それは……／／／／／（モジモジ）」

おい、何故赤面なんだ。やめろ、見ているこっちが恥ずかしい。

「武勇伝と写真を見せてもらった時、こっ……ビビッときて……／／／／／その……／／／／／」

……束の耳には入らない様にしなければ。じゃないと、デュノアは死ぬ。間違いなく。

「アンタって……そっち？」

「そっち……？ ツ！／／／／ち、違うよっ！！／／／／同性的のファンがいたって良いじゃないかっ！／／／／／」

「まあ、そっただけど……」

凰は知らないから仕方が無いが、コイツは女だからな。

「まあ、俺みたいな男にファンがいてくれるのは嬉しい事だ。さっ、そろそろ食べ始めないと時間が無くなるぞ?」

俺がそう言つと、皆はそそくさと持参してきた弁当を広げ始めた。

そして俺の分はというと、なんと箸が作ってきてくれたというのだ。持つべき者は弟子だな。

「ありがとう、箸」

「い、いえ…… / / / / 弟子として当然ですから / / / /」

そうか、そうか、当然なのか……。なら俺も義母さんに作ってやった方が良かったのか……?」

「あら? 先生はご自分ののは無いのですか?」

「ああ。俺は基本、食堂で済ますからな」

「そうでしたの…。では、わたくしのサンドイッチもどうですか？
一夏さんも」

ほう、オルコットのサンドイッチは美味そうに出来ているな。

「あ、あとで貰うよ」

ん？ 織斑、食べないのか？ 駄目だな、女からのプレゼントは貰
っておかないと。

「では俺はいただきます」

「」「」あっ……」「」

オルコットのサンドイッチを一切れ掴み、口の中に入れた。

「もぐもぐ……」

「……ゴクッ」

「……ング。……なかなか巡り合わない味だ。貴重な体験をありがとう」

「……ええっ!?!」

「いえ! これぐらいどうって事ありませんわ!」

「しかし、この味では俺一人で独り占めするのは忍びない。他の人にも食べさせてやりなさい。勿論、自分も」

「……えええっ!?!」

「はい! そうさせて貰いますわ!」

「……えええええっ!?!」

はっはっはっ、何を驚いているんだ。お前達だけ被害が無いとはこの俺が許さんぞ。……ん？どんな味だって？

甘さと辛さと苦さと酸味がボンバーイエイしてて殺戮兵器にフュージョンしていたさ。

いやはや……俺は過去にこれ以上のものを食べて耐久が付いていたから良かったものの……。

誰のかって？ 刀を振り回すクールレディさ。

「さて、筈の弁当を味あわせて貰おうか」

弁当を開くと唐揚げと鮭がメインの和風の弁当だった。

「これは……凄いな。手が込んでいる……」

「そ、それ程でも……／＼／＼／」

「特にこの唐揚げが美味そうだ。俺の為にありがとう」

「い、いえ……／＼／＼／」

「……一夏さん、殿方というものは、ああも簡単に恥ずかしい台詞を言えるもののですか？」

「いや……天星さんが特別なだけだと思う」

「確かに……一夏が言ったら気持ち悪いもんね」

「おい……」

「……いいなあ……」

「「「……やっぱり、男色」」」

「違うからねっ！」

外野共、煩いぞ。静かに出来んのか。

「ではいただきます」

唐揚げを箸で摘み、口の中に放り込む。

もぐもぐ……おおっ！ これは美味しいぞ！

「これは……ショウガに醤油……おろしニンニクとコショウとみた」

「ッ！……よく分かりましたね」

「俺も料理はする方だからな。……これは美味しいぞ」

「あ、ありがとうございます……／＼／＼／」

「……箸の弁当には無いようだが？」

「え、えっと……それは……」

何だ？ ダイエットか？ いかんな。

「俺の修行に食抜きというのは認めん。ほら、口を開ける」

「へえっ！？／／／／／」

「「「「ッ！？」」「」」

俺は弁当にあつた唐揚げを一つ摘み、箸の口元に持つて行った。

「さあ、食べ。あーん、だ」

「で、では……あーん……／／／／／」

その可愛らしい口で唐揚げを食べ、もぐもぐとどこか幸せな表情で飲み込んだ。

そんなに美味しかったのか。

「……一夏／＼夏さん!!」

「うおっ!？」

「さあ、酢豚食べなさい！」

「いいえ！ サンドイッチです！」

はいはい、食事中はあまり騒がない様にな。

「むー……」

「……どうした、デュノア」

「い、いえ！ 何でもありません!!／／／／」

……そんな反応じゃあ、本当にあつちだと確定されるぞ。

そんなこんなで、昼休みは終わった。

……そういえば、ラウラはどうしているだろうか……。

男同士に女同士（前書き）

今回は短過ぎたか……。

でもそれでも言い方は読んでください！

男同士に女同士

「部屋替えです！」

夜、山田先生が俺の部屋にやってきて、開口一番そう言った。

「……誰と誰がですか？」

「あ、レンヴァルス先生と篠ノ之さんが、織斑君とデュノア君とです！」

「何ッ！？」「」

うおい、いきなり出てくるなよ。

「どう言う事だ無駄メロン！ 私はイブキと一緒に部屋の筈だろう

「!?」

「弟子は師匠といるべきです!」

エレナと箒が山田先生に激しく抗議し始めた。

「む、無駄メロンって何ですか!? それに、そもそも男女が一緒に部屋なのがおかしいんです!」

「それは俺が最初に聞いたぞ!」

「え...? そうなんですか? 兎に角、男子が三人になった事ですし、この機会に整理しましょうと...」

「この...私より小さいが大きな胸をしているくせに...なんて器が小さいんだ」

「べ、別に小さくありません! これは学校が決めた事ですから!」

「.....チツ、仕方が無い。無理言っただけで雇ってもらった身だしな」

そっなのか、初めて知ったわ。医療関係に強い事は知っていたが。

「で？ どこに行くんだ？」

「織斑先生の部屋です！」

「……ほう……ふっふっふっ……」

あ、ヤバい。千冬、恨むなら学校か山田先生を恨みな。俺は知らないから。

「箒！ 今すぐ荷物を纏めろ！」

「へっ？」

「お前に大人の女がどういったものか教えてやろう！」

「お前は箒に何をする気だ!？」

「（イブキは大人の女が好きだ。もし大人っぽくなったら……）」
ボソボソ

「（……更に気に入られる」もっと教えてくれる!）」キラーン

おい……俺の弟子に何を吹き込んでいる。それと何故か言っておきたい事がある。クールで強い女が入ってないぞ。

「荷造り完了です!」

「よし! では共に行こうではないか! あの理想郷に!」
アウアロン

「はい! 先生!」

「おい! 箒を邪な道につて聞けやおい!」

二人は猛スピードで千冬の部屋に向かって行った。そしてすれ違いに織斑とデュノアがやって来た。

「箒の奴……なんか輝いてたような……」

「何かいい事あったのかな？」

あの馬鹿……もしこれで箒がおかしな事になってたらホストクラブに放り込んでやる。

男嫌いのアイツにとって最悪な場所だろうな……。

「織斑君、デュノア君。天星先生と一緒に部屋ですが、粗相の無いようにお願いしますね」

「はい」

「はい！ 勿論です！」

おおっ……デュノアの奴、光り輝いてるな。

そんなこんなで二人と同室になり、部屋の取り決め等を話し合った。

「さて、荷物はちゃっちゃと広げて明日の夜までに終わらせておけ。
デスクは二人が使え」

「はい」

「それとデュノア」

「はい！」

「そのパンパンに膨れ上がってるケースをどうにかしろ。ブルブル震えて今にも弾け飛びそうだが？」

デュノアが持ってきた旅行に持って行く様な大型ケースが、あり得ない程膨れ上がり、ブルブルと震えていた。

「えっと……これは……／／／／／」

「……まあ、恥ずかしいのなら別に今やらなくても良いが、ちゃんと終わらせておけよ?」

そう言つて、俺はベッドの下に置いてあつたケースを取り、部屋の扉を開けた。

「何処に行くんですか?」

「エレナの忘れ物だ」

俺はドアを閉め、千冬達の部屋に向かった。

イブキSIDE OUT

シャルルSIDE

はあ、良かった！ 天星さん、いや天星先生にはれなくて！
これを知れたらちょっと引かれるかもしれないから……。

「……ねえ、一夏」

「何だ？」

「僕たちって、友達だよな？」

「……？ なに当たり前の事言ってるんだ？」

「だよな。じゃあ、これから見せるものに引いたりしないでよ？
あと秘密だからね？」

「あ、ああ……絶対にしない」

「もの凄いファンなんだな」

「うん！……やっぱり、引いちゃう？」

「いや、少し驚いただけ。別にいいんじゃないか？」

え？ ほ、本当に？ 嘘ついてないよね？ ついてたら酷いからね？

「ほ、本当に…？ 信じていい？」

「ああ。……しかし、こんなに沢山、どうする？」

「それは考えてあるんだ！ 僕のクローゼットを改造して……」

よーしっ！ 今日は天星先生と同じ部屋になれたし、一夏に僕のファン魂を分かってくれたし、最高の日だ！！

シャルルSIDE OUT

イブキSIDE

はあ……デユノアが部屋に来たから腕のメンテナンスを千冬の部屋でやるしかなかったな……。自室から千冬の部屋まで結構遠いんだよな……。

メンテナンスの道具が入ったカバンを片手に距離がある千冬に部屋に向かう。

ああ……そういやまだラウラとあまり話してないな……。不貞腐れてなければいいが……。それに……あまり成長してなかったな、色々と。

義妹の今後を心配する俺であった……ってくだらない事を考えていたら目的地に到着した。

普通ここはロックをするのがマナーだが、今回に限ってするのを忘れてしまった。

ドアを開けて中に入った。

「よう、邪魔する……ぞ……」

さて……ここで物語の主人公なら大抵、シャワーを浴びた後のタオルのままの姿をみるか、着替え中の場面に遭遇するかだと思う。
だがこの部屋の住人、千冬とエレナと箒……このメンバーはその定義を破壊していた。

「んっ……や、やめ…… / / / / /」

「ほらほら……こんなに硬くして……気持ち良いのだろう？」

「や、やめろといって……あっ……！ / / / / /」

「ふふっ……どうしたんだ？ そんな声を出して……。子供の前で恥ずかしい……。そら、ここはどうだ？」

「んあっ……！ / / / / /」

百合だ……俺の目の前で百合が展開されてる……。
筈は……蒸気を出しながら硬直してる……。まるでマンガの様に……
…って！　なに呑気に状況判断しているんだ！

「ええい！　やめい、この痴女が！」

「きゃふっ！？」

ISを右腕に部分展開し、エレナの頭に落とした。
エレナはベッドから転がり落ち、痛みでのたうち回った。

「い、イブキ……／＼／＼／」

「ちよっ！？　千冬っ！？　何を……！？」

ちよっ！？　なに抱きついて……おい！　よせ！　乱れた下着姿で
抱き付くな！

「はあ……はあ……はあ……／／／／／」

「この……！　なんて力だ……！　俺が押される……！」

「い、イブキ……もう……／／／／／」

何がもうだ！？　ってええ！？　なに脱ぎだして……やめるそんな眼で見るな！　いくら俺が鬼神だろうとそんな眼で見られたら理性が……！

「崩れる訳ないだろうがああ……！」

ゴチンッ！

「ふぬっ！？」

千冬にも拳骨を落とし、ベッドから落とした。

まったく、生徒の模範となるべく教師がそんな体たらくな姿を見せてよいものだろうか。いや、良くない。

「~~~~っ！ 何をするイブキ！ いくら妻である私が他の女を抱いても……」

「知らん。それにその場合男だ。それ以前に俺とお前は恋人でも夫婦でもない」

「えっ？」

「そんな吃驚する事じゃないだろ！？ なにその悲しそうな目は！？」

「……ハッ！ 私は……？」

千冬が正気を取り戻し、辺りを見渡し始めた。

「……イブキ？ 何故ここに……ッ！？！？／／／／／」

千冬はいきなり顔がトマトになった。

あ、今（乱れた）下着姿だったな。

「み、みみみ見るな！ 寄るな！ 嗅ぐな！」

「嗅がねえよ！ 何を嗅ぐんだよ！？」

千冬はベッドの布団を被り、部屋の隅に寄った。

うわー……日頃の千冬とは思えない女らしさ……。

「……っと、箒を戻さない」と

俺は未だ固まってる箒に近寄り、目の前で手を叩いた。

「ほあっ！？ あ、あれ……？ 何かもの凄いものを見た気が……」

「気のせいだ」

「あれ？ イブキさん？ どうしてここに？」

「デュノアが部屋に来たから今日からここで腕のメンテナンスをする」

「そうですか……」

「……んで？ エレナは何故あんな事をしたんだ？」

俺に後ろから飛びつこうとしていたエレナに聞いた。

「あんな事とは？」

「千冬のくバキューン！>をくヒヒーン！>して、更にくウキィー

！>をくぶらああああ！！>していただろ」

箒の耳を押さえて正確に伝えてやった。

「んなあつ！？／／／／／」

「ほほう……お前も私にしてみるか？」

「それは関係が進展してから考えなくもない。で、何でやった」

「箒に大人の女はこうなのだと教えたかったのだ、身体的に」

「俺の弟子を邪道に走らす気が、お前は」

「私はイブキ以外の男に抱かれるのは死んでも嫌だが、女に抱かれるのはよし！」

「私情を箒に擦り付けるな！」

「ならこの疼きはどうかしらいい！？ この九年間、私はお前に抱かれる事を望んできた！ だが！ お前はあるう事があのウサギに……」

「さて、早速メンテナンスをやらせてもらうか」

鞆から道具を広げ、左腕を露わにする。

うーん……ちょっとアイアンクローし過ぎたか？

「……いいもん。イブキの下着で我慢するもん。ハアハアしてやるもん」

後ろでエレナが何か言っているが気のせいだ。気にしたら負けだ。

「箒」

「はい？」

「……これから頑張れよ」

「……はい」

今日も大変だったな……。明日ははラウラと話せたらいいが……。

「それでね！ このグッズを買うのに二十四時間並んだよ！
それで一番初めに買ったんだ！」

「へ、へえ〜……（先生〜！ 早く帰ってきて下さい！）」

「それでこれが……」

「はつくしゅっ！……あ、ネジが……」

「見られた……イブキにあんな所を……くう……／／／／」

「もっと色気を……もっとエロティックに……」

「大人……大人……黒耶さんも大人が良いのか……？」

「……気にしたら負けだな」

今日も夜は更けて行く。

鬼神は女難に悩まされる（前書き）

箒がチートに！？ シャルが悪魔に！？ ラウラが残念な子に！？

今回は一夏視点でお送りします。

鬼神は女難に悩まされる

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんファンに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応分かっているつもりだったんだが……」

シャルルが転校して来て五日。
俺、織斑一夏はシャルルにISのレクチャーをアリーナで受けている。

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の『瞬間加速イクニッション・ブースト』って直線的だから反応出来なくても軌道予測で攻撃出来ちゃうからね。あ、でも無理に軌道を変えない方が良いよ。機体に負荷がかかるし、最悪、骨折するからね」

「……なるほど」

……分かりやすい。ひじょーに分かりやすい。

過去の自称コーチその一、箒は『グツとする感じた。クイツとする感じた。ズバーっとするんだ』の擬音語集。

その二、セシリアは『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』の理論講座。

その三、鈴は『なんとなく分かるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ 何で分かんないのよバカ』の見るんじゃない、感じるんだ方法……分かるか！ この三つを合わせても分からんっつーの！

それに比べてシャルルは一つ一つ優しく丁寧に簡単に教えてくれる。これほどまでに完璧なコーチは見た事無い！

後ろでセシリアと鈴がぶつくさとか言ってるが気にしない！

「一夏の『白式』^{イコライザ}って後付武装が無いんだよね？」

「ああ。何回か調べてもらったけど、拡張領域^{バススロット}が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」^{インストール}

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティの方に容量を使っているからだよ」

シャルルの説明はこうだ。

ワンオフ・アビリティ
唯一仕様の特殊才能は、操縦者とISが最高状態の相性になった時に発動する能力で、通常は第二形態から発生する。^{セカンド・フォーム}

けど『白式』はそれを第一形態で発生させている。だから容量が無い。
そして、この能力は決して他人と同じにならない。いくら血縁者でも、違う能力になる。
けど俺は千冬姉と全く同じだ。これについては未だ不明だ。
……あ、そうだ。ちょっとシャルルに聞いてみよう。天星先生に聞いても答えてくれそうにないから。

「なあ、天星先生のワンオフって……」

「聞きたいの!？」

……うわあ……目がキラキラと輝いております……。
俺ってもしかしていけない領域に踏み込んだ？

「ワンオフは機密だから言えないけど、天照の大々的な事なら教えられるよ!？」キラキラキラ

「あ、ああ……お願い」

そう言うと、いつそう目の輝きが増した。

「えつとね！ 天照は近距離、中距離、長距離のオールレンジの戦闘が出来て、特に近接戦闘は織斑先生をも越えるって言われる程なんだ！」

「そうなのか！？」

「うん！ 『モンド・グロツソ』には参加しなかったから、世界最強は織斑先生って事になってるけど、実際は天星先生が世界最強だっって言われたりもしているんだ！」

ほへへ……知らなかった。千冬姉、全然そんな事言ってくれなかったし、それ以前に天星先生のこと全然教えてくれなかったもんない……。

「武装は刀が一本、剣が十一本、戟が一本、ライフルが二丁、両手の爪で、翼も武器にしたりするんだ！」

「どんだけー！？　どんだけ武装があるんですかー！？　一つ二つ分けて下さーい！」

「シールドエネルギーも正確には分からないけど、僕たちのISとは桁違いみたいだよ！　それに武装の一つ一つの威力も桁違いなんだ！　ある噂では山を一つ消したとか！」

「最早化け物だ。いや、だから鬼神か。
山一つつてどうよ？　一応ISってスポーツなんだよな？　死人が出るんじゃないの？」

「あ、そうだ！　ついでにレンヴァルス先生のISも教えてあげよう！」

「ええっ！？　レンヴァルス先生のも！？」

「うん！　先生のISは必要最低限、人型の形が出来るくらいの装甲しかないんだ！」

「そ、それはって自殺行為なんじゃ……」

だって防御も何も無いじゃないか。
当たったら即敗北になりかねないだろうか。

「普通はね。でもレンヴァルス先生に攻撃が出来ないんだよ。どうして分かる？」

「……どうして？」

「そ　それは敵に雨が降ってるからだ」わあっ!？」

「うおっ!？」

いきなりシャルルの後ろから銀色に見える白い髪のレンヴァルス先生が現れた。

その顔はいつも怒っている様な表情だった。

「デュノア……人の武器の情報をド素人の馬鹿に教えるな。代表候補生ならそこらへんの事情は知っているだろう」

「う、ごめんなさい！ つい天星先生の話で舞い上がってしまったて……」

「ふむ……なら良し。それなら仕方が無い事だ」

「いいのかよッ!？」

「黙れ童貞坊や。私は一にイブキ、二にイブキ、三、四もイブキで、五にイブキだ」

「取り敢えず天星先生が大切なんですね!」

「分かっているじゃないか、童貞のくせに」

くう……！ 俺はこの人が分からない！ 考えてる事がまるで分からない。

いや、実際何も考えてないかもしれない。天星先生の事しか。って言うか童貞童貞って、放っておいてくださいよ！俺だっていつかは来たる授業参観の為にですね！

「あの……雨が降っていたとは？」

今まで傍観していたセシリアが拳手した。

「ん？ イブキにアイアンクロウを喰らったマセガキではないか」

「マセガキ！？」

「授業中、おりん「いやあああつ！？／／／／」おっと、危ないではないか」

何だ？ セシリアがいきなりレンヴァルス先生に突撃したぞ？

「ほ、ほつといて下さいまし！／／／／ それよりさっきの質問を！／／／／」

「千冬には敵わないが、弄り甲斐があるな……。あゝ雨だったか？
それは簡単だ。ほれ」

……ん？ 指を上に向けて……ってえええっ！？

「「「ぎゃああああッ！」「」「」

ズドドドと、幾つもの剣が俺達の場所に降ってきた。正しく雨の様に。

「私は膨大な武具を持っているからな。相手に攻撃の時間を与えないんだよ」

そう言って妖艶な笑みを浮かべ、地面に突き刺さった剣を収納した。

「まあイブキはそれを尽く潰してくるけどな」

「そうなんですか！？」

喰い付きいいね、シャルル。俺は付いて行けないよ。

「ああ。ほら、あそこでイブキがやってるぞ」

「えっ!？」

え？ どこどこ？ あ、いた。……あれ？ 箒もいる？

レンヴァルス先生が指した方を見ると、天星先生と箒が向かい合っていた。

どちらもISは使っていない。けど、その手に持っているのはISのブレードだった。

……え？ 天星先生は兎も角、箒も持てんの！？ しかも何その殺伐した空気は！？ 二人の周りだけ生徒がいらないよ！？ だからこっちはこんなに込んでるのか！

「ふうん……これは私が来て正解だったか」

「え？」

「イブキの鍛錬は三段階ある。一段階目は体力、筋力、集中力を付けること。二段階目はIS無しの打ち合いで技術の鍛錬。そして三段階目は、ISを使った全力の死合いだ」

「試合？ それはまあ普通じゃあ……」

「試合じゃない。殺し合いだ」

「殺し　！？ そんな事……！」

「では聞くが、お前は安全が確保された練習をして、殺し合いが出来るか？」

「え？」

「相手は殺しを前提とした戦い方だ。そんな相手にたかがスポーツのやり方が通用するか？ 敵の闘気に勝てるか？」

「そ、それは……」

「勝てない。前に立った瞬間殺される。箒が戦うと決めた相手はそういう奴らだ」

「……」

甘く見ていた。俺は皆と訓練して、訓練しまくれば、強くなれると思っていた。確かに強くなる。けどそれはスポーツという範囲でだ。殺し合いでは赤ん坊のようだ。俺はそんな領域にいる奴らと戦うと言ったんだ。

「見ておけ。あれが箒の覚悟だ」

「……!!」

箒は跳び出した。剣を上段に構えて天星先生に迫った。その速さは俺の知っている箒には無かった。正に神速。対する天星先生は何もせず、ただ箒が来るのを待っていた。

「ハアッ！！」

は、速い！

箒の振り下ろした剣は速かった。

剣道の時も速かったが、これはその何十倍も速かった。

天星先生はその剣をたった一振りで弾き飛ばした。

「くっ……！！」

しかし箒は弾かれた勢いに乗って身体を回転させ剣を振った。

しかし、その時にはもう既に天星先生の剣が箒の剣の軌道上に置かれていた。

当然、箒の剣は受け止められた。そしてそのまま何度も打ち合った。マンガを見ている様な打ち合いだった。

……違い過ぎる。俺達とは一線を越している。

俺達はISを装着してISの武器を扱っている。それだけで俺達は苦勞している。

けど、あの二人は違う。

二人はIS無しでISの武器を扱ってあそこまで動いている。

一体どのような鍛え方をしたらあんなに動けるんだろうか。

「あれを見て、まだ戦う気があるか？」

レンヴァルス先生が二人を見たまま聞いてきた。

戦う？ 誰と？ あの領域にいる奴らと？ そんなの俺に出来るのか？

少なくとも、今の俺には絶対に出来ない。

俺の幼馴染、しかも女子があんなに頑張っているのに、俺は何も出ていない。

「お前には『武女帝』がいるだろう」

「……え？」

「筈には『鬼神』がいる。ならお前には『武女帝』がいるだろう」

「『武女帝』……」

「覚悟が本当にあるのなら、それに触れる。箒は触れてあそこまでものにしている」

箒は『鬼神』に触れた……だからあそこまで強くなっている。
なら俺は『武女帝』に触れれば……。
でも、俺に出来るのか？ 俺に殺し合いが……。

否、俺は殺し合いは出来ない。俺は……誰も殺さない。殺さないで勝つ。

それが、兄に誓ったヒーローだから！

「レンヴァルス先生」

「何だ？」

「俺は、俺の戦いで強くなります」

「……やはり、姉弟だな」

「え？」

「千冬もそう言った。だが千冬は出来なかった。それをお前はやると言っているんだ。出来るか？」

「……出来る出来ないの問題じゃない。やるかやらないかの問題だ」

「……そうか」

レンヴァルス先生はそれを最後に何も言わなかった。
そして弾かれた幕と天星先生の所に向かった。

「……凄いよ一夏」

「え？ 何が？」

シャルルが後ろで驚いた顔をしていた。

「『無限の魔女』と言いつけていたんだよ！？ それって誰にでも出来る事じゃないんだよ！？」

「どうしてだ？」

「『無限の魔女』はその名の通り無限の武器で攻撃するから無限つて付いているんだ。でも何故魔女なんだと思う？」

「それは……女だから？」

「違うよ……魔女の様に恐ろしく、言葉で敵を惑わすんだ。だから誰も言葉で勝った事が無いんだ。『鬼神』以外ね」

「それを……一夏がやってのけたってこと？ 信じらんない……」

鈴が驚くのは無理も無い。俺も驚いているんだから。

「一夏、事情はよく分からないけど、レンヴァルス先生に……」
『無
限の魔女』に宣言したんだから、もう投げだせないよ?」

「……ああ。俺は必ず、強くなる」

必ず強くなる。そして、兄さんとの約束を守ってみせる!

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわつき始めた。
天星先生と箒にじゃない。また別の所からだ。
俺は皆が注目している場所を見た。

そこにはもう一人の転校生、ドイツの代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

彼女は銀の髪を靡かせ、黒いISを身に纏っていた。
転校初日に俺に平手を喰らわした張本人だ、見間違える筈が無い。

「おい」

「……なんだよ」

ラウラが不機嫌な態度で俺に近付いてきた。
そして震える手である場所を指してこう言った。

「あ、あそこにいる女共……特にあの黒髪は兄上の何だ!？」

「………は？」

いきなり何を言い出すんだ？　そしてなしてそんな泣きそうな顔なんだよ？　俺が何かしたみたいじゃないかよ！

「ってか兄上って？」

「あそこにいる天星イブキだ！　そしてその手解きを受けていた女は誰だ！？　それからその女の手当てをしながら兄上に絡んでいる女は誰だ！？」

……あゝ……ジェラシー？　この子も所詮女の子って事か。

「銀髪に見える白髪の方はレンヴァルス先生で、この学園の保険医。天星先生の同級生……でいいのかな？」

あの二つ名も言った方がいいのかな？

「レンヴァルス……？　『無限の魔女』か！　くっ！　なら仕方が無い……」

知ってたのか。それと何が仕方が無いんだ？

「なら黒髪は!？」

「篠ノ之箒。俺の幼馴染で、天星先生の弟子」

「弟子だと!？」

「お、おう……」

こ、恐いな……。あらゆる意味で恐いな……。

「認めん……絶対に認めん……! あの女が兄上の弟子だなんて!」

「あのー……ボーデヴィツヒさん?」

「そして貴様もだ! 貴様が教官の弟などと決して認めん!」

「だから泣くなよ! 怒るなよ! 俺が何かしたみたいだろうが!」

「だが今は貴様は後回しだ! あのメス豚を潰す!」

そう言つてラウラはISの方に取り付けられている大型の砲台を簞に向けた。

こいつ……動揺し過ぎて思考が落ちてるのか？ 今撃つたら、天星先生達にも当たるぞ。

「この……泥棒猫が……！！！」

ドーン！！

ラウラは泣き叫びながら実弾を発射。
弾丸は真っ直ぐ簞に飛んで行った。

ちよつと前の俺なら焦っていただろう。

けどあの戦闘を見た後では、この後の未来が分かってしまう。

「ッ！」

箒が剣を持ち前に出た。

そして箒は剣を振り下ろし、弾丸を両断した。

……………予想斜め以上にいったな……………。俺はてっきり簡単に避けるんだと思ってたんだけど……………。

「な、なにっ!?!」

ラウラ、君の気持はよく分かるよ。デカイ弾丸を両断して対処するなんて思いつかないもんな。

「う……………ん……………七十八点。さっきのよれよれの弾丸なら打ち返せ」

ええ……………っ!?! 打ち返すの!?! 返しちゃうの!?! アホか!

「はい、師匠!」

こら第！ なに輝いた顔で普通に答えてんの！？ 人外になっちゃ
イヤー！！

「さて……ラウラ、一体どういっつもりだ？」

「うっ……」

天星先生は少し怒ったような感じでラウラに向いた。

「悲しいな……ラウラ。俺は今もの凄く悲しい」

「あ、兄上！ 違うのです！ 私は兄上を……」

「とうとう反抗期になってしまったのか……」

「女の手から………はい？」

うん、はい？ 反抗期？ 一体何を？

「すまなかった。折角学園にきたのに会話しなくて……。兄失格だな」

「い、いえ！ そんな訳ありません！ さっきのは……。そう！ 誤射なのです！」

ええ……。思いつきし狙ってたじゃん。

「そうなのか？」

「はい！ 私の兄上は兄上ただ一人です！ だから悲しまないで下さい！」

「そうか……。ラウラ、お前はなんていい子なんだ。お前が義妹でよかったよ」

「ああ……兄上……」

うわあ……懐柔されてるよ。見て、あの緩みきつた顔。撫でられた
だけであんなに……。

「さ、ラウラ。俺はまだ仕事がある。話がしたいのなら放課後にで
も来なさい」

「はい、兄上！」

「それと、仕事中は天星先生だ」

「はい、天星先生！」

ラウラは笑顔のままこちらに振り返った。その瞬間、最初のような
冷たい顔になった。

「今回の所は引いてやる。覚えておけ、私は貴様の存在を認めない。
……あとあの黒髪も」

「あ、そうですね……」

ラウラは立ち去って行った。

俺のラウラの評価、よく分らん、だ。

けど一っだけ分かった事がある。俺と箒に敵意を向けていること。

「……いい度胸してるよね、あの女」

ゾクッ!? う、後ろから!? な、何だ!?

後ろを振り向いたら、黒い霧に包まれたシャルルがいた。黒い笑みを浮かべて。

「僕という副ヘッドの前で天星先生に危害を加えようとするだなんて……。それに義妹? からかってるの? ふふ……ふふふふふつ……」

……見なかった事にしよう。
あの天使のようなシャルルがあんな悪魔みたいに笑う筈が無いし……。

「はぁ……」

「よっ、このゴールデンシスコン」

「別にシスコンじゃない。ああしないと穩便に済ませれないだろ」

天星先生が溜息を吐きながら頭をかいた。

なんかさっきち雰囲気が違う……？

「師匠、あの女子は誰ですか？」

「ん、過去にドイツに行った事があつてな。その軍で少しの間世話になったんだ。その時に、とある部隊で出会ってな、無性に懷

いてくるから俺の義妹のような存在になった子だ。ま、根は真っ直ぐな子だから宜しくしてくれ」

「師匠がそうおっしゃるなら」

「ん。……よし、今日はここまで。アリーナの閉館時間でもあるし、今日はよく頑張ったからな。しっかり休め」

「はい！　ありがとうございます！」

箒は頭を下げてから念入りにストレッチを始めた。
天星先生はそれを眺めて、俺達の所にやってきた。

「織斑」

「は、はい！」

「精々、幼馴染に置いてかれるなよ」

……ムカツ。挑発ですかそうですね。
さっきまでの会話全部聞いてたんですね。

「織斑千冬の名にかけて、貴方をも越えてみせます」

立ち去っていく天星先生の背中に、そうぶつけた。

「ふふふふふ……天星イブキファンクラブ『鬼神会』副ヘッド、
シャルロット・デュノアに喧嘩を売ったんだよ……？ 覚悟は出来
てるよね……？」

「おい！ シャルル行こうぜ！」

「あ、うん！ ちょっと待て！」

「…………『鬼神』も大変だな」

「黙れ魔女。…………なぜ俺の周りにはこんな女ばかり…………」

「（…………逆に言えば選り取り見取りなんだがな）…………はあ」

遂に発覚！ 副ヘッドの正体！（前書き）

更新です。ですがおかしなところがありそうで怖いです。

もし発覚したら教えてほしいなゝなんて……。

遂に発覚！ 副ヘッドの正体！

織斑を挑発した後、俺は職員室に戻り事務仕事を片付け始めた。

「また余計な事を言っ たな」

隣の千冬が溜息交じりに言ってきた。

「何を？」

「一夏にだ。つい先程、アリーナで」

「ストーカーは犯罪だぞ」

「なわけあるか。感だ」

そりゃ恐ろしい感で。シスコンは伊達じゃないってか？

「いいじゃないか。それ程期待しているということだ」

「お前がか？」

千冬は動かしていた手を止め、こちらを凝視してきた。
驚くのは無理も無い。俺が興味を持つことは中々ない。ツチノコを
発見する程レアなことだ。偶々、今年は異例なだけだ。

「面白いぞ？ 昔の千冬と同じ事を言っていたんだからな」

「……そうか」

千冬は少し表情を落とした。千冬は今でも昔の自分を後悔している
のかもしれない。あの時の甘い考えを……。

「だが、織斑ならやれるかもな」

「何……？」

「体験した当人が付くんだ……それを乗り越えれば或いは……」

「まさか……ありえんさ。あいつは……」

「『黒耶』と約束したんだと……」

「っ……」

「『全てを守るヒーローになる』……そう誓ったらしい」

「そうか……」

『黒耶』と約束したか……。何て縁なんだろうか……。これが運命とでもいうのか、神は。

「……ところで話は変わるが」

「ん？」

「ボーデヴィッヒとは話せたのか？」

ああ……ラウラね。アレは話せたのか？ 宿めた様な気がするんだが……まあ話せたんだろうな。

「何か、俺達の事を色々と誤解している様だぞ。それもすんごく過剰に」

「はあ……やはりな。朝も一夏を叩いていたさ」

「ほう……ついに浮気がばれたのか？」

「黙れ。一夏は誰とも付き合っていないし、そもそもボーデヴィッヒとは初対面だ」

なんだ、面白くない。態々遠出までして愛おしの恋人に会いに来た

のに、その恋人が知らない女とイチャイチャしていて、泥沼の三角関係が出来上がったと思ったのに。

「……あ、これでは既に関係が終わってしまっているではないか。それにそんな奴がラウラに手を出していたら流石にキレるぞ」

「……何をブツブツと言っている」

「あ、すまない。口に出ていたか」

「まったく……お前は本当にシスコンだな」

「いや待て、流石にコレはシスコンじゃないだろ。お前だって織斑に変な女が手を出してきたら「一刀両断でそいつを切り裂き、一夏からも記憶を消す」聞いた俺が馬鹿だったよ」

なんだよそのブラコンぶりは。それではもはや犯罪の域を出ているぞ。

「そもそも鬼神とあろう者が、よく出会えた者だな」

「そうだよな……。あれは凄いい出会いだったよな」

俺とラウラの出会い、それは……今から三年前。

当時俺とたば「長くなるから止める」人のモノローグに入ってくるなよ。

仕方が無い、この話はまたの機会に。

「さて……終わりっ」と

「……早過ぎないか？」

「俺を舐めるなよ。嘗て束を万年学園二位に仕立て上げたこの俺を」

「……そうだったな。あの馬鹿はそれでいつも私に泣き付いていたな。……ああ、それを思い出したらイライラしてきたぞ。おい、今すぐお前の首を斬らせてくれ」

「いや、止めるよ」

俺は仕事が終わりに、寮の自室へと戻ってきた。

今思えば、もう少し仕事を遅く終わらせるべきだったと、後悔している。

いや、これは己の女運が悪いと嘆くべきなのか、とにかく俺は今とてつもなく最悪な気分だ。

何故なら……。

「……」

「……はあ」

デュノアが水道場で“胸”の出たジャージ姿で織斑とひっ付いているんだからな。

「この……戯け共が」

「あははは……」

「笑い事ではないだろう！ デュノア！ 先ずは織斑から離れる！
そしてジッパーを上げる！ 織斑！ 鼻の下伸ばしてる暇がある
ならもつと周りに敏感になれ！」

「え？ ひゃああっ！？／／／／」

「は、はい！？」

「分かったらとつと座れ馬鹿共が！」

「「い、イエッサー！」」

「つたく、ホントこの学園は俺に平穏を与えてくれないんだな！ お
蔭で退屈しないで楽しいよ！ ええまったく！」

「さて、取り敢えず頭は冷えたか？」

「「はい……」」

二人をベッドに座らせ、俺は椅子に座り二人を見詰めた。

「まず最初に、織斑はこの件を誰にも言つな。万が一口を滑らせた場合、社会的に殺すからな」

「は、はい！」

「そしてデュノア」

「……はい」

デュノアの声には力が籠っていなかった。まるで刑を言い渡される罪人のように。
まあそれは仕方が無い事だ。デュノアは女なのに男と偽って編入してきたのだ。何らかの処罰が下されるのが通常なのだから。

「何故、男と偽って編入してきた？」

「それは……実家からの命令で……」

「ああ、もういい」

「え……？」

俺はデュノアの言葉を最後まで聞かず止めた。
何故ならそれだけで全てが分かったからだ。

デュノアの家はフランスでIS企業の会社を設立している。そこでは二世代型のIS、ラファール・リヴァイブの開発をしている。しかし近年、デュノア社は経営危機に陥っている。そこでデュノア社は三世代型のISを開発しようと乗り出したが、もともと遅れての二世代発明だった。だから圧倒的にデータが足りず、開発が出来ない状態だ。

そしてデュノア社は今度のトライアルで選ばれなかった場合、政府からの援助を全面カット、IS開発許可も剥奪という危機に陥っている。

しかし、その時にある情報が入ったとする。『新たな男性操縦者の出現』。しかもその人物はIS学園に入学し、更には白式という専用機が用意された。

ならデュノア社が助かる手段は必然的に浮んでくる。そう、織斑一夏の白式のデータを盗みだす事だ。更に言えば、デュノアから男の操縦者が現れれば広告塔にもなる。

「そう言う事だろ？」

「……どうして……」

「簡単だ。俺は過去にデュノア社に潜入した事がある」

「えっ!？」

「当時、デュノア社で違法な研究をやっているとの情報を聞いて潜入調査をした事がある。結果的に何も無かったがな。その時にデュノアに人間は全て調べ上げている」

「そうだ、俺はほんの数年前にデュノア社に潜入調査をしていた。
『ノアの箱舟』の情報を集めているついでにそんな情報が入れば、俺は束と共に調べては潰していた。」

「それじゃあ……」

「お前が女という事は、もう既にばれている」

「そう……でしたか……」

デュノアはもう終わりだと、悟ったように表情を落とした。

……馬鹿が、誰も終わりにするとは言っていないだろ。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

織斑が慌てふためいて入ってきた。

「シャルルの目的が俺の白式のデータだと言っるのは分かりました。けど何でシャルルがそんな」

「それは僕が愛人の娘だからだよ」

「……え？」

デュノアは恐らく言いたくない事なんだろう、それを話した。

「母さんが死んで、引き取られたのが二年前なんだ。父さんの部下がやってきて連れていかれて、ISの適正検査を受けさせられて、高かったから非公式だけどデュノア社のテストパイロットになったんだよ」

織斑は黙って聞いていた。が、織斑の手を見ると強く握りしめられていた。

「実際に会ったのが二回。その内、一回だけ本邸に呼ばれた事があるんだけど、あの時は酷かったなあ……。いきなり本妻の人に殴られたんだ。『泥棒猫の娘が！』って。母さんも教えてくれてたら、あんなに戸惑わなかったのに」

デュノアは乾いた声で笑った。だが顔を笑っていなかった。寧ろ泣きそうだった。

デュノアとその父の関係は上司と部下……否、プレイヤーと駒のよきな関係だ。

自分が助かる為に血の繋がった娘さえも利用する父親の風上にも置けない愚図野郎。

こんな人間がいるから、俺達は……。

「それで、いいのかよ？」

「え……？」

織斑はいきなりデュノアの肩を掴んだ。
織斑の目は真剣そのものだった。

「お前はそれでいいのかよ？　よくないだろ！　親が子の自由を奪うなんてあつてはいけないんだ！　そんなの、あつてはいけないんだ！」

「い、一夏？」

「親だからって子供に何でもしていいなんて、そんな馬鹿な話があるか！　親は子供に未来をあげなくちゃならないんだ！　なのに自由を奪うなんてこと許される筈がない！」

親は子供に未来をやる……か。なかなか、いい事言うじゃないか。そうだ、親は子供に生きて行く術を教え、未来を自分の手で切り開けるようにするのが役目だ。己の為に利用するなど、あつてたまるか。

「シャルルはそれでいいのか？ 生きる自由を失ったままでいいのか？」

「よくないよ……。でももう、どうしようもないよ。もう先生にもばれてるんだし……」

「天星先生……！」

織斑が俺を見てくる。しかも好戦的な目で。

何だ？ 黙らないなら力尽くでもってか？ いい度胸だな。

「織斑、俺を力尽くでも黙らせようと思ってないだろうな？」

「……………それが必要なら」

こいつ……………面と向かい合って言いやがったな。面白い。

「だ、駄目だよ！ 天星先生に敵いつこないよ！ それに迷惑なんか掛けたくない！」

「だけど……………！」

「戯け。頭を冷やせ」

「がつ！？」

織斑を蹴り飛ばして床に沈ませた。

「いつてー……………！」

「俺はここの教師だ。なら俺は大抵の事は学園の決まりに従わなければならぬ」

「だからって……あ！」

気付いたか、ニブチン。

「どうしたの？」

「シャルル！　ここにいろ！」

「へっ！？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同人がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

ほっほー、よく覚えていたな。間違えていたら笑ってやろうと思っていたのに。

「つまり後三年はこの学園に居れるんだよ！　その三年間でこれか

らの事を考えていけばいいんだよ！」

「……あ」

「そうだったな。なら俺は何も言わんよ」

わざとらしく両手を上げて部屋を立ち去ろうとした。

「先生！ その、生意気言ってすいませんでした！」

織斑が俺を引き止め、頭を下げてきた。

「その気があるのなら、しっかりとデュノアを守ってやれ。そいつはどつやら俺のファンらしいからな」

「は、はい！」

ん、これでまた織斑にはフラグが立ったかな？ 誰につて？ 決まっている。デユノアだ。

いや、自分に関わる女性関係を弄られるのは嫌いだが、人のを弄るのは面白い。いい暇つぶしだ。

俺は二人を残して部屋を出た。

「あら、天星先生。一夏さんはいらっしゃいますか？」

「オルコットか。ああ、居るぞ」

「そうですか。ありがとうございます」

……やべ、織斑の為の修羅場が構築されていくのが目に浮かぶ。

後ろの方で織斑の慌てふためく声を聞きながら、俺は食堂へと向かった。

途中、刀を持った筈と出会い、食後に居合いの練習に付き合った。

鬼神の義妹の気持ち（前書き）

申し訳ありません。スランプです。オチもまともじゃありません。

鬼神の義妹の気持ち

結果から言おう。エレナは俺を裏切った。

何故いきなりこう言ったのかは、今日の朝の授業の事だ。

「さて、授業を」

「先生！」

「何だ？」

「学年別トーナメントで優勝したら先生とも付き合えるんですか！？」

「なっ……」

という生徒からの積極的な質問がバンバンとやってきたのだ。

当然、俺は違うと訂正したが、他のクラスには未だ訂正出来ていない。

「エレナ、お前言ったよな？ 添い寝する代わりに言わないと」

「私が望んだのは添い寝ではない……合体だ！」

「千冬とでもしとけやああああ！」

「きゃう!？」

床で痛みに悶える縄でグルグル巻きにされたエレナをよそに、俺はどうしようか悩んだ。

どうする…… 箒を更に魔改造して優勝させるか？ それとももっと平和的に織斑を…… いやいや、それでは面白くなる…… ええい！ どうすれば……!？

「何だ？ またエレナが何かしたのか？」

「千冬……実はかくしかじか、以下省略だ」

「なるほど……」

くそ、教師である俺は参加できない……。噂はもう取り返しのつかない事になっているだろう……。

「くっ……こうなったら紗奈を編入させて優勝させるか？ そうだ……それがいい！ アイツなら」

「少し落ち着け」

うぐっ！？ 千冬、角は駄目だ……痛すぎる。

「だいたい、紗奈は戦う事に抵抗を感じているだろ」

「編入はいいのだな……」

「……」

「むぎやっ！？」

おおっ……エレナが千冬に蹴られるところ……新鮮だ。

千冬は蹴り飛ばしたエレナに近寄り、顔を耳元に近付けた。
それから何かボソボソと呟いた気がしたが、俺には何も聞こえなかった。

「……ほう」

ただエレナのニヤついた顔だけは分かった。

「まったく、お主も乙女よの」

「うるさい……／＼／＼」

「何を話してんだ？」

「何でも無い」

ああそうですか。さて、仕事仕事………ん？何か大切な事を忘れていた様な……まあいいか。

夜、俺は一人敷地内を散歩していた。いや、見周りを行っていた。これも立派な仕事だ。

「……ん？」

中庭に一人の女子生徒がいた。

銀髪の女子、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

ラウラか……こんな時間に何をしているんだ？

俺はラウラに近付き、声をかけた。

「ラウラ、もう門限を過ぎているぞ」

「ッ！？ あ、兄上……」

ラウラは俺だと確認し、一瞬放った殺気を解いた。

「何をしてる？」

「……いえ、何も……」

ラウラは何だか落ち込んでいた。

珍しい、ラウラがここまで落ち込むなんて……。

「どうした？ 虐められでもしたか？」

俺はラウラの隣に腰かけた。

「それ以前に誰とも口を聞いていません」

「そ、そうか……」

今時の女子はお喋りが好きだと思っていたんだがな……。

「……兄上」

「ん？」

「兄上は……何故こんな所に来たのですか？」

「ラウラ……？」

ラウラは強張った声でそう聞いてきた。

何故そんな質問をするのかは……まあ大体予想できるが。

「そうだな。千冬に頼まれたってのもあるが……」

「……」

「守りたいものが、この学園にあったからな」

「守りたい………ものですか？」

「ああ。俺の大切な人の大切な人……。そいつらを守ってやりたいからな」

束の妹の篤、千冬の弟の織斑一夏、そしてその二人の仲間……。そいつらを『ノアの箱舟』から守りたい。

「そう………ですか」

「言っておくが、お前もそれに入っただけだからな」

「え……?」

「この学園に入った以上、お前は俺の生徒だ。そして義妹だ」

そう、もう俺は教師なんだ。だったら生徒のことは教師である俺達が、責任を持って守らなければならない。

「織斑弟の事をどう思っているかは俺には関係ない。だが……」

俺は立ち上がりラウラを撫でた。

「アイツも、それなりに想いを持っている。それだけは分かってやれ」

俺は手を離して寮に戻った。

これで、織斑とラウラの間に問題が起きなくなればいいんだがな…

…。

翌日、俺はラウラの行動をずっと見ていた。

朝食時から授業中、休み時間までと誰にもばれずに見てきた。

放課後になるまでラウラは織斑に対して何のアクションも起こさなかった。

少しは考えてくれたか？

そう思っただけ俺はラウラの監視を止めた。

だがそれが間違いだった。義妹だからと言って少し甘くしていたのかもしれない。

「先生！　オルコットさんと凰さんが！」

「ッ！？」

女子生徒が職員室に走り込んできた。その生徒によると、先の二人がラウラにISの決闘で一方的にやられている。それもやり過ぎな程に。

俺と千冬がアリーナに駆け付けた時には、織斑がラウラと対峙していた。

イブキSIDE OUT

ラウラSIDE

兄上はあの男がちゃんと想っていると言った。あの男が自分の不甲斐なさを見据えていると。

そんな筈はない……あの男からそんな感じは見られない……。だが……兄上があんな愚図に騙される筈がない……。なら自分で確かめるまでだ。

私はそう決心し、丁度アリーナに居たあの男にひっ付いている女二人を挑発して決闘に持ち込んだ。

正直、こんなものは決闘に入らない。ただのお遊びだ。

だがこいつらを傷めつければ、見ている生徒共からあの男の耳に入り、絶対に駆け付けてくるだろう。

「その手を離せ！……！」

丁度二人をワイヤーブレードで締上げている時に奴は現れた。

「ふん……。感情的で直感的、絵に描いたような愚図だな」

奴が振り降ろしてきた刀をAICで奴の身体ごと止めた。

こんな愚図は何も考えていない、何も想っていない。ただ無能に呑気に生きているだけだ。兄上は間違っている！

「くっ……。ナメんなあああ！……！」

「なっ……。！？」

奴の身体が徐々に動き始めた。

馬鹿な、A I Cの前では何も出来ない筈！？

「うおおおおお！！」

「くうっ！！」

私は奴に肩のカノン砲を向けた。

消えろ！ 織斑一夏ッ！

しかし、弾丸は発射されず、代わりに銃弾の雨が降り注いできた。

「チッ……雑魚が」

私はA I Cを解除し、女二人を手放しその場から離れた。
撃ってきたのはラファール・リヴァイブ、フランスの代表候補だった。

「邪魔を……！」

弾丸の雨は止まる事を知らず、私に迫り続けてくる。
私はその弾丸を避け続け、攻撃の機会を覗う。

「面白い。世代差というものを見せつけてやるう」

イグニッション・ブースト
私は瞬間加速の準備をした。

行ける、私なら行ける。兄上にも指南してもらったのだ、必ず出来る。

「行くぞ……」

私は瞬間加速を使用した。だが

ガシャンッ!!

それはたった一本の腕で止められた。

「あ、兄上……」

私を止めたのは兄上だった。兄上は左腕で私の腕を掴んでいた。

「ラウラ……退け」

「し、しかし……!」

「これ以上は教師として俺も黙ってはおれん。素直に退け、な?」

その声は柔らかかったが、顔は酷く冷たく、悲しそうだった。

「分かりました……」

私はその顔に耐えきれず、素直に退いた。ISを解除し、地面に足を着いた。

「この決着は学年別トーナメントでつける。いいな？」

「あ、ああ……」

「僕も構いません」

「はい」

「ではそれまで今後一切決闘は禁止だ。以上、解散」

その声で、周りにいた生徒は散り散りになって行った。

ラウラSIDE OUT

イブキSIDE

俺は今職員室で事務処理をしている。が、俺の頭の中では今それどころではなかった。

何故だ……何故ラウラはあそこまで織斑を嫌う……。それにあそこまで非道にオルコットと凰を……。俺の知っているラウラはあんなにはしなかった……。

「…………おい」

「…………何だ？」

千冬が何処か呆れた声で話しかけてきた。

「お前はパソコンに何を打っている……」

「は？」

俺は改めてパソコンの画面を見た。そこには画面びっしり『ラウラ』で埋め尽くされていた。

「……ラウラだ」

「見れば分かる。……はあ、シスコンにも程があるぞ」

「お前だけには言われたくないよ。ってか俺はシスコンではない。俺は何故ラウラがあそこまで織斑を否定するのが……。千冬、何か当たりはあるか？」

千冬もラウラの教官だったし、何か分かるかもしれない。

「そうだな……アイツは何かと私を出してくるからな……」

「それ程尊敬しているんだろ。ドイツに居た時はずっとお前の後ろ

にいたし」

まるで金魚のフンだったな。千冬が右を曲がればラウラも右に、左に曲がれば左に、トイレに行けばトイレにとな。

「もういつそ本人に聞いたらどうだ？」

「そうだな……」

正直、そうした方が早いんだがな……。

「だがもし答えが……」

「……？」

「『織斑を見てドキドキする。だから私は織斑を否定する』って言われたら、俺どうなるか分からないし……」

「……馬鹿が」

「馬鹿だと？　なら千冬、お前は織斑が『彼女を見るとドキドキするんだ。これってなに？』って言われたらどうすんだよ？」

「決まっている。その女を抹消する」

「お前が馬鹿だ」

俺の周りにはまともな女はいないのか？　いや居ることは居るが、圧倒的に少ない。

「何にせよ、これは本人同士の問題だ。我々大人が介入する問題ではない」

「……ま、そうだよな」

「ああ」

「……まてよ？」

「今度は何だ？」

「もしラウラと織斑の仲が解決して、ラウラが織斑に惚れたら……」

「……………」

「おい、その刀どこから出した？　そしてどこに行こうとしてんだ？」

「喜べボーデヴィツヒ、私が今一度貴様に指南を施してやる」

「ちよっ！？　馬鹿っ！　止せって！！」

夜、俺は自室で織斑、デュノアと過ごしていた。

……千冬に関わるなと言われたが……気になるものは気になるよな……。

「織斑」

「はい？」

「ラウラとの事なんだが……」

ピクッ。

「ラウラ？」

「お前等はこつ……仲悪いよな？」

「まあ……そうですね」

「何故だ？」

「えっと……俺、昔誘拐された事があつたんですけど……」

ああ、そう言えば千冬がえらい慌てて助けを求めてたな。
結局、ドイツが情報を掴んで助かったって言う……。

「……まさか、『モンド・グロッソ』の決勝戦に出れなかったのが
お前のせいだ、とか？」

「ぶっちゃけ……はい」

「……はあ」

ラウラ……子供は外見だけにしてくれよ……。何だその無茶苦茶な
理由は……。

「織斑、俺の義妹が迷惑をかけてすまない。アイツ、一度思い込んで
だら中々解けないから……」

ピクピクッ……。

「いえ……。あ、ところで何でラウラが妹なんですか？」

ピクピクピクッ…。

「妹ではない、義妹だ。まあ向こうは俺の事を本当の兄のように『兄上』って表記するけどな」

ピクピクピクピクッ…。

「表記？ 何ですかそれ？」

「ああ気にするな。……あゝ何でデュノアはそんなに怖い眼をしているのかな？」

デュノアは『鬼神』とまで言われているこの俺を、冷や汗をかかす程怖い眼で見っていた。

「いえ。それで、どうしてですか？」

「う、うむ……。簡単に説明すると、昔ドイツ軍で世話になった時にラウラと出会ってその時にカクカクシカジカウマウマな訳で……」

「へえ、そうなんですか……。では僕も『お兄ちゃん』とお呼びしても……」

「勘弁してくれ……。それに、もう三人もいらな……」

「…………あれ？ 何故かデュノアの睨みが一段二段と怖くなったような気がするの？ 気のせいかな？」

「先生……三人も、という事はもう二人いるんですね？」

「お、おう……。そうだが……」

「…………」

「しゃ、シャルル？ 何だか知らないけど、別に良いじゃないか」

「ナイス織斑！ 空気を読まないスキルが功を成したか！」

「まあそうだけどさ……」

「納得してくれてどうも。まあ今度紹介してあげようか」

「……はい」

ふう……何か知らないが助かったか。

しかし、紗奈を紹介しても良いのか……。というかそう会っても良いのか？ アイツらに狙われてるかも知れないしな……。

あゝでも千冬とかにも合わせた方がいいよな。エレナと束にもよし、そうと決まれば今度のトーナメント戦の時にでも呼ぶか。

トーナメントの悲劇（前書き）

やってきたトーナメント戦。

イブキと篤がほぼメインになってる気が……。

そして一夏、何か地味にやるう……。

トーナメントの悲劇

六月も終わりに近づき、妙に暑くなってくる季節。IS学園は学年別トーナメント一色に染まっていた。

そして生徒は勿論、教師組はその準備で大忙しだった。会場の準備、来賓を迎え入れる準備、その他諸々。兎に角大変だった。

「篤、体調は良好か？」

「はい、万全です」

俺は更衣室に向かっていている篤を捕まえ、師として試合前の確認をしている。

「俺がお前に教えたのは“剣道”ではなく“剣術”だ。そこを間違えるなよ？」

「無論です」

「だが、第一く第四までのなら使用しても良い」

「宜しいんですか？」

「ああ。今のお前ならばまだそこまでの境地に辿り着いてないからな」

「むっ……」

「はは……そんなに膨れるなよ。別に見下してる訳じゃないんだからな。」

俺は拗ねている筈を撫でて声援を送った。

「お前なら出来る。だから精一杯やってこい」

「はい！」

「あ、そっぴや筈のペアは誰だ？」

今回のトーナメント戦は、個人戦ではなくタッグ戦だ。
第だけが奮闘してもそれではあまり意味がない。協力しての勝利だ。

「…………ラウラ・ボーデヴィッヒです」

「ラウラか？　なら問題は…………あるよな」

「はい…………」

先程まで威勢が良かった第はしゅんと縮こまり、顔を俯かせた。

「実は…………クジで決まったのですが、開口一番『貴様が兄上の弟子などと認めるか！　この泥棒猫め！　貴様なぞボロ雑巾のように扱われて惨めに捨てられてろ！』と、言われまして…………」

「…………すまん、俺の義妹が…………」

「い、いえ！　大丈夫ですから！」

ラウラ……泥棒猫って言葉、誰に教えてもらったんだ……。アイツか、クラリッサ！

「まあラウラの事は頼んだ。頑張れよ」

「はい！」

「ああそつだ。今日の試合、お前の姉弟子に当たる人も見に来るかな」

「姉……弟子？」

「そつだ。だから、頑張つてこい！」

俺は箒の背中を押して手を振った。箒は頭を下げてから更衣室へ向かった。

さてと、紗奈の奴を迎えに行きますか。

俺は急いでアリーナの入り口に向かった。

アリーナの入り口に付くと、黒髪の少女が立っていた。

「紗奈」

「あ、おにつ……イブキさん！」

紗奈を呼ぶと、紗奈は俺に駆け寄ってきた。

「待たせたな」

「いえ、大丈夫です」

「じゃあ行こうか。千冬も待ってる」

「はい」

俺達は特等席、即ちピットに向かった。

ピットの中に入ると、千冬と山田先生が色々と指示を出していた。

「千冬、紗奈が来たぞ」

「何？ ああ、紗奈。久しぶりだな」

「はい。千冬さんもお元気そうで何よりです」

「イブキが呼んだのか？」

「ああ。筈の事を紹介しておきたかったし、千冬とエレナもいる事だしな」

あとデュノアにも会わすとか言ってしまったし。

「そうか。まあゆっくりして行け。なんなら今晚泊まって行っても良いぞ。どうせ明日は日曜だしな」

「そうですね。考えておきます」

泊まるって……どこに泊めるつもりだよ。千冬の部屋は定員オーバーだろ。

「あの、織斑先生。この子は……」

「ああ。彼女は天星先生の義理の妹で弟子、私とレンヴァルス先生の妹分だ」

「へえ〜！？　そうなんですか！　私は山田真耶です。宜しくね」

「はい。伊司須紗奈と言います」

山田先生には紗奈の過去は伏せて紹介した。紗奈の過去はあまり外に漏らしてはいけないのだ。生まれがアレなだけに……。

「ところで、妹弟子はどんな子なんですか？」

「束の妹だ」

「え……束さんの？」

「ああ、安心しろ。束みたいに奇想天外じゃないから。強いて言うのなら千冬がもうちょい柔らかくなった感じだな」

「そうなんですか？」

「……知らん」

千冬は紗奈に聞かれたが、そっぽを向いた。

「それに才もある。もう既に『天星流』を第七まで習得している。極めてはいないが」

「第七まで……私でも一年は掛ったのに」

「紗奈はまあ当時は身体が弱かったからな。当たり前だ」

そう、とても弱かった。数十分運動しただけで倒れる程に。だが今はもう女子の平均より少し高いぐらいまでに身体は丈夫になっている。

「お、もうすぐ始まるな」

あと数十秒で試合開始だった。

イブキSIDE OUT

第SIDE

私は『打鉄』を身に纏い、アリーナに出て刀を片手に相手を見据える。

白式を纏った一夏、ラファール・リヴァイブのカスタム機を纏ったシャルル。

そして私の相方、ラウラ・ボーデヴィツヒ。ラウラは一夏を睨みつけ、交互に言葉を交わしている。

ラウラは一夏と戦うだろう。ならば私はシャルルと戦う事になるのか……。

シャルルは中・遠距離の武装をメインにしている。接近型な私は一般的に見て不利だろう。だが、『天星流』は相手が遠距離だろうと関係ない。少し前にラウラのカノン砲を切り裂いたのと同じだ。弾を見切り対応する、至って簡単な事だ。

イブキさんは嘗て、無数の弾丸の中を無傷で通かしたと言っていた。ならば、私もそれに追い付くだけだ。

「叩きのめす!」

試合が開始された直後、一夏とラウラは同時に突っ込んだ。

一夏は瞬間加速で突っ込むが、ラウラはそれを分かっていたのか、右手を向け、一夏の動きを止めた。

A I C か……。イブキさんならどう対応するのだろう……。

私がラウラの A I C の対策を考えていると、ラウラは一夏に右肩の
レール砲を放とうとした。しかしシャルルのアサルトカノンにより
射線をずらされ、A I C を解除し後退し始めた。

シャルルは逃がさんと言わんばかりに左手にアサルトライフルを瞬
時に展開した。これはシャルルの得意とする『高速切替』だ。事前
の武器の呼び出しをせずに戦闘と並行して行えるリアルタイムの武
装呼び出し。

シャルルはラウラに向かってライフルを放とうとするが、私がそう
はさせない。

「私を忘れてもらっては困る」

ラウラの前に跳び出し、シャルルが放った弾丸を刀で弾きながら斬
りかかった。

「なら俺も忘れられないようにしないとな!」

シャルルが宙返りをし、入れ違いに一夏と交代した。

一夏は私に斬りかかってきた。私は刀で防いだ。

「舐められたものだな、この程度で私を倒せると思ったか!？」

「いいや、まさか。シャルル!」

「うん!」

シャルルが一夏の背中で二丁のショットガンを構えてきた。

なるほど、一夏で私の動きを止め、その隙にシャルルが攻撃を与えるか。良い判断だが相手が悪かったな!

「ふんっ!」

「なっ

!？」

私は一夏の横腹に蹴りを与え、体勢を崩させた。それによりシャルルの射線上に一夏の身体が入り、ショットガンを撃つ事が出来なくなった。

「はあっ！」

シャルルがショットガンの射線を変えようとした隙に、刀でショットガンを突き、片方を貫いた。

「くっ！」

「甘かったな、次はこっちの　　！」

後ろから何かが来る気配を感じ、瞬時にその場から飛び退いた。すると赤いワイヤーがさっきまで私がいた場所を通過した。

「え……！？」

そのワイヤーはシャルルを縛りつけ、遠心力でアリーナの脇に投げられた。

「良く避けたな。だが嬉しい誤算だ」

「何？」

先程のワイヤーはラウラの物だった。しかし、ラウラは今私に『良く避けたな』と言った。

という事は私を狙っていた？ 馬鹿な、味方を狙うなど……いや、初めから味方などと思っていなかったのか。

ラウラはプラズマ手刀を展開し、一夏を斬り付けた。

「一夏！」

投げられたシャルルが一夏を援護しようと近付いてきた。

……一夏はラウラに任せて、私はシャルルの相手を務めよう。

「シャルル！」

「ッ！ 第……」

「悪いが、ここは通さん」

「そのよう……だね」

「……」

私達の間に長い、いや実際は短かったのかもしれない。静寂が続いた。

「……ふっ！」

先に動き出したのは私だった。刀を脇に構えてシャルルに突っ込んだ。

「そんな直線的な動き！」

シャルルはライフルとショットガンを構え、撃ち出した。

「そんなもの……！」

刀を振り払い、私に命中する弾だけを弾き、シャルルに近づく。

「う、ウン……！？」

シャルルは驚きつつも、動きながら弾を撃ち出してくる。

「いくら放とうとも無駄だ。全ての弾は見切っている」

しかし、ずっとこのままではじり貧だ。体力が尽きない自信はあるが、相手は代表候補生で専用機、こっちはただの訓練機。何かあるかは分からない。

私は勝負に出た。腰を深く落とし、出来るだけ脱力する。しかし弾を弾く腕は止めない。

「『天星流第参ノ型・風迅』！」

足に力を込め一気に地面をける。そして風の如くシャルルの目の前に移動した。その速さは瞬間加速と同等。

「なっ !?」

「『天星流第壹ノ型・鬼斬り』！」

刀を両手で持ち、身体全身で斬りかかる、鬼をも一太刀で殺す斬撃。それをシャルルに上段から叩き付けた。

「あああつ!?!」

シャルルはまともに喰らい、シールドエネルギーを根こそぎ斬り落とした。

「まだだ!」

「くっ! そう何度も!」

「ッ!?!」

シャルルは怯んだ体勢からショットガンを私に向け、ゼロ距離からの連射を放った。

「くうっ!」

私はすぐさま飛び退き、シャルルから離れたが、数発喰らってしまった。シールドエネルギーが三分の二まで減ってしまった。

「だが、まだやれる！」

「僕だつて！」

私は正面に刀を構え、シャルルはショットガンとアサルトライフルを放ちながら私に向かってくる。

「フッ！」

向かってくる弾を弾き、蛇行しながらシャルルに近付く。シャルルは私に標準を合わせようとするが、それを私は許さない。銃口が向けられる前に移動し、万が一合わせられ放たれても刀で当たる弾だけ弾く。そしてシャルルの懐に入った。

「それは読んでたよ！」

シャルルは左手に持っていたライフルを私に向けていた。

「そうか……だが私も読んでいた」

「え……？」

刀を地面に突き刺し、刀を軸にして回転、シャルルの後ろに回り込んだ。

「『天星流第四ノ型・蛇流斬』！」

蛇のように動き、流れるような素早い動きで敵を斬る。
私はシャルルの背中を回転しながら三撃与えた。

「くううつ！」

シャルルは私から離れ、距離を取った。

イける……！ 相手が代表候補生だろうと、専用機だろうと、今の私ならば勝てる！

私は勝利を確信した。

第SIDE OUT

イブキSIDE

「凄いですね篠ノ之さん！」

山田先生がモニターを見ながら興奮している。

「イブキ、お前篠ノ之にどんな教え方をした？」

「別に。ただ死合った」

「うわぁ……姉弟子の威厳、保てそうにありませんよ……」

紗奈は箒を見て褒める半分落ち込み半分になってしまった。

しかし……箒の奴、もう勝利を確信でもしてしまったか。それとも浮かれているだけか？ どちらにせよ、その考えを直さないとな。

「織斑君も凄いですね。ボーデヴィツヒさんに喰ってかかっていますよ」

織斑はラウラを中心に旋回し、素早い動きで隙を突き斬りかかる。ラウラはA I Cで織斑を止めようとするが、ラウラが織斑の方を向いた瞬間、織斑は即座に離脱。また旋回をし始める。

中々考えてるな。しかし、それではずっとそのまま……デュノアが来るのを待っているのか？ しかしデュノアは箒により苦戦を強いられている。おそらく、助けには来れないだろう。ならあ織斑一人

で戦うしかない。

「千冬、織斑には一応稽古を付けてるんだろ？」

「ああ、少しはな」

なら恐らく織斑一人でも戦える事は出来る筈だ。

「……ん？」

俺は他のモニターに目が行った。そのモニターは、観客席を映すモニターだった。

「……千冬、少し席を外す」

「ん？　ああ、分かった……」

俺はピットを出てその場所に向かった。

「あいつ、何を……っ!？」

「千冬さん、どうしたんですか？」

「……“シオン”……！」

「え……」

観客席。生徒ではない人達、政府の者や研究者達が座っている場所。そこに、紫の長髪の女性がいた。白衣を纏い、つまらなそうな目で

試合を見ていた。

と、その女性の空いている隣の席に、一人の男が座った。
女性はフツと笑い、その男に話しかけた。

「久しぶりね、イブキ」

「……ああ」

俺はモニターでこの女性を見つけ、すぐにここへやってきた。

「何故ここに居る」

「そうね……久しぶりにこの学園を見たい気持ちもあったし……貴方が大切にしている生徒たちを見たい気持ちもあるわね」

「……一人なのか？」

「知ってるくせに」

「……」

俺の数メートル後ろに一人、左に二人、前に一人……。だが操縦者は前の一人か……。残りはただの組員。

「やっぱり貴方の力は凄いわね。流石は鬼神」

「……そう言うお前も鬼神……。『夜叉』だろうが」

「そう。女の鬼神、『夜叉』……。貴方と同じ……」

「そう思って無いくせに」

知ってるんだよ、お前が俺の事をまだ偽物と思ってる事は。

彼女は少し顔を歪ませ、すぐに元の表情に戻した。

「そうよ。貴方じゃない。貴方は本物じゃない」

「何度言おうと、もう俺は天星イブキだ。“アイツ”じゃない」

「いいえ。いつか必ず本物にしてあげるわ」

彼女は手を数回振った。すると組員が一斉に立ち上がり、そろそろと観客席から出て行った。ただ一人を除いて。

「……」

「……」

そいつは俺の横に立ち、じっと俺を睨んでいた。

「……“黄泉”、今日は駄目よ」

黄泉と呼ばれた黒髪の長い女は俺を睨むと、観客席から立ち去った。

「ごめんなさい、気を悪くしたかしら？」

「いや、寧ろ納得したよ。さっきからずっと俺に当ててくる殺氣の原因が」

「そうよね。何せ、黄泉の“恋人”を殺したものね」

「まさか女同士でデキてるなんて思わないだろ」

「そう？ 案外珍しい事じゃないのよ、今の御時世」

彼女は口を隠して軽く笑った。そう言っているが、彼女は至ってノーマルだ。

「あ、そうだ。ねえ、あの『打鉄』に乗っている娘、何で『天星流』を使ってるの？」

彼女は箒を指さし尋ねてきた。

「俺の弟子だからに決まってるだろう」

「へえ、あの出来損ないよりも優秀じゃない。まあそれでも出来損ないだけだ」

「……」

「あ、ごめんなさい。貴方の宝物だったわね」

彼女は詫びるようすも見せず、ただ言葉にした。

「それと……あの男」

今度は織斑を指した。

「あの子、いい“鬼”になりそうね」

「ッ！？ シオン！」

俺はシオンに掴みかかった。

やらさんぞ、これ以上犠牲者を出してたまるか！

「落ち着きなさい。私はなりそうねと言っただけよ。別にする気は無いわ。今は」

「……くっ！」

俺は手を離し、シオンを睨んだ。

「はぁ……にしてもつまらな試合ね。……ねえ知ってる？ 『シュアルツェア・レーゲン』に搭載されているシステム」

「何……？」

それはラウラの機体……それを何故シオンが……。いや、『ノアの箱舟』なら当然か。

「アレにはね、『VTシステム』が組み込まれてるのよ」

「な、何だと!？」

VTシステム……ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステム。だがそれは危険が伴い、全世界で開発が禁止されている。

それが何故ラウラの機体に!？」

「アレが発動したら、面白くなると思わない?」

そう言うとシオンは空中にモニターを出し、何かの操作を始めた。

「や、やめ
！」

「動くな」

「っ……！」

俺の首元にナイフが当てられていた。
立ち去った筈の黄泉が俺の隣に居た。

「大丈夫よ、貴方の大事な生徒が何とかしてくれるわよ」

そしてシオンは操作を終えた。
俺はラウラを見た。一見、ラウラの様子は変わっていなかったが、
どこか動きが遅くなっていた。

「何をした……」

「あの娘のAICを発動出来なくしたのよ。ついでに機動力も落と

して防御力も落としたわ。これであの娘が織斑一夏に負けたら、V
Tシステムは発動するわ」

「くそっ……！」

マズイ……これではラウラが……。……いや、何を焦っているんだ
俺は。あそこには筈が、織斑がいる。何よりラウラが、俺の義妹が
この程度で死ぬはずがない。信じるんだ。信じて待つんだ。

イブキSIDE OUT

ラウラSIDE

何だこの男！？ 先程から旋回ばかりしては私に近付きまた離れて
旋回の繰り返しばかりではないか！ こんな臆病な男に教官は顔に
泥を塗られたのか！

「ふざけるな……！ 貴様の様な奴が存在していい筈がない！」

「ッ！」

私は織斑の移動先に移動し、プラズマ手刀を展開した。

「はあああああつ！」

それを勢いよく振り、織斑を斬り付けた。

「それを待っていたぜ！」

「何！？」

捉えた筈の織斑が私の横を通り過ぎた。そしてすれ違う際に私の胸に『零落白夜』が叩き込まれた。

「な　　に　　？」

「お前は俺が逃げてばかりだから相当イラついただろ？　だから咄
嗟の判断を誤る！」

「はか……な……。私が、この男の策に翻弄された？　しかも極簡単
な愚策に？」

「舐めるなああああ！！」

私はレールカノンを放ち、織斑の目の前に着弾させた。
幸い、まだエネルギーは残っていた。

「うおっ！？」

「ああああああつー！！」

動きが止まった瞬間にワイヤーブレードで拘束。プラズマ手刀で斬

りかかった。

「ぐあっ！」

「あはっ……はははっ……ははははははっ！」

やれる！ やれるぞ！ 勝てる！ 倒せる！ 斬り刻める！

私は目の前の動けない織斑を斬り刻み続けた。

シールドエネルギーをどんどん削り取っていき、憎き男を敗北のどん底に突き落としていった。

「こ　　のおっ！」

「なにっ！？」

突如、ワイヤーがブチ切れた。そして織斑は上空に逃れていった。

馬鹿な！ 何故その機体にそれ程までのパワーがあると言うのか！
？ いや、今のは違う……まさか、瞬間加速！？ 瞬間加速で生じ

る推進力でワイヤーを引き千切ったつというのか!?

「よっしゃっ！ 上手くやったぜ！」

「このっ……！」

「次はこっちからだ！」

織斑は地上に降下し、地面擦れ擦れで私に突っ込んできた。

馬鹿め！ そんな単調な動きでやられるか！

「でりゃっ……！」

「っ!？」

織斑は刀を地面に刺すと勢い良く振り上げ、土煙を起こした。

目潰しのつもりか？ ハッ！ ISにはハイパーセンサーがある！

その程度どうって事無いわ！

私はセンサーで織斑の位置を捜した。

……後か！

私は後ろを振り向き、そして何かが飛来してくるのが視界に入った。私は反射的に腕で弾いた。が、弾いた刀はすぐにキャッチされた。

「勝負ありだな」

「　　っ！？」

キャッチした織斑は『零落白夜』を発動し、斬りかかる体勢に入った。

負けるのか？　私が？　嫌だ！　こんな下衆に負けたくない！

私はA I Cを発動しようとした。だが発動出来なかった。

何故！？　何故発動しない！？　負けると言うのか？　この私が！
こんな男に！　嫌だ！！

私はもう出来損ないではない。戦う兵器として人工子宮で作られ、最高の兵器となった。だがISが登場し、私の左目に疑似ハイパー

センサー、『越界の瞳』を埋め込まれてから一気に出来損ないへと落とされた。

だが教官と出会い、兄上と出会い私は変わった。私はまた最強の座に着く事が出来た。

私は二人に憧れた、焦がれた。あの二人の強さに、凛々しさに、堂々とした様に。

だがこれは何だ？ 憧れた教官の凛々しさを、堂々とした様を壊す織斑一夏に負けている？ ふざけるな！ 私は負けられない！ コイツを完膚無きまでに潰しその存在を消さなければならない！ その為には、力が欲しい！

ドクン……

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

私の中で何かが囁く。

力？ そんなこと言うまでも無い！ 寄こせ！ 織斑一夏を潰せる最強の力を！ 私に寄こせ！

「あああああつ……！！」

その瞬間、私は私で無くなった。

救いの手（前書き）

更新です。少し強引かな？

救いの手

「あああああっ！！！！」

「「ッ！？」」

シャルルと戦っていると、ラウラの絶叫が聞こえてきた。私とシャルルは戦いを止め、ラウラと一夏の方をみた。

「な、なんだ……あれは……」

一夏の目の前には電撃を放電しているラウラがいた。いや、アレはラウラなのかと疑った。ラウラのISから電撃が放たれ、すぐさまISが黒い泥の様なものになり何かの形を形成していった。ラウラを呑みこんで。

「……シャルル」

「うん。一旦止めだね」

私達は一夏の元に近寄った。刹那、一夏はアレに斬られた。

「一夏！」

一夏は辛うじて緊急回避を行い直撃は免れたが、白式のエネルギーが底をつき光となって消えた。

しかし一夏は無謀にも生身のままアレに突っ込もうとした。

「馬鹿者！ 死ぬ気か！？」

私は寸前で一夏の腕を掴みそれを阻止した。

「離せ！ あいつ、ふざけやがって！ ぶっ飛ばしてやる！」

「何を馬鹿な事を言っている！ 生身で敵う訳無かるう！」

「うるせえ！ 邪魔をするならお前も」

「いい加減にしろ！！」

私は一夏の顔を殴った。殴らなければ頭に血が上ったままで何を仕出かすか分からない。

「落ち着け！ 何でそんなに怒ってるんだ！？」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のも

のだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそ！」

「何……？」

私は改めてソレを見た。そしてソレが持っている武器を見た。

『雪片』……？

ソレが握っている武器は『雪片』にそっくりだった。

「それに、こんな訳分かんねえ力に振り回されてるラウラも気に入らねえ。どっちもブン殴んねえと気が済まねえ」

「だからと言ってどうする。お前にはISのエネルギーは無い。それに、先程から教師部隊が鎮圧すると放送されているだろう。お前がしなくても……」

「違う。俺が『やらなきゃいけない』んじゃない。俺が『やりたいからやる』んだ。それに、ここで引いたら俺じゃない、織斑一夏じゃなくなる」

「……」

私は呆れた。そして同時に感嘆した。

一夏は昔から変わっていない。黒耶さんと約束してから一夏は真っ直ぐな正義感と強い意志を持ち始めた。それが今でも続いている。

幼馴染として嬉しい事だった。

「だが、どうするつもりだ。エネルギーは無いのだぞ？ 私の『打鉄』ももうあまり残っていない」

「無ければ他から持ってくれば良いんだよ」

「シャルル……」

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイブならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か！？ だったら頼む！ 早速やってくれ！」

「けど！」

シャルルは指を立てて一夏に条件をだした。しかも有無を言わさない強さで。

「絶対勝つてよ。もし負けたら……明日から一夏は女子の制服で通ってね」

一夏の女装……いかにいかに、気持ち悪いヴィジョンが浮んでしまった。

「うつ……！　い、良いぜ！　約束してやる！」

するのか！？　してしまうのか！？　もし失敗したら本当に女装するのか！？

シャルルはその答えを聞いて笑顔になり、白式にエネルギーを渡した。

「右腕と武器だけで限界だね」

「充分さ」

一夏は『零落白夜』を展開してソイツと対峙した。

「箒は手を貸さないの？」

シャルルが私に聞いてきた。私は『打鉄』を解除してシャルルの隣に立った。

「ああ。アイツは一人で決着を着けたいようだからな」

「……信じてるんだね」

「勿論。何せアイツは一緒に約束した幼馴染だからな」

「それって……恋人？」

「無い。それは無い。アレはただ少し特別な幼馴染だ。恋愛感情は全くもって無い」

確かに一夏の天然スキルには何度もやられそうになった事はあるが、それ以前に私は黒耶さんに……。っ！ いかんいかん、こんな時にニヤけては駄目だ。

私は一夏を見た。一夏は『雪片』を構え、ソレの前に立った。ソレは刀を振り下ろし、一夏を襲った。しかし一夏は自分の刀で横に一閃、ソレの刀を横に弾く。そして頭上に構え、開いたソレの胴体を切り裂いた。

『一閃二断の構え』。嘗て千冬さんから学んだ真剣の技。一足目に閃き、二手目に断つ。

斬られたソレは真つ二つに割れ、中からラウラが出てきた。一夏はラウラを受け止め何かを呟いた。

これで終わった。そう、この大事件は幕を閉じた。

第SIDE OUT

イブキSIDE

「あゝあ、呆気なく終わっちゃったわね」

シオンは落胆し、肩を落とした。

俺達は観客が避難し、誰も居なくなった席でずっと戦いを見ていた。俺の首にはまだ黄泉のナイフが付き付けられていた。

「少しは面白くなるかなと思ったけど、逆に面白くなかったわね。アレも所詮、出来損ないか」

「ッ
！」

俺は今の言葉にキレた。

ナイフを左手で握りつぶし、黄泉を右腕で殴りとばした。そして刀の『鬼龍』を展開しシオンに突き付けた。

「俺がずっと黙ってると思うなよ。あの時の俺とは少し違うぞ」

「……そのようね。でも、斬らないんでしょ？」

「……」

「いいえ違う。斬らないんじゃないって、『斬れない』んでしょ？
まだ私を『愛してるから』」

「…………ッ！」

くそっ…………あの時に断ち切った筈なのに！

「『断ち切った筈だ』、そう思ってるんでしょ？でも残念、貴方は断ち切れないわ。だって貴方は」

「エレナ！！！」

俺の声で剣戟が上から飛来してきた。それらは真っ直ぐシオンと黄泉に目掛けて襲った。

しかし二人はその場から飛び退き、当たらない場所に出た。

「…………『無限の魔女』か」

黄泉が憎たらしく呟いた。

「ん？何処かで見た事ある様な奴だと思ったら、百合女じゃないか」

エレナは俺の隣に現れ、シオンと黄泉の周りに剣戟を待機させた。

「久しぶりね、エレナ」

「ああ。ストーカー常習犯色仕掛け魔とまた会うとはな」

「ストーカー？ 失礼ね、奪ったのは貴女達でしょ？ この淫乱魔女」

「残念ながら、まだ抱かれたことがないんだよ」

エレナとシオンは女に有るまじき言い争いを始めた。

「そこまでだ。ここに男がいるんだぞ」

「「うるさい！」」

「っ……」

何でこんな時だけ気が合ってるんだよ。

「シオン様……」

「……時間なのね」

黄泉がシオンに時間が来たと告げ、ナイフをしまった。

「今日は楽しかったわ。また会いましょうね」

「ここでお前等を殺せば、会う事は無くなるんだがな？」

エレナは更に剣戟の数を増やし、シオンと黄泉に近付けた。

「出来ないでしょ？」

「……」

「それじゃあね。今度は私の『修羅』と貴方の『天照』もね」

そう言つてシオンと黄泉はアリーナから出て行つた。

ここでシオンを倒せる程、俺達は強くない。良くて周りの被害が酷くなり、悪くて相討ちだ。それ程、シオンは強い。

「……すまない、助かつ」

「っ……！」

エレナに礼を言おうと向いたら、エレナが抱き付いてきた。

「エレナ……？」

「馬鹿者……一人で無茶をするな。また私を悲しませる気か」

エレナは泣いていた。

俺が『鬼龍』を向けた時、シオンは顔色一つ変えなかった。それは俺が何も出来ないのと、簡単に振り返り討ちに出来たからだ。

「……すまない、エレナ。また俺は頭に血が上っていた」

「謝るな。謝るなら私を抱きしめろ。お前を感じさせる。私を感じる」

「……ああ」

俺達は暫くの間抱き合った。

イブキSIDE OUT

ラウラSIDE

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会う事があれば、心は強く持て。あれは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると惚れてしまうぞ?」

これを聞いたのは昔の事だ。教官の強さの秘訣は弟だと知り、私は嫉妬したのだろう。そして教官が見せる優しい笑顔にも。

「教官も惚れているのですか?」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者め。それに私には……」

「……?」

その時教官は言いだそうとしていた言葉を呑みこみ、少しだけ顔を紅くしていた。

今なら分かる。あれは兄上の事を言い出そうとしていたんだと。

私と兄上が出会ったのはそれから少し経った頃だった。

私は教官と訓練をしていた。その時に我々の基地に侵入者が現れた。その侵入者はあまりにも強く、我々の手には負えなかった。そして、その侵入者が一番最初に発した言葉が……。

「スマン、篠ノ之束から織斑千冬にバレンタインを届けに来ただけだ。敵意は無い」

我々の精鋭を打破しておきながら、そんなふざけた事を言ったのが、兄上だった。その後、兄上は教官に説教をされ、お詫びにと教導をしてくれた。あの伝説の鬼神が教導官になってくれるのは喜ばしい事だった。が、同時に不服だった。教官と親しく、強さも教官以上最初の私と兄上の関係はお世辞にも良いとは言えなかった。だが、ある日兄上は言ったのだ。

「ボーデヴィツヒ、お前は兵器か？」

「……そうであります。ただその為だけに作られ、生み出されました」

「失格」

「は……？」

「兵器が心など持つものか。お前はお前自身が持っている心で千冬を尊敬し敬意を払っている」

「だからどうしたというのですか？ たったそれだけで私のこれまで生きてきた過去を潰す気ですか？」

「そうだな。潰そう、完全に」

「なに……！？」

「ラウラ！ お前は今日から俺の義妹になれ！ 俺がお前に、お前

「が心ある人間の少女だと教えてやる」

それからだ、兄上が私にしつこく付き纏ったのは。何度言っても、「義妹を心配しない義兄はいない」とだけ返し、私に話しかけてきた。内容はもう忘れてしまった。だがこれだけはつきりと覚えていいる。兄上は私に世界を教えてくれた。だから私は付き纏われる側から付き纏う側になった。

それと兄上にも強さについて聞いた。

「強さね……。俺の強さは心だな」

「心……？」

「ああ。俺は俺自身の心があるから強くなれた。だからラウラ、お前も自分の心を見つけれ。さすれば自ずと答えが見えてくる」

強さとはなんなのか……。その時の私には分からなかった。だが、織斑一夏と出会って、戦って、やっと分かった。無数の答えの一つに出会った。いや、もしかしたらもう兄上の時に出会っていたのかもしれないが。

『強さつつーのは、心の在処。己の拠り所。自分が自分がどうありたいかを常に思う事じゃないかと、俺は思う』

……そう、なのか？

『そうだよ。俺も兄さんから学んだんだけどな。自分がどうしたいかもわかんねー奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか、どうして向かうか、さ』

……どうして向かうか……。

『つまり、やりたい事はやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぜ?』

……やりたい事……。

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

では、お前は……? お前は何故強くあるとする? どうして強い?

『強くなえよ。俺は、まったく、強くない』

強くない?

『けど、もし俺が強いつて言っんなら、それは』

それは……?

『強くなりたいたから、強いしさ』

。

『それに、強くなって果たしたい約束があるんだよ』

約束……？

『自分の力で、全てを守る。誰も泣かないように、自分の力で皆を守る』

それは……夢物語だな。

『そうだな。でも、やってみせる。だからお前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ』

言われて私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやる』

そう言われて、私は ああ、そうか。これが……そうなのか。
兄上とはまた別の感情……。

ときめいて、しまったのだ。

こいつの前では、私はただの十五歳の『少女』なのだと、ただの『女』なのだと。

織斑一夏。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

ラウラSIDE OUT

イブキSIDE

月曜日。俺はラウラが何事も無く元気になった事に喜びを感じ、そして、とある事に怒りを感じていた。

VTシステムの事も頭に来ている。だから束に頼んでソレを研究している研究所を破壊してもらった。勿論、死者は無し。

だからそれに関してはもういい。

そして、あれ程デュノアには性別を隠しておけと言っておいたのに、今日からシャルロット・デュノア、女子として通いますと言われたが別にどうでも良い。

だが、今の俺はラウラの義兄としてやらねばならん事がある。それを実行しに、今、一年一組の教室の前にいる。

そして、何故か開かれている扉を覗きこみ、衝撃的な場面を目撃した。

「「ちゅー！」

「……」

織斑とラウラがキスをしている場面だった。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

な……なん……だと……？ ラウラ……本気なのか……？

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前は私の嫁にする」

誰だ……？ そんなデタラメを教えた奴は……クラリッサか、クラリッサなんだな、クラリッサだな！ 後で……絞める。
だが今は……こいつだ、織斑一夏。

俺は右手に刀の『鬼龍』を、左手に剣の『邪天』を展開し、凰、オルコットの衝撃砲とビームから逃れてこちらに來た織斑一夏に突き立てた。

「ひいつ！？」

「織斑……覚悟は出来たな」

「確定！？　　ってか何でここに！？」

「なに、昨日ラウラを口説いた事を説教しに来たのだが……まさかもう口まで出したとはな」

「だ、出してません出してません！！　　ってか何故相互意識干渉クロッシング・アクセスの事を！？」

「ほほう……俺は口説いたとしか言っていないのに、何故それと思っただ？」

「……」

「デユノア、織斑を押さえてくれ」

「はははっ、そんな事シャルロットがするワケ……了解です、先生！……わおう、良い笑顔……」

デユノアはISを纏い、織斑を羽交い絞めにした。

「わわわわっ！？　　待って！　　待って下さい！　　死んじゃ　　」

「死ね」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああっ！

「!!!」

その後三日間は、織斑は保健室のベッドの上で過ごした。

義妹の力（前書き）

テイルズオブエクシリアを買った作者です。

特典はスタンのミラでした。ミラ最高！

義妹の力

これは、織斑一夏が鬼神と一夏ーズに沈められた三日間の話である。

「であるから、この式の解は $3X$ となる」

「ここに」

「「「……」」」

「理解出来たのなら、問題集の二十四頁から二十六頁まで、残りの時間を使ってやれ」

「ここに」

「「「……」」」

「……ゴホンッ！ やらないのなら問題集全てを宿題に出すぞ」

「『さあ、頑張ろー！』」

まったく……。

現在、俺は数学の授業をやっている。そして先程から『にっこにっこ』としているのは、俺の義妹であり弟子の伊司須紗奈である。

実は、紗奈は千冬が言った通りこの学園に泊まったのだ。……俺の部屋じゃないぞ、千冬の部屋だ。で、折角だから俺が授業をしているところを見たいと言ってきて、特別参加させている。

だって仕方ないだろ。紗奈が俺に我儘を言ってくれるのはこの八年で二回目なんだから。

それで、紗奈はこの三日間、何故か三日間、ここの生徒として一組に所属する事になった。そして、紗奈は美人だ。それも老若男女を振り向かす程の美人だ。しかも俺の義妹、俺の弟子、千冬の妹分と聞かされれば、嫌でも注目される。だから他の生徒は授業を聞かず、紗奈の方に意識が向いてしまっているのだ。

「はぁ……先が思い遣られる」

「先生！ 出来ました！」

「……」

ついでに言うと、紗奈は稀に見る天才だ。俺や東程ではないが天才だ。

だからこの程度の問題など一分もあれば終わるのだ。

「先生！ 私終わりました！」

「はいはい、終わったのは分かったから静かに予習復習でもしてなさい。いくら初めての高校だったとしてもいくら俺の授業だとしてもいくら楽しくて浮かれているとしても！ もっと！ 学生！ らしく！ 出来ん！ の！ か！？」

「出来ません！」

「即答！？」

紗奈はキラキラ輝く笑顔で俺を精神的に疲れさす。

紗奈はある都合により学校という所に通った事がない。今までは俺が義母さん、紗奈を引き取ってくれた人が教えていた。故に、紗奈は学校で学ぶ事が余程嬉しいのだ。

「あのな、嬉しいのは分かる。だがあまりはしゃぎ過ぎると周りの迷惑になる。お前は十八なんだから、もっと大人しくしなさい」

「……分かりました」

「ん。なら静かに予習復習でもしている」

「はい、先生」

紗奈は何時もの落ち着きを取り戻し、ノートと教科書を開いて静かにペンを走らせた。

はあ……やっぱり学校に行きたかったんだよね……。あの時の俺にもっと力があれば……。

今更後悔しても遅い。その後悔を得て、これからを守っていけばいい。

その後、昼休みまで紗奈は箒達と仲良くしていた。

「はふう〜……学校ってこんなにも楽しい所だったんですね」

昼休み、俺達は保健室で昼食を取っていた。ここにいるのは箒、オ
ルコット、凰、デュノア、ラウラ、紗奈、エレナ、俺、そして織斑
馬鹿夏。

「あれ？　なんか俺の名前がおかしい様な……」

「気のせいさ。そら、この餃子を食べたまえ」

「天星さん、それ雑巾でゴミを包んだ……」

「食え」

「フゴッ!？」

まったく、これだからボンボンは。貧しい人間は靴を食べる奴もいるんだぞ。

「紗奈姉さん、本当に学校に行った事が無かったんですね」

「うん、そうなんだ。私、ちょっと特別な事情があつて皆とは一緒にいられなかったの」

紗奈姉さんと呼んだのは筈だ。紗奈が妹弟子ならお姉さんと呼びなさいと言いだし、筈はそれに何の抵抗を見せる事無く紗奈姉さんと呼んだ。

……束に何言われるか分かったもんじゃないな。

「特別な理由って……?」

「織斑、このピーマンの肉詰めを食え」

「それスリッパハアツ!？」

この、KYめ。普通そんな事を聞くもんじゃないだろうが。

「姉上、では誰に勉学を教えてもらったのですか？」

「イブキさんにライトさんに千冬さんに束さんにエレナさん、それから義母さんだよ」

姉上と呼んだのはラウラ。紗奈が俺の義理の妹であると知り、ならば私は妹ですと言い張り、姉上とこれまた血が繋がったように表記して呼び出した。紗奈はそれに満足しているから別に良い。

「紗奈は偉いぞ。教科書を一度読んだだけで、一字一句暗記してしまうからな。教えたのはほんのちよつとだけだ」

「エレナさん、そんな……」

「んふふ、照れるでない。しかし、相変わらず可愛い奴よ」

「もう、おじさん臭いですよ？」

「何を言う。これはスキンシップと言うものだ」

だからと言って胸掴むな。触るならまだしも掴むな。……こら織斑、ガン見すんな。

「でも、何で紗奈さん、天星先生の事、お兄ちゃんじゃなくて、イブキさんって呼ぶの？」

デュノアが不思議そうに聞いた。

「ええっと……乙女の、秘密？」

「何故疑問形？」

そこは気にしてやらんでくれ。紗奈なりの考えがあるんだ。ま、俺は別にお兄ちゃんでも良いんだがな。

「紗奈さんって、強いの？」

凰が目を光らせて紗奈に聞いた。

「さ、さあ……？ 自分では何とも……」

「ふん……」

そこで凰は俺を見た。

「……そうだな、IS学園では一番じゃないか？」

「え、マジですか？」

生徒会長は、IS学園では最強の実力者なる存在。つまり、ISの達人と言っても過言ではない。

因みに、俺が一番と言ったのは、同率でだ。

「そ、そんなこと無いですよ。それに私は近接戦闘しか出来ないですし、体力も平均より上ぐらいですし」

「なら紗奈姉さん、今日の放課後に手合わせ願えますか？」

「ふえ？」

「姉弟子の実力を見たいのです」

「えーっと……」

紗奈は俺を見てきた。

……仕方がないな。

「やってやれ。俺がISを貸してやるから」

「ええっ！？ 『天照』をですか！？」

「デュノア、静かに。貸すのは『打鉄』だ」

「あ、そ、そうですね。ははは……」

もつとも、ただの『打鉄』ではないけどな。

「おい……」

「ん？」

エレナが俺を引き寄せてきた。そして小声で聞いてきた。

「いいのか？ 紗奈はまだ……」

「大丈夫だ。そこまではないようにするさ」

「ならいいが……。それと『打鉄』は……」

「大丈夫だろ。ばれやしないって」

「むう……」

エレナは心配そうに見てきた。

……やべ、いつものふざけた態度じゃないから可愛い……。

「大丈夫だって。心配無用だ」

と、エレナの額を突いた。エレナはうつと軽く呻き、俺を睨んできた。

……何でだろう、今日はエレナが可愛く見える。土曜の影響か？

「あの～天星さん？俺の目の前でイチャつかないでくれませんか？」

「……………」

織斑……貴様はどこまでKYなんだ。

「織斑」

「へ？あ、あの…レンヴァルス先生？何故大量のメスが宙に浮いてるんですか？それも切っ先が俺に向いてるんですけど……」

「これよりオペを開始する」

「オペ！？」

「その脳みそに巣くうKYスキルを摘出してやる！」

「いやあああああああああ!」

哀れ織斑。そのまま闇に眠れ。

「さ、こっちはさっさと飯を食おう。時間が無くなる」

「「「「「はい」「」「」」」」

放課後、織斑を抜いたメンバーがアリーナに来ていた。

「何も千冬まで来なくても良いだろ」

「紗奈は私にとっても妹分だ。見に来て何が悪い」

「……本音は？」

「これ以上エレナに遅れを取ってたまるか」(ボソッ)

「スマン、聞こえなかった」

「何でも無い。行くぞ」

千冬はすたこらとアリーナへ入っていった。

…… ったく、そんなに急がんでも良いだろう。

俺もアリーナに入っていた。

アリーナに入ると、俺は更衣室に向かった。

言うておくが、決して紗奈達の着替えを覗くつもりで向かったのではない。だから主人公の様な展開は無いぞ。

俺は更衣室の前で紗奈が出て来るのを待った。

『あら、紗奈さん。胸、結構大きいんですね』

『そう？　あまり気にした事ないから……』

『一体何食ったらそうなるんですか？』

『確かに、それは私も気になります。姉上、教えて下さい』

『うん、それは僕も気になるかな。大きい上に形も良いし、肌触りも良い』

『ひゃん！？　い、いきなり触らないでください』

…… おい、おいおい、おいおいおい。中で何やつとるんだあいづらは。何？　女同士のエロスだ？　そんなもん黄泉だけで十分だ。

……いや待てよ？ そうならば紗奈もいずれは男を見つけて……いやいやまさか。紗奈にそれはまだ早いだろう。外は大人でもまだ中は子供だ。……いやいや、そうやって子供扱いするのま良くないな。もうすぐ成人だし、紅さん…紗奈の義母さんな、も自立させるだろうし、そうなれば社会に出て男と知り合うことも……。駄目だ、紗奈が純粹なのを良い事につけ上げる下衆共が沸き上がる筈だ。そんな事はこの俺、『鬼神・天星イブキ』が許さん。

『そ、それなら箒ちゃんだって大きくて綺麗じゃない』

『さ、紗奈姉さん！？』

『確かに……ちよつと箒、アンター一体何してんのよ？』

『正直に話さない？ その方が賢明ですわよ？』

『さもなくば、撃つ』

『教えてくれるよね？ 箒？』

む？ 次は箒か？ 箒はアレでいてしつかりしている。家事能力もあり、武もある。人を見る目もあるだろう。ハッ！ しかし箒にはどことなく心配な部分があるぞ。箒は一度優しくされたら懐柔しやすくなってしまう。例えば、箒が落ち込んでいる時に優しく励まし、慰めたりしてみる？ その瞬間、箒は犬の如く懐いてしまうではないか！ いかん、これでは社会に出た時に悪い男に引っ掛かりそうだ……。

『わ、私は何もしていない!』

『嘘おっしやい! 何もせずにそんな胸が出来ますか!』

『胸が小さい女への嫌みか? アア!?!』

『貴様、良い度胸しているではないか』

『あゝ……僕はまだある方だね』

『『『あ”あ”っ!?!』』』

『あ、もしかして……恋してる?』

『ぶふうっ!? さ、紗奈!? 何を言い出すんだ!?!』

『へ?』

『恋していると、その人に振り向いて貰おうと努力して、自然に綺麗になっっていくものなのよ』

『ホントなの? 篝』

『ま、まさか一夏さんではありませんよね!?!』

『それは無い』

哀れ、一夏。お前は呆気なくフラれた。気がある無しに、な。

『そうか。ま、あいつは私の嫁だ。その事は変わらない』

『へえ、本人の承諾も無しに嫁ね。それは横暴つてもんよ。法律が認めないわ』

『それに嫁ですって？ おほほ！ 男性の場合は“婿”と言いますのよ。知性に欠けてますわね』

『それに、最初に敵視していた相手に恋心なんて向けると思う？
いくら優しい一夏でも、そんなことはしないと思うな』

『……ねえ、箒ちゃん。一夏君つてモテモテなの？』

『はい……昔から天然タラシで……』

『そう……。お兄ちゃんと同じか……』

俺と同じ……？ 止してくれ。俺は学生時代は他人に興味を持たない、周りを冷たくあしらっていたんだぞ？ まあ東と千冬とエレナと義母さんは例外だが。そんな俺が天然タラシ？ 冗談は程々にしてくれ。

『……紗奈姉さんは、恋をしているのですか？』

『恋？ うん……たぶん、してる……と思う』

なっ……！？ そう、なのか……！？ くそ、誰だ！？ 紗奈を惚
れさせた男は！？ この俺が直々に見定めてやる！

『それはどんな人ですか？』

『えーっと……まず優しい』

うむ。それは当然だ。

『それから厳しい』

時には厳しく、だな。

『それでいて心配性』

ほっ……まあ相手を気遣う気持ちは大事だ。

『でも世の中の厳しさをしえる為に、敢えて手を貸さない』

……中々、分かつてる奴じゃないか。

『それから、もの凄く強くて、遅しくて、カッコイイの』

……最後のはともかく、まえ二つは気になるな。この俺より強いのか？

『家事も出来て、その他にも何でも出来るの』

それは中々いない存在だぞ。世界に数人しかいないとされる超人、ガイ・スペシャル。通称ガイ様だ。

『でも歩いてるだけで老若男女を惹き付けるから、少し心配かな』

この……クソ野郎が。人を惹き付けるのは良い事だ。だが紗奈を泣かすような事であるのなら、地獄を見る事になる。

『でも、守ると誓った相手は絶対に裏切らない、裏切ってって言っても絶対に裏切ってくれない』

くっ……何て覚悟のある奴なんだ……！ そんな奴こそ男だ！

『だから、私もそんな人について行ける女性になりたいな、なんて……』

紗奈……お前って奴は……なんて健気な娘なんだ……。お前がいて、俺は嬉しい……。

『……その人って　　ですか？』

『ふえっ！？　何で分かったの！？』

『いえ、分かりますよ』

何？　箒が認知している人物だと？　つまり近くにいる？　織斑……は無い。あっても無い。無いと言ったら無いんだ。じゃあ誰だ……？

『……何をしている？』

「千冬、今は放って置いてくれ。俺は今、義兄として大切な」

「ならその体勢は何だ？」

「あん？」

俺の体勢？ 俺は今、両手を更衣室の扉に付き、耳を扉に当てている。端から見れば……まあ変態？

「……これが今流行りの考える人ポーズだ」

「そうか」

「……どこからISブレードを出して来たのか、凄く気になる。あとこの後の展開も」

「気にするな。それとこの後は、天星イブキの千切りだ」

「千冬、お前には料理スキルがつノオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「えーっと……大丈夫ですか、イブキさん」

「だ、大丈夫だ……問題無い」

や、やべえ……千冬の料理スキルは相変わらず健在だった。俺の身体が、危つくキャベツの様になるところだった。

「あ、あの……それで『打鉄』は……」

「ああ、それなら……」

俺は言葉が止まってしまった。何故なら俺は先程まで地面とキス状態だった。今思えば、俺のファーストキスの相手は地面だったかもしれない。そんなことはどうでも良い。俺はやつと立ち上がり、たった今、紗奈の方を向いたところだ。そして俺は目を奪われた。紗奈の、核弾頭並のスタイルを、ピッチピチのISスーツで、身を包んだ、姿を！ 長く美しい黒髪はうなじ辺りで一本にまとめ、黒いISスーツを着こなす姿を！

「誰だ！？ ISスーツのデザインをスク水にした奴は！？」

「え、えつと、神様？」

「神よ！ 俺は貴様を許さん！ 我が義妹にこんな……こんな……くそっ！」

大体何でスク水にニーソックスなんだよ！？ なにか他意が見えるぞ！

「ど、どうしたんですか？」

「……何でも無い。機体はこれだ」

俺は紗奈に待機状態の『打鉄』を渡した。

「これは悪魔でも……」

「訓練、ですよ。分かってます」

「無理はするなよ？」

「合点了解です！」

俺は紗奈と分かれ、観客席に移動した。
そこには千冬とエレナ、山田先生がいた。

「何故、山田先生が？」

「駄目ですか？」

「いえ、まさか。ですが、ここで行われることは他言無用ですよ。
アレに関わる事ですから」

「……はい、分かりました」

アレとはつまり、昔の戦争の事だ。紗奈が使用するISはそれに関
わる代物だから。

何故、そんな代物を使わすのかは、それはそうじゃないといけない
理由があるからだ。

「さて、始まるぞ」

アリーナに箒達と紗奈が現れた。

イブキSIDE OUT

紗奈SIDE

「よし！ それじゃあ始めようか！」

「……って、ちょっと待って下さい。紗奈姉さん、ISは？」

「ん？ 用意してるよ？ 見せてないだけで」

これは見せる訳にはいかなからね。イブキさんに関わる事だから。

「用意してるって……もしかして専用機ですか？」

「私のじゃないけどね。待機状態にして、スーツの中に入れてるよ」

「私のじゃないって……そんなことあるの？」

「まあまあ、鈴ちゃん。乙女の秘密ってことで」

「それで全部通せると思ってたません？」

あははは……ばれちゃった。でも教える訳にはいかないんだよね。

「知りたいなら私を倒してみなさい。勝ったら全部教えてあげるよ」

「姉上、言いましたね？」

「仮にも代表候補生の集まりですよ？」

「生意気言ってくれますね……酢豚にしてあげますよ」

「貴女を倒して私も義妹になります！」

「姉弟子の実力、この身で確かめる！」

あ、あれ？ 何か後半からどんどん可笑しくなっていってない？
それにシャルロットちゃん、ハイライト無いよ？

皆は各自のISを起動し、その身に纏った。箒ちゃんは訓練機だから最初から。

それじゃあ、私も起動しますか！

私もISを起動し、身体に纏わせた。

「……『打鉄』……ですの？　しかし……」

「……赤黒い、な」

「ってか、何かに似てない？」

「もしかして……『天照』？」

「似ているが……違うようだ」

そう、私に纏っているISは『打鉄』。だけぢただの『打鉄』じゃない。色は全身が赤黒く、まるで『天照』の兄弟のように似ている。

「さあ、かかってらっしゃい」

黒い刀を右手に展開し、目線まで上げて切っ先を相手に向けた。

「いきますわ！」

セシリアちゃんのISからビームが放たれた。私はそれを身体を軽く捻ることで避け、その場から滑るように移動した。

「速い!?!」

「ならば私のAICで!」

ラウラちゃんが目の前に飛び出してきた。右手を出してきた。しかし、完全に突き出すより早く、私はラウラちゃんに接近し、その手を刀で弾いた。

「なにっ!?!」

「一本……!」

がら空きになった胴体の下から上に斬り付けた。

「くっ!」

「ラウラ!」

「……!」

シャルロットちゃんがライフルを放ち、私とラウラちゃんを離れさせ。すると後ろから鈴ちゃんが青龍刀で斬りつけてきた。

「もらったぁー！」

「残念」

刀を後ろに回し、背中越しに青龍刀を受け止める。

「ウソッ!？」

「ハッ！」

私は空中バク転の要領で鈴ちゃんを蹴り、怯んだ所に一太刀浴びせた。

「ブルー・ティアーズ！」

セシリアちゃんから四つのピッドが飛んできた。

「はぁあっ！」

更に横から箒ちゃんが斬りかかってきた。

「まだまだ」

私は箒ちゃんの横をくると回転しながら避け、その時に箒ちゃんを後ろから押した。

「おっと」

「くっ！」

後ろから放たれたビームを避け、更にピッドから放たれるビームを滑るようにして避ける！

「ああ、もうっ！ 何で避けられますの！？」

「相手は近接用だよ！ 囲んで一斉射撃！」

シャルロットちゃんの指示で私を取り囲み、各自の遠距離用の武器を構えた。

箒ちゃんはただ静かに離れて私を見ていた。

……クスッ、箒ちゃんは分かっているみたいね。

「今よ！」

鈴ちゃんは衝撃砲を、セシリアちゃんはライフルとピッドのビームを、ラウラちゃんはレールカノンを、シャルロットちゃんはアサルトライフルとショットガンを同時に撃ってきた。

「『天星流九ノ型・斬陣』……」

私はその場で高速回転し、飛んでくる全ての弾を斬り落とし始めた。天星流は刀一本で全ての戦いに通じる刀術、この程度の事はどうって事無い。

「……やはり、全て防いだか。だが、防ぐばかりでは……」

箒ちゃんの言う通り、このまま斬り落とし続けても、勝負は一向に動かない。けど……。

私は握っている柄を捻った。するとエンジン音が刀から聞こえてきた。

「『EX^{イク}シード・LV1』」

刀身が黒くなり振動が起こった。更にギアを捻った。

「『EXシード・LV2』」

今度は刀身に赤黒いエネルギーが纏いだし、それを……。

「ハアアアッ！」

周囲に放った。放たれたエネルギーは赤黒い障壁となり、三人の攻撃を弾きながら三人に迫った。

「そんなっ！？」

「ウソでしょ！？」

「くっ！？」

「逃がさない」

「くっッ！？」

私は三人が後退した隙にその場から駆け抜け、ギアを更に捻った。

「『EXシード・LV3』」

エネルギーが刀身に激しい渦を巻きながら全身に纏った。

「『瞬間加速』……」

狙いはセシリアちゃん。

「えっ……?」

「終わり」

セシリアちゃんの背後に回り込み、刀を縦に振り降ろした。

「『鬼龍閃』」

それはセシリアちゃんのシールドエネルギーを全て削り落とした。

「ウソ……!」

「次……」

狙いは鈴ちゃん。

「そう簡単に！」

「はい、終わり」

「へっ？」

同じく後に回り込み、鈴ちゃんを撃墜した。

「ウッソッソッ！？」

「次……」

「くっ！」

ラウラちゃん。けど、A I Cがあるから迂闊には近付けない、かな？

「『EXシード・L V M A X』」

全開にギアを回した。するとエネルギーが暴発しそうになり、刀が爆発しそうになった。

「じゃあ近付かなければ問題無いね」

「なに……?」

「こっちだよ」

「後!？」

私は瞬間加速でラウラちゃんから少し離れた後ろに回り込み、刀を上段から振り降ろした。

「『暴龍波』」

刀に纏わり付いたエネルギーを全て、ラウラちゃんに解放放った。

「でかい……!!」

ラウラちゃんは避けられず、波に飲まれて終わった。

「さつてと、次は箒ちゃんだよ?」

私は今まで傍観していた箒ちゃんに切っ先を向けた。

「……無茶苦茶でしょう」

「そう？ ただこの『打鉄』は、エネルギーが多くて一発の威力が桁違いなだけだよ」

「……それを何処で……」

「なっいいしょー！ それよりどうする？ 降参しちゃっ？」

「まさか……。全力でまいります」

「かかって来なさい」

そして、私と篤ちゃんはぶつかり合った。

紗奈SIDE OUT

イブキSIDE

「今回はこれまた派手にやったな」

「えへへ……楽しくて、つい」

日も暮れてきた頃、俺と紗奈は食堂で食事を取っていた。

気を利かしてくれたのか、皆は俺と紗奈だけにしてくれた。

「でもやっぱりあの『打鉄』は反則ですよ」

「仕方ないだろ、俺達では普通のISには適合しないんだし」

「そうですけど……」

「これが実力なんだと割り切れ」

「はーい……」

紗奈は少しだけしょんぼりとし、シチューを口にした。

そんなにフェアでやりたかったのか……。義兄として、何だか罪悪感を感じる……。

「だがその『打鉄』に箒は対等に渡り合っていたじゃないか」

「そうそう！ 箒ちゃん、やっぱり天才ですよ！ 私の動きに付いて来るんですから！」

そう、箒は紗奈の動きに付いて行き、ずっと打ち合っていた。紗奈

が右へ動けば箒も右へ動くように、決して離れず、己の間合いに納め、攻撃と防御を繰り返した。

しかし、EXシード・システムという刀の威力を劇的に上げるギアにより、箒は打ち負け、紗奈が勝利した。

「僅か数ヶ月であんなに『天星流』を扱うなんて、世界を捜してもいませんよ!」

「俺は二ヶ月で免許皆伝したが?」

「……このシチュー、美味しいですね!」

逃げたか……。ま、義母さんは一週間で皆伝したって聞いたがな。

「……紗奈」

「はい?」

「学校、楽しいか?」

「はい! それはもうもの凄く!」

「……そうか」

「……どうしたんですか?」

「いや、何も……。それより、このシチューは確かに美味しいな」

「はい！ 本当に美味しいです！」

「……………」

紗奈……………もし、もし全てが終わったら……………お前はちゃんと皆と一緒に生きて、楽しく暮らしていけるか？ そんな風に笑って暮らしてくれるか？ 紗奈……………もし俺が……………完全な鬼になっても、笑って過ごしてくれるか……………？

俺は紗奈の笑顔を眺めながら、今日この日を心に刻み込んだ。

鬼神の日常（前書き）

さてさて、もうすぐ臨海学校編ですね。その時に何かが動く！
か
もしれませんね……。

鬼神の日常

鬼神・天星イブキの朝は、午前五時からの鍛錬が始まる。先ずは敷地内を軽く二十周走り、体を解す。これだけで普通の人は体力の限界を超えるが、イブキは息一つ乱さず、一筋の汗が流れているだけだった。それから真剣の刀を持ち、『天星流』の型を一通りこなし、その場で立って瞑想をする。これをたったの一時間でやりこなす。イブキは天星ライトに育てられてから今まで、ずっとこれを繰り返し返して来たのだ。いや、昔は今になる為にもっと過酷な鍛錬を積んできた。

「ふう……戻るか」

天星イブキは昇る太陽を眺め、部屋へと戻って行った。

余談だが、この鍛錬には週五日、箒も一緒にやっている。

「イブキ、紗奈がない」

「だろうな。もう帰ったからな」

「何故だ？」

「紗奈はこの生徒じゃないからな」

「何故生徒ではない？」

「……何が言いたいんだ？」

「美女成分が足りない」

「千冬ので足りるだろう」

「訂正しよう。妹成分が足りない！」

朝の職員室で何叫んでんだよ……。ああ、そう言えばエレナは紗奈のことが好きだったな。所謂シスコンだ。まったく、エレナのキャラが未だにはつきりと分からねえ。

「だからそれを私とお前の合体で補おう！」

「ならそこらへんの馬とでも合体してこい」

「酷い！ 昔はあんなに私を虐めて楽しんでいたのに！」

「そのような事実は一切ない」

「ふむ……このキャラでは駄目か」

頭痛い……。エレナは何の研究をしてんだよ。それからお前は保険医だろ。保健室にいるよ。

「何時になったら私と無限合体してくれるんだ」

「さあな。今日か明日か明後日か、はたまた来世か」

「……そんなに私には魅力が無いのか？」

「いや、寧ろど真中近いな」

「なら何故だ？」

「何故だろうな？」

「……千冬よりは先に手を出して貰うからな」

エレナはそう言うと言席を立ち、職員室から出て行った。

「……はあ」

戦争も大変だが、こつちの問題も大変だよ……。まったく、面倒な人生だよ。

そもそも、俺達の出会い方からしてこんな風な関係に発展するとは

思いもしなかった。寧ろ、下手したら俺達は敵同士で戦ってたかもしれない。

「……難しいな」

「何がだ？」

千冬がやってきて隣に座った。

「俺達の関係……」

「……それはどう捉えたらいいんだ？」

「さあな。ただ、面白くも難しい関係だよな」

「……そうか」

ま、ぐだぐだ言っても何も変わりはないか。皆が笑顔になる選択肢を捜すしかないな。

「千冬」

「何だ？」

「今日も美人だな」

「……………！？／／／／／」

顔面からは決して鳴ってはいけない音が、職員室に響き渡った。

「さて、もうすぐ臨海学校な訳だが……」

ラウラの件から数週間。織斑も退院し、何事も無く過ごしてきた。

そして今は数学の時間。俺は教壇に立って生徒と向き合っていた。

「皆は楽しみか？」

「「「イエー……ッスー！！」」」

相当楽しみなのか、殆どの生徒が手を挙げ立ち上がった。

それもその筈、本来なら女子高なので女子しか居ないが、今回は織斑一夏というモテ男がいる。この機に仕留めようという輩が多い。

「そうか。だが諸君に残念なお知らせがある」

「「「へ?」「」」

「次の数学のテストで、前回の平均点以下を取った者は、俺と特別補習でお留守番だ」

「「「ええゝゝつ!?!」「」」

前回の平均点は八十六点という高得点だったが、それより下を取った者は俺との居残り補習を受けてもらう。何故なら……。

「お前達は海が大好きだな?」

「「「うんうん!」「」」

「だが俺は大嫌いだ! 故に! 誰でも良い! 平均点以下を取って俺と補習を受ける! その暁には嬉し恥ずかしのイベントハアッ!?!」

突如、横から出席簿が飛来し、俺の頭に直撃した。

この攻撃は……千冬! 貴様か!

「なに生徒を貶めようとしている」

「だが千冬! 俺が海が大嫌いだと知っているだろう!」

「だからどうした。その為だけに、態々補習を実施させてもらえるよう理事長に頼みこんだのか？」

「無論だ！ 俺は断固として海へは向かわない！ 海へ向かうぐらうなら、『ノア』に単独で向かうガシツ！？」

「アホか」

おおお……！ 出席簿が頭にめり込んでる！ 痛い！ 痛いぞ！

「諸君。先程の話は忘れても良い」

「え、でも……天星先生と二人きりになれるチャンスかも……」

「そうよ。しかも嬉し恥ずかしのイベントもあるって……」

「……」

「くそ……こんなに痛みを感じたのは久々……千冬さん？ なして俺の首を絞めてるんですか？ そして何処へ連れていく！？」

「今から海へ行くぞ」

「ッ！？ 止せ！！ それだけは止してくれ！！」

「懺悔は海でしろ」

「止めろおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

海は……海だけは止めてくれええええ!!

「天星先生、どうして海が嫌いなんだ？」

「さあ？ 副ヘッドの僕でも初耳だよ」

「兄上は海が嫌いなのか……」

「まさか、泳げませんか？」

「まさか。師匠に限ってそんな馬鹿なこと」

「止める！ 本当に連れて行く気か!？」

『当然だ。私を苛めた事と一夏をベッド送りにいた事を反省しても
らおう』

『だからと言って海は無いだろ！ 俺は海では泳げないんだぞ!』

『だからだ。溺れてゆく様を録画してやる』

『この鬼が!』

『鬼神よりはマシだ』

「」「」「」……「」「」「」

「師匠……」

天星イブキ、海が嫌いな男だった。

『せめてプールに！』

『足が着くだろ』

『競技用なら着かないだろ！』

『借りる手間が面倒だ』

『何でそう言う部分だけ雑なんだ！ 昔もお前の部屋は脱ぎっぱなしの下着が……』

『そうか。重りも必要だな』

『アハハハッ！ 束えええええ！！ ヘルプミーーーー！！』

イブキSIDE OUT

シオンSIDE

私はアジトの中を、不機嫌な態度で歩いていった。
何故ならこれから向かう場所が場所なだけに、嫌悪感と苛立ちが募っているからだ。

「何で私が行かなくちゃならないのよ……」

不満を零しながらとある一室の前で立ち止る。

いくら不満があろうと、相手は私の上司。失礼が無いように服装を正し、髪のを直した。別にこんな事をしなくても良いのだが、変に心を許していると思われたら困るから、きつちりとしておかなくてはならない。

私は扉の横に付いている端末で、インターフォンを鳴らした。

「失礼します。シオン・アイルス、出頭しました」

『ああ……』

男性特有の低い声が聞こえ、扉のロックが開いた。

私は扉を開き、中に入った。中は真っ暗で、パソコンの画面だけが光っていた。そしてパソコンの前には誰かが座っていた。私はその人影に向かい、口を開いた。

「何のご用でしょうか？」

「その玩具はもう用済みだ。適当に処分しておけ」

玩具……ベッドに転がっている裸の女性。意識は無く、身体を痙攣させ、息も荒かった。

「閣下、あまり実験体に手を出さないで下さい。補充するのにも手間がかかります」

「ならお前等が相手になってくれるのか？」

「……………」

「ふん、冗談だ。お前らでは、俺の欲は満たされない。泣き喚く女ほど、美味しい物は無い」

顔は見えないが、恐らく厭らしい表情だろう。この男は、そういう奴だからだ。

「なら何度も相手を取り変えないで下さい」

「それは無理だな。私が相手をする玩具は一日で壊れる。故に変えなければならぬ」

「……………」

「お前達のような強い玩具ならば、話は別だろうがな」

「……処分はこちらでしておきます。では……」

私はこれ以上ここに居たくないの、女の足首を掴み、部屋を出て行こうとした。

「ああ、待て」

「……何でしょう？」

「IS学園はどうだった？」

「……どう、とは？」

「美味そうな獲物はいたか？」

「……『武女帝』、『無限の魔女』、鬼神の弟子。閣下の口に合いそうなのはこの三人でしょう」

「弟子、とな？」

「はい。若干、十五歳であるにもかかわらず、中々成長しております。その他にも、探せばいくらでもいるでしょう」

「そうか……。それは良いことだ。それと、今度は何時向かうつも

りだ？」

「もうすぐ臨海学校ですので、その時にでも」

「そうか……」

「ではこれで」

私は部屋を出た。

「……下衆が」

何故あのようなゴミが私達の上に立つ。何で“彼”じゃないのよ。
どうして……。

「シオン様」

「……黄泉、この女に薬を打って。万が一適合する身体だったら処分できないから」

そついつて引き摺ってきた女を渡した。

「畏まりました」

「私は部屋に戻るわ。あの下衆の事を忘れたいの」

「では、何か御用があれば呼んで下さい。すぐにでも向かいます」

「ありがとう」

私はお礼を言い、自室へと足を運んだ。

自室に入ると、一目散にベッドに身体を沈めた。

「もういや……。早く帰ってきてよ……。このままじゃ私……。壊れちゃう」

帰ってきてよ……。ねえ……。黒耶……。

買い物へGO！（前書き）

え、すみません。なんだか分からない事になってしまいました。
おまけに短いと言う失敗。一体何がやりたかったんでしょうか、私
は。

買い物へGO！

週末の日曜日。その日の街の駅前に、三人の男女の姿が確認された。

男性の方は黒髪で黒い衣装に身を包み、どこかワイルドでクールな雰囲気醸し出している、天星イブキ。

女性の方は、長い黒髪で黒いスーツとタイトなスカートを履いた、これもクールな女性、織斑千冬。

もう一人の女性は、長い白髪をポニーテールにし、黒のパーカーに白のTシャツ、水色の長ズボンに白のヒールサンダルを履いた、これまたクールで何処となくミステリアスな雰囲気を出す女性、エレナ・レンヴァルス。

そして最後の女性は、緑の髪で幼い顔つきの山田真耶。こちらはクールには至って遠い、温厚な性格である。

この伝説的な人物＋が、何故こんな所に来ているのかと言うと、理由は一つ。臨海学校に向けての買い物である。

「何で俺が海に行かなくてはならないんだ……」

「一教師として、引率するのは当然だろう」

「海には絶対入らないからな」

「そうだ。イブキは私とビーチでオイルの塗り合いからの岩陰で私を突いて……」

「れ、レンヴァルス先生！／＼／＼ いきなり何を言い出すんですか！？／＼／＼」

俺は頭を抱えた。今日で何回目だろう。

そもそも、俺は海に入る気はさらさら無い。岸辺で監督をするか部屋で休む事しかないのに、何故水着を買いに来る日必要がある。

「天星先生、元氣無いですね？」

「山田先生、イブキは過去に海上で……」

「……あ、あれですか……」

こらそこ。昔を思い出すのは良いが、俺に同情の目を送らないでくれ。

「大丈夫だ。怖くなったら私で」

「水着売り場はあっちだったな。時間が惜しい、早く行くぞ」

エレナが放送コードギリギリの発言をする前に中断し、目的地へと足を速めた。

目的地、『レゾナンス』。ここは兎に角、広い、デカイ、何でもござれのショッピングモールである。ここに無いという文字は無いと言っぐらい、品が揃っている。

「三人は適当に買って来い。俺は俺で買うから」

「こう言う時は彼氏が彼女の水着を選ぶものだろう」

「俺は彼氏ではない。よってバイバイ」

俺はその場から逃げだした。

付き合えるか。千冬や山田先生ならともかく、エレナと水着選びは駄目だ。強制的に一緒に試着室へと入れられ、目の前で着替えだし、隙あらば襲いかかる。それだけは避けねば。

「まあ待て」

「つつっ！？」

千冬が俺の肩を掴んだ。

「偶には良いだろう」

「面倒……」

「またダイビングでもするか？ 最近ではサメと戯れるのもあるそうじゃないか」

「さ、買い物を開始しようか」

俺は覚悟を決めた。

もうどうなっても良い。

ダイビングを避けるれるのならば！

現在、エレナが試着室に入っている。

千冬と山田先生は、並べられている水着を物色している。

拙いな……本気で拙いな……。一瞬、チラツと見えたが、エレナが持っていた水着……明らかにおかしい水着だったぞ……。

「生きるか……死ぬか……。二つに一つか……」

まったく……水着を見るだけで生きるか死ぬかが決まるなんて……。俺の人生……どんだけだ。

「イブキ、どうだ？」

カーテンを捲る音が聞こえ、継いでエレナの声がした。

決めよう……。もう俺はツッコまないと！

俺は意を決してエレナの方を見た。その姿は……。

「どうだ？　これならお前の刀も反応するだろう？」

エレナの水着は、一言で表現すると、紐だった。

紐を上手い具合に交差させて、隠すところだけを最低限に隠し、如何にも『そいつった専用です』と主張している水着だった。因みに青紫。

「お前はポニーテールが好きだったからな……。それもポリウムを持たせて結ったし、それにこの水着と合わすと、流石のお前でもピンピン来るだろう？」

「……どこから持ってきた？」

「その一角だ」

俺はエレナが指した売り場を見た。そこにはこう書かれていた。

『これで貴女の彼氏はビックバンに！ 核ミサイルなんて比じゃない！ 今話題の必勝水着！』

「因みに三十%OFFだ」

「……………」

「どうしたそんなに震えて。……ああ、そうか！ とうとう私の初めてを……………」

「貴様は痴女か！？」

「何を言う。お前に対してだけだよ……………」

「そんな色香で言っても何の効果も無い！ そもそもお前は保険医だろ！ 生徒の前でそんな格好させるわけ無いだろう！」

「ま、まさかお前の前だけと！？ 勿論だ！」

「誰もそんな事言っただろうが！！」

「むう……だったら今度はセクシーな、水着をだな……………」

「もうこれにしゃがれ！ この変態痴女オッサン女が！！」

水着をエレナに放り投げ、カーテンを強制的に閉めた。

「くそう……！ 一発でツッコんでしまった……！」

何で、どうしてあんな風に育ってしまったんだ……。

「着替えたぞ」

「早いな！？……ッ！？」

ま、まさか……！？

「お前が選んだ水着……中タイイ趣味じゃないか」

俺は何と言ったものを放り投げてしまったんだ……！

「このブラの部分がクロスして下と繋がっているところといい、色といい、正に私の為に選んだ水着ではないか」

そう、俺が投げ入れた水着は、つまりそんな水着だったのだ。そして、何故かとてもなくエロい。

「やってしまった……」

「まだヤツていないが？」

「もう、いいよ……」

疲れたよ、束……。お前との買い物より遥かに疲れたよ……。

結局、エレナがその水着を買い、千冬に見せびらかして自慢した。

俺がエレナの件で疲れ果てていて、千冬たちが離れて物色しているのを眺めている時、横から女の声が聞こえた。

「ちょっとあなた」

俺は仕方無しにその声の方を視界に入れた。

そこに立っていたのは何かもの凄く腹が立つような、『私、セレブです』って主張している馬鹿がいた。

「これ、戻しといて」

女はカゴ一杯に詰め込まれた水着を差し出して来た。

「は？」

「分からないの？ 戻しといってたのよ、この能無し」

聞いたか？ この女は俺に向かって能無しと言ったぞ？ 何故見ず知らずの屑に言われなければならないんだ。

だから俺は言っちゃった。

「自分でやれ、あばずれ」

「な、何ですって！？」

女は面白い程に激怒し、顔を怒りに染め上げた。

「聞こえなかったのか？ あばずれと言ったんだ。ああ、意味が分からないのか。簡単に言うとクソ女って事だよ」

「な、何て口の悪い！ これだから男は嫌なのよ！」

「これだからクソ女は嫌なんだよ。分かったらさっさと消えな」

シッシ！ と手を振って千冬達の方へ視線を戻した。

うん、比べるまでも無いが千冬達の方が目の保養に良い。

「この、下等な存在が私に刃向うつもり？　いいわ、後悔させてあげる！」

女は手を叩いて何かの合図みたいなものを出した。

すると何処からか黒服の男たちがゾロゾロと笑われた。

「どう？　今なら社会で生きられる程度にしてあげるわよ？」

「……ぷっ！　止めるよ、俺の腹筋を殺す気か？　何処のヤラレキヤラだよ。それ以前に今の御時世にこんな馬鹿な真似する奴いたのかよ」

や、やべえ！　腹イテゝ！

俺が腹を押さえて笑っていると、女は我慢できなくなったのか、男たちに合図を出した。

「やってしまいなさい！」

「ふははっ……あゝ……鬱陶しんだよ」

殴りかかってきた男の腕を左腕で掴みとった。

「ぎゃあああっ!?!」

「喧しい。お前が殴りかかった相手、誰だと思ってんだ?」

「ひっ!?!」

俺は内ポケットから黒い物を取り出し、男の目の前に突き付けた。

「……ッ!?!?!?!? て、てててて、天星イブキ!?!?!?!?」

その男に突き付けたのは俺の身分証明書である。

「様を付ける、この能無し」

「しっ……」

「……失礼致しました!?!」

「分かったらとつとそのあばずれを連れて失せろ! それと店に迷惑料払え!」

「……しよ、承知いたしました!?!?!?!?!」

「えっ!?! な、何するのよ!?!」

男たちは女を連れて店から大慌てで飛び出していった。

ふう……あいつらがちゃんとしたSPで良かった。もしヤクザ者なら……まあそれ関係を引き張って来るがな。

「おい」

「あん？　ンガッ！？」

ガツンと、俺の頂上に鉄拳が落とされた。

「な、何をする千冬……」

「この馬鹿者が。何を大騒ぎしている」

「知るか。あの女が悪い」

あゝクソ、腫れてやがる。冷やさないと。

「学園に来て、少しは変わったと思ったのにな……」

「あのな、人の性格は死なない限り変わらないんだよ」

「なら死ぬか？」

「どこから出したその刀」

千冬は刀を俺の喉仏に突き付け、今にもブツ刺そうとしていた。

「天星先生が赤の他人を嫌うと言っつのは知ってましたけど、まさかあんなに人が変わるなんて……」

「今はまだマシな方だ。……いや、もしかしたら悪化してるかも……」

エレナが僅かに冷や汗をかいて俺を見た。

「ところで、何であの人達は血相を変えて逃げて行ったんですか？」

「ん……」

俺は山田先生に身分証明書を見せた。

「………今まで馴れ馴れしくして申し訳ありませんでした」

「いや、別に山田先生は問題無い。と言うか、学園の関係者（一部を除く）は例外だ」

「そうですか……」

山田先生が何を見たのかは、今は秘密にしよう。明かす事が無いかも知れんが。

「全く、これだから有名人は面倒くさいんだ」

ブツブツと愚痴をこぼしながら刀を……ポケットにしまった！？
え、何！？　ちふえもん！？

「さ、買い物続きだ……ん？　アレは千冬の弟ではないか？」

「何？」

エレナが指した方では、確かに織斑の姿が見えた。ただし、デュノアが織斑を連れて試着室へ入り込んだのをだ。

「……最近の子は随分と進んでいるな」

「え？　どうしたんですか？」

「デカメロンは知らなくても良い事だ」

「でか……！？」

山田先生は何も見えて無かったらしく、状況を察していないようだ。

「はあ、あの馬鹿者が」

「まったくだ。と、言う事で」がしっ！

「え？」

エレナは俺の腕を掴んで千冬に敬礼しだした。

「姉として頑張りたまえ。私はイブキと二人でデートに洒落込むとしよう」

「なっ！？」

「お、おい！？」

「へ？　へ？」

「さらば、我が戦友」

「ちょまあああああ……！」

女とは思えない力で引つ張られ、俺はエレナに拉致された。

「……………」

「あ、あの…織斑先生？」

「……………！」

「あ、何処行くんですか！？」

シャーーーーー！

「げっ！？　ちふ、織斑先生！？」

「えっ！？」

「……………って」

「へ？」

「私だって偶にはアプローチさせるやこの白髪婆ああ…！」

「う、うわああああ…！！！」

「きゃああああ…！！！」

この時、違う店の下着店に連れられたイブキに、織斑一夏の断末魔と山田先生の二重の意味での悲鳴が聞こえたとき。

海、兎、そしてトラウマ（前書き）

やっ
ちまっ
たぜ

海、鬼、そしてトラウマ

臨海学校当日。

俺達を乗せたバスはトンネルを抜け、海が見える場所を走っていた。
天気は快晴、生徒の心も快晴、俺の心は大雨洪水警報。

「とうとう来てしまったか……」

「何を深刻な顔をしている。天下の鬼神様が情けない」

そう隣で言う千冬は、ニヤリと俺の顔を見ていた。

「くそ……絶対楽しんでるだろ？」

「何を言う。お前が怖がる姿を見て……楽しまない筈が無いだろう」

この鬼が。鬼神より鬼らしい鬼が。
絶対寝てる時にエレナと共に仕返ししてやる。

「安心しろ。お前が溺れても、私の深い人工呼吸で復活させてやる」

「だったらその興奮した顔は止めてくれ」

エレナは何を想像したのか、顔を紅くし、息も少し乱れていた。

「ふふ、楽しみだな。お前が私に必死で手を伸ばし助けを請うのだ。これ程愉快なことは無い」

「違うぞ、間違っているぞ千冬！」

「何？」

エレナがどこぞの仮面坊やの格好をして千冬に指を差した。

「イブキが求めるのは助けではない……合体だ！ そう！ 私との究極完全合体で天へと昇る様な体験を」

「そろそろ目的地に着くぞ。全員ちゃんと席に座れー」

「いいさ、何時かお前を振り向かせてやるさ」

はあ、ただでさえ海は嫌なのにエレナの強襲にも対応せねばならんとは……。束が居れば簡単に片付けられるんだがな……。

宿泊する旅館に到着し、四台のバスから生徒達が降りて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「宜しくお願いしまーす」「」」

生徒たちはきちんと挨拶し、向こうの女将……（和服美人とでもいうのだろうか、一瞬目を奪われてしまった……）も、綺麗なお辞儀を返した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があって宜しいですね」

……マズイ、ジャストミートだ。

俺の女性の好みはロングヘアーでクールで強い女と言ったが、もう一つ。そう、浴衣や和服が似合う女だ。

「あら、こちらが噂の……?」

織斑と目が合った女将が千冬に尋ねた。

「ええ、まあ。今年は二人、男子と男性がいるせいで浴場分けが難しくなってしまうて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子と男性ではないですか。男の子なんかはしっかりしてそんな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者」

千冬が織斑の頭をグイッと押した。

「お、織斑一夏です。宜しく願います」

「天星イブキです。三日間お世話になります、女将さん」

「……！」

……マズ。千冬とエレナの視線が怖いぞ……。

「……丁寧にも。清洲景子です」

……あ、大和撫子のような女性もタイプだ。
つまり、クリティカルヒット。

「不出来の弟と『馬鹿男』で迷惑おかけします」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんとその方にはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので。そう……毎度毎度、ね」

い、痛い……。千冬もの凄く痛い。頼むから足をヒールで踏まないでくれ。

それとエレナよ。ナイフを展開して徐々に背中に刺していくな！

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用くださいな。場所が分からなければいつでも従業員に聞いて下さいまし」

生徒一同は返事をして部屋に向かってゆく。
そして俺は……。

「来い。今すぐに海へ放り投げてやる」

「いや、ホモの海に放り投げろ、流石の私でもアレは許せん」

「ま、待て！ お前らだつてあるだろ！？ 初対面でも好印象の相手には優しくする事が！」

「前よりは丸くなったと思ったら、女癖が出ていたか」

「目の前に極上の女が居ると言うのに」

俺は千冬とエレナに両腕を掴まれ、海の方に引き摺られている。

「止めろ！ 俺に何かあれば束が何をするか分からないぞ!？」

「知った事か。握り潰せばよい」

「若しくは刺せばいい」

「殺すなよ!？ ちょ、本当にやめっ……誰か助けてくれええええええ!！」

「あゝ、箒？ 師匠が連れ去られて……」

「自業自得だ」

「……怒ってたんだ」

いきなりだが俺は死んだ。肉体がではなく精神が。

海に放り投げられ『天照』を展開しようとしても何故かその時だけ出来ず、俺は海の底へ沈んでいき、目の前が真っ暗になった。

意識がはつきりした時、俺は岸にあがっていた。

そして千冬とエレナが何故か言い争っていた。

呼吸がどうのこうの言っていた気がしたが、一先ず旅館まで一目散に逃げ、自分に割り当てられた部屋へ逃げ込み、今に至る。

駄目だ、海は駄目だ。殺される。プールならまだしも海は駄目だ。

「……でだ、何故織斑はここにいる？」

「え、えっと……」

確か織斑の部屋は千冬の所だったはず。姉弟を一緒にしようと言う山田先生の取り計らいでそうだったはず。因みに俺は個室。

「海へ行こうと……」

「ここで着替えようと言う訳か」

「そうです」

「男の裸なんぞ見たないわ。別館に行け！」

「でももし間違えて着替えている途中の女子の部屋に入ったら！」

「諦めて責任でも取れ、このヘタレ」

織斑を放り投げて部屋の襖を閉める。

「まったく、ヘタレでこの学園で生活できるか。」

「夜は常に女の襲撃に備え、朝もそれに備え昼も備え夕方も備え……
って、これは束とエレナが相手だったからか。」

「しかも今回もエレナに備えなければ……」

「どちらも大人というのが性質悪い。もし越えてしまっても問題無い
しな。」

「しかも旅館に備え付けられている浴衣が寝巻だぞ。耐えられるの
か、俺は」

「恐らく、今までで一番こつい猛攻だろうな。」

イブキSIDE OUT

一夏SIDE

俺は天星さんに追い出されて、周りを気にしながら別館へ向かって
いた。

もし誰かと鉢合わせになったら絶対厄介な事になる。俺の今までの
経験がそう言っている。

例えば水着の格好のまま出てきて俺を囲んだり、例えば俺が着替え
る更衣室までついて来たりと、あり得ないようであってしまふ事だ。
そもそも何でそんな事すんだ？ そういうのが今の流行りなんだろ
うか？ だったらそれはとてもいかん事だろう。

「……ん？ 簞？」

「……………」

更衣室へ向かう途中、簞が渡り廊下から見える庭をジッと見ている
簞を発見した。

「どうしたんだ？」

「……………」

あれ？ 無視？ いったい何をそんなに見て……………へ？

箒が熱心に見ているそれは、地面から生えているウサミミだった。
しかし機械的な、そして張り紙付きの。

その張り紙には、『引っ張って下さい』という文字が書かれていた。

「……………箒さん？」

「知らん。私は何も知らん 知りたくない」

箒は強く否定した。

という事はやっぱりこれって……………束さんだよな？

「……………抜くぞ？」

「勝手にしろ。私は行く」

箒はスタスタと何処かへ行ってしまった。

まったく、姉妹仲良くしないといけないぞ。

俺はウサミミが生えている所に向かい、ガシッと掴んでどっこいし

よおおっ!?

ウサミミは簡単に抜けた。

てつきり束さんが埋まってるのかと思ったが、流石にそれは無かった。

「一夏さん？ 何をしていますの？」

「セシリアか。いや、ウサミミが……」

こう言うのを何て言うのだろう。危険察知能力、未来予知、ニュータイプ……は違うか。

ともかく俺はこの場から逃げなければならなかったと感じた。

「おおおおっ!？」

「きゃっ!？」

俺は急いで廊下の方へ走り、セシリアとぶつかり押し倒してしまっ
た。

「い、一夏さんっ!？／＼／＼」

セシリアの悲鳴が聞こえるなか、もう一つの音が聞こえてきた。

キイイイイイン……。

来る。空から。何かが！

ドガアアアアアン！！！！

「うおおおおっ！？」

「ひゃああああっ！？」

それは、ウサミミがあつた場所に落下してきた。
ウサギが好きな食べ物、デフォルメ化された巨大な人参が。

「に、にんじん……？」

俺はその場に固まり、人参を凝視した。

すると、人参がプシューと音を立てて割れた。

そして何処か聞き覚えのあるBGMと煙と共に登場したのは……。

「I'll be back」

黒いジャケットとサングラスをかけた束さんだった。

「いやいや！ 何してるんですか！？」

「オリ・ムラー。時は来た」

「誰ですかそれ！？」

「抹殺完了！」

「もがつ！？」

ターバネ タ が俺の口に何かを突っ込んできた。

これは……。あれ？ 何紐が付いてる……。それに火薬臭くないか？

「い、一夏さん！ それ導火線です！ は、早く捨てて下さい！」

「ぶぺえっ！？」

「きゃあっ！？」

慌てて吐きだした爆弾はセシリアの顔に落ちた。

ってか俺セシリア押し倒してる！？ いや本当に爆弾！？

「ぶーぶー！　　いっくん吐き出しちゃ駄目じゃない！」

束さんがブーイングを送って来るが、その格好で可愛い仕草をしないほしい。もの凄く変だ。

「殺す気ですか！？　　何爆弾を突っ込むんですか！？」

「爆弾じゃないよ？　　火が付いたらお口の中でとろける媚薬だよ！
　　ブイブイ！」

「なっ！？　　何でそんなもの飲ませようとしたんですか！？」

「だって、真昼間からいっくん大胆じゃない。だから私はそれを
　　加速させようとしただけなのだー！」

は？　　大胆？　　ウサミミを抜いた事が？

「い、一夏さん！？／／／　　そうなんですの！？／／／」

……あゝ、なるほど。

俺はセシリアに謝りながら立ち上がった。

「束さん、違いますから」

「ほへ？ そうなのいっくん？」

「……………なんかムカつきますわー」

あれ？ 何でそんなに不機嫌なんだ？ 立ち上がるのに手を貸さなかったからか？ だったらごめん。

「で、いっくん！ 篝ちゃんは何処かな？」

束さんは来ていたジャケットとサングラスを取り外して、一人不思議な国のアリスな格好に戻った。

青と白のワンピースに、俺が抜いたウサミミを着けた格好。

「えーと……………さあ？」

束さんを避けて何処かへ行きましたと言いつい辛い。

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機で見つけるからいいよ。……………で、これは今知りたい事なんだけど……………」

「え……………」

あの束さんが鋭い目つきになって真剣な表情になった。

束さんをここまでにするって事は、世界に関わる問題！？

「……いぶちゃん、どこかな？」

「……いぶちゃん？」

「もう！／＼／＼ 束さんのダーリンだよお！／＼／＼ ……で、何処かな？」

い、痛い！ 痛いです！ そんなに肩を掴まないで下さい！

「ねえ、どこ？」

「し、知りません！ 束さんのダーリンなんて知りません！」

「そう……。じゃあいいや！ またねいつくん、バイバイ！」

束さんは纏っていた怖い雰囲気を消し、何時ものようになって去っていった。

「……………」

「…………アレが俗に言う、ヤンデレですの?」

「違うと思う……。でも…………」

「怖かった…………!!」

一夏SIDE OUT

イブキSIDE

「で、結局こうなったか…………」

俺は今、浜辺のパラソルの下で遊び回っている生徒たちを見守っていた。

そして俺は水着に着替えさせられた。誰に、とは言わない。

…………俺の水着? そんなもん知りたいのか?

…………黒の海パンに黒と赤の長袖のアロハだ。左腕をあまり晒したくないからな。

左手の手袋も着用。後、サングラスも。

「せめて海にだけは近付かないでおいこ」

「イ・ブ・キ~~~~!!」

「こおっ!？」

いきなり後ろからエレナに抱きつかれた。

油断した！ 海の方に気を取られ過ぎたか！

「うつふつふつ、こうも容易く近付けるとは、とうとう私としてみたのか？」

「何故そう考えるんだ。それより離れろ。お前の自己主張の激しい山が押し当てられてるんだよ」

「ワザとだ」

「知ってるさ。だから、退け」

左手でエレナの頭を掴み、力を込めながらエレナを引き剥がした。

チツ、買った水着を着てやる。

もしこれを俺が選んだと生徒に知られれば、何か拙そうな事が起きる気がする。

「さあ、イブキ。我が夫よ」

「夫じゃない」

「私にオイルを塗れ。厭らしく、激しく、滅茶苦茶にするが良い！」

ドンッとオイルを置いてシートの上に寝そべる。

「おい！ レンヴァルス部の女子共！」

「は？」

「はい！ 何でしょう！？」

「レンヴァルス先生がオイルを塗ってほしいらしい。頼めるか？」

「勿論です！！」

「え？ ちょ、おい！？」

レンヴァルス部。それはエレナを教祖としたエレナを愛する会だ。所属する部員たちは皆、エレナを愛する、所謂、百合だ。因みに千冬のも存在する。

顧問？ 勿論どちらも俺に決まっているだろう。理事長にも許可を貰った。

「こ、こら！ そんな所を触るな！ あっ、そこは違う……！ やっ、あああつ！」

哀れエレナ。初めての相手が女だとは……。これもまた、人生だ。

俺はその場から退散し、気晴らしに見周りをする事にした。

見周りをしている内に、織斑の姿が見えた。
その周りに居るのは無論、女子である。

……って、アレは……ラウラ！？

その女子の中に、デュノアとラウラの姿が見えた。
そしてその格好は、背伸びをし過ぎたにしか見えない、大人の下着のような水着を着ていた。

「こらこらこらこらあああつ……！」

「あ、兄上！？」

「ラウラ！ 何と言う格好をしているんだ！？」

「こ、これですか？ これはクラリッサが進めた物でして……」

「…………ふっ」

そうか……クラリッサ。お前は俺の義妹にそんな事を教えていたのか。嫁の件といい、貴様は間違った教育を施している様だな……。

「クラリッサ……貴様にはもう一度、調教の必要があるようだな……」

「あ、兄上？」

「ラウラ。お前はそのまま純粋に育てばいい」

「は、はぁ……」

「織斑」

「は、はい！」

俺は織斑の肩を掴み、出来るだけイイ笑顔を向けた。

「俺の義妹に欲情でもしてみろ……後生、それを使えなくするからな」

「さ、サー・イエッサー……」

「宜しい。……ふふ、ふははは……何時ドイツへ行こうか……」

クラリッサ。貴様にはどういった調教をくれてやろうか……。くっ

くつく……。

「天星先生、何か怖かったね」

「そ、そうだな……。で、ラウラ」

「な、何だ？」

「さっきの話だけど、可愛いぞ」

「　　っ！？／／／／／」

「どうし　　ぶっ！？」

「い、一夏っ！？　これは……岩？」

「あ、さっき天星先生が何か投げてたよ？」

「……天星先生って……シスコンなんだ……。会員に教えるネタが増えたけど……何か悔しい」

織斑にメテオスウォームをぶつけた後、俺は見周りを続け、ある美女を見つけた。

「……それは下着じゃないのか？」

「水着だ」

デーンと胸を張るのは千冬だった。

黒のセクシーな水着を着こなし、モデルの様な姿になっている。
髪はおろしていた。

「エレナはどうした？」

「生徒と戯れている」

「……あのエレナが？」

実際は快樂の海に運ばれてるんだろうがな。

「で？ 見目麗しい貴女様は何処へ？」

「茶化すな。……見周りついでに泳ごうと思っていた所だ」

「さようなら」

俺の予想。腕を掴まれて海に運ばれる。

「まあ、何だ。出来ればその……一緒に泳がないか？／／／／／」

「……態度と行動が矛盾してるぞ」

顔は紅く染めているが、千冬の手は俺の手首を折る勢いで掴んでいた。

「こっしないと、お前は逃げるだろう」

「……俺は海が嫌いなんだ」

「大丈夫だ。私に捕まっていればよい」

「……どうせもう、拒否できないんだろう？ 分かった、分かりました。エスコートして下さいな」

「良いだろう……／／／／」

俺は海へ入る千冬にくっ付いて、何年ぶりの海に足をつけた。

「……………」

「……………ほれっ」

「なあっ!?!」

いきなり千冬が俺を持ち上げ、足が届かな地点に放り投げた。

色々ツツコたいがこれは拙い！！

「ぶはっ！ ごぼっ！」

「ほら、掴まれ」

千冬が寄ってきて俺を千冬の背中に乗せる様な感じで掴ませた。

「ごぼっ、ごぼっ！」

「まったく、大の男がだらしない」

「だ、黙れ……。言っておくが俺は泳げるからな」

そう、俺は泳げる事は泳げるのだ。

しかし、ある時を境にトラウマが生じ、それ以来海やプールに入れなくなったのだ。

「分かっている。……だが久しぶりだな。お前と共に海に入っただけは」

「……そうだな」

俺は離れないようにしっかりと千冬の背中に掴まった。

「あの時は遠泳で勝負したっけな」

「ああ。お前は私達を置いて先に泳いでいったな」

「その時に確か束が力尽きて溺れたっけか？」

「そうだったな。戻ってきたお前が束を殴って意識を戻させたな」

懐かしい……。まだ俺が普通の学生だった頃の、戦いが本格的になる前の頃だったな……。その後すぐに戦いが始まったが……。

「またあの時のように泳いでみたいものだ」

「……そうだな」

俺を乗せた千冬はスイスイと泳ぎ、俺は千冬の上で久しぶりの海を感じた。

「ああ、そうだ」

「どうした？」

「いや……千冬の身体って、随分と心地が良いんだな」

「　　っ！？／／／／／」

俺は少し千冬と強く密着した。

海の中でも千冬の体温が感じ取れるほど温かった。

「肌触りも良い、香りも良い。エレナがスキんシップしたくなる気も分かる」

「なっ、何を言い出す！？／／／／／」

「千冬はいい女だって事だ」

「……／／／／／」

千冬は顔を真っ赤にして、黙りこんだ。

「なあ、千冬」

「……／／／／／」

「　　」

「　　っ！?!?!?!／／／／／」

「おっと！　ここで離されたら俺ヤバいつて」

俺を振り落とそうとする千冬に俺はしがみ付いた。

偶にはこんな日もありか。

俺と千冬……主に俺は、千冬の上で海を満喫した。

夜、夕食時。

俺は千冬、エレナに挟まれて教職員の部屋で食べていた。

「おい、酒は無いのか？」

「無いだろうな」

「ある訳無いだろう。私達は仕事の一環で来ているんだぞ」

「飲まないとやってられん。あの女共……イブキに触らせたこと無い所を何度も……くっ！」

「……何をさせたんだ？」

「餌役」

一体どんな事をしたのだろうか、あの生徒たちは。

エレナをここまでぐれさすとは、並大抵の事ではないな。

「……騒がしいな」

千冬は隣の生徒達が居る部屋から聞こえて来る大声に気が付いた。

大方、織斑が誰かに『あゝん』とかやったんじゃないのか？

「煩い奴らだ」

千冬は立ち上がり、隣の部屋へと赴いた。

「……今がチャンス」

「は？」

「イブキ、あゝん」

「……あ？」

エレナは刺身を箸で摘まんで俺の口に持ってきた。

「……………何してる?」

「あゝんだ。男の夢だろう?」

「全ての男がそう思っている訳ではない」

ってか止める。山田先生も含め、その他の先生も歳を考えずにキヤーキヤー言ってるんだぞ。千冬がまた怒るぞ。

「そうか、私にしたいのか。あゝん」

「……………あゝん」

「んんっ!?!」

俺は刺身の隣にちょこんと乗せられていた緑の小山……………即ち、わさびをエレナの口に丸々放り入れた。

「~~~~~!!!!!!」

「お、おい!?! 何をする!?!」

エレナは悶え苦しむ中、俺を押し倒してきた。
そしてあるう事が、顔を、正確には口を近付けてきた。

「んんふんふんふんふん！！」

「『お前にもお裾分け』だ！？ いるかチクショウ！！」

エレナの顔を押し返し、エレナの目論みを防ぐ。

千冬！ 早く帰って来い！ 俺の唇と舌が大ピンチだ！ あと味覚！

「何をしてるか！！」

「あふんっ！！」

エレナが吹き飛び、俺の視界には、顔を紅くした千冬がスリッパを
持っている姿だった。

「まったく、織斑が織斑なら、お前もお前だな！」

「俺をヘタレ童貞と一緒にするな……」

俺はエレナにお茶を渡しながら、乱れた服装を正した。

因みに黒い浴衣。何故黒があつたのかは、この際どうでも良い。

「で、何で騒いでたんだ、向こうは？」

「知らん。『あゝん』とか何とか言っていたがな」

ほう……俺の予想通りとは。

「何故ガキ共はそれだけで騒ぎだす……」

「い、良いじゃありませんか。女の子と言つのはそういう者ですよ？」

「山田先生、それでは私は女では無いと、そう仰りたいのですか？」

「い、いえ！！ 滅相も御座いません！！」

山田先生は千冬の睨みにより、身体をガタガタと震わせた。

はあ、何やってんだか。

……そうだ、良い事思い付いた。

「我々教師が、しっかりと見本を見せなければ……」

「千冬」

「何だ、私　　むぐっ」

「なあっ!？」

「」「あああっ!？」「」

おうおう、いい大人達が口をあんぐり開けてやる。

俺はくどくど説教をする千冬に、箸で摘まんだ刺身を口に入れた。

「美味しいか？」

「…………ゴクン。な、何をする!？／／／／」

おお……ちゃんと飲んでから言いやがった。

「何って……あゝん、だ。もっと欲しいのか？　仕方が無い。ほら、あゝん」

「な、ななななな、なあ!？／／／／」

「こ、こらっ！　何故私にしない!？」

「羨ましい〜！　天星先生！　私にも！」

「私にもお願いします！」

エレナを筆頭に、他の教師陣も口をパクパクと開けて来る。
山田先生は固まって動いていなかったが。

うむ……思った以上に大騒動になってしまったな。
まさか他の先生方が来るとは……。

「すまないな。さっきので全部無くなってしまった」

「「「そんな〜!？」」「」」

というか、俺は百歩譲ってもエレナにしかせんぞ？ 俺が他人嫌いなのを忘れていないか？
今では丸くなってきているが。

「チッ、千冬……後でこねくり回してやる」

エレナ、生徒が居る事を忘れるなよ？

夕食後、俺は風呂に入って見周りを兼ねて旅館内を散歩していた。

こう言った和風の建物は好きなので、少し気が弾んでいた。

「……ん？」

廊下を歩いていると、襖に耳を当てている三人の生徒がいた。

箒、凰、オルコットの三人だ。

三人は一生懸命何かを聞き取ろうとしているようだ。

「おい、何をやってる？」

「わっ！？ いぶ……天星先生」

俺は小声で箒に話しかけた。

「何をしているんだ？ ここは織斑姉弟の部屋だぞ？」

「そうですが……！ 天星先生も聞いて下さい！」

「「うんうんうん！」」

は？ 何がだ？

俺は箒に襖へと耳を押し付けられた。
そして聞こえてきた。

千冬の気持ち良さそうな声が。

『んっ……そこは……』

『我慢だつて。すぐに良くなるから』

『そういう問題……あっ！』

『ほら、良くなってきただろ？』

『か、変わらんぞ……んんっ』

……なん……だと？

千冬が……弟と何かをやっている！？ それもマニアにはもってこいの何かを！？

「馬鹿な……！？ まさか、エレナに毒されたか！？」

「て、天星先生！？」

「ちよっ！？」

「何をなさるつもりですか！？」

煩い、これは重大な問題なんだ！ あの千冬がエレナのように変態かしてはいけないんだ！

でないと、俺の助け舟と遊び相手がなくなる！

俺は襖に手をかけて、思いっきり開いた。
そして中では……。

「あ、天星先生」

「な、なに！？」

「……………だと思ったよ」

うん……………これは、アレだな。所謂、マッサージってやつだな。
くそっ、我ながら馬鹿な想像をした！

「い、イブキ……………！？ それにお前等……………！？」

「……………あ、ははは……………さよなら！……………」

「動くな……！」

ガキーンと、何処からか取り出した刀を箒達の足元に投げて、箒達の動きを止めた。

だから、どこから出してんだよ。

「……ちょうど良い。篠ノ之、凰、ボーデヴィツヒとデュノアを呼んで来い」

「は、はいいゝ！！」

千冬は冷静さを取り戻し、二人にそう命令した。

残されたオルコットは、千冬に入れと言われ、恐る恐る中に入った。俺もついでに中に入って窓際に座り、冷蔵庫から取り出した冷えたビールの缶を開けた。

日本酒が良いんだけど……。まあいいか。

……。ん？ 何故オルコットは俺と千冬をそんな真っ赤な顔でチラチラ見てくる？

オルコットは俺と千冬をチラチラと見て、織斑に催促されて布団の上に寝転んだ。

……。何だ？ 何が始まるんだ？

オルコットは仰向けで寝転んだが、織斑に言われてうつ伏せになった。

ああ……。マッサージか。しかし、何故オルコットは顔が紅いんだ？

「わきゃっ！？ いたっ、いたたたっ！」

……なに可愛い叫び声上げてんだよ。

オルコットは織斑に何をしているのかと今更聞き、マッサージだと言われてもの淒く落ち込んだ。

はっはーん……こいつ、そういう事を考えていたのか。

俺は千冬の方を見ると、子供がイタズラを思い付いた様な顔付になっていた。

千冬って、時々こんな子供じみた顔するよな。
ま、そこが可愛いんだけど。

千冬は音を立てないようにオルコットに近付き、自分の手をオルコットの尻に……尻に！？

「ひゃあっ！？／／／／／」

「おー、マセガキめ」

「「ぶっ！？」」

千冬はオルコットの尻を握り、ニヤニヤと笑った。

そして何と、オルコットの浴衣の裾を捲り、下着が露わになってしまった。

「ぶふっ!？」

「おおっ……」

織斑はすぐに顔を逸らしたが、俺はその下着を分析した。

豪奢なレース、際どい黒い下着、そういう事を目的とした、所謂『勝負下着』、か。

オルコット、今の学生にしたら中々いい度胸だ。これは好感度上昇か……。

俺はオルコットに対しての好感度を上げた。

「やれやれ、教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いつ、インコっ……!?!?!?!」

「冗談だ……」

千冬は笑うとスツと立ち上がり、襖の方へと歩いて行った。

そしてオルコットは起き上がり、服装を正そうとしたが、俺と目が合い、今までの出来事が俺に見られていたのだと察したのか、紅かった顔が更に紅くなり、涙目になってしまった。

……何故だ？ 俺が悪意を感じてしまうのは何故だ？

俺は軽い罪悪感から、オルコットに冷蔵庫にあった紅茶を、慰め代

わりに黙って渡した。

「ん？ オルコットにはもう渡したのか」

「あ？」

「イブキ、一夏を連れて部屋に行ってる」

「……何でだ？」

「何でもだ」

「俺的にはエレナから逃れるのと、もう少しお前の浴衣姿を見たいんだが？」

「アイツなら一夏と居ればそんなにしつこくないだろう。あと、見たいのなら後で来たらいい」

さりと夜のお誘いが来ましたよ。

とは言っても、酒を飲むぐらいだろうか。

「はあ、仕方ない。行くぞ織斑。早くせんと、女子の部屋に放り込むぞ」

「そ、それは勘弁！」

織斑は素早く立ち上がり、俺よりも先に部屋から出て行った。

そんなに放り込まれたくないのか。

今時の男は草食系でいかん。もつと喰らい付かなくては生き抜けんぞ。

イブキSIDE OUT

千冬SIDE

さて、イブキと一夏も出て行っとな。

「ほれ、これでも飲め」

私はこいつらに冷蔵庫に入っていた飲み物を渡した。

オルコットはイブキから渡された紅茶をしっかりと握り閉めていた。

「い、いただきます」

全員はぐびつと飲んだ。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「失礼な事を言うな。単なる口封じだ」

私もビールを取り出して一気に飲んだ。

この為の口封じだ。仕事中に酒を飲んでいるのを、な。

「さて、回りくどいのは嫌いだ。本題に入る」

私がそう言つと、こいつ等は顔を引き締めた。

「お前等、一夏のどこが良い？」

「……？ 私はただ同じ志を持つ幼馴染としか……」

チツ、面白くない。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

「ふむ、そうか。では一夏に伝えておこう」

「言わなくていいです！」

ふん、素直に言わないからだ。

さて、デュノアとボーデヴィツヒは言いそうだな。

「僕　　あの、私は……優しいところ、です」

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ」

何時か後ろから刺されそうだな。

ま、その時は私が守るが。

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

ふむ……まあ良いだろう。次だ。

「で、お前は？」

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろう」

あいつの何所が強い。

まあ最近になって私に訓練相手を申し込んできたから少しは強くなっているだろうがな。

「つ、強いです。少なくとも、私よりは」

そうかねえ……。まあどうでもいいさ。

私は二本目のビールを開けた。

「あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージも上手い」

先程も、オルコットは気持ち良さそうにしていたしな……。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「「「く、くれるんですか？」「」「」

「やらん」

「……ええ……」

「女ならな、奪つくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキ共」

と言いつつ、これは私にも言える事だ。

イブキの周りには強敵がゾロゾロと存在する。
しかも一夏とは訳が違う。

私も、もっと全力でいかなとな……。

「……それともう一つ」

三本目のビールを開けてガキ共を見た。

「……イブキの事は、どう思っている？」

これに反応したのは……全員か。
イブキよ……まさか生徒にまで……。

「先ず、篠ノ之だ」

「わ、私ですか!？」

「そうだ。早くしろ」

「……あ、兄の様に、尊敬する師匠で……でもカツコ良くて……優しく……強くて……」

「ああ、もういい」

チツ、こいつは白か。

しかし、篠ノ之は黒耶が目当てじゃなかったか？ いやまあ……別にいいか。

「次、凰」

「私は何んとも……。ただ、怒ったら怖い……」

恐怖故、反応したのか。

「次、オルコット」

「私にとって天星イブキさんと言う存在は一種の憧れでしたわ。男性の中では一番強く、賢く、自分の意志を貫くその姿に……私、実はファンクラブにも所属していますの」

まさかのカミングアウト。

これは私でも予想できなかった。

あのオルコットがイブキのファンだったとは……。そう言えば、初めてアイツが挨拶をした時、目を輝かせていたな。

「ですが、鈴さんの言う通り、怒ったら恐いですわ……」

アイツのアイアンクローはハンパないからな。私を凌駕してしまう程だ。

「因みに会員ナンバーは7ですわ！」

もうどうでも良い。

「次、デユノ……」

「もうっ最っ高ですよ！！ あの強さにカツコ良さ！！ 誰にも負けない信念の強さ！！ 数々の伝説や名言を残し、今や教科書にも出てくる存在！！ そんな方の教え子になれるなんて僕はもう感激で感激で！！ 今までテレビや雑誌でしか見れなかった天星イブキさんですよ！？ 限定グッズなんかバンバン出て、今や何万種類とあるんですよ！？ それ全部買うのにどれだけ苦労したか！！ そもそも天星イブキさんの存在を語れる筈が無いんですよ！！ あの高貴な方は正に神！！ 鬼神と名乗るだけに神様なんですよ！！

僕なんか毎日部屋のクローゼットを改造した聖壇に写真とグッズを祀って祈ってるし、前までは毎朝天星先生より早めに起きて寝顔を見ていたし、僕の朝は先生の顔を見ないと始まりませんね！！
もはやそんな領域の存在なんですよ！！　ですから　」

「もう良い。黙れ。口を閉じろ」

頭が痛い。下手したら私にもこう言った輩がいそうだ。

「セシリア！　僕は副ヘッドだからね！」

「むむっ……ヘッドでは無いくせに威張らないで下さいまし。でも……羨ましいですわ」

お前等はそこら辺で語り合ってろ。

「次、ボーデヴィツヒ」

「無論、敬愛する兄上です。それ以外の何者でもありません」

予想通りの答えが帰ってきたか。これもまたつまらんな。

「それで、教官殿はどう思われているのですか？」

「な、何……？」

「その……嫁にしたいのですか？」

嫁……恐らくアイツが教えたんだろうが……。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ええい！ 全員こっちを見るな！

「無論、私はイブキが欲しい」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「ずっと頑張ってきた……。エレナに邪魔されながらも、アピールしていき、あいつが喜びそうな事も考え、実行し、アイツの気を惹こうとした。そして私は遂に告白した！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「だがその時はそんな事をしている状況では無かった……」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「だが想いはしっかりと伝わった！ あとは振り向かせるだけだ！
！」

「「「「先生!!」「」「」」

そくだ！ 私は諦めん！！ 例え捨てられようが追い駆けて見せる！
！ どんな障害があろうと、私はそれを切り裂いて見せる！！

「ふっ、私を置いて何を話してるのかと思えば……」

「「「「ッ!?!」「」「」」

「……エレナ」

何時の間にかエレナが部屋に侵入して来ていた。

拙い……聞かれた。弄られる！

「この事を弄りたいが、今はそれどころではない」

「何……?」

エレナは手を厭らしく動かして近付いてきた。

ま、まさか……。

「夕食の時の恨み……今こそ晴らしてくれよう！」

「ま、待て！ ここのは生徒もいるんだぞ！？」

「何、安心しろ。……今回は全員参加だ」

「「「「「へっ！？」」「」「」「」

エレナの恐ろしい言葉を聞いた瞬間、ガキ共は部屋を出ようとしたが……。

「あ、開かないだと！？」

「何だよ！？」

「誰か！ 一夏さん！ 天星先生！！」

「ふっふっふ……さあて、お楽しみの時間と行こうではないか……」

この時、私はエレナが久しぶりに本当の魔女に見えた。

「あれ？ 先生、何か聞こえませんでした？」

「織斑、勉強から逃げ出そうとするな」

「……はい」

紅（前書き）

申し訳ありません。何故かネットに接続できない状態が続き、執筆する事が出来ませんでした。

これを読んでくださっている方々には、深くお詫び申し上げます。

そして久しぶりに書き上げましたので、どこかおかしい所があるかもしれません。

これから何卒よろしく願います。

紅

翌朝、朝食も済ませ、俺は黒のジャージ姿で、集まっている生徒達の前に立っていた。

横には千冬が白いジャージ姿で立って今日からの試験運用とデータ取りの説明をしている。山田先生もいるが、ただ千冬の隣で生徒たちを笑顔で見ていた。

余談だが珍しくラウラが遅刻をし、千冬に罰としてコア・ネットワークについて説明させられた。

操縦者同士の通信や相手のデータを進化の糧にする等々。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用気持ちは専用のパーツのテストだ。全員、迅速に行え」

千冬の命令により、生徒たちはテキパキと行動を開始する。

しかし、何故にISスーツがこんなにも水着に見えてしまうのだろうか。織斑が大変そうだな。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

千冬が『打鉄』の所に並んでいた筈を呼んだ。

「お前には今日から専用」

「やーーーーっほーーーー！！！」

「っ！！！」

この可愛い声、如何にも性格が天然そうなのこのニュアンス。まさか……。

俺は声が聞こえた方向を見た。

そこからは砂煙をあげて走って来る人影があった。

まさか……まさかまさか！！

「束か！！！」

間違いない！あの艶やかな美しい髪！あの可愛い顔は間違いないく！篠ノ之束！

俺は此方に向かってくる束に向かって大きく手を広げ受け止める体勢に入った。そして

「たば」

「ちーーーーちゃーーーーん!!」

ビューンっと、俺の横を通り過ぎて千冬にダイブしていった。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ　　ぐへえっ」

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

「くそ、逃がしたか」

「やあっ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいがあっ」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言っただ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！酷い！　ねえ、ちーちゃん！」

「……酷いのはお前だ。ほれ」

「んむ？　あ……」

「…………どうせ俺なんて……ただの石ころさ。いや……石ころとですら認識されて無いのさ……」

もういいさ。必死で理性を保ってきた俺が馬鹿だったんだよ。あのまま素直にしていたら良かったんだ。

「うわっ、天星先生の周りが大嵐なってやがる!!」

「あ、兄上!?! お気を確かに!」

「…………ウチの教師をどうしてくれる」

「あー…………だいじょーぶ! ラブリーな東さんにかければちょちょいのホイだよ!」

ああ、そうだ。貝になろう。それもしゃこ貝に。そうすれば大きくて誰かに見つけて貰えるだろう。ああ、そうしよう。そうすればこの苦しみから解放

「いーぶちゃん!!」

「ほあ?」

むぎゅう…………。

何だ、これ……？ 柔らかくて尚且つ張りが合って温かい。それにとっても良い香りだ……。

「ごめんね？ 別に無視したわけじゃないよ。こうやって焦らした方が、束さんを意識してくれると思って」

「……束？ 束、なのか？」

「うん！ 束さんだよ！」

「……たばあっ！」

「いぶちゃん！？」

束を抱きしめようとした瞬間、俺の頭部に何かが炸裂し、俺は吹き飛んだ。

「チッ、目障りだ」

「ち、千冬姉……」

「いやー！ 名簿がいぶちゃんの頭にめり込んでさってる！？ ちよっと！！ 死なないでー！！！」
いや刺

「な、なんのこれしき……！ エレナの誘惑に比べたら……」

「……スタンガンどーん！」

「じばばはっ！？」

な、何故だ！？ 俺は何も悪くは……ってこれ何ボルト！？ い、意識が！！

「ね、姉さん！！ 止めないか！！」

「あふん！」

箒が鞘で束を打ち飛ばし、俺を救いだしてくれた。

「ふん！ いぶちゃんなんかエレちゃんに喰われちゃえば良いんだ！」

「……じゃあ今からエレナの部屋に」

「だめだめえ！！ まだ私だけのモノだよお！！」

どっちだよ……。分かったから腰に巻き付けてくる腕の力を弱めな
いか！ く、苦しい！

「おい、束。自己紹介くらいしろ」

あ、あれ？ 何で箒はそんな絶望した！って顔になってんだ？ あ
っと、それより今はこっちだ。

「ところで、何で束がここにいるんだ？」

「いぶちゃんに恋焦がれて来たって、言ったら信じる？」

「今すぐにでも部屋に連れて行く」

「行くなドアホ」

「うぐっ」

くそ、最近千冬に殴られ過ぎてないか？ 拙いな……このままでは
からかう事が出来なくなってしまう。

「ほら束、さっさとしろ」

「んもー、これからがいいトコだったのにー。……よし、箒ちゃ
ん！」

「……！ は、はい」

束は俺から離れ、箒の目の前に顔をズイッと出した。

「大空をご覧あれ！」

束は天を指差し、俺達もつられて天を見た。

あ？ 何か降って来る……？

ズーンッ！

金属の塊の様なものが空から落下し、俺達の目の前に現れた。
そしてその金属の様な壁がパタリと倒れて、中にあったソレを露わにした。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが特定のISを抜いて現行ISを上回る束さんお手製のISだよ！」

中に入っていたのは紅いISだった。

束の言葉に応えるかのように動作アームによって出てきた。

成程、束は箒に『紅椿』を届けに来たのか。
しかし、何故今日なんだ？

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッシングとパーソナライズを始めようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

「…………お、お願いします」

「堅いよー！ もっと姉妹仲良くしようよー！」

「う…………ん…………」

束はそんな箒の返事に嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべて『紅椿』を箒が乗り易いように操作し、箒を乗せた。

そして空中ディスプレイを六枚投影し、キーボードも同じく六枚、次々と叩いていった。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ！ あとは自動支援装備も付けておいたからね！ お姉ちゃんが！」

「…………あり…………がとう」

「…………っ！ やっぱ箒ちゃんは可愛いねえー！」

「……………」

姉さんは本当に私の為に戦ってくれたんだろうか……。だとしたら私は……。

「……………」

「…………どうした、イブキ？」

「……いや」

『紅椿』は近接戦闘型だから、これからの訓練、やっと本格的に始められるな。

確か、束が俺の『鬼龍』と『邪天』を参考に作った武器もあるとか言ってたしな。

「あの専用機って、篠ノ之さんが貰えるの？ 身内ってだけで」

「だよねえ。なんかずるいなあ」

……チツ、ガキ共が。

「おい、生徒共」

俺は後ろで箒と束を見ている生徒たちに向き直り、腕を組んだ。

「先に言っておくが、篠ノ之箒は専用機に乗るに値する実力の持ち主だ。お前等も見ただろ、あのトーナメント戦。篠ノ之箒は『打鉄』に乗りながらもデュノアの『ラファール・リヴァイブ』と同等、いやそれ以上の力を示した。ああ、確かに俺が訓練を付けた。が、あの訓練メニューははつきり言って他の専用機持ちですら一日とて耐えられないメニューだ。生徒会長は知らんがな。それを今もノルマ

以上の結果を出しながら続けている。そら、これでも篠ノ之箒への専用機贈呈が不満な奴はいるか？ いるのなら出てこい。俺が論破してやる」

俺は生徒共が理解できるように説明し、箒への不満を消してやった。

俺は何も反論が無い事を確認し、再び箒と束の方を向いた。どうやら殆ど終わったらしく、今は織斑の白式を見ていた。

……あ、オルコットが束に自分のISを見て欲しいとか言ってる。そんな事しても自分に心の傷が付くだけ ってほら、滅茶苦茶に拒絶されてるし。あーら、涙目になって追い返された。

束は俺と同じで他人に関心を持たないからな。それであの時は色々問題が起きて俺が色々とする事に……。良く考えれば、あの時からかもしれんな。俺が束に惹かれていたのは。

「イブキ、顔がニヤけてるぞ」

「ん？ まあ、ちょっと昔をな」

「うう……」

オルコットがフラフラと下がってきた。

あちゃー、相当きてるな、これ。

「オルコット、気にするな。アイツはああいう性格なだけだから。別にお前が嫌いって訳じゃない」

「そうなんですの……?」

「ああ。俺も最初はそうだった」

「……それがどうして『婚約者』ですか?」

「ん、まあそこは置いといて」

「……いえ、そうはいきませんわ」

「あ?」

「『鬼神会』の一員として私はこの件についてじっくり聞く必要がありますわ」

オルコットがゴゴゴと音を鳴らして俺ににじり寄ってきた。

おいおい、いくら束に拒否られたからって、俺に向かってくるなよ。

オルコットに左腕でのデコピンで正気を取り戻させ、箒の方を向いた。

今度は全て終わったようで、試験運転に入ろうとしていた。

「じゃあ、飛んでみて。箒ちゃんのイメージ通りに動く筈だよ」

「はい」

『紅椿』に繋がっていたケーブルが次々と外れ、箒は目を閉じて意識を集中した。

そして次の瞬間には、衝撃の余波を残しながら上空に飛び上がった。

「ほう、速いな」

現行ISを上回るとは、まさにその通りだな。

「どう？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ……」

オープン・チャネルでの会話がここまで聞こえた。

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『あまつぎ雨月』で左のが『からわれ空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

束は指を空中で動かし、箒に武器のデータを送る。

「こ、これは……」

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説」

「紗奈姉さんのと同じ……！」

「はえ？」

「やばっ……」

しまった……束に紗奈と箒の事を伝えてなかった！ 唯一の妹にも
う一人勝手に姉が出来ただなんて知られたら……！

「いぶちゃーん、ちょー……とお話があるんだけどー？」

「……かくかくしかじか、以下省略だ」

「箒ちゃーん！！『雨月』は打突に合わせて連続ビーム！『空
裂』は斬撃に合わせて帯状のエネルギーをぶつけるんだよー！！
紗奈のとは違うからねー！！絶対違うからねー！！！」

そんなに取られたくないか。まあ、俺も取られたくはない。

「という訳で今からいぶちゃんが行くから打ち抜いて切りさいて」

「お、俺え！？ そんなもんミサイルでも何でも」

「んふふ……GO」

「い、イエス・ママ……」

怒ってらっしゃる。

俺は仕方なく『天照』を展開し、箒のいる高度まで上昇した。
それから右手に『鬼龍』を、左手に『邪天』を展開し、箒と真正面
に向かい合った。

「箒、その刀は確かに紗奈が使っていた刀を参考になっている」

「やはり……」

「ならやり方は分かるな？」

「はい！」

箒は返事と同時に『雨月』を突き出し、幾つもの紅いビームを放つ
てきた。

俺は上へ飛び射線上から退避した。
目標を失ったビームは後ろの雲に命中し、雲を綺麗さっぱり消し去
った。

「はあっ！！」

今度は箒は『空裂』を振るい、斬撃を飛ばした。
俺は『鬼龍』を振り上げ、斬撃を受け止めようとしたが、予想以上の威力のより、身体ごと弾かれた。

「なっ！？」

おいおい、俺が見た時よりも威力が上がってるぞ！ ええい！ 少しでも力を出さないとマジで撃ち落とされそうだ。

「はあああっ！」

箒は『雨月』を繰り出し、ビームを放ってきた。

俺は『邪天』にエネルギーを送り、横に振り払った。

するとエネルギーが放出され、赤黒い障壁となり、ビームを防いだ。そればかりでなく、そのまま箒に襲いかかった。

「うわっ！？」

「どうした箒！ その程度で師匠であるこの俺に一撃当てれるとでも思ったか！？」

「まさか！　まだまだ！」

今度は『空裂』を振り払い、斬撃を飛ばして来た。

「綺麗な斬撃だ。だが綺麗過ぎる！」

俺は『鬼龍』にエネルギーを纏わし、『空裂』よりも大きく、赤黒い斬撃を飛ばした。

二つの斬撃波ぶつかり合い、空中で爆散した。

お、少しだけ加減し過ぎたか。そのまま斬り裂こうと思ったんだがな。

「はあああつー！」

「っー！」

筈が『紅椿』で爆炎の中から現れ、俺目掛けて突撃してきた。

やべっ、速い！

まさか刀の練習だけではなく、俺を討ち取りに来るとは思ってもいなかったから、油断してしまっていた。

筈は二本の刀を交差させて俺に振り払ってきた。

「『天星流九ノ型・十文閃』！！」

「チツ！」

敵の懐に入り、全く同時に二つの強力な斬撃を与える技。

速さと力が必要な技を、『紅椿』の機動性が可能にさせた。

だが俺は斬線を見切り、その場所に刀と剣を置いて防いだ。
しかし衝撃までは消し切れず、俺は後ろへ吹き飛ばされた。

「つと……ほう、完全に油断していたとはいえ、まさかここまで攻撃を与えるとは……。紗奈でも出来なかったぞ」

「あ、ありがとうございます！」

弟子は育つのが速いなあ……。

俺は箒を見てうんうんと頷いた。

その時、下が騒がしい事に気が付いた。そして千冬が俺と箒に向かって叫んだ。

「天星先生、テスト稼働は中止だ。すぐに戻って来い」

「……何があった？」

「……緊急事態だ」

「……………」

平穩は一時の休戦。

昔、義母さんに言われた言葉が何故か頭によぎった。

狂気（前書き）

いやー、試験で書く時間がありませんでした。

狂気

「現状を説明する」

旅館の風花の間では専用気持ちと全教師が集められている。
薄暗い部屋の中、大型の空中投影ディスプレイが浮んでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

千冬の説明により、専用機持ち共の顔が険しくなった。

福音か……確かアメリカの国家代表のナターシャ・ファイルスが操縦者だったけな。

顔は知らんがそこそ腕が立つとかなんとか。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

おーおー、織斑があたふたしてるな……。男のくせに情けない。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「「はい」」

挙手したのはオルコットと珍しく織斑だった。

千冬はほんの少しだけ驚いてから織斑の名を呼んだ。

「専用機持ちなら、天星先生やレンヴァルス先生も出撃するんですか？」

ふむ、確かにそう思うだろうな。だが残念、そうは問屋がおりさない。

「残念だが、俺とエレナは出撃できない」

「どうしてですか！？」

「まず俺は過去の大戦で身体にダメージを負った。そのおかげで高速戦闘は不可能に近くなってしまった。データを見る限り、福音は超高速で動いている。なら俺は戦えない。エレナにしてもそうだ。こいつの戦闘スタイルはその場に止まっただけの攻撃。今回に関しては分が悪い」

「別に勝てない訳ではない。苦しいだけだ」

横でエレナが間違うなよと注意してきた。

いや、苦しいって……まあ負けるとは決まっていけないけどさ。

「という事だ。いいな」

「は、はい」

「ではオルコット」

「はい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の重要軍事機密だ。決して口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

公開された詳細データを取り囲み、専用機持ち共は相談をし始めた。広域殲滅を目的とした特殊射撃型、攻撃と機動の両方を特化した機体、スペックでも全員のISを上回る。更に格闘性能が未知数ときた。

正直、こいつらに相手が出来るのかどうかもの凄く不安だ。

偵察も、相手の速度が速過ぎて行えない。一度限りのアプローチが限度。ならば必殺の一撃で落とすしかない訳だが……。

「お、俺え！？」

「当然」

全員の声の一つになった。

当たり前だろう、『零落白夜』ならば撃ち落とせる可能性が高いのだから。

あとは『白式』をどうやってポイントまで運ぶかだ。エネルギーは全て攻撃に回さないといけないし、目標に追いつける速度の出せるISじゃないといけない。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

千冬が織斑にそう言った。織斑は少しだけ考え、しっかりと目を開いて答えた。

「やります。俺がやります」

……上出来だ。その眼なら大丈夫だな。

「よし。では誰が織斑を」

「箒で良いのではないか？」

「何？」

エレナがニヤツと笑いながら箒の傍に寄った。

エレナは箒を後ろから覆い被さり、箒の頭を撫でくり回した。

随分と気に入っている様で……。

「束に貰ったんだろう？ 『紅椿』を」

箒の左手首に巻かれている金と銀の鈴を紅い紐で巻かれているものを触った。

「だろう、束っ」

エレナは槍を展開して天井に突き刺した。

ドスツと刺さる音の他に「にゃっ」という音が聞こえたが、まさか……。

「そら、早く出て来ないか。でないと剣戟の餌食になるぞ?」

そう言いながらもエレナはドスドスと次々に展開して刺し続けた。

おい、天井弁償するのは誰だよ。

「エレちゃんのバカァー! 東さんのラブリーでセクシーな身体が傷つくじゃんか!」

「はんっ、私に比べればまだまだ乳臭いガキだ」

「何をー!? えっちゃんのくせに!」

「え、えっちゃん言うな!」

東が天井から飛び降りてきてエレナと口喧嘩をし始めた。

つたく、こいつ等も相変わらずだな……。

「えっちゃんえっちゃんえっちゃんえっちゃん!」

「その田舎臭い呼び方は止める!」

「だってエレちゃんって呼び方、何だか語呂が悪いし。えっちゃん

んの方が良いじゃんか！」

「良くない！ 魔女がそんな田舎臭い呼び方であってたまるか！ この胸だけのバカウサギが！」

「胸バカにすんな！ 気持ち良いんだぞ！ 柔らかいんだぞ！ 美味いんだぞ！」

「ふっ、ガキの胸より大人の胸の方が断然いいの決まっている！ 子供は大人しく帰ってママのパイパイでもしゃぶってる！」

「いーっだ！ いぶちゃんに相手にされないからって怒らないでよね！ まあ、私は今夜にでもにゃんにゃんするけどね！ まいったか！ あっはっは！」

「残念だったな。私は相部屋の時にもう既に楽しんでいたのだよ」

「な、何だとー！？」

「凄かったぞ。欲しいと言っているのに焦らして焦らして、私を罵って、それから……嗚呼！ 思い出しただけでも火照って……」

「ぐぬぬぬ！ えっちゃんのバカァー！」

「「お前等いい加減にしろっ！！」」

「「ぎゃふん！」」

俺と千冬の殺人チョップが二人の頭に炸裂した。

「お前等、今がどういった状況下解っているのか!？」

「「一番相手にされて無い奴はすっこんでろ!」「

「……………」

ピンポンパンポン……。暫くお待ちください。

「このクソ野郎が」

「お、落ち着けて。な?」

「ふんっ」

千冬が刀を肩に担いで足元の二つのゴミを見下ろした。

刀に赤い液体が付いているように見えたが、気のせいだと思う。

「で、なぜ筈なんだ？」

「あ、『紅椿』の展開装甲ならいけるから……です」

「み、右に同じく……」

束とエレナが震える片腕を上げて親指を立てた。

「……イブキ、説明を」

「へ？ 俺？」

「説明を」

「……はい」

俺は束の懷から端末を引っ張りだし（この時束が変な声を出した）、メインモニターに『紅椿』のデータを映した。

「簡単に説明するぞ。『展開装甲』というのは第四世代型の装備だ。第四世代型というのは『パッケージ換装を必要としない万能型』だ。攻撃・防御・機動のあらゆる状況に即応することが可能だ。まあ、ぶっちゃけ最強だな」

因みに今世界では、第三世代型の試作機が作られている最中である。

下手すれば、この『紅椿』は戦争の火種になりかねん。

「具体的に『白式』の『雪片式型』に使われている。『紅椿』はそれを全身のアーマーにしたというわけだ」

……まあ、誰も発言できないわな。こんな世界を馬鹿にしたような天才的な発明は。

「でもこれも、『紅椿』が完成型になればの話だ。だろう？ 束」

「ザツツライト！ どうどう？ 凄いでしょ？ 褒めて褒めて！」

「ああ、凄いな。……下手したら戦争になるだろうが」

左腕で束の頭を鷲掴みにした。

束は面白いくらいに暴れてギブアップしてくるが、千冬がもっとやれと目で命令してくるので暫くの間続けた。

「で、でもでも、海で暴走っていえば、『白騎士事件』を思い出すよね」

束が俺の拘束から抜けだし、わざとらしく話題を変えた。

『白騎士事件』。この名を知らないものは世界中何処を探してもい

ないだろう。

全世界のミサイル二三四一発が一斉にハッキングされ、日本に向かって発射された。

絶望の淵に立たされている時、現れたのが白銀のISを纏った中世の騎士と思わせる姿の女性だった。

彼女は全てのミサイルをその手に握る剣でぶった切ったのだ。

そして世界各国の奴らが彼女を捕縛、若しくは撃墜を試みたが、あっさりと敗北。彼女は何処かへと去っていった。

そう、俺は義母さんに“教えられた”。

「それにしても。白騎士って誰だったのかな？　ね？　ね？　ちーちゃん」

「……知らん」

「私の予想によるとバスト八十八……」

ごすつ。鈍い音がして振り返れば東が千冬により制裁を加えられていた。

ちよつと待てよ……バスト八十八って……。

「八十八……まさかちふ」

「死ねっ」

「はうっ　　！！」

お、男の勲章に千冬の蹴りが炸裂してしまった。

痛い……苦しい……死んじやう。何だよ……昔より今の方が大きいんだなって言おうとしただけなのによぉ……。

俺は千冬が白騎士だというのを本人から聞いた。その時は驚きも何とも感じない時だったからな、対してリアクションをした覚えが無い。

「話を戻すぞ。『紅椿』の調整にはどれぐらいかかる？」

「七分あれば十分だぜ」

「では本作戦は織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜とする。作戦は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

千冬の一声でそれぞれ準備に取り掛かり始めた。

どれ、俺も何か手伝うかな。

取り敢えず『紅椿』のセッティングをしている束と箒の下に寄った。途中、転がっているエレナを踏んずけた気がした。

「ふんふん」

束は四つの前腕部、移動型ラボ『吾輩は猫である（名前はまだ無い）』を展開して『紅椿』を弄くりまわしていた。

「あ、イブキさん……」

「うにゅ？ いぶちゃん？」

箒が俺に気付き、束が超高速の手を止めないで振り返った。

「乗り心地はどうだ？」

「は、はい。凄いとか……」

「でっしょー！？ 箒ちゃんの為に一生懸命に作ったんだから！」

箒の言葉が嬉しかったのか、束は顔を綻ばせる。
それでも手は止めない。寧ろ速くなった。

「……………」

「……ん？ どうした？」

箒がジッと俺の顔を見ているのに気付き、尋ねた。

「あ、あの……姉さんと婚約しているというのは……」

「ああ、本当だ。知っているのは極僅かな人だけ。ま、それも今日で学園中に広まる事になったけどな」

女の噂好きは恐いからな……。もの凄く脚色される気がして嫌なものだ。

「そ、そう……ですか……」

「……何だ？ 嫉妬してるのか？」

「へえ！？ / / / / /」

「なぬっ？ 箒ちゃん、本当なのかな？」

「ち、ちがつ！ / / / / /」

おうおう、面白いくらいに真っ赤にしゃがって。つっても箒はアイツが好きなんだよな……。

以前に聞かされた箒と月夜黒耶という男の話。箒が約束をした相手……。

「んん……いぶちゃん、姉妹な并って食べれる？」

「んなっ！？／／／／」

「それを真剣な顔で聞くな。もっと羞恥心とかそういうモノをしれ」

お前は一体どうしてしまった。エレナに毒されたか。いや、元々だったな。

「だってえ、箒ちゃんと一緒に食べられるのも……へへへ」

「へへへ、じゃない。ったく……で、箒はさっさと戻って来い」

箒は顔を真っ赤に染めて何処かあらぬ方向を見て固まっていた。

……何を想像してんだ。

「箒、今回の作戦は実戦だ。絶対に気を抜くな。専用機を使えるからといって舞い上がるなよ」

「っ……はい」

俺が真剣に話すと、箒も真剣な表情になり、しっかりと頷いた。

「そうだな……上手くいけば『天星流』の必殺技の一つを教えてや

ろつか」

「姉さん！ 完璧に仕上げてください！ 期待してますよ！」

「お、おおっ！ お姉ちゃんやっちゃんぞ！」

……やっぱりこいつら姉妹だ。本当に現金な奴らだ。束は兎も角、
箒の将来が本当に心配だ。

十一時。太陽が容赦なく照りつける中、作戦が開始された。

『白式』を背負った『紅椿』が飛翔し、目標の場所まで向かいだした。

流石は『紅椿』と言ったところだろうか、その自慢のスピードで短時間で目標に接近してゆく。

「速いな……」

隣でエレナがモニターを見て呟く。

「……………あの馬鹿が」

「ん？ どうした？」

「箒の奴、浮かれると言ったのに浮かれてやがる」

「は？ 何で分かる？」

モニターはレーダーでしか表示されていない。それでは箒の表情を取れる筈が無い。確かにそうだ。

「……………聞いた」

「っ……………お前、何をやっている」

「仕方ないだろう。一度心配したら収まらないんだよ」

「この……………はあ」

エレナが頭を押さえて溜息を吐いた。

エレナが溜息を吐くのは珍しい。それ程の事をしたのだ、俺は。

まあ、それはそれとして、箒が浮かれている以上、こちらも準備をしておいた方が良くかもしれない。

「……………何？」

「どうした、イブキ」

この感じは 来る。アイツが。

俺は呼び止めるエレナを無視して『天照』を展開した。

イブキSIDE OUT

第SIDE

目標の福音に到達し、一夏が『零落白夜』で攻撃をしたが避けられ、私達は福音と戦闘を行っている。
福音は翼から大量の光りの弾丸を放ち、高機動性を生かしてこちらの攻撃を難なく避ける。

「La」

甲高いマシンボイスを響かせ、私達を撃って来る。

くっ、これでは勝てない！

「一夏！ 私が動きを止める！！」

「わかった！」

こんな所で負けられない！ 強くなって約束を果たすんだ！

私は両手の刀を強く握りしめ、福音に突っ込んだ。

「L a L a」

福音は弾丸を放ち、私を近寄らせないようにしてくるが、こんなものの、師匠との鍛錬の方が上だ！

弾道を見切り、最小限の動きで弾丸を避ける。そして福音に向かって二本の刀を上から叩き付けた。

福音は腕で防いだが、動きは止まった。

「今だ！ 一夏！」

一夏が『零落白夜』を構えて福音を 通り過ぎた。

「な、何！？」

一夏は海面に向かった福音の弾丸の前に出て、『零落白夜』で弾丸

を薙ぎ払った。

「何をしている!？」

「船がいるんだ! 封鎖したはずなのに
ああくそつ、密漁
船か!」

密漁船!？ こんな時に何をやっているんだ!!

「馬鹿者! 犯罪者などを庇って……お前のエネルギーも切れたではないか! そんなやつらは
」

「
そうよね、悪い人間何かは死んだ方が良いわよね」

私はその場からすぐに移動した。すると私が先程までいた場所に何かが通り過ぎ、そして一夏も通り過ぎ密漁船に命中した。
密漁船は爆発し、海の藻屑となって消えた。

「なつ
!？」

「つ、
第!!!」

一夏が私の名を呼ぶ。そして気付いた。光りの弾丸が私に迫っている事に。

福音が私に向かって放った弾丸はまっすぐ伸びてきて
私の前に出た一夏に全弾命中し、爆発した。

「ぐああああっ！！！！」

「い、一夏あ！！！」

一夏が爆発に吞まれ、海へと落ちていく。私は落ちる一夏の腕を掴み、一夏の顔を覗いた。

血の気が引いた。熱波に焼かれ、身体のおちこちが火傷し、出血もして気を失っていた。

「一夏！ 一夏っ！ 一夏っ！！！」

「La」

福音が更に弾丸を放とうとしてくる。

そんな……私を庇って……駄目だ！ 死んでは駄目だ！ お前も約束を果たすのだろう！？

福音が弾丸を放ち、私と一夏に襲いかかる。
私は咄嗟に一夏に覆い被さり、一夏を守ろうとした。

「あらあら、美しい友情ね。潰したくなるわ」

先程の声が聞こえ、襲いかかって来ていた筈の弾丸が全て弾かれた。顔をゆつくりとあげると、そこには真っ黒い、女武者のようなISが存在していた。

「どうも、初めまして。『ノアの箱舟』のメンバー、シオン・アイルスよ」

紫の髪をした女の人は、綺麗な笑みを向けて挨拶をしてきた。

「それにしてもさっきから煩いわね、あのガラクタ」

シオンと言った女は福音を鬱陶しそうにみて、右手を福音に向けた。

「今は見逃してあげる。バイバイ」

そう言った瞬間、右手から黒い光りが放たれ、矢のように福音に襲いかかった。

福音は何とか回避し、そして離脱していつてしまった。

「そうそう、オモチャはどっかに行つてなさい。さて……」

「っ……」

女がこちらへ振り向いた。笑顔を浮かべているが、その表情は何処か恐ろしく感じた。

まうで狂気に呑みこまれる様な、そんな恐怖感。

「ふふ、どうしたの？ 私が怖い？」

「くっ……！」

「でも貴女は私と同じなのよ？」

「何だと……？」

私がこの女と同じ？ 馬鹿な、あり得ない。こんな狂気染みた顔は持ち合わせていない。

「だって、貴女さっきの密漁船見捨てろって言ってたじゃない」

「っ……！？」

言った。犯罪など庇うなど。一夏に確かに言った。

「ふふふ、貴女その力に溺れかかっているわね。言われなかった？
貴女の師匠に。浮かれるなって」

言われた。浮かれるなど。だが私は浮かれていた。

実際に動いてみると私はこの『紅椿』の力を感じ取れた。これで強くなれる、約束を果たせると。無意識のうちに浮かれていた。

「いいのよ？ そんなに失望しなくて。それが人間の摂理なんだから」

「あ……ああ……！」

恐い。無性に恐い。何だこの恐さ、雰囲気、声、顔、言葉、存在感。この女の全てが恐い。

「だから私は思うの　人間なんて滅んでしまえと」

動けなかった。女が黒い剣を展開して突き立てて来るというのに。指一本動かせなかった。

女の速さは速くない。ただゆっくりと来るのに、私は瞬き一つ出来ない。

支配された。何に？ この女が放つ狂気に。

死ぬ。誰が？ 私が、一夏が、人間が。

「さようなら」

目の前に晒された切っ先が私の身体に迫る。

しかし、その前に何かが女に体当たりを喰らわせた。

「はああああっ！」

「ぐっ！ 貴方……！」

赤黒いIS『天照』、イブキさんだった。

イブキさんは女に体当たりを喰らわせ、更に拳を叩き込んだ。

今までにない気迫。イブキさんの顔がとても恐かった。

「このっ
」！

女が剣を振るうが、その前にイブキさんは離れ、私と一夏の腕を掴み、この場からもの凄いスピードで離脱していた。

「あーもうっ！ 体当たりなんてしないでほしいわ！ しかも殴っていったし！ まあいいわ。“刺せちゃったし”しね」

「ヒッグ……！ い、イブキ、さん……っ！ 一夏がっ！ 一夏がぁ！」

イブキさんに引っ張られている途中、私はあの女から逃げれた安心からか、涙が溢れだし、一夏の事もあって更に顔を歪めた。

「……………」

「一夏が私、を……っ！ シールドもっ、無かった、のにいつ！」

イブキさんの身体を掴んでそう訴えるが、イブキさんからの返答がまるで無かった。

「何か言つて

え？」

見えた。

見えてしまった。ドス黒く、赤いソレを。

見えてしまった。大きな穴を。

見えてしまった。生気のない瞳を。

見えてしまった。イブキさんの胸の真ん中に大きな穴が開いているのを。

「イブキさんっ！！ きゃっ！」

飛んでいた『天照』が急に高度を下げ始めた。まるで不時着するように岸边に転がり落ち、私と一夏は投げ出された。

「うう……っ！ 一夏！」

一夏に駆け寄り、容態を確認する。水がクッションになって更に大きな怪我はしていなかった。が、重体なのは変わらない。

「イブキさん!!」

私はイブキさんを探した。

いた。ドス黒く赤い血を海に染めながら浮んでいた。

「い、いや……!!」

「篠ノ之!　っ!？」

千冬さんが駆け付けてきて、イブキさんの姿を見て息を呑んだ。

「エレナっ!!　すぐに手術だっ!!!!」

「分かっている!!」

私は千冬さんとレンヴァルス先生がイブキさんを救出しているのを見ただけだった。

一夏も他の教員に運ばれ、私はゆっくりと立ち上がり、イブキさんの近くに寄ろうとした。

が、足に触れた海の水が赤く染まっているのに気が付き、感情が爆発した。

「いやあああああつ!?!?!」

目覚めの前兆（前書き）

さてさて、今回は期待しないでください。自分でも「あ、これは駄目だ。屑だ。何やってんの？」と、思ってしまった程の出来となってしまうしました。

頭の中では完璧なのに書いてみたらめっちゃおかしくなるのってありますよね？

目覚めの前兆

真っ赤。いや黒い。いや、そのどちらもだ。
目を開けるとその世界が広がった。

…… ああ、またここに来たのか、俺。

どっちが地面なのか分からないこの世界の中で、俺は溜息を吐いた。
という事は俺やられたのか。まあ、そりゃそうか。超高速で飛んで
胸刺された身体にえげつないダメージが来るか。

「おい、居るんだろう？ さっさと出て来い」

俺は投げやりな感じでここの主を呼んだ。
すると世界が一変し、何も無かった世界から日本庭園のような場所
に変わった。

一本の杉の木に大きな一つの岩。暗い空に綺麗な満月が輝いていた。
そして、岩の上に一人の女性が座って空を見上げていた。
長い黒髪に黒い和服を着た女性。

「おい、“天照”」

「……また来たの？」

「ああ、来てしまった。向こうの状況は？」

「貴方の身体は瀕死。あの織斑って男の子は意識不明。後はまあ……
……どうでも良いわね」

女……天照は面倒くさそうにそう答えた。

瀕死か……無理し過ぎたな。

「なあ……俺は前みたいに動けないのか？」

「……戻りたいの？」

天照はこちらを振り向いた。黒い瞳が俺を捉える。

「戻るのか？」

「……ええ。でも、人間からまた一步離れるわよ？」

「……“記憶”、か」

俺の失われた記憶。それをこいつは所持している。俺を人間にして
おく為に。

「記憶をある程度戻せば、貴方は前の身体に近づける。でもそれは“鬼神”に近づくってことよ？」

「だがそれしか無いのだろう？ このままではシオンに全員殺される。アイツと撃ち合えるのは『鬼神因子』を持った俺しかない」

「……良いわ。けど、どの記憶を返すのかは私が決めるわ。貴方はまだ人間でいてほしいから」

「……ありがとうよ」

「でも気をつけなさい。貴方という人格と鬼神の人格は別物よ。呑まれないようにしなさい」

その忠告を最後に俺は意識を飛ばされた。

イブキと一夏が撃墜されて三時間。

どちらも意識を戻さず、ベッドの上に横たわっている。

容態は一夏はまだ良い。身体の損傷は軽いとはいえないが重いともいえない程だが、イブキはそうではない。

心臓のすぐ横を貫かれ、超高速移動が原因で筋肉が断裂、内臓の損傷、さらに出血が多く輸血しなければならなかった。

しかしイブキの血は特別だ。輸血できる血はこの世界で二人しかない。

伊志摩紗奈とシオン・アイルスしか存在しない。『鬼神因子』という特別なモノが存在する血でないと輸血できない。

だからオルコットに紗奈の家を教えてISで連れて来てもらった。

「……………」

「千冬、そう怖い顔をするな」

「煩い。無茶をしたアイツが悪い」

作戦会議室で私とエレナはモニターを見ていた。

何故『ノアの箱舟』が福音の隣で待機している。まさかあいつらがハッキングして暴走させたのか？

いや、そんなことをするあいつらではない。あいつらならあんな物を使わず自分たちのもので行動するはずだ。

「……………」

「ふんふん」

部屋の隅で端末を弄っている束を見る。

まさか……。いや、そうなら辻褃が合うかもしれん。

「しかし、こうなった以上、私たちも動かなくてはいけなくなるかも知れんな」

「だがエレナ。私にはもう『暮桜』が無い。戦う術が無い」

「そんなもの、束に作ってもらったらいいだろっ」

「出来るかそんなこと」

しかし、エレナの言うとおりだ。そろそろ他のメンバーも動き出すだろう。

そうなれば私たちも出なければ勝ち目は無い。イブキ一人だけでは無理がある。

「織斑先生！ 大変です！」

「どうした？」

山田先生が大声で叫んできた。

まさかノアが動き出したのか？

「専用機持ち達が勝手に出撃しました！」

「何だと!？」

不味い、今福音の横にはシオンが……! あいつらでは殺される!

ふ〜ん、アメリカもまああのモノを作り出したわね。
でも私たちと比べるまでも無いが。

「聞こえて? ナターシャ・ファイルス。ああ、ファミリーネーム
が似てるなんて気味が悪いわね」

「……………」

「返事が出来るはずないつか。まあ良いわ。このガラクタ、壊すか
ら」

ブンブンと飛ばれてても鬱陶しいからね。

「…………ん? 何かしら?」

これは…………ふふ、彼も世話のかかる生徒を持ったものね。こんな愚
かな生徒を持つなんて。

「『夜叉』はリーダーでは決して捉えられないから仕方ないか。けど、ド素人が束になったって勝てるわけないのにね、福音？」

上空に隠れて観戦でもしてまじょうか。暇つぶしにはなるでしょう。あ、あとデータ採集もしなくちゃね。

「……………」

目を覚ますと左手に違和感を感じた。
誰かに握られている感じだった。
俺は首を動かしてその誰かを確認した。

「紗奈？」

「え……？ お兄ちゃんっ！」

俺が起きたことに気づくと、紗奈は抱きついてきた。
よく見ると、もう一つベッドがあり、そこには織斑が寝かされてい

た。

「お兄ちゃん！ 良かったあ……起きてくれた……！」

「紗奈……何故ここに？」

「セシリアちゃんが来てね、お兄ちゃんが撃墜されたって。それで血が足りないからって」

「そうか……」

『鬼神因子』は俺と紗奈とシオンしか持っていないからな……。オルコットには礼を言わなくてわな。

「……紗奈、もう気付いているか？」

「……うん。勝手に出て行っちゃったね」

「何をしてるんだか、あの餓鬼どもは」

ベッドから降りて身体を伸ばす。

「……記憶、返してもらったの？」

「ああ……我ながら、罪深いことをしてたもんだよ」

どう説明したら良いんだろうな、東には。あと千冬とエレナ、紗奈にも。

ヤバ……義母さんにもしくちゃなんのか。死にたくなる。

「聞かないほうが良い？」

「今はそうしておいてくれ。さて、こいつもそろそろ起きるか」

そう言ったのと同時に、織斑は目を覚ました。

「よう織斑。目覚めはどうだ？」

「天星さん……」

「やる事は……分かるな？」

「……はい！」

いい返事だ。それでこそ……。

「紗奈」

「はい、千冬さんには私から言っておきます。いってらっしゃい、

イブキさん」

「……行くぞ、織斑」

「はい！」

「何だこいつは！？」

「ラウラ！ そいつに近づくな！」

黒い武者がラウラを襲う。

福音を攻撃している最中、シオン・アイルスという女がまた現れた。福音を一撃で海に殴り飛ばし、私たちに攻撃を仕掛けてきた。

リーダーでは確認できなかったはず。なのにすぐ近くから現れた。

私は『雨月』と『空烈』を強く握り締めて武者に向かった。

「ラウラから離れる！」

「あら？ 貴女はあの時の怖がりさんじゃない」

刀を振るうも片腕だけで止められる。この様子ではシールドエネルギーは削られていない。

「福音を倒せるのかどうか見ていたのだけど、正直言ってつまらなかったわ。だから私が壊してあげる」

「貴様、何者だ!？」

「出来損ないの兵器に教えるわけないでしょ」

「ぐあっ!」

ラウラが蹴飛ばされ、左手をラウラに向ける。

そして黒い光が左手に集まり、矢のように光が放たれた。

「ああああっ!」

ラウラのAICで防ごうとするも、まったく意味を成さず命中する。

「そんな小細工で防ぐことが出来るはずないでしょ。これだから出来損ないは」

「それ以上口にするなっ!」

脚部の展開装甲を展開し、回し蹴りを放つ。が、それも片腕で防がれ、足を掴まれた。

「この状態で撃つたらどうなるかしらね？」

「くっ！」

「箒さん！」

セシリアがブルー・ティアーズでシオンを撃つ。
シオンは足を離し、両手をセシリアに向ける。

「セシリア避ける！」

ビームが当たっているにもかかわらず、狙いを定め、放つ。

「くう！」

セシリアは避け、私もこの好きに離脱した。

「あらあら、この程度？」

「くそ……」

「箒、何か弱点とか分からないの！？ 目の前で天星先生が戦ってたんでしょ！？」

「分からん！　そもそもただ殴ってただけだ！」

「このままじゃやられちゃうよ！　どうにかしないと！」

鈴とシャルロットの攻撃もまったく効かず、私たちはお手上げ状態だった。

「……もういいわ。面白くもないし、終わりにしましょ」

シオンがそう口にした瞬間、私たちは吹き飛ばされた。

「きゃああっ！！」

セシリアの叫び声。

「ぐうつ！！」

鈴の声。

「わあああっ！！」

シャルロットの声。

「あああああつ！！」

ラウラの声。

何をされているのか分からない。相手が目に見えないスピードで移動し、私たちを攻撃している。

「あああああつ！！」

私も攻撃された。何か腕に鎖のようなものが絡まっていて、それに引っ張られた。

「さあ、纏めて殺してあげる」

引っ張られた場所には全員が集められ、その場所から動けなかった。相手は弓を射る構えを取り、黒い光が弓に、矢に変化してゆき、私たちを狙った。

「さあ、新たな世界の礎となちなさい！」

矢が放たれ、それは巨大なビームの砲撃となった。

死ぬ。そう確信した。

せめて最後に、黒耶さんに会いたかった。大好きだと言いたかった。

襲い来る砲撃を睨み、覚悟を

「させるかああああっ！！！」

赤が目の前に現れた。

それは翼を盾にし、黒いビームを受け止め、私たちを守った。

「はっ、間に合ったようだな」

「い、イブキさん！？」

「くっ、もう起きたの」

「俺だけじゃないかな」

「なん」

「はあああああっ！」

敵の上から白が襲った。

『白式』。だが姿が変わっていた。大型の四つのウィングスラストを背負い、左手が大きなクローとなっていた。

「へえ……」

一夏が振り下ろした『雪片』を軽く避け、一夏に攻撃しようとしたが、イブキさんが大型ライフルでそれを阻止した。

一夏は避けられるとこちらにやってきた。

「よう」

「一夏……貴様！ 心配させておいてどうしてそう軽く……」

「まあ良いじゃないか。お前ら、まだ生きてるよな？」

イブキさんが鎖を引き千切り、私たちを解放した。

「兄上！ よくぞご無事で！」

「ラウラ、喜ぶのはまだ早い」

生きていることを確認できたイブキさんはこちらをジッと見つけて

くる相手を見つめ、指示を出してきた。

「再開を喜ぶたいのは分かるが、まだ福音は死んでいない」

「えっ!？」

そういわれると同時に海から福音が飛び出してきた。

背中からエネルギーの翼を生やし、獣のような咆哮をあげた。

「いいか、俺がシオンの相手をする。お前らは福音を仕留めろ」

「し、しかし！ イブキさんは高速戦が出来ないはずでは！」

「安心しろ。……ヒーローになるんだろ？」

「え……?」

それは、黒耶さんとの約束。

「あの時の約束を今果たしてくれよ、第……一夏」

「え……どういうこと……ですか？」

そんな言い方、まるでイブキさんが黒耶さんじゃないですか。

それに一夏って名前で……。

「箒、兄さんなんだよ！ 天星さんは黒耶さんなんだよ！」

「なっ……！」

「正確には“だった”だな」

「一体どういう……！」

「詳しくは後でだ。行くぞ」

「ま、待つて……！」

イブキさんは武者に向かって行ってしまった。

イブキさんが黒耶さん？ 確かに少しだけ似ている気もするが、それだけで黒耶さんというわけでは……。

「箒。今はこっちに集中しよう」

「あ、ああ……」

約束を果たせ……。ああ、そうだ。私は約束を果たさねばならん！
絶対に果たしてみせる！

「行くぞ！ 皆！」

一夏の合図で戦いが再開された。

鬼神と鬼神（前書き）

これで臨海学校編は終了です。

なにやめちやめちな展開かもしれませんが、よろしく願います。

鬼神と鬼神

『箒はどんなヒーローになりたいんだ?』

『え、えっと……誰よりも強くて、大好きな人を皆守れるヒーロー!』

『一夏は?』

『世界一最強な正義の味方!』

『はははっ、そうか。じゃあちゃんとなって見せろよ? ちゃんと見てるからな?』

『うん!』

『ちゃんと見ててやるからな……』

『何をかしら?』

『っ……』

右から迫り来る剣を刀で受け止める。左の『邪天』を横に振るい、

『夜叉』の胴体を斬り付ける。しかし夜叉は離れ、剣を避ける。

「遅いわね。黒耶ならそんなハエの止まりそんな攻撃はしないわ」

「ああそうかい。その黒耶はもういないがな」

「……貴方が殺そうとしてるんでしょう！」

シオンが左手からエネルギーの矢を放つ。

『鴉』……夜叉の射撃武器。自身のエネルギーを矢に変えて放つ攻撃。威力は一撃で量産型のISを葬り去るには申し分ない。

「くっ……！」

『邪天』の刀身にエネルギーを纏わせ、横に薙ぐ。

すると赤黒いエネルギーの障壁が展開され、矢を防ぐ。

その隙にその場から移動し、『邪天』を収納して、ライフルの『麒麟』を展開し、シオンに向ける。

「遅い！」

「チッ！」

放つ前にシオンが矢を放つ。
咄嗟に射線上から退避し、矢を避け続ける。

「ええい！」

シオンの周りを旋回しながらライフルを放つ。だがシオンは右手に持った剣で荷電粒子砲並みの威力を誇るビームを容易く切り裂いた。

くそ、アイツの単一仕様能力は相変わらず厄介だな！
「ワンオフ・アビリティー」

「そろそろ本気をだしたらどうかしら？　それとも、本気を出せないのかしら？」

「はっ、知ってるくせに」

「ええ、そうよ。今の貴方では本気を出せない。何故なら私が過去に負わせた傷が身体に残ってるからでしょう？　いえ、侵食しているの方が正しいわね」

イグニッション・ブースト
瞬間加速を発動し、俺と一瞬で間合いを詰めた。

振り下ろしてくる剣を『鬼龍』で受け止め、鏖迫り合いの状態になる。

「まったく、忌々しいな。女の執念ってのは……！」

「貴方がさつさと黒耶を返さないからでしょう?」

「だから……アイツはもういない!」

『麒麟』を収納して『鬼龍爪』を展開、シオンに突き出す。
が、シオンも右手を突き出し、爪と爪がぶつかり合う。

「いないんじゃない! 貴方の中で眠らされているだけよ! 貴方がいるから!」

「例え黒耶が起きても、そいつはもうお前の知っている黒耶じゃない!」

「貴方に何が分かるの!?」

「お前に何が分かる!?」

どちらも同時に蹴りを放つ。

同時に刀と剣を振るう。

同時に爪を振るう。

「もう終わりよ!」

『夜叉』の腰から鎖が射出され、右腕を絡めとられる。

『ヤマトノオロチ』…黒い鎖で強力な電流を流すことが可能。自由自在に操ることが出来る。

「何が！ まだ始まってすらない！」

鎖を引き寄せ、離れようとしたシオンを引き寄せる。

「この、往生際の悪い！」

シオンが矢を放ってくる。俺は瞬時に左側の翼を展開し、盾にする事で矢を防ぐ。

シオンは鎖を外し、俺から再び離れる。

俺は『鬼龍』を収納し、新たに方天画戟『喰龍』を展開し、翼である『夜叉』も完全に展開した。

「……その翼はね」

「……………」

『喰龍』にエネルギーを注ぎ込み、雷が溢れ出す。

「黒耶の為に……渡した私の翼なのよ！ 貴方が使って良いものじゃないわ！」

「だがコイツは俺に使ってほしいと言ったが？」

「そんな訳ない！」

シオンが剣を構えて向かってくる。

俺は『喰龍』を両手で持ち、柄の部分で受け止める。

「何で、どうして！ 貴方なんかが生まれてくるのよ！」

「散々言われた言葉だがな……知らん！」

剣を弾き返し、遠心力を付けながら戟を振るう。

「くう！」

シオンは剣で受け止めるが、力に特化した『喰龍』で押し返す。

「きゃああつ！」

「はあああああつ！」

吹き飛ばしたシオンに向けてもう一撃正面から振り下ろす。

「くっ……調子に、乗らないで！」

もう一度剣で受け止めてくるが、今度は先程のように力で押し切れない。

「まだまだああっ！」

何度も何度も戟を振り落とし、シオンの剣にぶつけるが、折れるどころかビクともしない。

くそ！ 早く終わらせて箒たちのところに向かわないといけないのに！

「はああああっ！」

「しっこい！」

振り下ろした戟を、シオンは受け流すように裁き、俺の懷に潜り込む。

「はあっ！」

剣を俺の胴体に向けて振り払おうとしてきたが、柄で受け流し、シオンを蹴り飛ばす。

そしてその隙に戟にエネルギーを最大限まで送り込み、シオンに向けて突き出す。

「おおおおおおおおっ！！！！」

戟の先から赤黒い極太の粒子砲が放たれ、シオンを襲う。

「！！」

しかしシオンは粒子砲を二つに切り裂き、切り裂かれた粒子砲は海に落ち、大爆発を起こす。

「はぁ……はぁ……」

くそ……しぶとい女だ。やはりあの剣をどうにかしない限り勝機は無いか。

「もう許さない……。さっさと貴方を殺して黒耶を助け出す」

そう言った瞬間、シオンの剣が白銀に光り輝きだし、刀身がエネルギーの刃に成り代わり、長く伸びた。

「ふん、そう言ってる割には、まだ切り札を残しているじゃないか」

「当然よ。まだ世間に見せるわけには行かないのよ」

「……あのクソ野郎の命令か？」

「ええ……。反吐が出るわ」

「そうか……」

『喰龍』を収納し、『夜叉』に手を伸ばす。

ここから先は……少々死を覚悟しなくちゃな。

「行くわよ」

「……参る」

二人同時に動き出し、ぶつかり合った。

シオンの白銀の剣と俺の短剣の『修羅』がぶつかり、火花を散らす。

「相変わらず、嫌って言うほどに硬いわね……！」

「そつちこそ、相変わらず触れたくない剣だ！」

同時に離れ、またぶつかり、剣を交える。

シオンのこの剣は、通常状態では一夏の『零落白夜』とほぼ一緒の状態であり、ビーム兵器は意図も簡単に切れる。展開すると、威力、剣圧、範囲、全てが格段に飛躍する。

しかしこれはただの副産物にしか過ぎない。本当の力はもっと強大で、恐ろしい。

この剣と打ち合うためにはある事をしないと対等に渡り合えないのだ。

一本では足りない判断し、もう一本『修羅』を抜き取り、シオンと打ち合う。

一本飛ばされた。

またもう一本抜き取り、打ち合う。

また飛ばされた。また抜き取り、打ち合う。

隙を見て一本、『修羅』を翼からシオンに向けて射出する。避けられる。

何度も繰り返し、もう残りが手に握る二本しかなくなってしまった。

振り下ろされる剣を、『修羅』を交差させて受け止める。

「どうしたのかしら？ このままでは死ぬわよ？」

「死んでほしいのか、死んでほしくないのかどっちかにしろよ……！」

「せめて『鬼神化』して死になさいよ……それが私達の終わり方でしょう！？」

『鬼神化』……。確かに使用すれば生き残れる可能性がでる。だが、代償が……。

「くっ……！」

「そんな無様な姿で死ぬのは許さないわよ！」

「……ふん、ならお言葉に甘えてそうさせて貰おう！」

力を振り絞り、剣を弾き、シオンを蹴り飛ばす。

「だが一つ訂正してやる。俺は、まだ死ねない！」

身体スイッチを切り替えた。人間から鬼神に変わるスイッチを。

「おおお……おおおおおおっ！！！」

視界がクリアになり、全てがこの手に分かるようになる。同時に、全身を赤黒いオーラが包み込み、更に辺り一面に散布してゆく。

「……いいわ、その眼よ。その“紅く”染まった狂気の眼よ！それこそ鬼神！」

『……行くぞ、シオン』

二重音声になった俺の声を合図に、シオンが襲ってくる。だが遅い。今の俺にはどのように動いているのか、どのように動くのが手玉に取るように分かる。

「はぁあっ！」

『……ふっ』

必要最低限の動きだけで振り下ろされた剣をかわし、短剣を肩に決める。

「ぐっ!？」

『まだだ……』

続いてもう一撃肩に入れ、シオンを海に叩き落す。

シオンは海に落ちる前に体勢を立て直し、矢を放とうと左腕を構えた。

『……困え』

『修羅』を二本ともシオンに向かって投げつけ、シオンはそれを弾いた。

が、『修羅』はそのまま海には落ちず、シオンに切っ先を向けたまま空中に停止した。

すると先に海に落された八本の『修羅』が海から飛び出し、赤黒いオーラを纏いながら、シオンに切っ先を向けたままシオンを取り囲んだ。

『……ゆけ』

その言葉を合図に十本の『修羅』がシオンに襲い掛かった。

「こんなもの……!？」

シオンは剣で弾くが、海には落ちず、またシオンに切っ先を向けて襲い掛かった。

これは俺が所有している『鬼神因子』と全武装に埋め込まれている『鬼神因子』が反応しあい、ブルー・ティアーズのようなビッドみたいに攻撃を仕掛けているのだ。

「まさかこんな芸当が出来るようになるなんてね……！」

『……………』

しかしシオンは一撃も当たらず弾いては捌いてゆく。

「じゃあ……私も行くわよ」

シオンが黒いオーラを身に纏い、周りに散布しだす。シオンも『鬼神化』をしようしたのだ。

同じ『鬼神因子』を持つものならば当然のこと。

『鬼神化』したシオンは『修羅』を両断してゆき、やがて全ての『修羅』を破壊した。

『……………』

どうする……“アレ”を使うか？　だがそれでは本当に……。いや、迷っている暇は無い。やらなければ、やられる。

俺はこの状態でしか使用できないものを取り出そうとしたが、シオンが突然『鬼神化』を解いた。

『……何のつもりだ？』

「……帰還命令よ」

剣も収め、もう戦う意思は無いようだ。

俺も『鬼神化』を解き、シオンを見つめる。

「……今日はこちらでお別れよ。いつか必ず、黒耶を返してもらっわ」

シオンはそう言って飛び立とうとするが、呼び止めた。

「シオン！　何故あの男の下にいるんだ！？　あんな外道の下に！」

「……………」

「お前の仲間も連れて来て良い！　俺たちの所に来い！」

さもないと、お前は……。

シオンは向こうを向いたまま一向に何も言わない。
そうして少し経つとシオンが動き出した。

「私が……私たちの居場所は月夜黒耶だけよ。貴方じゃない……貴方じゃ……ないのよ！」

それを最後に、シオンは空域から離脱して行った。
俺はシオンが見えなくなるまで空を見つめた。

もう、日の光が真っ赤に染まっていた。

「……ぐっ！？ ごほっ！！」

身体の奥が痛み出し、血を吐き出した。全身にも激痛が走り、今にも意識を失いそうだった。

「くそ……もう少し保っててくれ……！」

俺は激痛の中、大切な教え子の下へと急いだ。

「はああああっ!!」

雪片で福音に斬りかかる。それを福音はひらりとかわす。

「逃がさねえ！」

そこを左手の『雪羅』で追った。

第二形態に移行したことで現れたこの武装は、状況においていくつかのモードに切り替わる。

今は接近型のビームクローを展開している。

福音はかすりながらも避け、光の弾丸を掃射してくる。

「くそっ！」

『雪羅』をシールドモードに切り替え、福音の攻撃を全て相殺した。

これは謂わば『零落白夜』のシールドバージョン。エネルギーの消耗は激しいが、ビーム兵器には天敵となる。

「くそっ！ このままじゃジリ貧だぞ！」

エネルギーも残り僅か。時間がねえ！

福音がさらに掃射を開始しようと翼を広げる。

「させませんわ！」

そこにセシリアのビームが邪魔をする。

「ここでやられては代表候補生の恥！ それに、天星先生の教え子として負けられませんか！」

「そうだよ！ 負けるわけにはいかない！」

「兄上も頑張っている！ 我々も頑張らないでどうする！」

「私はどうでもいいけど、あの先生を驚かさないと気がすまないのよ！」

四人が福音に向けて攻撃を仕掛ける。

その鬼も怖がるような気迫で迫る四人の攻撃に、福音は防衛戦の一方になっている。

そうだ……天星さんが……兄さんが見ているんだ。俺が、俺と篤がヒーローになる時を！

「箒！」

「ああ！ 負けるわけにはいかない！」

俺と箒も福音に迫った。

『最大攻撃

』

福音が翼を自身に巻きつけるようにし、球体になった。

不味い、アレがくる！

全方位に嵐のようなエネルギー弾の雨。

それを今されれば確実にエネルギーが無くなる。つまり……負ける。

「くっそおおおっ！」

『雪羅』をカノンモードに切り替え、福音を撃つ。だが当たらない。

福音は回転をし始め

『離れろ！』

通信越しに聞こえた声の直後に、赤黒い閃光が福音の片翼を貫いた。

「兄さん!？」

閃光が走ってきた方向をみると、ライフルを構えた兄さんがいた。

「やれ！ お前ら！ 俺の教え子ならば、この程度の問題、乗り越えて見せろ!!」

兄さんの言葉に、俺たちは動き出した。

セシリアとラウラとシャルは援護射撃を、俺と篤と鈴が福音に迫った。

「「「はああああっ!!」」」

怯んでいる福音に三太刀を浴びせる。福音は防御体制に入っており、それ程ダメージは負わせれなかった。

「うおおおおおっ!!」

『零落白夜』を発動させ、福音に振り下ろす。
しかし、『零落白夜』が解除された。

しまつ ！ エネルギーが切れた！

福音が俺に向けて腕を伸ばしてきた。

やられる！

そう思ったが、黄金色に光る筈により福音の腕が弾かれた。

「一夏！」

筈が俺の腕を掴んだ瞬間、『白式』のエネルギーが完全に回復した。

「筈……！？」

「行け！」

「……ああ！」

『零落白夜』と『雪羅』のクロウを展開して福音に迫る。

福音は回避しようとするが、セシリアとラウラとシャルによる弾丸の嵐で動くことが出来ない。

「でりゃああああっ！」

『零落白夜』で福音の残りの翼を切り落とした。

「これで最後だああああっ！！！」

『雪羅』を福音の腹に叩き込んだ。

「うおおおおっ！！！」

スラスターを全開にし、福音を押す。

福音は俺の首を掴んで締め上げようとするが、それよりも早く、福音の機能が停止した。

「勝つ　　！？」

アーマーを失い、スーツだけの姿になった操縦者が海に落ちていく。

「っと……。最後の最後で油断したな」

「兄さん……」

兄さんが空中でキャッチしたおかげで、操縦者は助かった。

「……終わったな」

「……はい。やっと……」

夕日の光を浴びながら、その温もりを噛み締めた。

「作戦完了
ると言いたいところだが、何をしたのか解っているんだろっな？」

「……はい」

現在、俺たちは戦場から帰還し、大広間で千冬に正座させられている。しかも三十分も。セシリアなんかは顔を真っ青にしている。

「千冬、もうこのぐらいで許してやったらどうだ？ 戦闘で疲れて

」

「特に貴様だ！ 自分が一体何をしたのか分かっているのか！？」

今まで俺に怒ることはあったが、これ程まで本気で怒られたのは学生時代くらいだ。

「貴様は！ 下手をしたら戻れなくなっていたんだぞ！？ それを理解して」

「分かってるさ。だがな……」

「……？」

正座させられている生徒たちを見て俺は言う。

「こいつらは俺の大事な生徒だ。生徒を守るのが教師の役目。教師じゃなくても守るがな」

「だからと言って……」

「ほら、お前もこいつらに言うことが他にあるだろう？」

「っ……」

そう言うと千冬は顔をしかめ、そっぽを向いて口を開いた。

「……よく……やった」

千冬は恥ずかしいのか、背中を向けて顔を見せないようにした。

「だよ、良かったな」

俺は立ち上がり、改めて生徒たちを見る。

「お前ら、よく無事でいてくれた。お前らの強さ、しかと見させてもらった」

言われた生徒たちは笑みを浮かべ、照れくさそうにした。

「だが、お前らの独断行為は少々許せないな」

五人は笑みを引きつらせ、動きを止める。

「帰ったら特別補修だ。一夏、箒、セシリア、鈴音、ラウラ、シャルロット。覚悟をしておけよ」

そういい残し、千冬の背中を押して広間から出た。
エレナもいたが、アイツらの健康診断をしなければならない。

「……どういっつもりだ？」

「何が？」

「……名前で呼ぶとは」

「……さあな。黒耶に近付いたのかもな？」

「イブキ……！」

「冗談だ。……強いな、アイツらは」

「……」

強い。いつか俺を超えるほど強くなる。
いや……その時は……俺はもう……。

夜。俺はとある場所にやってきた。

俺の視線の先では束と千冬が何かを話していた。
少しの間様子を見てみると、束の姿が消え、千冬だけになった。

俺は押しを動かし、またある場所に向かった。
そこは何処かの岩場。そこにウサ耳をつけた女性が座っていた。

「束……」

「やあ、いぶちゃん」

束の隣に腰掛けると、束は俺の腕に自身の腕を絡め、頭を肩に預けた。

「ねえ、いぶちゃん」

「ん？」

「身体、大丈夫？」

心配そうな声で尋ねてくる束の肩は、少しだけ震えていた。

「大丈夫だ。まだ死なないさ」

「……良かった。束さん、もの凄く心配だったんだよ？」

「そっか。ありがとな」

束の頭を優しく撫でると、より一層力強く抱きついてきた。

「篝ちゃん、どうだった？」

「そうだな……『紅椿』を完全に乗りこなせれば、アイツらにも勝てる」

「ふっふっふ、何たって束さんの妹だからね！」

「……………」

束の声に元気が無い。元気そうに振舞っているが、空元気だというのがバレバレだ。

「……………安心しろ。篝は俺たちが必ず守り通す。だから安心して、お前のやるべき事をやれ」

「でも……………イブキがこんな風に傷つくのは嫌だよ……………。唯でさえ、時間が無いのに」

「だからこそ、お前はやらなければならない。俺が 最後の世界の為に」

「うん……………ねえ」

「何だ？」

「ん……」

束が目を閉じて口を突き出してきた。

俺はゆっくりと自分の唇を束のそれに当てて、束を抱きしめた。

数分が経ち、唇を離して束は立ち上がった。

「じゃあもう行くね？」

「……ああ」

「あ、ちーちゃんやエレちゃんにもよろしくしてあげてね？　ばいばい！」

束はどこから出したのか、ニンジンのロケットで飛んでいった。

俺はそれが見えなくなるまでそれを眺めた。

「……まったく、予測不可能な女だな、箒」

「……………」

後ろから水着姿の箒が歩いて出てきた。手招きをして横に座らせた。

「で？ 何が聞きたい？」

「……よく、分かりません」

「だろうな。……筈、これから俺が言うことをよく聞け」

俺は話す。月夜黒耶と天星イブキの関係を。

「俺が十年ほど前までの記憶を失っていると、前に話したな？」

「はい……」

「天星イブキという男は、そこで生まれた」

「……………」

「記憶を失う前は、確かに月夜黒耶として生きていた。だが、ある理由で黒耶は記憶を封じさせた。この『天照』に」

右手首から上を展開させ、上に掲げる。

「その時に月夜黒耶という個人は死んだ。そして天星イブキという個人が生まれた。だから……お前たちが知っている黒耶はもう……帰ってこない」

箒の肩がビクツと震えた。

約束をした、好きな人が帰ってこないと言われた。相当なショックだろう。

「……だがな、箒」

「……………」

「俺は黒耶じゃないが、黒耶の想いは残っている。俺はあの時の、約束した時の記憶を返してもらった。箒……俺は、おれ自身の意思で言う。約束は守る。これは同情でもなんでもない。あの時約束した黒耶としての、イブキとしての意思だ。……あとはお前が好きに受け止める。拒絶してもいい」

箒の頭を撫でて、返答を待つ。

箒は肩を震わせながら口を開いた。

「私は……………」

「……………」

「私は………… 黒耶さんが好きです」

「ああ……………」

「でも………… イブキさんも好きです……………」

「……ああ」

「だけど……！ イブキさんは姉さんと……！」

婚約している。確かに、俺は束と婚約している。
だが、そんなことはすでに承知済みだ。

「筈、俺の野望を知っているか？」

「……野望？」

「……国を創る」

「国……？」

「ノアとの戦いが終わったら、必要になることなんだ。だから、俺は国を創る。でだな、束が案をだしたんだ」

「案……ですか？」

「俗に言う……一夫多妻制」

「んなつ！？」

「そうすれば、千冬ともエレナとも一緒になれる。端から見れば最低な野郎だと思われるが知ったこっちゃない。愛している者を全員幸せにして何が悪い」

この中から一人を選ぶ？　だったら俺は全員を選ぶ。俺は強欲なんだよ。

箒は驚いた表情をして俺の顔を見ていた。

「だからさ、お前との約束は守れるって事だ。ははは、自分で言うて笑えてくる」

「そ、そんなこと……」

「あ、これ千冬とエレナには内緒だぞ？　まだ言っていないからな」

まあ、愛しているとか言っただけだな。
その時のアイツらを弄るのが楽しいんだ。

「箒、俺はどんな返答でも構わない。それがお前の意思なら、それでいい」

俺は立ち上がり、宿の方へ足を運んだ。

「ああ、そうだ。箒……誕生日おめでとう」

「っ……！」

「確か今日だったな？ 記憶が戻った時に思い出した。……一夏はリボンを渡したのか。じゃあ俺も何か考えなくちゃな」

簞のリボンが変わっていた。それが一夏からの誕生日プレゼントなんだろう。

俺は何を渡す？ 刀か？ いや、浴衣？ 簪？ うーむ、難しい。

俺は何を渡すか考えながら宿に戻った。

朝。今日は臨海学校最終日で、バスにISの機材などを運び、生徒をバスに乗せる。

「はあゝ、だるい」

昨日の今日だぞ。殺す気かよ。まだ『鬼神化』の影響で身体全身が疲労感で重く感じるし、睡眠不足だし、ああ、駄目だ。

「い、イブキさん、大丈夫ですか？」

「紗奈……お前だけだ、俺を気遣ってくるのは」

「千冬さんたちも気遣ってくれてると思うけど……」

どこがだよ。朝叩き起こされて仕事仕事の台風だぞ。これが英雄の扱いか！

「……ん？ バスが騒がしいな」

一組のバスがなにやら騒いでいた。

仕方がない。ここで見過ごしたら千冬にどやされるからな。

俺はだるい足取りでバスに近付いた。

バスに近付くと誰かが降りてきて千冬と会話をし始めた。

誰だ？ あの女？

金髪の長髪でカジュアルスーツに身を包み、胸の谷間を見せている女。

「……ナターシャ・ファイルスカ」

「あら？」

俺の呟きが聞こえたのか、ナターシャ・ファイルスカが此方に気づい

た。

「もしかして貴方は天星イブキさんですか？」

「……ああ」

そう答えるとこいつは笑みを浮かべて礼を言ってきた。

「先日はありがとうございました。貴方のおかげで『あの子』が殺人を犯すことになりました」

「……そうか」

初対面の相手な上に気だるさが足されて不機嫌っぽく答えた。

「それと……これはお礼です」

何かが俺の口に触れた。

普段の俺ならば相手が動いた瞬間反応するのだが、今は昨日の反動が大きく、何も反応出来なかった。

何をされた？　というか何故コイツの顔がこんな近くにある？　まさか……。

「んっ……では、これで失礼します」

ナターシャ・ファイルスは笑みを浮かべてから立ち去っていった。
途中、ガッツポーズをしたのが見えた。

「……………」

……………不味いな。非常に不味いな。世界の終わりが来たぐらいに不味いな。

殺気が正面から一つ、右隣から一つ、バスから一つ、宿から一つ、世界のどこから一つの計五つの殺気が俺を睨みつけていた。

「イブキ……………」

「イブキよ……………」

「お兄ちゃん……………」

「イブキさん……………」

『いゝぶゝちゃん？』

千冬が刀を鞘から抜き取り、エレナが俺の周りにいくつも剣を待機

させ、紗奈はその一つを握り、簞がバスから刀を持って降りてきて、束の聲が開いてもいな携帯電話から聞こえた。

はっはっはっは………これは何という無理ゲーだ？

この日のバスには、二人の遺体が乗せられた。

一人は伝説と言われた鬼神。

もう一人はその教え子だった。

鬼神の母（前書き）

ああ、やっと出来た。ぎりぎり間に合った。

またオリキャラ増えた……。

鬼神の母

八月。もの凄く暑い。格好が黒尽くしだから余計に熱を吸収して暑い。

何？ なら別のを着ろだと？ 俺は黒以外は似合わないのだよ。何時だったか、別の色のを着て千冬達に見せたら本気で気まずい雰囲気になった。

そしてこの仕事の量。今年も男性の操縦者が現れ、事件、筭の専用機、ノアの襲撃などなど。始末書やその他の書類。そして教師としての生徒達の管理。はつきり言って、疲れる。

「くそ……これで給料が安かったら反逆してやる」

「鬼神がそれを言つと本当に現実になりそうだ」

「だがな千冬、俺は本来ここへ何しに来た？ 筭と一夏の護衛だぞ？ 何故教師をしているんだ！？」

そうだ、おかしい。俺は護衛のようなもんだ。それが何故数学教師兼実技教師なんだ！？

「そう暑くなるな。そうだ、お前宛に手紙だ」

「それをなぜお前が持っているのか是非知りたい」

「ストーカーしていると言えは信じるか？」

「一夏、お前の姉さんは変態だ」

「一夏！ 違うからな！ 私は……」

馬鹿が。そのケータイに電源は入っていない。騙されやすい奴だ。

「っと、誰からだ……？」

手紙の封をしてみるが、差出人は書いていなかった。こういうとき、必ず厄介ことになるというのが、世界のお約束だ。

「まったく、少しは休ませてほしいものだ……」

封を切って手紙を読む。そして、そこには

「……………遺書を書かなくちゃ」

厄介ことなんてレベルじゃなかった。ストレートに俺の死が書かれていた。

「一体何が……………一夏に最後の電話をしなくては」

まず最初に、俺の全財産は紗奈にあげよう。いや、軽く百億は超えているから、ラウラにもあげよう。それから箒には謝罪と流派の奥義書を全てあげよう。

「……………ん？ 二人とも何をやっているんだ？」

「静かにしているエレナ。……………ああ、一夏か？ お前に言うておかなければならないことがある」

「ん？ この手紙は……………イブキ、後生だ。私を抱いてくれ。このまま死にたくない」

「ああ、これが書き終わったらいくらでも抱いてやるから。……………それから一応シオンにも伝えなければ。お前を救ってやれずすまなかった。黒耶と共に見守ってやる」

「……………何やってるんですか？」

山田先生が後ろで尋ねてきた。

何をやっているか？ 見て分からないのか。俺は遺書を、千冬は最後の会話を、エレナは……………身嗜みを整えながらそわそわしている。

「あの、天星先生と織斑先生とレンヴァルス先生にお客さんが……」

「一夏！ 愛している！」

「郵便屋さん！ これをこの住所に！」

「せめてファーストキスだけでも！！」

去らば！ 皆！ お前達の事は忘れない！

俺達は泣きながら山田先生に連れられ、応接室に足を運んだ。

コンコン。

「失礼します。天星イブキ、織斑千冬、エレナ・レンヴァルス、以上三名をお連れしました」

ああ……地獄門が、今開かれる！ 我らの同僚によって！

扉が開かれ、俺達は中に入った。中には軍服を着た一人の男と二人の女性がいた。

男性と一人の女性は壁際に立ち、もう一人の女性は階級が上の立場であり、ソファ―に腕を組んで眼を閉じて座っていた。

俺達は冷や汗をだらだら流しながら向かいのソファ―に座った。

「……山田教諭、すまないが私達だけにしてもらえないだろうか？」

座っている女性が山田先生に向かって口を開いた。
その声に俺達は更に肩をビクつかせた。

「あ、はい。わかりました」

そついつて山田先生は応接室から出て行った。その時俺達三人は見逃さなかった。山田先生の額に冷や汗が流れている事に。

「……さて、先ず何か言う事があるのではないか？　ん？　天星イブキ」

俺にもんの凄い覇気をぶつけながら言った。

「お、お久しぶりです……義母さ　」

パンツ！

「お義母様、だ」

「は、はひ！ お義母様！ 義母上！ マイマザー！」

「うん、よろしい」

掠った。今掠った！ 銃弾が耳を掠った！

「二人も、久しぶりだな」

「は、はい！ お久しぶりです！ ライトさん！」

「お、お会いできて嬉しいです！」

二人も冷や汗を流しながら引き攣った笑みで答えた。

俺達の目の前に座ってらっしゃるお方、その名は天星ライト。俺のたった一人の義母である。

ピンクのセミロングの髪を左肩に掛け、鋭く蒼い瞳をし、スタイルは女性が羨ましく思うほどのナイススタイル。

白と黒で統一された軍服を身に纏い、義母さんだけは金の装飾が施されていた。

ISが登場する前から存在した、日本軍と米軍の特別合同軍。その一つの『第七防衛軍』総司令官の証である。

そして義母さんもISの操縦者であり、世界に名を轟かせている。

「ああ、久しぶりだ。もう五、六年も会っていなかったな」

どうしてだろう……。義母さんはとても綺麗な笑みを浮かべているのに、俺は怒りを感じている。

「さて、ここに来た理由は三つある」

「三つ……ですか？」

「そうだ千冬。先ず一つ……」

「っ……！」

いきなり鎌のような剣のようなIS武装を展開して俺の首にまわした。

「何故、日本に帰ってきたことを連絡しない？」

「い、いや！　しょうとは思ったさ！　けど義母さんも忙しいだろうなーって思ってたさ！」

「私が、何時、仕事で、忙しいからと、息子である、お前を、相手に、しなかった？」

「全くしてませんね！ 俺の要らぬ気遣いでした！」

「そうだろうとも。私はお前の為ならば例え戦火の中でも馳せ参じるさ」

「おお！ 何と言う親心！ その心が身に染みたからこの剣を今すぐ退けて！ 食い込んで！」

義母さんは剣を収納し、俺の首は解放された。

殺す気がないと分かっているのも怖い。流石銀河最強。冗談でも怖い。

「で、もう一つだが……」

「あ、あのライトさん」

「ん？ どうした、千冬」

「後ろの二人は……？」

千冬が差す二人を改めて見る。二人とも若い男女で、もの凄く緊張していらっしやる。年齢は見た限り二十歳になっているか否か。男性の方は黒髪の短髪で某ガンダム大好き少年に似ている。女性の方は赤髪のセミロングで某仮面ライダー大好き少女に何処となく似

ている気がする。

「ああ、この二人は新人だな。男の方は……ほら、あのパワードス
ーツのデバイサーだ。女のほうはISのパイロットだ。二人とも、
挨拶をしろ」

義母さんに言われて二人は姿勢を正す。

「第七防衛軍雷光部隊所属、風上刃^{かざがみしん}准尉であります！」

「同じく、ミレイナ・ハプソン准尉であります！」

二人は顔を紅くしながら敬礼をしてきた。

俺達も挨拶をしようとしたが、義母さんに手で止められた。

「二人はお前達の武勇伝に憧れていていてな。そんなお前達を見る
だけでこの有様だ。挨拶までされるともう使い物にならんようにな
る」

「し、指令！ 何を言い出すんですか！？」

「そ、そうです！ 私達は決して……！」

「数日前にイブキたちに会うからついて来いに行ったら、お前達そ
の間使い物にならなかっただろう」

「「ぐっ……」」

ははは……向こうも相変わらずだな。

いきなりだがここでさっき出たパワードスーツについて説明しよう。第七防衛軍が独自に開発研究をしている歩兵専用の兵器がある。それは着るだけで体中の神経から脳に特殊な信号を送り、身体能力を飛躍的に向上させる歩兵スーツ。

見た目は種に登場するパイロットスーツのようだが、パワー、防御力はIS並である。

しかし、これを着れる者はいなかった。身体がついていけず、下手をすれば死に至る。それをこの風上刃は使用している。

「でだ……二つ目の理由だが……」

義母さんは眼を細め、俺を睨んだ。

「イブキ……お前『鬼神化』をしただろ？」

「っ……」

「やはりな。……シオン・アイルスカ？」

「……ああ」

「……はあ」

「ら、ライトさん！ イブキは生徒を守るために必死だったのです！ 責めるのなら何もしなかった私を！」

「いや私です！ 千冬には力がなかったが私にはありました！ けど動かなかった！ 責めるのなら私を！」

「お、おい……！」

義母さんが怒っているのと思ったのだろうか、千冬とエレナが立ち上がり自分を責めると言い出した。

しかし義母さんは怒るところかニヤニヤと笑っていた。

「ふふつ、相変わらず愛されているなあ、イブキ」

「みたいだな……」

「あ、あの……」

「安心しろ千冬。別に責めはせんさ。ただまた無茶な事をしたなと呆れていたただ」

義母さんは魅力的な笑みを浮かべてそう言った。
しかし何だろう。この笑み、何か企んでいそうだ。

「そつだ、何時か聞こうと思つていたんだが……」

義母さんは足を組んで俺達の顔を交互に見て口を開いた。

「結婚式は何時やるんだ？」

「「「ぶうつ！？」」「」」

待て待て待て！ 義母さんや、ちよつと待つておくれや。え？ 結婚？ 何言つてんですか！？

「何だ、まだなのか。良いか、イブキ。お前は他人と違つて三人も嫁にするんだぞ？ そこいらの男とは何倍も甲斐性を持たなくてはならない」

「か、義母さん！ 何で俺が一夫多妻制前提で進めてるんだ！？」

「ん？ 束からそれらしき事を聞いたんだが……まあ、それはさておきだ。まさか、また誰か惚れさせたんじゃないだろうな？」

「……………」

「……………」

不味い……もし筈との関係が知られたら色々と問題になりそつだ。

いくら黒耶の時に結婚の約束をしたからといって、それは黒耶との
だとは言えない。アレは俺であり、俺ではない。けれども俺という
存在。そして心は二つではなく一つ。

記憶を取り戻した際に、封じ込められていた箒への想いも蘇った。
そして俺は箒に箒しだいの考えで立場を決めると伝えた。もし箒が
想いを貫くならば受け止め、俺を否定するのならばそれで終わり。
今はその状態なのだ。

「……凶星か」

「へっ！？ な、何の事でしょうか？」

「篠ノ之だな？」

「千冬！？」

「ほう、束の妹か？」

「あ、いや、そうだが……何と言うか」

「まったく……まさか生徒までに手を出すとは、我が息子ながらあ
つぱれだ」

何か誤解してらっしやるこの人！ 俺が生徒に手を出した！？ 否
！ 生徒になる前に約束していたんだ！ 俺は悪くない！ 俺は悪
くない！ 悪いのは黒耶だ！

「ま、この話は保留にして……」

しないでください、捨ててください、永久に忘れてください。

「三つ目だ。刃、ミレイナ」

「「はっ！」」

「この二人を暫くこの学園に置く。理事長にも許可を貰った。異論は認めん」

「了解 ってはあ!？」

つい反射的に返事をしてしまったが、これは一体全体どういうことだ？ 何故軍人の人間を二人も置いていく？

「『ノアの箱舟』の動きは確認済みだ。近い内に大きな戦闘が行われるのは確実だ。そして、今回は千冬と束の肉親がいる。お前も、一人でノアから守れるとは思わないだろう？」

「それは……」

「まあ、これはあくまで保険として認識してもらってても構わない。有事の際には使ってくれても良い」

「まあ、無いよりは断然良いが……」

「それと、こいつらに授業を受けさせてやってほしい。刃にはISの事を知ってもらい、『テロス』で勝負出来るように。ミレイナには言わずもがな」

「……分かった。義母さんの頼みだし、それに一夏以外にも男が欲しかったところだ。最近、女ばかりで肩身が狭い」

ホント、休み時間になると女子共が迫ってきてキヤーキヤー煩いし。さり気なく密着してくるし、見せてくるし、誘ってくるし、香水臭いし。

大体、俺は軽く振ったくらいじゃないと顔を顰めてしまう。あまりキツイ臭いは嫌いなんだ。

「と、言う事だ。二人とも」

「「よろしくお願いいたします！」」

「ああ。それと先に言っておくが、俺は完全に信頼を置ける奴しか名前で呼ばん。いいな？」

「「はっ！ 了解であります！」」

「「ここでは教師と生徒だ」

「「はい！ 分かりました教授！」」

……まあ、言いか。さてさて、また濃いキャラが増えたな。これからがまた大変だ。

「さてと……」

「ん？ もう帰るのか？」

義母さんが立ち上がり、時計を気にしだした。

「ん？ 何を言っている。久々に会ったんだ。今日一日はここにいろ。……というわけで」

逃げる。俺の本能がそう叫んでいる。でなければ死、あるのみだとさあ、動け足よ！ 動いて今すぐこの部屋から出るのだ！

「久々に一緒に鍛錬しようじゃないか！」

「拒否権を」

「あるわけ無いだろう？ 本当に久しぶりだ。腕になるよ。いつも着ていた胴着を持って来てやったからそれに着替えるんだ」

「この人本気だ！ 本気で俺を殺す気だ！」

「千冬、ここの道場借りるから手続きを頼む」

「は、はい」

「エレナ、怪我をしたら大変だ。医療の知識があるお前も来い。千冬も後で来いよ」

「はい、分かりました」

義母さんは俺の襟元を掴み、ずるずると引っ張って部屋を出た。

ああ、俺……明日の太陽拝めるか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5468s/>

IS(インフィニット・ストラトス) 伝説の鬼神

2011年11月24日23時59分発行